

バカとテストとスポン
サー～愉快な彼らのバ
カバカしくも素晴らし
き日常～

アスランLS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

先進的な進学校で日夜勉強に明け暮れる和真達のプライベートな日々を大公開！

コメディ全開のトラブルアクシデントハプニングに巻き込まれ右往左往することに

……。

……ん？本編と大差ないって？それは言わないお約束。

【バカとテストとスポンサー】の番外編集です。

内容は原作の0・5巻の話＋αです。原作とは違った視点でストーリーを進めてい

こうと思います。

ほとんどタイトル詐欺なガチシリアス話もたまくにやりますのでご了承ください。

目次

如月ハイランド〜前編〜 | 1

如月ハイランド〜中編〜 | 14

如月ハイランド〜後編〜 | 28

如月ハイランド〜終劇〜 | 49

週末のプール（前編） | 72

週末のプール（後編） | 84

海辺でのお祭り騒ぎ① | 102

海辺でのお祭り騒ぎ② | 111

海辺でのお祭り騒ぎ③ | 132

海辺でのお祭り騒ぎ④ | 153

海辺でのお祭り騒ぎ⑤ | 165

海辺でのお祭り騒ぎ・完結 | 189

本音を喋る召喚獣① | 201

本音を喋る召喚獣② | 225

本音を喋る召喚獣（完結） | 250

合体召喚獣① | 271

合体召喚獣② | 283

合体召喚獣③ | 296

合体召喚獣（完結） | 312

終守那流クツキング | 328

修羅と英雄① | 337

修羅と英雄② | 347

修羅と英雄③ | 358

修羅と英雄（完結） | 366

和真と優子① | 383

和真と優子②

—

390

和真と優子③

—

400

和真と優子（完結）

—

414

動揺してはいけない土屋家①

—

431

動揺してはいけない土屋家②

—

441

動揺してはいけない土屋家③

—

450

動揺してはいけない土屋家（完結）

464

violet

memory①

—

475

violet

memory②

—

484

violet

memory③

—

498

violet

memory④

—

510

進路指導の召喚獣①

—

522

進路指導と召喚獣②

—

536

進路指導と召喚獣③

—

552

進路指導と召喚獣（完結）

—

566

如月ハイランド～前編～

【優子視点】

「―以上でHRを終わります。皆さん、充実した休日です」

担任の高橋先生の号令とともに放課後に突入する。クラスメイト達は休日用の宿題を処理するため教室に残ったり、部活動に参加するためさっさと教室を出て行ったりとさまざまである。

ちなみにアタシこと木下優子は友達に別れの挨拶をし、帰りの支度を済ませたものの、自分の机から腰を上げようとすらしていない。

アタシの放課後の過ごし方は、もう少ししたらやって来るであろう友人の気分次第で決定する。今日は金曜なので、休日どう過ごすか決めることになるだろう。

アタシの休日の予定がアイツの気まぐれで右往左往する現状についてはまあいいとして……ちよいちよい山登りに付き合わされるのは正直勘弁して欲しい。アイツのチョイスする山はやけに険しいものばかりで、日頃鍛えてるアタシでも休日明けには筋肉痛で登校するのも一苦労になる。

まったくアイツはうら若き女子高生をなんだと思ってるのかしら？

そんな軽い不満を胸の内に秘めていると、教室の扉を開き、アタシが待つていた人物が入ってくる。

赤みがかかった黒い髪、あどけなさが残るものの非常に整った顔立ち。180センチ近くもある長身。細身ではあるが服の上からでもはつきりとわかる鍛え抜かれた体。そして何より、ある人には羨望と情景を、ある人には不安とちよつとした恐怖を感じさせる不敵な笑み。

トップクラスの学力を有しながらも最底辺クラスに所属している自称娯楽主義者の問題児。

アタシの友人、柊和真。

「わりい遅くなつた優子、待ったか？」

「待ったわよ。いったいどこで油売つてたのよ」

多少待たされたところでアタシは気にしないけど、これくらい言つてもバチは当たらないわよね？

「HRで西村センセの雷が落ちた」

「また？今度は何があつたのよ？」

「授業中俺と秀吉と翔子以外の計46名がラブレターを貰つた明久を追い回してた」

「ごめんちよつと待つて理解が追い付かない」

聞いていて目眩がしてくる内容だ。

「何でそれだけで学級崩壊レベルの暴動が起きるのよ……?」

「Fクラスは基本的に他人の幸せを祝福できない奴の集まりだからな」

人としてどうなのよそれは?

「だいたい坂本君は翔子の恋人でしょ? 吉井君をどうこう言う資格ないじゃない?」

「あいつは明久の不幸を誰よりも喜ぶ奴だからな。そして最終的には明久に嵌められて雄二も処刑されてたな、翔子の手によって」

吉井君と坂本君は本当に友達なの?

あとどういう罠に嵌まれば恋人に処刑されるなんて凄惨な結末をむかえるのよ!?

「まあそんなのいつものことだ。本題に入るぞ」

「いつものことなんだ……」

友達が処刑されたことをいつものことですました和真はアタシの近くの席に腰を下ろし、本題に入る。

「明後日に如月ハイランドに行くぞ」

「…今度は何を企んでるのよ?」

普通仲の良い男子にこんなこと言われたら、デートに誘われたと多少ときめくものだけど、こいつに限ってそれはない。

なにしろこの男、感性がお子様なのだ。

まだ思春期が来ていないのではないかと思うくらい恋愛への関心が薄い。モテるためしよっちゆう告白されているが長続きたためしがなく、それについて気にしたそぶりも見せたことがない。心の中では傷付いている可能性もゼロでは無いかもしれないが多分ゼロね。こいつは言いたいことは言っちゃうし、やりたいことはやっちゃうタイプの人間だし。

だからこんな台詞が出てくるときは大抵何か裏がある。一年の頃は多少どぎまぎさせられたが流石にもう慣れた。

「清涼祭のときに雄二達が如月ハイランドのプレミアムチケットを手に入れたのは知ってるよな」

「ええ」

「雄二が明久に押し付けて明久が翔子にプレゼントしたため、今は二枚とも翔子が持っている」

「へえ、よかつたじゃない翔子」

アタシは翔子に頼まれて召喚大会に出たものの、吉井君の策略に嵌まり敗退してしまった。あのときは悔しい思いをしたものだが、結果的に友人の望みが叶ったみたいで何よりだ。

「そのプレミアムチケットにはウエディングギフトという特典があるんだが、俺達『翔子の恋路を手伝い隊』はアシスタントとしてそれに参加しようと思う。あ、ちなみに愛子は予定があるらしく不参加だ」

「そういえば以前アタシも入隊させられたっけ……」

アタシにとつて翔子はかけがえない友人だ。あの子には幸せになつて欲しいと思つている。それは和真も同じだろう。

だけど、

「アンタは坂本君が翔子に追い込まれていくのを間近で見たいつてもあるんじゃない？」

「もちろんそれもある」

せめて形だけでも否定しておきなさいよ友達なら……。

「それにアシスタントとして参加するって言つてもどうやって？」

「その点については既に明久が学園長のばーさんと取引して参加できるようにしてある、何も心配はいらないぜ」

別の意味で心配なのだけれどその内容。

何よ取引つて？

「で、参加してくれるよな副隊長？」

「いつアタシが副隊長になったのよ……。まあ、構わないわよ」

こんなに楽しそうな表情をした和真の誘いを断るつもりなど最初から無い。何より和真の無茶苦茶な生き方は正直見ていると危なっかしいので、目を離すと色々心配なのだ。

まったく、本当にいつまでたっても手のかかる子なんだから。

「おい優子、お前今心の中で俺をガキ扱いしなかったか？」

相変わらず勘も鋭い。

「そんなことないわよ」

「……まあいい。明日は当日に備えての下準備があるから良いとして、明後日の朝はお前家に迎えに行くから、秀吉と一緒に待機しておいてくれ」

「わかったわ」

伝えたいことを伝え終わると和真はさっさと教室から出て行ってしまった。

そして当日。

朝早くに如月ハイランドに集まった『翔子の恋路を手伝い隊』のメンバーの吉井君、土屋君、島田さん、姫路さん、秀吉、和真、アタシの計7名。程度の差はあるが和真以外は皆眠そうな顔をしている。もちろんアタシも朝早くに起こされてとても眠い。

和真はアタシ達を一行に並ばせると、いつもの不敵な笑みを浮かべつつ腕組みをしながら前に立った。

「いいかお前らー！これより『ウエディングシフト』の作戦を伝える！各々は栄えあるこの作戦の構成員としての自覚を持って行動するように！一切の容赦は必要ない！俺達の手でターゲット坂本雄二を人生の墓場へと叩き落とすのだ！」

「！！！！おおうっ！！！！」

おかしい。アタシが聞いていた話と違う。

翔子の幸せを云々はどこいったのよ？

しかも何でアタシ以外は眠気も吹っ飛ばすほどノリノリなの？アタシが何か間違ってる

るの？

「ねえ秀吉、なんでアンタ達はあの悪意に満ちた演説に何の疑問も抱かないの？ 納得のいく説明をしてお姉ちゃんのお願い」

「Aクラスの姉上にはあまり馴染みがないじやろうが、和真が霧島の手助けをしつつ雄二を追い詰めるのはFクラスではいつものことじや。姫路と島田は和真の話術によって雄二を追い込むことが霧島の幸せに繋がると信じておるしおう」

「アンタ達って本当に友達なの？」

少なくともアタシの知ってるような友達関係のそれではない。

「というかアタシ達の立ち位置アシスタントよね？ 何でいつのまに和真が『ウエディン グシフト』の全権をにぎっているのよ……」

そのまま作戦説明を展開していく和真。

作戦の内容に思わず頭を抱えたくなるようなものが多々あったがFクラスの面々は一切疑問に思っただけでなさそうだったので言及しないことにする。これ以上はアタシがもたない。

ピピピピピピピ

作戦の説明中に吉井君のケータイが鳴る。

「あ、ごめん電話だ。えっ……と、非通知？」

(ピッ) はいもしもし?どちらさまですか?」

『……………キ

サ マ ヲ コ ロ ス』

「え!!なにになに!!本当に誰!!メチャクチャ怖(ブツツ、ツーツーツ)……………」

吉井君がやけに狼狽している。

「作戦説明中に電話してんじやねえよ明久」

「か、和真…………知らない人から殺害予告されたんだけど、どうしよう?」

「おおかた番号通知をOFFにして雄二が電話してきたんだろ」

「あ、あの野郎なめたマネを!」

吉井君は憤慨しているが、プレミアムチケットを内緒で翔子に渡した時点である程度予測できたでしょうに…………。

「さて、作戦の続きだが—」

和真もアタシと同じ考えのようで、怒りを露にする吉井君を捨て置いて作戦の説明を続けた。

「—最後にウエディング体験をさせて終了だ。ムツツリーニ、指定した位置に監視カメラの設置は済ませてあるな?」

「……………問題ない」

問題しかないわよ。

「ターゲットが来たら連絡してくれ」

「……………了解」

「よし、ターゲットが来るまでそれぞれ場所で待機のち自由時間だ。それじゃあ散会！」
和真の号令と共に、持ち場へと移動していくメンバー達。その場にはアタシと和真だけが残った。

「なんかもう既に疲れたわよ……………」

「なんだ優子体力不足か？そうと分かれば月曜日に体力強化スーパードプログラムを」

「精神的に疲れたのよ！アタシの中の常識がどんどん瓦解していくのよ!?!そりやこうなるわよ！」

弱音を吐いた途端に人をさらに地獄に突き落とす台詞をさらりと言えるこいつは間違いないSだ。

「まあ冗談はともかく、ほれ変装アイテム」

アタシ達は如月ハイランドから支給された係員用の服を身に纏っている。これだけでは坂本君達にバレバレなので、隠密に任務を遂行するために各自変装することになっている。

で、和真がアタシに渡してきた物はどうと……

マント

鹿追帽

オモチャのパイプ

アタシはシャーロック・ホームズか。

「アンタ、真面目に変装させる気あるの……？」

「当たり前だろ何言ってるんだお前」

そう言ってる和真は自分の分の変装アイテムを全て身につけた。今の和真の格好は……

麦わら帽子

ダウジング

2002年眼鏡

「アンタ絶対ふざけてるでしょ!?!いい加減殴るわよ!?!」

「わかった、わかったから拳を下ろせ」

もしアタシがプライベートでここに来てこんな怪しすぎる従業員を目撃したら、おそらくそのまま回れ右して帰宅するだろう。

ワガママ言ってる今回の催しを任せて貰った以上、評判を悪化させる訳にはいかない。

「まあこんなもんでいいか（カチャツ）」

怪しさが倍増する三種の神器を外して和真のした変装は、サングラスをつけるだけだった。

いや、あのねえ……

「そんなんでバレないでも思っているの？」

「変装なんて意味ないから適当でいいんだよ」

「こいつはここに來て本末転倒なことを言い出した。

「意味ないってどういうことよ？」

「明久達がボロを出さず隠しきれれると思うか？」

そう言われると……。

「……アタシも意味ないような気がしてきた」

「だから俺はバレても是が非でも認めない作戦でいこうと思う。そつちのがおちよくりがいがあるしな」

「それが狙いでしょ絶対……。まあ、折角だしアタシはちゃんと変装しておくわ」

「おお、よくわかつてんじやねえか。お前が真剣に変装してくればくれるほど雄二の俺への腹立だしさもアツプするからな」

アタシにそんな狙いは無い。

「さてと、準備も終わったしとりあえず将棋でもして時間潰そうぜ」
特にやりたいことも無かったので、アタシは二つ返事で了承する。

『……………ターゲット出現。作戦開始』

「よっしゃ作戦スタートだぜえ当然このゲームはお流れな！」

「あと数手で詰みじゃない往生際が悪いわよ！」

「はい終了〜！仕事にかかろぞ！」

「まったくアンタは……………」

そういうところが子どもっぽいのよ。

というか20回も待ったをかけてこれって、いくらなんでも弱すぎるわよアンタ……………。

如月ハイランドく中編く

【雄二視点】

「……俺は……無力だ……」

電車とバスで二時間ほどかけ、俺と翔子は如月ハイランドの前まで来ていた。

ここ、これは仕方がなかったんだ！翔子だけでなくおふくろまで結婚の話を進めだしたのが悪いんだ！どこの誰がこの俺を責められようか！

「……やっとなつた」

「よし。それじゃ翔子」

「……うん」

「帰ろう」

ミシッ！

「……ダメ、絶対に入る」

「はっはっは、翔子、俺の肘関節はそっち側には曲がらないぞ？」

やべえ。指先の感覚がなくなってきた。

「……恋人同士は皆こうしている」

「待て翔子！お前は腕を組むという仲睦まじい行為とサブミッションを同様に考えていないか!？」

「……??？」

世の中の恋人同士は相手を逃がさないために肘間接を取り合っていると言っていると真面目に信じてそうな学年次席様を目の当たりにして、つくづく世の中勉強よりも大切なものがあると痛感させられる。

左腕を人質に取られたまま入場ゲートへと連行される。

プレオープン期間のためか特に待つこともなく係員のもとまで進むことができたのだが、その係員二人を見るや否や俺は目のハイライトが死んでいくのを感じた。

片方の女だけならまだよかった。シャーロック・ホームズみたいな格好をしているがこいつだけなら何かのイベント用の格好だと納得できた。

だがもう片方の男、キサマは駄目だ。

なぜなら…

「イラツシャイマセ！ 如月はいらんどへヨウコソ！」

キャラ付けのつもりか謎の片言で喋っているサンガラスをかけたこいつは、明らかにクラスメイトの大バカ野郎だからだ！

「何やってんだ和真テメエ!？」

「イエイエ、私トアナタハ初対面デス」

誤魔化せるでも思ってたのかこいつ!?

「私ハ通称ねぱーるノ大地ガ生ンダ英傑コト、柘・マシンガン・和真デス」

「いや和真じゃねえか!？」

「ちよつとこつちに來なさい」

女の方の係員に連れられて俺達と離れた場所に移動するマシンガンバカ。

今の声、あの口調、あいつ木下姉か……。

「アンタバカじゃないの!?!偽名の意味まるで無いじゃない! (小声)」

「やれやれ仕方ない、変更するか (小声)」

何やら話し込んでから戻った来た。ここからじゃ聞き取れなかったが大体内容は想像がつく。

「間違エマシタ。私ハもるでいぶノ海カラノ刺客コト、柘・ビバリーヒルズ・和真デス」
「いやだから和真じゃねえか!？」

あ、木下姉が頭を抱えている。こいつはいつもこんな感じでこのバカ野郎に振り回されてるのかと思うと少しだけ同情した。

「ソシテ彼女ガ国籍不明名称不明ノ凄腕ノ仕事人、ソウデスネ……仮にインフェルノ
ドラゴンヴァイツとシテオキマシヨウ」

「無駄に壮大なコードネームだな!? 覚えにくいことこの上ねえ!」

隣で木下姉改めインフェルノードラゴンヴァイツは真っ赤になって手で顔を覆っている。まああんな中二全開の通称無断でつけられたらそうなるわな……。

「本日ハぷれおーぷんナノデスガ、ちけつとハオ持チデスカ?」

「……はい」

「拝見シマース……コ、コレハ!」

マシンガンバカ改めビバリーヒルズバカは翔子の取り出したチケットを受け取ると、やたら胡散臭い演技で驚いた。というか翔子、何のリアクションも無いと思ったら、まさか和真だと気付いてないのか!?

「……そのチケット、使えないの?」

「イエイエ、ソナナコトハナイデスヨ? デスガ、チヨットオ待チクダサーイ」

和真は携帯を取り出し、俺達に背を向けてどこかに電話し始める。

「……俺だ、例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始める、確実に仕留めるぞ」

「おいコラ、なんだその不穏当な会話は?」

「……ウエディングシフト?」

隣で翔子が首を傾げている。如月グループの企みを知らないこいつからすれば初耳の単語だろうが、それこそ俺が是が非でもここには来たくなかった諸悪の根源なのだ。

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

「お前さつき電話で流暢に日本語を話してただろ。心なしか片言が崩れてきてんぞ」

「オーウ。ニクホンゴむくつかしくてワカカリくまシエーン♪」

やべえこいつ殺してえ。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ？入場だけさせてくれたら後は放っておいてくれていい」

紆余曲折あつて翔子に告白した俺だが、いくらなんでも高校生で結婚の話なんて嫌過ぎる。俺は目の前のビバリーヒルズバカみたいに気楽に人生を謳歌したいんだ。

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ!?!そんな事をされたら、我が家は食中毒で大変なことになってしまう!」

あの天然ボケの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓に上げるだろう。

流石はFクラス最強の矛、なんて恐ろしい脅迫をしてくるんだ!?

「では、まず最初に記念写真をお撮りさせ頂きます」

「……記念写真?」

「はい。とつてもお似合いのお2人の愛のメモリーを残しましょう」

「……雄二と、お似合い……(ポツ)」

インフェルノⅡドラゴンヴァイツ、お前もか。

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を深くかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。和真が一枚噛んでいるんだから、もしかするところいつは……。

「どうもご苦労様デース」

「どうしたの和真? 変な話し方して」

「あつバカ……」

確認する前に疑念が確信になったが、万が一を考えて一応やっておくか……。

「悪いが、ちよつと電話をさせてくれ」

「わかりませシタ」

携帯を取り出し、番号非通知で下衆野郎に電話をかける。

P r r r r r r r r r P r r r r r r r r r

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

「……ハア、まさかもうバレるとはね……」

呆れるインフェルノドラゴンヴァイツにも気付かず、バカは尻ポケットから携帯を取り出し電話にでる。

「……いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃねえか……!」

「人違いですつ!」

ダッ!

「あつ、コラ!逃げるなテメエ!ええい、離せビバリーヒルズバカ!」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ(35歳)、通称ステイーヴでース。吉井ナントカさんではありませーん。そして私の名は終・アルケミスタ・和真デース」

「黙れ!人種性別年齢氏名すべてに堂々とウソをつくな!しかもどう考えてもその名前で通称ステイーヴはないだろ!ついでに俺は吉井なんて名字は一言も言っていない!つかお前はいい加減偽名に本名を混ぜるのやめろ!」

ビバリーヒルズバカ改め錬金術バカに絡まれているうちに明久の姿は見えなくなつた。

こいつら俺の人生をなんだと思つてやがる!?

しかし、このスタッフになりすましているとなると、かなり大掛かりな話だ。バックに誰かいやがるのは間違いない。最初に思いつくのは和真の友人である鳳や橘だが、和真の性格上その線は薄い。

となると……おのれ、あのババアか……！

そして紛れ込んでるのがこいつら三人とは考えにくい。間違いなく他にも協力者がいる……！

「翔子、すまんがちよつと我慢してくれ！」

「……??？」

きよとんとしている翔子のスカートを掴み、見えるか見えないかのギリギリの高さまでめくり上げる。

「……………っ!! (ギラッ)」

その瞬間、視界の隅で懐に手を伸ばした人影……というか、キツネの着ぐるみ。

「なっ?!なにやってるのよさかも (ギユッ) むぐう」

「はい優子ストツプ」

思わずボロを出しかけた木下姉（そろそろ面倒だから戻すか……）の口を和真が抑える傍ら、着ぐるみは脱兎の如くその場から消え失せた。

「咄嗟に懐のデジカメに手を伸ばすあの動き……。やはり、ムツツリーニも来ていたか」

この分だと間違いなく姫路や島田や秀吉もいるだろう。いや、和真が関わっている以上もはや誰が参加していてもおかしくはない。

どいつもこいつも人の不幸を楽しげに……！

「……雄二、えっち」

俺が奴等の処刑法を考えていると、翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた。

「わ、悪かった。もうしないから許してくれ」

「……うん。続きはベツトで」

「なっ!?ちっ、違うぞ翔子！俺はお前の下着になんか微塵も興味はねえっ！」

「……それは許さない（メキッ）」

「ぐああああああっ！理不尽だああっ！」

翔子の握力で俺の頭蓋がきしむ音が響く。

「翔子、女性ならもうちよつと恥じらいを持ちなさい……」

「でハ、写真を撮りマース。はい、チーズ」

呆れる木下姉を余所にマイペースにカメラを構える和真。フラッシュが焚かれ、ピピツという電子音が聞こえてきた。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてください」

「……わかった。このまま待ってる」

「ぐああああっ！ このままだと俺の頭蓋がつ！」

律儀にも翔子はそのままの握力を緩める事なくキープ。こいつは本当に俺のことが好きなのか度々疑問に思う。

「……なんだこの写真は」

俺と翔子を囲むようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。アイアンクローをかましてしている翔子とそれに苦しむ俺の周りを、未来を祝福するように天使が飛び回っている。俺達の関係をよく知らない奴が見ればどういった経緯で結婚に至ったのか気になるどころだろう。

「ええと……サービスの特殊加工で御座います」

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か!?!これを飾ることでここになんのメリットがある!?!あとインフェルノ!!ドラゴンヴァイツ、こいつのこういふ暴走を止めるのがお前の役目だろ！」

「後で説得しておくからその呼び方やめて!？」

「……雄二。照れてる?」

「この写真に照れる要素は見当たらない」

なんて写真を見ていると、

『ああつ!写真撮影してる!あたしらも写真取って貰おうよ!』

『オレたちの結婚の記念に、か?』

そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

偉そうな態度でチャライカッブルがやって来た。

「あの、すみません。こちらはプレミアムチケットの特別サービスですので」

この手のタイプと交流経験が少ないであろう木下姉だが、少々戸惑いながらも毅然とした態度で断ろうとする。

『ああつ!?!いいじゃねーか!オレたちやお客様だぞコルア!』

『きやーっ。リユータ、かつこいーっ!』

男が横柄な態度で木下姉に食ってかかる。

やれやれ、絵に書いたようなチンピラだな。それを見て喜ぶ女もどうかと思うが。

大の男に詰め寄られても木下姉は目を少し細めただけで微塵も物怖じした様子は見られない。

喧嘩慣れた俺には分かる。これは秀吉のようなボーカーフェイスではない。目の前のチンピラではどうかあがいても自分を害することなどできはしないという確固たる自信が木下姉にはある。こいつ……伊達に和真と肩を並べてはいないな。

木下姉の立ち振舞いに俺が感心していると、和真がチンピラと木下姉の間に立つ。

一見すると和真が木下姉を庇おうとしているように見えるが、日頃つるんでいる俺にはわかる。今みたいな笑みをしているときの和真にそんな殊勝な考えが頭にあるわけがねえ。

今の和真の表情は面白い玩具でも見つけたときの子どもの無邪気で残酷な笑顔そっくりだ、というかそれぞれそのものと言って良い。

『すみませんねえ、俺達のポリシーはあ、『客は客であつてそれ以上でも以下でも無い』がポリシーでしてえ』

『てめ、なめてんのかコラ!? ああ!』

和真の明らかに相手をバカにしたような口調に神経を逆撫でされたチンピラは激昂する。どうやら面倒になったのか片言はやめたようだ。

あ、後ろで木下姉がまた頭を抱えている。

『だいたいよお、あんなダッセエジャリどもよりオレたちを写した方がココの評判的にも良くねえ?』

『そうよっ！あんなアタマの悪そうな男よりもリュータの方が百倍カッコイイんだからあっ』

「砂利を顔にまぶしたような無様な男とカマキリにも劣りそうな知能の女のカップルなんざ祝福したら経営が右肩下がりになる一方だと思いませんか？」

『『だとコルアアアア!?!』』

まあとりあえず和真にこの場は任せて俺達はさっさと避難するか。

「……（ツカツカツカ）」

「っつておい、翔子。どこに行くんだ」

急に勢い良く歩き出した翔子の腕を掴んで引き止める。

「……あの二人、雄二の事を悪く言った」

「あのなあ……。その程度でイチイチ目くじら立ててたらキリがないぞ？何より視界に入れておくだけで不快だ」

「……雄二がそう言うなら」

翔子も渋々納得する。

俺としてはむしろ和真に目をつけられたあのチンピラカップルにも少し同情している。あいつの挑発スキルは学園でも随一で、あと数分もすればストレスが何十倍にも膨れ上がっているはずだ。

ちなみに俺が今一番同情しているのは木下姉だ。今度機会があつたら胃薬でも差し入れてやろうか。あいつとは分かり合える気がする。

「……雄二、浮気の気配（メキツ）」

なぜこいつはさつき和真達の正体にも気づかなかつたのに、俺が絡むと和真に匹敵するほど勘が鋭くなるのだろうか？

そして誰でも良いから俺にも同情してくれ。

再び頭蓋骨が軋む音を聞きながら、俺は切実にそう思った。

如月ハイランド〜後編〜

【雄二視点】

「ねえねえ、そのラブラブなカップルのお二人。キツネのフィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ？」

翔子に関節を極められながら園内を見回っていると、メスらしきキツネの着ぐるみが見寄ってきた。俺達の異様な光景に疑問を抱いていない上にどこかで聞いたような声。

……一応確認しておくか。

「そういえば、さつき明久がバイトの女子大生に映画に誘われてたな」

「ええつ、あつ、明久君が!?!そつそれ、どこで見たんですか!?!」

本当にコイツらは、揃いも揃って……。

「おい姫路、アルバイトか？」

「あ……っ！ち、違いますっ！私……じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ？見ての通りキツネの女の子だよ」

「まあこの際どっちでもいいが……。じゃあフィーとやら、お前のおススメを教えてくださいませんか？」

「あ、う、うんっ。フィーのおススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ」

姫路は噴水を挟んだ向こう側に見える、廃病院を改造したという話題の建物を指差す。

「そうか……。よし翔子、お化け屋敷以外に行くぞ」

翔子の背中を押して歩き出す。すると姫路が慌てたように俺の腕を掴んできた。

「ままま待つて下さいっ！ どうしてオススメ以外のところに行くんですか!？」

「どうしてもクソもあるか！ お前らの手で余計な仕掛けを施されてる事は明白だろう！ わざわざ地雷源に足を踏み入れてたまるか！」

あの和真が関わっている以上、もしノコノコお化け屋敷に行こうものなら間違いなく俺は……。考えただけでも恐ろしい。

それにしてもアトラクションを選ぶ前に姫路に遭遇できて本当に良かった。いくら成績優秀とは言え、姫路はこういう駆け引きに不向きで簡単にボロを出してくれる。

ハッ、まだまだ詰めが甘いな和真。もし俺がお前の立場だったら作戦に姫路は参加させていなかった。こういうところが指揮官としての俺とお前の差なんだよ。

「そ、そんなの困りますっ！ お願いですからお化け屋敷に行ってください！」

「断固断る！」

そのお願いとやらのために残りの人生を捧げる気はない。

そのまま姫路が引きずられるようになってくる。邪魔なので振り払ってしまおうか、なんて考えていると、そこに何か近づいてきた。

「そこまでだ雄二……じゃなくて、その不細工な男っ！フイーをいじめると、このノインが許さないぞー！」

「その頭の悪そうな仕草……明久かつー！」

颯爽と登場したのは、さつきも見た雄キツネのノイン。

「失礼なっ！僕……じゃなくて、ノインのどこが頭が悪いって言うんだ!？」

「黙れ！頭部を前後逆につけている奴をバカと言って何が悪いー！」

本来可愛らしいであろう着ぐるみの頭部は装着が前後逆になっており、とてもシュールな生き物となっていた。

「……雄二。ノイちゃんはうっかりさんだから」

「うっかりで頭が逆になるキツネはいない！」

こんな滑稽な生物が自然界にいたら、即自然淘汰されてしまうであろう。

『あつ、明久君っ。頭が逆です！ああつ！今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ!?!』

『うわっ、しまった！道理で前が見えないと思っただ！』

『早く治さないと、坂本君にバレちゃいます!』

まだ誤魔化せると思っているコイツらはつくづくお似合いのカップルだと思う。

「ハイ。すいまセーン。お待たせしまシタ」

ちいいつ、明久なんぞに気をとられている内に一番来て欲しくない和真が来やがった。

「坂本雄二サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「だからイヤだと言つてるだろうが！」

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

「やめろっ！そんな事をされたら我が家の家事が全て滞つてしまう！」

おふくろは全てのプチプチを潰し終えるまで他のことは何もしなくなるだろう。

もしこの世に神とやらがいるのなら、何故こんな外道に人の弱点を的確に抉る才能なんかを与えてしまったのだろう。

『ところで明久君。さつき女子大生の声を掛けられていたって聞きましたけど？まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と……』

『え？何の事？僕は別に何も……あの、どうして携帯電話を取り出すの？誰を呼ぶ気？』

『美波ちゃんが今すぐ来てくれるそうです。お話、ゆつくり聞かせてくださいね？』

『だ、ダメだよっ！オープン初日で刃傷沙汰なんてここの評判に……ひいっ！』 なん

だかすごい勢いで美波らしき人が走って来てるみたいなんだけど!」

離れた場所でファンシーなキツネの痴話喧嘩という珍しい光景が展開されていた。

「坂本翔子さん、お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題ですよ?」

「……雄二、お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞ木下姉! 翔子を使って罠にハマようなんて! それと勝手に翔子を入籍させるな

! ソイツの名字は霧島だ!」

「……大丈夫、すぐ変わるから」

さっきの同情を返してほしくなった。

「では、こちらにサインして下サーイ」

「なんだよこれ?」

「ただの誓約書デース」

誓約書が必要なお化け屋敷ってなんだ? こいつはいったいどんなトラップを仕込ん

だんだ?

【誓約書】

1. 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
2. 婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。
3. どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

4. 日本で保障されている人権という人権を妻に献上することを誓います。

「……はい雄二、実印」

「朱肉はこちらデース」

「俺だけか!?俺だけがこの状況をおかしいと思ってるのか!?特に最後のやつは誰が見ても明らかにおかしい!」

こいつは俺を地獄に叩き落とさなければ死ぬ病気にでもかかっているのか!?そして木下姉、そんな可哀想なものを見る目で俺を見るくらいならどうかしてこのド外道を止めてくれ!

「冗談です。誓約書は良いので中に入れて下サイ」

「……うん。冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか!」

色々言いたいことはあるが、この連中に常識とか容赦とか慈悲とかを求めるのも酷だろう。

「そつ…それでは、邪魔になりそうなのでその大きな鞆をお預かり致します」

「……お願い」

翔子が持つていたカバンを木下姉に預ける。

そう言えばやけに荷物が大きいな。

「……零れちやうから、横にしないでほしい」

こぼれる？何が入ってるんだ？和真が何か察したような表情をしているが。

「……デハ、行つてらつシャイマセ」

「廃病院を改造したお化け屋敷だけあつて、確かに雰囲気は十分だな」

「……ちよつと怖い」

「こういうものにあまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな」

適当に談笑しながらも、俺は周囲への警戒を張り巡らせていた。一階では特に何も起きなかつたが、あのサデイストがそのまま順調にゴールさせてくれるわけがねえ。必ずどこかしらで俺を抹殺するトラップが待ち受けているはずだ。

「……………じの方が……………よりも……………」

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。

「……………この声、雄二……………?」

「合成音声か、秀吉の声真似か?どっちにしても大して怖くねえな」

確かに不気味っちゃ不気味だが、和真にしては思ったより普通の演出だな……

【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】

……………と一瞬でも考えてしまった時点であいつの思う壺と言うわけか、なるほど。

「……………雄二。覚悟、できてる……………?」

「怖えっ!?翔子が般若のような形相に!確かにこれはスリル満点の演出だ!」

俺の馬鹿野郎……………!わかっていたはずだろうが……………!ここに入ったてしまったら生

きて出ることとはできないかもしれないと!

そこに何かの仕掛けが作動した。天井に穴が開き何かが落ちてくる。なんだ!?!何か

この状況を切り抜けるアイテムか!?

「……………気が利いている」

……………釘バット?、

「畜生っ!よりによって処刑道具まで用意してくるとは!全く趣旨は違うが確かに恐ろ

し……」

「……………雄二、逃がさない」

釘バットを持った幼馴染に追いかけられるという斬新なアトラクションを満喫(?)している、またどこからか声が聞こえてきた。

【翔子、よく聞いてくれ!】

「……何?」

聞こえてきた俺の声に立ち止まって耳を傾ける翔子。

た、助かったのか……?

【たとえ誰に批難されようとも、俺はお前を愛している!世界中の誰からも認められなかったとしても、俺は——】

「やめろおおおおおおおお!」

「……雄二(パワー)」

確かに翔子からの命の危険は無くなったが今度は羞恥で死にそうだ!間違いない、あの野郎本気でこの俺を抹殺するつもりだ。常日頃から過酷な環境(原因の8割強が翔子からみ)に身を置く俺は肉体的ダメージや死の恐怖に対しては、悲しいことに耐性がついてしまっている。しかしこういう手口からの攻撃にはまるで耐性が付いていない。チクシヨウ和真め。恋愛方面には明久以下の感性しか持つてねえくせに、こういう攻め方だけは熟知しやがって……。

【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】

「……雄二、覚悟」

そして再び訪れる命の危機。恍惚とした表情を浮かべていた翔子はまた般若の顔に。くそつ、危険の緩急についていけねえ！しかしまだこういう方向の方がありがてえ！今のうちに逃げ切つてー

「たとえ誰に批難されようとも、俺はお前を愛し「やめろおおおおもういつそのこと殺せええええええ!!」

そんな感じで、この後も俺は二つの音声に翻弄されながらも、命からがらお化け屋敷を脱出した。

「お疲れサマでシタ。どうでシタ「死ねええええええ!!」おおつと、ずいぶん血の気が多いじやねえか」

怨敵の姿が見えるや否や俺は殴り殺すつもりで飛びかかるが、ムカつくことにあつさり回避されてしまう。

「和真、お前をクロス」

「んだよ、何が気に入らねえんだよ」

面倒になったのか片言キヤラも放り投げてこの鬼畜外道野郎はぬけぬけと俺に文句を言う。人の告白台詞勝手に引用しておいてどこまで面の皮が厚いんだこいつは……！

「キサマあの音声をどうやって入手した!?まさかあのとき録音して——」

「いや、一字一句覚えていたのを書き写して秀吉に読ませた」

あ、こめかみに熱が集まるのを感じる。

「ということは何か?少なくとも秀吉にはあのが漏れた、と?」

「秀吉だけじゃなくウエディングシフトに参加してる奴は全員知ってるぜ?やっぱあんな熱い告白内容は皆で共有すべきだよな〜♪」

明久以来になるかな、心の底から人を殺したいと切実に思ったのは……! !

「くそつ、やはりお化け屋敷だけは避けるべきだったんだチクショウが!」

「何言ってるんだよ雄二、助かる望みのあるアトラクションなんてこの俺が用意している筈ないだろ?どのアトラクションを選んでも俺の仕掛けた罠が待ち受けてるぞ」

先ほど指揮官として云々と勝ち誇ってた自分をぶん殴りたい。プレミアムチケットを自分で処理するのを面倒がって明久に押し付けたあの瞬間から、俺はもう詰んでいた

のだ。

「……そろそろお昼」

翔子が噴水の上の方に見える多時計を見て、そう呟いた。

『えー、お客様にご案内申し上げます。本日はレストランにて特別ランチが催されます、プレミアムチケットのお客様には特別メニューを用意します』

「あちゃー……」

「へー。特別メニューか」

「それでは、レストランへ案内させていただきます」

園内にアナウンスが流れる。何故だか和真が不都合そうな表情をしているのが気にかかったが、走り回って腹が減ったのも事実なので木下姉の案内についていく。

「ん？翔子、どうした？」

「……なんでも、ない」

「??？」

一瞬寂しげな顔をしていたような……？

木下姉の誘導に従い、しばらく歩くとこじやれたレストランが見えてきた。そこからさらに中に入り、あるパーティー会場の様な広間に出る。

「此方でございます」

そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというより……。

「……クイズ会場？」

そう、一応テーブルには、豪華な料理が並べられているがそこはクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらつしやいませ、坂本雄二様、翔子さま」

ボーイが現れ、俺たちを席に案内する。

まあ、こいつもいるよな当然……。

「秀吉。ボーイの真似事か？」

「秀吉？何のことでしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。こいつ、役者モードになってやがるな。こうなるとそう簡単に化けの皮は剥がせない。もういちいちつっこむのも面倒だし放っておくか。

レストランで俺と翔子が特別メニューを食べ終わり、特に仕掛けもないようだと安堵しかけたそのとき。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

会場に大きくアナウンスが響き渡った。

《何と本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやるのです！》

飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させていただきました！題して、「如月ハイランドウエディング体験」プレゼントクイズ〜！》

出入り口を封鎖する重々しい音が響く。

この手口は恐らく明久……！おのれ……俺の行動パターンは予測済みということか……！

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事5問正

解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験していただけるといふものです！もちろん、ご本人様の希望によつてはそのまま入籍ということでも問題ありませんが」

大問題だバカ野郎。

《それでは坂本雄二さん&霧島翔子さん！前方のステージへとお進みください！》

「ご丁寧にも司会が俺達の席を示したお陰で、観客の視線が一斉にこっちの方を向いた。」

「……ウエディング体験……頑張る……！」

「落ち着け翔子。そう言ったものはだな、きちんと双方の合意の元に痛だだだっ！耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ!!」

ただの体験だと自分に言い聞かせ渋々壇上に上がり、回答席に座る俺達の前に現れたのは、文月学園を代表するバカ。

「それではクイズを始めます！」

そうだ。クイズをわざと間違えればいいんだ。

残念だったな明久、俺もかつて神童と呼ばれた男。テメエの企みを阻止することぐらい造作もないんだよ。

「では、第一問！」

ボタンに手を伸ばす用意をし、出題を待つ。

さて、どんな問題でもかかってきやがれ！

「坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？」

おかしい。問題文の意味がわからない。

ピンポーン！

しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！だ、だが、いくら翔子でも正解の存在しない問題を答えることなど……

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかしくて死んでしまう！」

「お見事！正解でーす！」

しかも正解!?

俺は殺意のこもった眼で明久を睨みつけるが、このバカは観客に見えない角度で片目を瞑ってきた。

野郎……！出来レースかつ！どんな手を使っても俺達にウエディング体験とやらをやらせるつもりか!?

！
上等じゃねえか……こいつ如きの策に嵌められてたまるか！意地でも間違えてやる

「では、第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？」

ピンポーン！

「鯖の味噌煮！」

「正解です！」

「なにいつ!?!」

バカな!?!場所を聞かれたのにこれで正解だと!?!

「お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名『鯖の味噌煮』で行われる予定です！」

「待てえっ!?!絶対その別名はこの場で命名しただろ!?!強引にも程があるぞ！」

「では第三問！お二人の出会いの場所はどこでしょうか?！」

ダメだ、聞いちゃいねえ……!?!だがな明久、テメエのやり口はわかった。今度は確実に間違えて見える。翔子より先にボタンを押し、間違った解答を……

「……させない」

ブスッ

「ふおおおおつ!?!目が、目があ！」

ピンポーン！

「……小学校」

「正解です！お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚式にまで至るとい
う、なんとも仲睦まじい幼馴染みなのです！」

こいつの目は節穴か!?今の光景をどう見たら仲睦まじいという言葉が出てくるんだ
!?

こうなったら最後の手段だ！

「では第四問！」

ピンポーン！

問題文が読み上げられるよりも先にボタンを押し、翔子の妨害が入る前に解答を済ま
せる！どんな問題だろうが、こう答えれば100%間違いになる筈だ！

「わかりません！」

「正解です！それでは最終問題です！」

詰んだ……！こいつ、俺の解答を無視しやがった……！これではどうやっても問題を
間違える事は……！

もはやこれまでかと思ったとき。

『ちよつとおかしくなくい？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコー
セーだけが特別扱いなワケ？』

不愉快な口調の救いの神が現れた。こいつら入場口で和真達に絡んでいたチンピラ

どもか。和真の口撃を受けても以前と態度が変わっていないとは、思ったよりタフなのかそれともよっぽどのバカなのか。

「あの、お客様。イベントの最中ですので……」

「グダグダとうるせーんだよバカ面！俺達やお客様だぞコラア！」

「アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんですけど〜？」

「ですけど〜といわれましても……」

「グダグダ言ってるじゃねえよコルア！俺達も参加してやるってんだよボケがっ！」

「じゃあこうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってことで！」

「そんな勝手な……」

明久の文句も無視して、そのバカップルはズカズカと壇上上がり、設置してあるマイクを一つひとつたくる。

千載一遇のチャンス到来……！

あいつらが相手なら確実に間違えられる。ありがとよバカども、存在そのものが不愉快な連中だったが、最後の最後で俺の役に立ったようだ……！

『じゃあ問題だ聞けよコラッ！』

さて、どんな問題だ？安心しろ、どんなに簡単な問題でも間違えて――

『ヨーロッパの首都はどこか答えろっ!』

「……………」

言葉を、失った。

『オラ、答えろよ! わかんねえのか?』

確かにわからないと言えばわからない。俺だけじゃなく、和真だろうが木下姉だろうが姫路だろうが翔子だろうが、例え二年の主席に君臨する俺達Fクラスの宿敵、鳳蒼介をこの場に連れてこようが、この問題に答えることは不可能だ。

なぜなら、俺の記憶が正しければ、ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。

「おめでとうございます。坂本雄二さん、翔子さんに『如月ハイランドウェディング体験』プレゼント♪」

『おい待てよ! こいつら答えられなかっただろ!? オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』
『マジありえなくない!? この司会バカなんじゃないの!?!』

世界って俺の思ってたよりずっと広いんだな…………。

まさか明久以上のバカがこの世にいたとは……。

如月ハイランド～終劇～

【優子視点】

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》

園内全てに行き届くのではないかと思えるほどの拍手が響き渡る。

「ホントに色々あったけど、なんとかウエディング体験までもっていったわね」

「そうだな。それにしても、メインイベントだけあってやけに準備が長かったな」

翔子の晴れ舞台を見届けるため、アタシ達『翔子の恋路を手伝い隊』のメンバーは観客席に座っている。まとまった席が取れなかったのでいくつかに分かれているが、アタシの隣にはいつものように和真がいる。何故か秀吉がニヤニヤしていたが、イラツとしたのでいつものように処刑しておいた。

「お、雄二がステージに上がってきたぞ」

「へえ……長身なだけあって、意外とタキシードが似合っているわね」

「翔子のために一枚撮っておくか」

そう言いながら和真は坂本君の姿をフィルムに収める。そういう気遣いができるな

ら、もう少しマシな作戦を立てられたんじゃない？

《それでは、新郎である坂本雄二さんのプロフィールの紹介を………省略します》
いくらなんでも手を抜き過ぎでしょ……。

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな』

『だよね』

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてきた。

声の主は……さっきのヨーロツパバカね……。

「ああもう、マナー悪いわね……！」

「確かにそろそろ目に余るな……。まあ、もう仕込みは終わっている。後は引き金を引くだけで大打撃を与えられる」

和真が携帯を弄りながらなにやらアタシの隣で恐いこと言ってるけど、危なっかしいこと企んでんじゃないでしょうね……？

《……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願いします》

『これ、アタシらのことってんの？』

『間違えだろ。俺らはなんたつてオキヤクサマだぜ?』

『だよね〜』

『ま、俺達の事だとしても気にすんなよ。要は俺達の気分が良いか悪いかってのが問題だろ? な、コレ重要じゃない?』

『うんうん! リュータ、イイコト言うね!』

調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響き渡る。

宣伝目的でやっているイベントである以上、ここまで騒がれては迂闊に手を出せない。

「本当にムカつく……!」

「もう容赦はいらないな……。思いしれ(ピツ)」

和真は不吉な発言とともに何かをやったようだが、それが気にならないほどアタシはイライラしていた。

全身の骨という骨を折り畳んでやろうかしら……?」

《……それでは、いよいよ新婦のご登場です》

心なしか音量の上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。

スモークが足元から放出され、雰囲気が高まっていく。

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時に幾筋ものスポットライトが壇上の一点を照らし出す。暗闇から一転して輝き出す壇上で、純白のドレスに身を包んだ翔子がそこにいた。

「……………綺麗」

溜息と共に思わず漏れ出たアタシの台詞が、静かな会場に響き渡る。

「以前雄二が、自分では翔子には相応しくないとかほざいてたが……なるほど、あいつの言い分も一理あるかもな」

和真の台詞をアタシは否定しきれなかった。今の翔子は、同姓のアタシですら目を奪われるような幻想的な美しさだった。坂本君の見てくれが悪いわけではないが、あの二人が並ぶとどうしても坂本君が添え物のように移ってしまう。

ゆつくりと翔子が坂本君のもとに歩み寄るのを、会場中が静かに注目していら。

「……………雄二」

『翔子、か？』

『……………うん』

坂本君の口から、そんな質問が出て来た。その姿に見惚れ、動揺しているのが手に取るように分かる。

『…………どう…………? 私、お嫁さんに、見えるかな…………?』

『…………ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない』

「いや、言葉のチョイスも少し他に無かったんか? 相変わらずデリカシーのねえヤツ」
「坂本君もアンタにだけは言われたくないでしょうね」

こいつがデリカシー云々で人にとやかく言うなど噴飯ものではあるが、言い分自体は否定できない。あんなに綺麗な翔子にかけた言葉が「少なくとも婿には見えない」って…………。

確かにもっと他に言うべきことがあるでしょ。

でも、

「テンパってる今の雄二(坂本君)からすれば精一杯の誉め言葉のつもりなのかもな(ね)」

『…………雄二』

『お、おい。翔子…………?』

『…………嬉しい…………』

翔子はそれ以上言葉を発することなく、ブーケに顔を伏せたまま静かに震えだした。

《ど、どうしたのでしょうか? 花嫁が泣いているように見えますが?》

事情を知っているアタシ達にはその涙の真意が読み取れた。けれど何も知らない観客の間には先程までの静寂の代わりに、ざわめきが生まれ始める。

そんな中、彼女は小さな、しかしはつきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと……夢だったから……」

《夢、ですか？》

「……小さな頃からずっと……夢だった……。私と雄二、二人で結婚式を挙げる事……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対叶わない、小さなころからの私の夢……」

普段口数の少ない翔子の、ぼつぼつと懸命に紡ぐ言葉。

それを満足そうに聞きながら、和真は自身の見解を述べる。

「確かに外見のみで判断すると雄二と翔子は全く釣り合ってねえかもしれないねえ。だが今の言葉で分かるだる優子？自分には相応しくないだの自分では翔子を幸せにすることはできないだのでグチグチ悩んでいた頃の雄二が……」

「ええ……独善的な勘違い野郎だったってことがね」

そりゃ私も翔子があんな問題児と添い遂げて良いのかと思つたことは一度や二度ではない。しかし今なら胸を張つてこう言える。

坂本君のその言い分は、見当違いも甚だしい、と。

「……だから……本当に嬉しい……他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこからは言葉にすることができずに、彼女はまた静かに泣き始め、会場からはもらい泣きをしたような音が聞こえ始める。

坂本君では翔子に相応しくない？

坂本君では翔子を幸せにはできない？

大間違いよ。

「坂本君『が』翔子に相応しいのよ。他の誰でもない、坂本君『だけ』が翔子を幸せにできるのよ」

「そうだ。それを再確認できただけでも、今回のことに意味はあった」

今の和真の表情は、普段浮かべている不敵な笑みでも、人をいたぶるときの無邪気な笑みでも、ましてや困難を前にしたときの狂喜の笑みでもなく、慈愛に満ちた笑顔を浮かべている。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか》

「恋人にここまでされてなお舌先三寸で誤魔化すつもりなら、坂本君は男じゃないわ」
「安心しろ。雄二の素直じゃなさは筋金入りだが、アイツはそんなタマナシじゃねえよ」
和真の言葉の通り、坂本君は今まで見せたことの無い、覚悟を決めたような真剣な表情で口を開いた。

「翔子、俺は……」

『あーあ、つまんなーい！マジつまんないこのイベントお。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い？』
『だよな。お前らの事なんかどうでもいいっての！』

最前列から放たれた心無い罵倒によつて、アタシの脳が一瞬で沸騰したように感じた。

『つてか、お嫁さんが夢ですつ、つて。オマエいくつだよ？なに？キャラ作り？このスタツフの脚本？バカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？ギャグにしか思えないんだケドお〜！』

『そつか！コレつてコントじゃねえ？あんなキモイ夢、ずっと持つてるヤツなんていねえもんない！』

『え〜っ!?!コレってコントなのお?だとしたら、超ウケるんだケドお〜!』

口々に文句を言い、翔子を指差して笑い始める二人組。

《んだとテメエらっ! もういつペン言ってみやがれ!》

《あ、明久君! 落ち着いてっ! ステージが台無しになっちゃいます!!》

《そうよアキ! 気持ちは痛いほど分かる! けど、ここで暴れたらそれこそ大問題になっ
ちやうわ!》

遠くの席で吉井君達が声を荒立てているが、今のアタシの耳には入ってこなかった。

許せない……! かけがえの無い親友の、大事な夢を土足で踏み荒らしたあいつらを……アタシは絶対に許さない!

そのまま怒りに任せて立ち上がるつもりだったが、肩を和真に押さえつけられてできな
かった。

「っ!?!何で止めるのよ!?!」

「言わなきや分からねえか?」

八つ当たり気味に和真に食ってかかるが、やけに冷静な声で諭される。しかし満面の
笑みを浮かべていたつい先程までとは打って変わって、非常に冷たい表情をしていた。

和真がなぜ止めたのかは言われなくてもわかる。

だが理解は出来ても感情がまるで納得してくれない。

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらへ行かれたのですかっ!?!》

アナウンスを聞き舞台上に目を移すと、いつの間にか翔子が姿を消していた。さつきまで立っていた場所にブーケとヴェールを残して。坂本君はヴェールを拾い上げると、何かを考えるように目を閉じる。

『霧島さん!?!霧島翔子さーん!?!みなさん、花嫁を探してください!!』

スタツフがバタバタと駆け出す。

ここまで大々的に準備をしてきたのに失敗したとなれば、如月グループのお偉方は顔を青ざめるだろう。

でも今のアタシにとってはどうでもいい。イベントの失敗が確定してしまった以上、遠慮する必要などもう無いのだから。相手は恐らくどこかしらの会社の重役のせがれ、そんな相手と暴力沙汰を起こせばどうなるかだいたい想像がつく。それは今まで築いたものを全て投げ捨てる愚かな行為だということも重々理解している。

それでも、ここで拳を下ろす理由にはならない。

「放しなさい和真! アイツらはここでぶちのめす!」

「落ち着け。お前に教えたのはあくまで護身術、人を傷付けるには向かないし、何よりそんなことをさせるつもりでお前に身に付けさせたんじゃないやねえ」

アタシは段々と和真にも腹が立ってきた。

なんでアンタはそんな冷静なのよ……! !

「アンタは翔子の夢を穢されて悔しくないの! ? 見損なつたわ! 」

気がつけばそんな言葉が口から出ていた。

後から思い返せばそのときのアタシはどうかしていた。友達を傷付けられて怒っていないわけではない、それを頭でわかつていながらアタシはそんな最低な言葉をぶつけてしまった。このことがきっかけで絶縁になってしまってもおかしくないレベルの最低な行為だ。

「あのなあ優子……」

お前は今まで俺の何を見てきたんだ? 」

「……え? 」

まあ結果的にそうはならなかったけど。

怒っているわけでも悲しんでいるわけでもなく、「何言ってるんだこいつ? 」と言わんばかりの呆れるような口調に、アタシは思わず思考が吹き飛んだ。

「俺があんな迷惑な奴を見逃すような甘い奴に思うか? 」

虎の威を借りて甘い汁をすすってるだけの奴を許容するような、寛容な奴に見えるか?

この俺が、大切な友達の、大事な大事なものを土足で踏み荒らしたような奴を、ここ

から無事に帰すような、慈悲深い奴だという可能性が果たしてあるか？」

「……思わない、見えない、有り得ない」

そうだった。五体満足で帰すつもりなど端から存在していなかったのだ。

「あいつらは越えてはいけけない一線を越えてしまった。対価はあいつらの今後の人生全てで払ってもらおう。だが、今は俺達は動いてはいけねえ」

「どういふことよそれは？」

「俺の言いてえことはただ一つ、端役がでしゃばる場面じゃねえつてことだ」

そう言うってから和真がステージに目を移したのを見て、アタシはようやく和真の言いたいことを理解した。ステージには既に誰もいなくなっていた。

そうよ。今日の主演はアタシ達ではなく、翔子と、もう一人。

「もう一度言うておくれ。雄二は……アイツはタマナシ野郎なんかじゃ断じてねえ」

『いや、マジでさっきのウケたな！』

『うんうん！私……結婚が夢なんです……。どう？似てる？ 可愛い？』

『ああ、似てる！けど……キモいに決まってるだろ！』

『だよね〜！』

「なあ、アンタら」

『ああ？あんだよ？』

『リユータ。コイツ、さっきのオトコじゃない？』

『みてあだな。んで、その新郎様がオレたちになんか用か、あア!?』

「いや、大した用じゃないんだが……」

ちよつとそこまでツラあ貸せ」

【雄二視点】

「よっ。遅かったな翔子」

「……雄二」

如月ハイランド内のグラウンドホテル前で待つことしばし。

翔子がトボトボと俯きがちに歩いてきた。

「さて。それじゃ、帰るとすつか」

ぶちのめしたゴミ二体と引き換えに和真から受け取っていた翔子の鞆を担ぎ直す。

あいつらがその後どうなったのかは知らないが、和真の邪悪な笑顔からしてロクな目に合わないことは間違いない。詮索するのは正直怖すぎるのでアイツらのことは脳内から削除することにしよう。

「……雄二」

「なんだ？」

「……私の夢、変なの？」

あのバカどもに笑われたことをずっと気にしているのだろう。翔子の表情は俯いて見えないが、長い付き合いだ、どんな顔をしているのか見なくてもわかる。

「翔子、俺から告白しておいてこんなこと言うのもなんだが一応ハッキリ言っておく。お前に男を見る目は無え。こんなどうしようもない男に惚れちまったんだからな」

俺はやることなすこと全てが半端だ。

多少喧嘩は強いが、和真のような何者にも縛られない絶対的な強さの前では霞んでしまふ。

かつては神童と言われていたが、神童のまま成長しても果たして鳳蒼介には勝てたかどうか。

立てた戦略は鳳に見抜かれたし、今日も和真の立てた策に良いように手玉に取られた。

いや、和真や鳳だけじゃねえ。

姫路のような献身的な心を持つている訳でもなく、島田のように語学力があるわけでもなく、ムツツリーニのような技術も持ち合わせておらず、秀吉のような演技力も備えていない。

そして……明久は、普通の人間が持つていて当然のものを何一つ持つてねえあのバカは、一つだけ持つてている。神童と呼ばれ天狗になっていた俺が持つていなかったものを、俺が心の底から望んでやまなかつた大切なものを。

翔子は俺の言葉に耳を傾けている。言いようもない不安を抱えながら。「だけど……俺はお前の夢を笑わない。」

こいつの夢は、大きく胸を張れる、誰にも負けない立派なものだ

「思う相手こそ間違つたかもしれないが、一人の相手を思い続ける事は誇らしい事だと

思う、だからお前の夢は他の誰にも負けない立派なものだ」

会場で拾っておいたヴェールを被せる。

花嫁衣装の1つである白い薄布を手で押さえ、翔子は驚いたように顔を上げた。

なんとなく気恥ずかしく思い顔を背けるが、そう言えばもう一つ言っておくことがあつたつけ。

「……弁当、旨かった」

俺は軽くなった鞆を翔子に渡す。

「……あ……私のお弁当……。気づいて……。くれたんだ……」

「さて、さっさと帰るぞ。遅くなると誤解されるからな」

「雄二っ！」

いつもとは違う、張り上げるような大声に、思わず立ち止まる。

「……なんだ？」

平静に、いつも通りの態度と声で言葉を返す。

そして少しだけ振り返ると、赤い光の中、自らの手でヴェールを持ち上げ、

「私、やっぱり何も間違つてなかった」

満面の笑みを浮かべる幼馴染が、そこにいた。

何もかも中途半端な俺が唯一誇れるもの、絶対に誰にも負けないと胸を張って言える

ものがあるとすれば、

こいつを世界中の誰よりも幸せにして、こいつの選んだ道が失敗ではなかったと証明する覚悟だ！

【優子視点】

「一件落着ね」

「だな」

坂本君達からは死角になる場所で、アタシ達は彼等の帰宅を見届けた。

「それにしても坂本君大丈夫かしら。あのチンピラども、どこかの会社の跡取りでしょ？顔の面積が倍になるほど殴り倒して」

「どこかの会社じゃねえ。『橘』の傘下の会社だ」

聞き慣れた会社名に思わず耳を疑う。『橘』といえば和真の幼馴染みの一人でアタ

シのクラスメイト、橘飛鳥の父をCEOを務める世界的大企業。

「雄二達がお化け屋敷に入っている間暇だから調べておいた。『桐谷』系列の如月グループに営業妨害をしていると飛鳥の父の大悟さんにリークして、会社の地位を落としてやるだけで済ますつもりだったが……あそこまでしたこいつらにかけてやる慈悲はない」

「アンタ……最終的にどうしたのよ？」

正直聞きたくなかったが、こいつと肩を並べていく以上聞いておかなければならない気がした。

「事情を包み隠さず話すと大悟さんがノリノリで行動してくれたよ。あのチンピラの親の会社に『橘』の力を背景に息子と絶縁するか倒産するか二択を突き付けたらしい」

やっぱり聞かなければよかったかな。

「ちなみにアイツの親は即決で息子を見捨てたんだと。あのチンピラの居場所はもうどこにも無い。自己保身のために捨てられるとは惨めだな、同情するぜ」

欠片も同情していないじゃないその顔……。

あいつらに同情する気はアタシも無いけれど、金持ちの怖さは正直知らないままでいたかったなあ……。

「しっかし今日は色々あったなあ。どうだ優子、たまにはこういうのも悪くねえだろ？」

「よく言うわよ。アンタの悪ノリにやきもきしたり、変なアダ名つけられたり色々大変だったんだから」

「だいたい何よインフェルノ||ドラゴンなんたらって。」

「そう、か…。楽しくなかったか…?」

……………。

「えいっ」

「(ビスツ) いてっ」

「アタシは和真の額にデコピンした。突然のデコピンに呆けた顔になる和真。うん、とても珍しい。」

「もちろん楽しかったわよ。アンタにそんな顔は似合わないから、いつもみたいに笑ってなさい」

「……そんな顔ってどんな顔だよ?」

「教えてあげない♪」

和真は滅多なことでは笑みを絶やさない。

普段は不敵な笑みを、サドモードに入っているときは無邪気な笑顔を、強敵と対峙したときは狂喜を、基本笑っていることが多い。

逆に怒りや悔しさや辛そうな表情は、和真と仲が良い人にしかみせない。なまじスマートに物事をこなせるため、親しい人でもあまり見かけないのだが。

そして……アタシにしか見せない表情がある。そのアタシも極々たまにしか見たことがない。さっきのを合わせて三回目かな。本人すらどんな表情をしているか自覚がないため、あの表情を知っているのはアタシだけになる。

あの……こちらの顔色を伺うような、どこことなく寂しがっているような、それでいて、拒絶されることを恐れているような表情は。

アタシにだけ違った顔を見せてくれることがちよっぴり嬉しい反面、アタシは和真にあの顔をして欲しくない。

和真をよく知る人からすれば、これほどまでに能力のある和真を常々何かと心配しているアタシを不思議に思うだろうが、アタシにとってそんなことは関係ない。あんな表情をされると、心配の一つや二つして当たり前だ。

アタシは和真の側にいたい。

誰よりも強くて、だだけど誰よりも不安定なこの子を守るような人になりたい。

あの顔を見てから、アタシは強くそう思うようになった。

休日の予定を強引に決められたり、今日みたいに気まぐれで色々と振り回されたりしても、怒るに怒れないのはそういう理由だ。

「……まあいいか。さて、メンバー達誘って打ち上げにでも行くか！」

「そうね。また明日から学校だし、栄気を養うのも悪くないかな」

「……………しかし、いつになったらこの子は思春期になるのかな？」

週明けの学校、放課後…………。

【雄二視点】

「おい、和真」

「ん？雄二、何かようか？今からラクロスの練習あるから手短にな」

「如月ハイランドでは随分と色々やってくれたな」

「だろ？時間と労力をかけた甲斐があつたぜ」

「少しは悪びれるよ!? 誤魔化すどころか堂々としやがって！……まあいい。ところで、さつき明久にもあげたんだが、お前にもプレゼントがある」

「5万でいいぞ」

「現金じゃねえよ!? がめついな金持ちのくせに！」

「いや、お前の懐から搾取してえだけだ」

「お前実は俺のこと嫌いだろ!? ……今話題の恋愛映画のペアチケットだ。気になる相手がいれば一緒に行くといい」

「お前ほんと陰湿だな……。俺が人から貰ったもん無下にしながらないの知つてて、俺の興味ないジャンルチョイスしやがって」

こいつにだけは陰湿云々言われたくない。

「木下姉でも誘つて行つてやればどうだ？お前のフォロー凄く大変そうだったから労つてやれよ」

「それを言われると返す言葉もないな。練習の後にも誘つてみるか……じゃあこれはありがたく貰つとくわ、じゃあな」

教室から出ていく和真を見届けながら、俺は内心ほくそ笑む。勿論俺は何の考えもなくこんなことをしたわけじゃない。全ては復讐のための布石。

「お前がそれに自覚したとき、俺の復讐の準備が整う。余計なことを企んだツケはそのとき返してもらうぜ……」

ガシヤアアアン

『か、和真?! 盛大にこけたけど大丈夫か!?!』

『ててて……あ? 源二か? 大したこたあねえよ』

『お前が転ぶなんて、体調でも悪いのか?』

『あー、ちよつと考えごととしてな……』

「……あの様子だと想定したより早そうだな」

……いくらなんでも動揺し過ぎだろ。

t o b e c o n t i n u e d ……

週末のプール（前編）

〔徹視点〕

『プール？』

「そ。いつものように明久達がバカやってプール掃除の罰を課せられたんだがよ、掃除した後で自由に使ってもいいって言われたそうだ。そこでだ、お前らも来ないかって誘いに来たんだよ」

週明けの放課後Aクラス教室にて、和真がそんな提案をしてきた。ちなみにこの場にいるのは僕、優子、愛子の三人。源太は週末に塾のバイトがあり、飛鳥も鳳も休日ほども忙しいので、休日にはこの四人で集まるのがそこそこ多い。まあ愛子は休日にも部活に顔を出す日があるし、僕も趣味のスイーツ巡りがあるのでほぼ毎回集まっているのは優子と和真の二人だろう。まったく、これでまだ付き合っていないと言うのだから驚きだ。

「アタシはもちろん良いわよ」

「ボクもOKだよ。和真君、ボクのセクシーな水着期待しておいてね♪」

「愉快に脳が沸騰してるバカは放っておいて、徹はどうだ？泳ぐの得意だろ？」

相変わらず言動に容赦がないな。

「いくらなんでもひどくないっ!？」

「僕も別に構わないよ」

「徹君も流さないで!？」

自慢じゃないが泳ぐのは得意だ。バケモノ二名（鳳と和真）相手では流石に厳しいが、それ以外の『アクティブ』メンバーにはそうそう遅れをとらないだろう（優子とは接戦になるけど）。なんだったら視界の端で何やら喚いている水泳部員よりも速いと自負している。

「あ、当然掃除は手伝ってもらうからな。働かざる者泳ぐべからずって言うしな」

「いや、言わないわよ……」

こいつ全員が了承したのを見計らって言いやがった。最初から労働力増やすのが魂胆かよ。一流の詐欺師は嘘もつかずに人を騙すらしいけど、こいつがまさにそれなんじゃないか？

「おはよう、待たせたかい？」

「いや、大して待ってねえよ」

「おはよう徹」

そして週末。雲一つない抜けるような青空の下、僕は校門前にいるで立つ和真と優子に手を挙げて挨拶をした。ちなみに優子は諸事情で少し遅れるそうだ。

僕達が他愛ない話をしてると、

「バカなあああああつ！」

突然絶叫が聞こえてきた。視線を向けてみると、Fクラスの吉井明久と土屋康太（面識は無いがこの二人は色々と悪い意味で有名なので名前を覚えていた）が沈んだ表情のまま地面に突っ伏していいいて優子の弟さんと姫路さんがおろおろしていた。とりあえず僕達三人は何があつたのか事情を聞くため彼らに近づく。

「秀吉、何があつたのよ？」

「姉上か、最近こやつらは完全にワシを女として見ておるようじゃからな。ここらで一度ワシが男じゃということを再認識させようと思ったのじゃが」

「酷いよ秀吉！君は僕のこと嫌いなのかい!？」

「……………見損なつた……………」

「な、なんじゃ!?!なぜワシは責められておるんじゃ!?!」

「き、気にしなくていいと思いますよ。木下君」

「アンタも苦労してるのね秀吉……………」

大体事情が掴めた、どうやら優子の弟が女性物の水着でないことにガツカリしているようだ。

ふむ……………似たような苦しみ（Dクラスのとあるバカが原因）を持つ者として手助けしてあげるのも吝かでないかな。

「吉井、土屋。その辺にしておきなよ。男に女物の水着を着ることを強要するなど、あつてはならないことだよ」

「お、お主……………」

何故か弟君は感激の眼差して僕を見ているが、これは僕の心の底からの切実な本音だ。

「何言ってるんだよ!?!秀吉は男とか女とかそんな枠組みなど超越した存在……………そう！第

三の性別『秀吉』なんだよ！」

「ごめん、もうついていけない」

新しい性別を作り出してまでこいつは弟君に女物の水着を着せたいのか……？

「つてあれ？君は……」

「ああ、そう言えば面識無かったね。僕は」

「葉月ちゃんの知り合い？それとも誰かの弟さん？」

ヒキイツ

「明久……さらばだ」

「え？何で和真いきなり十字切ってるの？」

大袈裟だなあ和真は。流石の僕も初対面の相手をブチ殺したりはしないよ。

「初めまして。二年Aクラスの大門徹だ」

「え？同級生だったの頭蓋骨が砕けそうなくらいいたいいたい!!」

「人のこと背丈で判断してんじやねえそゴルアアア！」

以前Fクラスと試召戦争のとき、こいつは僕と和真が対戦していたのを見ているはずなので初対面とは言えない。

だから心置きなくブチ殺せるね♪

「あ、明久君の骨格がミシミシ悲鳴を上げています!？」

「あー、あいつの握力1000近くあるからなー」

「他人事のように言っておる場合か!? 早く止めねば明久が!」

「無理よ秀吉……。徹は自分をチビ扱いした相手には容赦しないから……」

「ううう……。ひどい目にあつた」

「次、僕を年下扱いしたら今度は砕くから」

「くだ!?!……き、気をつけます」

怯えた表情で僕から距離を取る吉井。トラウマを植え付けてしまったかもしれないが自業自得なので謝る気はない。

ータタタタタツ

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ!」

「わわっ!?!」

後ろの方から小柄な少女が急に吉井に飛びつき、吉井が驚いたような声を出す。ちなみに僕の恋愛対象は僕よりも背の低い人だがこんな幼い子に手を出すような深すぎる

業は持ち合わせちゃない。というか僕の予定ではあと20cmは伸びる計算なので、今後もロリコンの誘いを受けることは無いだろう。

あ、「そんなに伸びるわけねえだろ」とか思った奴には容赦するつもりはない。僕はチビではなく、ただ普通の人より成長期が遅れているだけに決まっている。

「もう葉月ってば。アキがびつくりしてるでしょ?」

「あ、美波ってことは……やつぱり葉月ちゃんか」

「よう島田、おはよう」

少し遅れて女子がやって来る。どうやらこの女子生徒の名は島田美波、先程の少女はこの女子の妹である葉月という名前らしい。……葉月ってこの子か。つまり吉井は僕をこの娘と同じくらいの子に見えたってことか?

どうしよう、もう一度ブチ殺したくなってきた。

「えへへー。二週間ぶりですつ」

明久の背中で天真爛漫を体現したように笑う葉月ちゃん。流石にこの子にスプラッタな光景を見せるのは僕でも憚れるな……命拾いしたな吉井。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですつ。酷いですつ。どうして葉月は呼んでくれないんですか?」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

吉井……君は小学生からもバカ扱いされてるのか？

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃて。どうしてもついてくるって駄々こねてきかないもんだから……」

島田さんが溜息まじりに呟く。

「あれ？坂本はまだ来てないの？ウチが最後だと思ったのに」

坂本と言えば、言わずと知れたFクラス代表にして、問題児コンビの片割れである坂本雄二のことだろう。

「いえ、もう来てますよ。今職員室に鍵を借りに行つて……あ、丁度戻ってきたみたいですよ」

姫路さんが説明していると、後者の方から坂本と霧島の姿が見えた。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「……おはよう」

「ん？見慣れない顔がいるな」

僕の方を向いて坂本がそう言った。

「そーいや優子はともかく徹は翔子以外のFクラスの面々と交流が無かったな、とりあえずお互いに自己紹介でもしとけよ」

「それもそうだな、Fクラス代表の坂本雄二だ」

「僕は吉井明久だよ」

「……………土屋康太」

「木下秀吉じゃ、以後よろしく頼むぞい」

「島田美波よ」

「姫路瑞希です。仲良くしてくださいね」

「ご丁寧にも。僕は大門徹、『人の身長をとやかく言う奴は神でも殺す』がポリシーだよ」

僕の自己紹介を聞いてやや引き気味になるFクラス一同。それでも君達が悪気無く地雷を踏まないように忠告してあげたつてのに、その反応は解せないな。

「徹は昔身長のことイジメを受けた過去があつてな、それでちよつと敏感になつてるんだよ。危ねえ奴ではないから心配すんな」

和真のフォローで引き気味の表情から同情めいた表情に変わる一同。一応言っておくが僕はそのことを一切引きづつてはいない、なぜなら一人残らずブチのめし終えていくからだ。

それを知っているからこそ、和真も人のプライバシーを平然と暴露したのだろう。

「小さいお兄さん、可哀想です……………」

「おい徹、一応言っておくけど殺るなよ」

「だ、大門！葉月は悪気があるわけじゃなくてね…」

釘を刺してくる和真と慌てふためきつつも葉月ちゃんを庇うように前に出る島田さん。

まったく、二人とも的外れにもほどがある。

「流石に僕より背の低い子に言われても特に怒りは感じないよ。むしろ優越感に浸れるね！」

ふふふ……人を見下ろせるこの感覚は、かくも新鮮で素晴らしい。

「器小っちゃ……」

うるさいな和真。

「……まあそれはさておき、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

坂本の言葉通り一旦男女に別れるが、何故か葉月ちゃんが僕達に付いて来ようとする。

「（こ）こら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていけないとダメだよ」

「えへへ。冗談ですつ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……？」

木下……いややこしいか秀吉で良いか……秀吉はこの扱いがデフォルトなのだろうか。同情する。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田!?!?ついにお主までそんな目でワシをみるように!?!?嫌じゃ!女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ!」

あ、和真も憐れむような目で秀吉を見ている。どうやらこの扱いがデフォルトらしい。

「あの、吉井君と島田さん、うちの弟は歴とした男なんだから流石に女子更衣室で着替えるわけには……」

「あの……それなら、木下君は一人別の場所で着替えるっていうのはどうですか?」

見かねた優子が助け船を出すものの男子更衣室を使わせるまでには至らず、結局姫路の提案が可決された。

「ぬ、ぬう……得心行かぬが、この際我慢じゃ……水着姿を見せればきつと皆もワシのこ

とを見る目が変わるはずじゃ……」

などとブツブツ言いながら、秀吉は水着の入った鞆を握り締めた。

「本当に苦労してるようだね……」

「よし。決まったならさっさと行こうぜ。時間が勿体無い」

「うん。そうだね」

「ちやつちやつと着替えるか」

「……………（コクリ）」

こうして僕達はそれぞれの更衣室に向かった。

週末のプール（後編）

【雄二視点】

更衣を済ませてしばらく遊んだ後、休憩のため俺と明久と和真はプールサイドのベンチに腰掛けて皆の姿をなんとなく眺めていた。

遊んでる最中に明久の策略で俺が翔子に溺れさせられたりもしたが、悲しいことにそんなことはFクラスでは日常茶飯事だ。本当に悲しい。

女子達は、あらかじめ遅れてくると通達していたAクラスの工藤や、何故か誘ってすらいないDクラスの清水も混ざって、三対三のビーチバレーを行っていた。

ムツツリーニ？ 現在輸血作業に勤んでいるが何か？

「あのさ、雄二」

「なんだ？」

バシツと水面にビーチボールが叩きつけられる音が響く。

「あの二人、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーをやっているように見えるけど気のせいかな？」

「大丈夫だ。俺にも険悪な雰囲気に見える」

ボールよ割れろ、とでも言わんばかりに全力で打ち合う姫路と島田。あの二人がああも対立するときは決まってこの明久（バカ）が原因だ。

どれ、ちよつと探りを入れてみるか。せつかくだからついでに和真にもな。

「ときに明久と和真」

「あん？」

「どうしたの雄二？」

「この前俺がお前らにやった映画のペアチケットはどうした？」

確か恋愛ものの映画だったはず。

「ああ、優子と見に行っただけど面白かったぜ。ヒロインがエイリアンに食い殺されたときはどうなることかと思っただけだよ」

おかしい。俺が監督ならそんなシーン恋愛ものの映画に違和感無く組み込める気がしない。

「……お前本当に見に行ったのか？でたらめ言ってるんじゃないだろうな？」

「お前どんな映画かも確認しないであれ渡したのかよ……」

「まあ雄二も恋愛映画なんて見慣れてないから、詳しくないのも無理ないんじゃない？」

明久に言われるのは非常に腹立だしいが言い返せねえ……。くそつ、意識している相手と慣れない恋愛映画を見させてどぎまぎさせてやろう大作戦が台無しだ。

「僕は、姫路さんと美波が随分と見たがつていたから、それなら二人で観てくるといいよつてあげちゃったよ」

「間違いない。それが原因だ」

「へ？何が？」

「こいつは本当に……」

あいつら二人は明久と一緒に行ききたがつていたということに微塵も気づいていねえ。流石の俺もあいつらが可哀想になつてくるぜ……。

だが和真、俺と同様に明久に呆れたような目を向けているところ悪いが、お前も人のこと言えないからな？

「ほう……。姫路と島田の勝負とは面白いのう。どちらが優勢なのじゃ？」

疲れたのか、秀吉もプールから上がつて俺らの座るベンチにやつてきた。ふむ、どちらが優勢かと言われると……

「今のところ姫路チームが圧倒的に優勢だな」

「んむ？それは意外じゃな。球技ともなれば島田の方に軍配が上がりそうなものじゃが」

「一対一ならな」

姫路と島田以外のチーム分けはグループで行われ、結果島田、工藤、清水と姫路、翔

子、木下姉という風に別れている。そして姫路が圧倒的に優勢な理由は主に3つ。

まず1つ目。

「なるほど、霧島は運動神経も良いようじゃな。島田と互角とはなかなかやるではないか」

翔子はスポーツもそつなくこなし、その実力は島田に勝るとも劣らないレベルと言つて良い。工藤も動きは悪くないが、島田や翔子に比べると少し劣るな。

そして2つ目。

「姉上か……。久しぶりに見たが、ワシの男としてのプライドが打ち砕かれるほど見事じゃのう……」

島田の渾身のスパイクをなんなくブロックした木下姉を見て秀吉が気を落とすが、正直あれを見て落ち込む必要は無いと思う。

「和真……木下さん強すぎない？」

「俺の弟子兼相棒だぜ？ 恵まれた運動神経に胡座をかいているような半端な相手に遅れを取るような鍛え方はしてねえよ」

なるほど、『アクティブ』で和真とコンビを組めるだけのことはある。女子の中ではトップクラスな筈の島田がまるで歯が立ってねえ。セッターなのかトスを多用してスパイクには行こうとしないものの、サーブ、トス、ブロックの全てがバレー部顔負けだ。

それだけでもこんなお遊びバレーでは大人げないレベルの完成度だが、それよりもう一つ気になることがある。

「なあ和真、なんで木下姉はプールの中であんなにスムーズに動けるんだ？」

そう、いくらなんでも速すぎる。普通は水の抵抗を受けてかなり鈍くなるはずなのに、木下姉は平常時よりは緩慢であるものの、水の抵抗をあまり受けていない。

「そりゃ、水の抵抗を受けにくい体の動かし方をしてるからに決まってるじゃねえか」

「……お前ら『アクティブ』は誰でもそんなことができるのかよ？」

「誰でもはできねえよ。できるのは俺と優子、あとソウスケだけだ。優子は身体能力は精々下から2番目ってとこだが、センスとテクニクは俺に匹敵するんだぜ？」

こいつに匹敵!? かなり出来る奴だとは薄々わかっていたが、まさかそこまでとは……。

「それにしても、島田のもう一人の相方は動きが不自然じゃな。故意に手を抜いておるように見えるのじゃが」

「あ、秀吉もやっぱりそう思う?」

明久達の予想はおそらく正しい。そしてそれが最後にして最大の理由だ。島田のパートナーの清水はさつきからミスを連発している。サーブは全部外し、ボールが飛んできたら落とすか場外へと飛ばしてしまう。

構えや動きを見るにそんな鈍くさい奴に見えないため、露骨に手を抜いていると見ていいだろう。

『美春。アンタ、絶対手抜いてるでしょ……!』

『そんなことありませんお姉さま! 美春はお姉さまの為に全力で（手を抜いていま）す!』

『これにはウチの大切な物がかかっているんだから本気でやりなさい!』

『はい! 美春もお姉さまの為に本気で（手を抜いていま）す! あんな奴とデートなんて、お姉さまの為になりませんから!』

『アンタ、さてはウチを負けさせるつもりね……!』

『ほらお姉さま! ボールがきましたよ!』

『あつ!?! もう、早く言いなさいよっ!』

二人が言い争っているうちに木下姉の絶妙なトスを受けた翔子が、強烈なスパイクを島田達の陣地に叩き込んだ。

「これで15点目……と。1セット目は姫路チームの勝ちだ」

審判をしている大門が手を挙げて、最初の勝負の終了を告げる。15―2と、見事なまでにワンサイドゲームだ。

「1セット目?」

「大方3セットマッチだろ。5セットもやるとは思えないからな」
「確かにそうだね」↑明久

しかし遊びの割に随分と本格的だな。コートチェンジまであるのかよ。

「お姉ちゃん、ファイトですっ」

無邪気に姉の応援をするチビツ子。両チームの剣呑な雰囲気には気づいてないようだ。

「続いて二セット目だ。サーブは島田チームからだよ」

島田のいる方にボールが投げ込まれる。島田はそのボールを拾って清水に渡した。

「それじゃあ、二セット目開始」

「ああっ！手が滑ってしまいましたあっ！」

大門の合図と同時に宙に舞ったボールは、サーバーの後ろへと飛んでいった。

「はあ……0対1だよ」

つまらない役割を押し付けられたと言わんばかりに、大門は壁に当たって戻ってきたボールを島田のコートに無造作に投げ入れる。まあ気持ちはわからんでもない、結果の見たゲームの審判など退屈極まりないだろうしな。

「パートナーがああザマじゃ、島田の勝利はないな」

「そうだね。いくら美波が上手でも、2対4じゃ勝ち目はないよね」

「おまけに姉上が相手では、もはや勝負は見えたも同然じゃな」

少なくとも味方である清水が真面目にやらないようでは、島田に勝ち目は全く無いだろう。

『美春。もう一度言うけど、次のサーブからは本気を出しなさい』

『ひ、酷いですお姉さまっ！美春はお姉さまの為に一生懸命頑張っているというのに、その頑張りを疑うなんて！』

『下手な演技はいらさないわ。よく聞きなさい美春。これが最後の警告よ』

『お姉さま信じてくださいっ！美春はお姉さまに嘘なんてつきません！』

『いい？ここまで言ってもまだ本気を出さないといいなら……』

『ですから、美春は本気を出していると何度も』

『ウチは明日から美春のことを、「清水さん」って呼ぶことにするわ』

『……………』

「ねえ、いまのサーブ見た!? 垂直に変化したよ!」

「どうやればビーチボールであんな芸当ができるのじゃ!」

「流石の翔子もアレは取れないな……!」

「ようやく面白くなってきやがったじゃねえか!」

『お姉さまごめんなさい！美春は嘘をついていました！』

『いいのよ美春！これからも友達でいきましょうね！』

ヒシと抱き合う二人。

なんだこの安い茶番劇は……？

「でも、こうなると形勢は一気に逆転だね」

「そうじゃな。可哀想じゃが、姫路はお世辞にも巧者とは言えんからのう」

「……さて、それはどうかかな？」

正直俺も明久達と同じ意見なのだが、なぜ和真は不適な笑みを浮かべているのか気になる。

『翔子、ポジション交代よ』

『……わかった。あのサーブは優子に任せる』

「す、すごい！木下さん、あの垂直に落ちるサーブを完璧にとらえたよ!？」

「これはたまげたのう……」

「今の木下姉、完全に落下地点を読んでやがったな……」

「言っただろ、やわな鍛え方はしてねえつて。清水が覚醒しようが優子には勝てねえよ。」

さて、島田と翔子はほぼ互角、そして愛子は姫路より強い。となると……この勝負ここ
にきて完全に互角だな」

和真の戦力分析は概ね正しい。こうなってはどっちに転ぶかわからねえ……確かに
ちよつと面白くなってきたな。

パアンツ！

そんな中、大きな破裂音がプールに響き渡った。

「むう。まさかビーチボールを割るほどとは」

「え？今の、ボールが割れる音なの？」

「うむ。島田の相方の渾身のスパイクを姉上がブロックした瞬間に破裂したのじゃ」

確かにプールの水面にビーチボールの破片らしきものが浮いている。それにしても
どんだけガチなんだあの二人……。

「あつちやあ……これはやってしまったわね……」

「美春が代わりを探してくるのでお姉さまたちは休憩してください」

そう告げて清水はプールを出て行く。おそらく用具室にでも向かったんだろう。

「……ちよつと疲れた」

「そうですね。ボールが見つかるまではお言葉に甘えて休みましょうか」

「優子、相変わらず馬鹿力だね〜」

「人間き悪いこと言わないでよ愛子！確かにまあ、女子の中では強い方だとは思うけど、そこまでじゃ……」

女子達と大門が休憩のために戻ってくると、和真は大門をこつちにを手招きする。

「おい徹、俺の言いてえこと……わかるよな？」

何を企んでいるんだこいつ？

「勿論だ。女子達があればどの名勝負を繰り広げて僕達が何もしなれないとなれば、男の道理が廃ると言うもの」

なるほど、こいつらがやりたいことは大体読めた。中々面白そうじゃねえか。明久達も理解したらしく、アイコンタクトでタイミングを合わせる。

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「ガチンコ、水泳対決ーっ!!」（和真と大門の声）

「イエーツ！」（秀吉とムツツリーニの合いの手）

和真の友達だけあって、大門も違和感無くFクラスのノリに自然に溶け込んでいた。ちなみに女子達は突然の事態についてこれずに目を丸くしている。

「明久、ルール説明だ！」

「オツケー！ルールはとつても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう、複雑なルールなど存在しなく、賭けるものは男のプライドのみという非常にシンプルな勝負だ。

「そして下位三名は罰ゲームとしてこの『綾倉特性ドリンク v e r . 2 ペナル茶（ティー）』を一気飲みしなければならぬ」

和真がどこからともかく取り出した血のように赤いドリンクのせいで、俺達の賭けるものに命が加わった。

「和真!?!なにその見るからに危なそうな液体は!?!」

「こいつは綾倉先生が趣味で製作した飲み物でな。『栄養バランスに優れることや健康に良いといった大義名分を維持しつつ、どれだけえげつない飲み物を作ることができるか』というコンセプトで製作されている」

なんだその悪意に満ちた飲み物!?!そんなもん絶対飲みたくねえ!?!……しかし、今からその罰ゲームを取り下げるのは気が引ける。ゴネればなんとかなるかも知れんが確実に「チキン野郎」のレッテルを貼られてしまうだろう。

な、なあに……勝てば良いんだ勝てば。

「バカなお兄ちゃんたち、突然どうしたんですかっ？急に水泳勝負なんて、葉月ビツクリですっ」

「葉月ちゃん。男にはね、大切なものを賭けて戦わないといけない時っていうものがあるんだ」

「ふええ。お兄ちゃんたち、かつこいいですっ。プライドを賭けた勝負ってやつです
ねっ」

賭けてるのはプライドだけじゃないがな。

「よくわかんないけど、誰が速いのかは興味あるわね。……トツプは柵だろうけど」

「そうですね。一番は多分柵君だとして、体力なら坂本君が一番に見えますけど……」

「……動きの速さなら吉井や土屋や大門も負けてない。それはそれとして勝つのは十中八九和真」

「おそらく二番は徹として……罰ゲームを逃れるため三位争いになるわね」

女子達の呑気な予想を聞き流していると、一つ気がかりな内容が聞こえた。確かに和真には勝てないだろうが、大門もそこまでのやり手なのか？……よし、情報は集めておくに越したことはないな。

「なあ和真」

「なんだ雄二」

「大門って水泳得意なのか？」

「ああ、水泳部に入っても確実にレギュラー狙えるくらいには速いぜ」

こいつの言葉に嘘は無いだろう。何故なら負ければあんな劇物を飲まされるというのに、大門は平然と準備体操をしている。このことから、自分が負けるとは微塵も思っていないことが伺える。

くそつ、こいつの関係者はどいつもこいつも化け物だらけか!?

……いいや、落ち着け坂本雄二。

よしんばこの二人に勝てなくても、三位になりさえすれば罰ゲームは回避できる……！

「へえ、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

工藤がスタート兼ゴール地点に立つ。25メートルのプールだから、50メートル勝負は往復になる。俺達は闘志を燃やしながらスタート地点に着く。左隣には明久、右隣には和真がつく。

「はい、行くよ！位置について……」

工藤のコールが響く。

俺は飛び込みの構えを取りながら考える。ムツツリーニは大量の出血で弱っている。秀吉にはまあ普通に勝てるだろう。

「よーい……」

和真はもうどうしようもない以上、残る二人のどちらかさえ潰せれば三位の座は磐石だ。となると狙う相手は実力未知数の大門ではなく……

「……スタート―」

「くたばれええっ!!」

工藤の合図と同時に、俺と明久はお互い目がけて全力で飛び蹴りを放っていた。

こ、このクズ野郎、人間のする所業じゃねえ!

「くそっ! やっぱり雄二も同じことを考えていたね!」

「てめえこそ卑怯な真似してくれるじゃねえか! この恥知らずが!」

「その言葉、そっくりそのまま返してやる!」

体勢を立て直し、明久は間髪入れずに飛びかかってくる。上等だ! お望み通り殴り合いで決着を着けてやる!

『ねえお姉ちゃん。水泳なのに、どうしてお兄ちゃんたちはまだプールの中に入らないですか?』

『見ちゃダメよ葉月。バカがうつつちやうからね』

くそ、こいつバカのかせにホントしぶといな! さっさと沈めよコラ……!

「なあお前ら。盛り上がっているとこ悪いんだがよ……」

「僕達もう泳ぎ終えちゃったよ?……くそつ、勝てなかったか」

なにイイイ!? こいつらもう泳ぎ終わったのか!? ……こりやあまともに勝負しても勝てなかっただろうな……つてムツツリーニ達ももう半分以上泳ぎ終わってるじゃねえか!?

「雄二! このままじゃ僕らの負けは確定だよ!」

「そうは行くかつ! 俺はムツツリーニを止める! 明久は秀吉をやれ!」

「了解! ここは一時休戦だね!」

俺はムツツリーニのレーンに、明久は秀吉のレーンに飛び込む。こうなりやもう何でもありだ!

「止まりやがれムツツリーニ!」

「……………っ!? 卑怯なっ!」

「負け犬の遠吠えだなそんなもん!」

「……………させるかつ!」

ムツツリーニは何とかして俺を避けるため辺りを見回し、

プール全体に鼻血を噴射させた。

「おわあっ!? どうしたムツツリーニ!? 俺まだ何もやってねえぞ!」

「……………死して尚、一片の悔い無し……………!!」

ムツツリーニの言葉とともに朱に染まっていく水面。やべえぞこれ!? いったいこいつに何があつた!?

そう思つて辺りを見回すと……………原因はすぐにわかつた。どうやら秀吉の上の水着が取れたようだ。またそんな理由かよ……………つてそんな場合じゃねえ!?

「大丈夫かムツツリーニ!? この出血量はマジでやばくないか!」

「……………構わない。むしろ本望……………!」

「わああつ! ムツツリーニが大変な事に!? 血がもの凄い勢いで出ているんだけど!」

「き、木下っ! とにかく胸を隠しなさい! 土屋の血が止まらないから!」

「いいいいヤじやつ! ワシは男なのじゃ! 胸を隠す必要なんてないのじゃ!」

「木下君、我儘言つちやダメです! 土屋君が死んじやいます!」

「今回は見逃すから早く隠してあげなさい秀吉! 今の土屋君かなりマズいから!」

「……………愛子。救急車の手配、頼める?」

「はい。やつぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃん達、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま愛しています……………」

「和真、君達のクラスは毎度毎度こんな感じで騒動になるのかい？」

「まあそういうことだ、退屈しねえだろ？」

「まあね」

結局、ムツツリーニは何度も峠を迎えながらも、俺達と救急隊員の懸命な延命措置によつて一命を取り留めた

そして俺と明久は再び鉄人からの教育指導（物理）を受けるはめになった。

納得いかねえ……！

海辺でのお祭り騒ぎ①

【蒼介視点】

「海だと?」

『うん。週末に姉さんと海に行く約束しててね、車を借りるみたいだしせっかくだから皆で行こうと思っただけ』

命からがらアドラメレクを退けた日の夜、居間で日課の瞑想をしていると突然吉井から電話がかかってきた。吉井の話は要するに海水浴のお誘いのようだが、私には少々気になる点がある。

「なぜ私を誘うんだ?」

『ほら、この前期末テストで随分助けて貰ったから』

「……私が手伝った甲斐もなく、凡ミスで目標点に届かなかったと聞いているが?」

『うっ……面目ない……』

まったくこいつは……名前の記入漏れならまだしも、何がどうなれば名前欄にアレクサンドロス大王と書いてしまったんだ? まあ話を聞いている限り姉との仲は良好のようだから結果オーライかもしれないがな。

「それに、色々迷惑かけちゃったしそのお詫びもかねてね……」

「何の話だ？」

「校舎爆破とか覗き騒動とか……」

「……別に気にしなくてもいい。それらは生徒会長としての責務というものだ」

「……というか悪いと思ってるなら、お詫び云々より今後自制心を身に付けてくれる方がありがたいんだが……」。

まあそれはそれとしてこの誘いは断らせてもらうしかないだろう。いずれ来るであろうアドラメレク一派の襲撃に対策を立ててはいけないこともそうだが、「鳳」次期後継者の私に泊まり掛けで遊んでいる暇など無い。

『で、どうかな？もしよかったら橘さんとかも誘って——』

「吉井。せっかくのお誘いだ……」

「お待ちなさい」

突然横からある女性に携帯を引つたくられた。

その女性はそのまま私に意見を挟ませることなく吉井の誘いに了承の返事を出す。私は呆気を取られて口を挟む隙すら無かった。

「重ね重ねお誘いありがとうございます。それでは週末に息子をそちらにいかせますのです。(プツツ)」

「……母様、どういふことか説明していただきたい」

その女性は料亭『赤羽』の料理長を勤める私の実母、鳳藍華

。その名の通り宝石のように艶のある藍色の髪が特徴的な女性で、私の髪質はこの人からの遺伝であることが一目でわかる。料理中もしくは料理の指導中は性格が変わることが周知の事実である人だが普段は礼節や他者への配慮をかかさない人格者であるため、先ほどのような暴挙に出た理由が私にはどうしてもわからない。母様は私の両目を見据えつつ、諭すように話し始めた。

「蒼介、私は貴方を他人からの御厚意を無下にするような人に育てた覚えはありませんよ?」

「……そのことは重々承知しています。ですが、私にはやらなければならないことが――」
「貴方は一つ思い違いをしています。」

確かに貴方は「鳳」の次期後継者ですが、まだ16歳の子どもであることに変わりはありません。そんな貴方が夫の会社の業務に忙殺されるなど、たとえ天が許そうとも私が認めません」

静かで落ち着いてはいるが、反論は一切受け付けないと言わんばかりの母様の口調。

……なるほど、どうやら母様は実の息子である私の、学生の限られた貴重な時間を「鳳」に費やしていることに小さくない不満があったらしい。

「ちなみにもう既に秀介さんには話をつけていて、貴方が予め立てていた『鳳』に關係する予定は全て白紙にしておきましたので」

だからといって行動力がありすぎないだろうか？

「……おそらく父様は二つ返事で了承したでしょうが……他の分家の人間がそうやすやすと首を縦に振るとは思えません？」

「首筋に包丁を当てながら一人一人交渉したら、全員快く快諾してくれました」

「母様、それは交渉ではなく脅迫です」

この人は息子の夏休みのためだけに人を殺すつもりだったのだろうか……？

「ああ、心配しなくてもスーパーで購入した包丁ですよ？雪月花をそんなことに使うわけにはいきませんから」

「確かに赤羽に代々伝わる業物をそんなことに使うわけにはいきませんが、私が心配しているのは包丁云々ではなく母様の頭です」

そもそも鳳家の人間は分家に至るまで一人残らず武道を納める義務がある。父様以外に『明鏡止水の境地』を体得している者はいないものの、今の私に比肩するレベルの者も確か数名いたはずだ。それを包丁一振りで残らず屈服させた母様にはある意味畏敬の念を抱かざるを得ない。

「確かに常軌を逸した行動であったことは理解しています。……でも、こうでもしない

と貴方は休もうとしないでしょう?」

「……まあ、それでしようね」

「色々と余計な前置きが長くなりましたが……簡単に言えば私も秀介さんも、ただ貴方にもう少し羽を伸ばして欲しいと思っただけです。最近の貴方は少々張り詰めすぎだと、二人で話し合っていたんですよ」

「母様……」

「真面目で責任感が強いことは貴方の美点だとは思いますが……あまり親を心配させないでくださいね?」

母様の話を聞き終えた私は自身の愚かさを理解した。

まったく……つくづく私は未熟者だな。他人の厚意を無下にしようとしただけでなく、ただ前ばかり見て進むあまり両親に心配をかけていることにすら気づけないとは、どこまでも滑稽極まりない。

「では週末までに支度をしておきなさい。聡明な貴方なら、ここで拒否することがどれだけ愚かしいことか、もう既に理解しているでしょう」

「……ええ、もちろんです。母様、ご指導ご鞭撻の程、ありがとうございます」

「……欲を言えばもう少し肩の力を抜いて欲しいのですが、それは流石に高望みでしょうか?」

「……おそらく無理でしょう」

私にもできないことぐらいいある。

そして当日、海水浴に出掛ける日としてはこれ以上ない絶好のコンディションであった。

「なあソウスケ、飛鳥は誘わなかったのか？」

白のハーフパンツに黒のポロシャツといった、ラフながらも清潔感のある格好をしたカズマがかなり大きいリュックを背負いつつそんなことを私に聞いてきた。

別に構わないんだがお前やけに荷物が多いな……山を舐めてるとしか思えない程軽装で登山したりするくせに。

隣には似たような格好をした木下（姉）もいる。誰が見てもペアルックにしか見えな
いが、後から聞いた話では偶然の一致らしい。仲が良いようである。

「一応誘うには誘ったのだが、この夏は学業に集中したいと丁重に断られた。よほど期

末試験で成績が落ちたことを気にしているんだろう」

「でも、インターハイで念願の優勝を勝ち取ったんでしよう？ だったら少しくらい息抜きしても良いじゃない……」

「あいつは物事を妥協できない性分だからな」

「それ、お前が言うか？」

「やかましい」

そんなことは自覚している。

「そう言えばカズマ、五十嵐や大門も誘いを断ったのか？」

「徹はケーキバイキングの予定があるってよ。源太は今日Bクラスの男子達とキャンプに行くらしい」

「1学期前半、あれだけクラスで浮いていた源太がねえ……」

奴はあの顔つきのせいで何かと誤解されやすい男だからな。クラスに溶け込め始めたように思わず安心する。

「ところで明久君。今更なんですけど、この人数が車に乗りきれますか？」

「そう言えばそうね。お姉さんを入れたら12人だけど、普通の車の免許で大丈夫なの？」

少し離れた場所で姫路と島田がそんなことを話している。確かに普通免許で乗せら

れる人数は10人までで、それ以降は中型免許が必要になるが……。

「えーっと、姉さんは知り合いに頼んでなんとかしてみるって言ってたけど……」

そんな吉井の台詞に呼応するかのようにならぬうちにこちらに近づいてくるバスが1台。

「あ、このエンジン音はもしかして……」

「……車が来た」

「だな。おそらく大型バスの類いと言った所か」

木下姉、土屋、カズマの三人もそれに気付いたようだ。ふむ、私やあの二人とほぼ同時に察知した辺り、土屋も相当気配には目ざといようだな。

私達の察知した通りこちらに大型のバスがやってきて近くに停車し、バスの中から一人の女性が降りてきた。おそらくこの人が吉井の姉であろう。

「あら……? すいません。お待たせしてしまっただようですね」

「いや、僕達が早く集まったただけ……姉さん、大型バスの免許なんて持ってたの?」

「いえ、参加人数が多かったので大学時代の先輩に運転をお願いしたんです。ちなみにこのバスも先輩の私物です」

「大学時代の先輩って、まさか……」

吉井の反応を見るに、どうやら心当たりらしきものがあるらしい。すると、運転席か

らその先輩とやらが降りてきた。

その姿を確認した私は……いや、吉井の姉を除いたその場の全ての人間は度肝を抜かれた。

所々はねまくったボサボサの黒髪、覇気の欠片も感じない濁った目、あまり手入れされていない口元のだらしない無精髭、ハーパンにタンクトップというフアツションに気を使うつもりのない雑な格好。そして片手には季節感全無視のコンポタ。

「よーガキども、何かと縁があるな」

「「おっちゃん!」」

「御門社長!」

アツシー役に抜擢されたのは……押しも押されぬ大企業のトップ、御門空雅その人であつた。

海辺でのお祭り騒ぎ②

【雄二視点】

「(パチッ) 王手だ」

「ぐっ……」

バスに乗っている最中、暇になったので和真に将棋セットを借りて(というかアイツ最近将棋セットを常備しているな……)向かいに座っている鳳と対局している。

ちなみにバスの席は2人掛けの椅子が対面するようになっていて、工藤・ムツツリーニと島田・姫路、和真・木下姉と明久・玲さん、そして俺・翔子と鳳・秀吉の順に4人ずつ3グループに別れて座っている。

「ううむ、頭を使うゲームで雄二がここまで追い詰められるとはのう……」

「……雄二、頑張つて」

「俺だつて負けたくはねえがよ……(パチッ)」

「…王手(パチッ)」

「……投了だ」

「ふむ、なかなか手強かつたぞ」

くそつ、こいつマジで強え……。将棋のようなルールに則った戦いじゃまるで勝てる気がしねえ。この力の差はおそらく試召戦争にも通ずるだろうな、真つ当な戦術で挑んでも勝ち目はおそらくゼロに等しい。

だが付け入る隙が無い訳ではない。将棋では負けたが二学期に仕掛ける予定の試召戦争では絶対に負けないと心に誓う。

その後、明久にスクール水着フェチの変質者疑惑がかかったり（それに関しては玲さんの独断であったようだが、俺は明久を心の底から変質者であると確信している）、和真が木下姉にオセロで圧勝していたり（将棋と打って変わって和真はオセロがやたら強い。しかも中盤辺りで木下姉の負けがほぼ決まっていたのにもかかわらず最後まで続けさせるという安定の鬼畜っぷりを発揮していた）、女子達がやれ体重だのバストサイズだので盛り上がった（その途中に俺が翔子に目を潰される羽目になったのは言うまでもない。理不尽極まりないが慣れつつあることに少しブルーになった）しつつ約三時間過ぎた。

長い道のりを経て辿り着いたペンションは、緑に囲まれつつも潮の香りが行き届くような好立地だった。

小高い丘の上というだけあって眺めも良い。建物自体は多少年期の入ったものだが、夏の海を楽しむには最高の条件が揃っている。

「さて、どうするんだ？荷物を置いてすぐにでも海に向かうか？」

「そうだね。海が見えたら泳ぎたくて仕方なくなっちゃったし」

「……………（ココココココ）」

「折角砂浜があることだし、後で走り込みさせるつても悪くねえな……………倒れる寸前まで」

「『アクティブ』活動中じゃないんだからスパルタしようとしないの……………」

何やら不吉なことを言い出した和真を木下姉が諫めている。ナイス判断ではあるがその諫め方だと『アクティブ』活動中はそういうスパルタが常識であるかのように聞こえるんだが？もしそうだとしたら、よくついていけるなアイツら……………。

「それでは荷物を部屋に運んだら海に行きましようか。御門先輩はどうします？」

「せっかくの海だし、タバコでも吸いながらその辺で適当に黄昏れておく。迎えに来て欲しいけりや連絡してこい」

あのオッサン……………玲さんと同時期に大学に在籍してたつづうことはまだ二十代だろ？なんであんなにくたびれてるんだ……………？

俺達が着替えを終えて二十分後。

「やっぱり俺たちは待たされるわけだ」

「仕方ないよ。向こうは水着の準備に時間がかかるんだから」

「……………こつちも機材の準備に時間がかかるから助かる」

「……………」

男五人で浜辺で女子勢の着替えを待つ。ちなみに鳳は俺達の近くで日課であるらしい瞑想に耽っており、和真は少し離れた場所でロンダード↓後方伸身宙返り2回半ひねり↓伸身前宙2回ひねり↓バンローンという超人アクロバット連続技を砂浜上で決めて観光客達から拍手喝采を浴びている。相変わらずデタラメな身体能力だ。

「とかいうかいつも思うけど、和真は着痩せするにもほどがあるよね……………」

「まったくだ、歴戦の傭兵かつての……………」

和真は普段から周囲にどこからそんな力が？と疑問に思われているみたいだが……………服を脱いだアイツの体を一目見ればそんな疑問は一発で解決するだろうな。

『……………む、明久たちはあそこじゃな。おい、お主ら……………』

『あ、あなたっ！何をしているんですか!?!』

『んむ？なんじゃ、監視員の方じゃな。そんなに血相を変えてどうしたのじゃ?』

『どうしたのじゃ、じゃありませんっ！どうしてあなた、上を着ていないんですか！』
『???どうしてと言われても、普通男物の水着に上は着ないものじゃと』

『女の子が男物の水着を着る時点で間違っているんです！とにかくこつちに来なさい！』

『ま、待つのはじゃ！ワシは男じゃからこれで良いと』

『私の目が黒いうちは、この海水浴場でそんな過激な格好は許しませんからね！ここは子供たちも大勢いるし、怖いお兄さんとかも一杯いるんだから！』

『だから違うのじゃ！とにかくワシの話を……』

『上を着ない限り、絶対に海水浴場には入らせませんからね！途中で脱いでもダメですよ！きちんと遠くから双眼鏡で監視しますからね！』

『だから待つのはじゃと言うとるのにーっ！』

パラソルの陰に入りながらのんびりしていると、遠くからそんな会話が聞こえてきた。秀吉もいい加減自分の性別が初対面の人間にどう判断されるかぐらいわかってもいいのにな……いや、玲さんが初対面でわかってくれたことで味を占めたのか？

「お待たせつ。準備に手間取っちゃってゴメンね」

「うう、やっぱりちよつと恥ずかしいわね……愛子、本当にこれで良かったの……？　なんだかアンタに良いように乗せられてる気がしてきたんだけど……」

「今更何言ってるのさ優子。さきさき、恥ずかしがってないで披露しちゃって♪」

最初にこちらに合流したのは工藤と木下姉のAクラス才女コンビ。工藤は下にジーンズを短くカットしたようなパンツで、上は肩や腹の部分の日焼けの境界線がはつきりと見える水着だった。頭には麦わら帽子を被っており、いかにも『夏』という感じの健康的な格好だ。

そして木下姉だが……その、なんだ、黒のマイクロビキニというなんというか目のやり場に困る格好だった。……というか視界に入れただけで翔子に目を潰されかねないな、アイツがここにいなくて助かった……。

真面目そうな木下姉にしては意外すぎるチョイスだが、先ほどのやり取りから察するに工藤の入れ知恵だろう。

「おい和真、彼女に水着の感想の一つでも言ってこいよ（ニヤニヤ）」

「そうだよ和真、木下さんは多分和真に見てもらいたいだろうしね（ニヤニヤ）」

「……ぞとばかりに俺と明久は弄りにかかる。木下姉が絡まないと和真が動揺するこ

とは滅多にないから、俺達は数少ないチャンスを絶対に逃さない。

「ん。おーけー」

しかし俺らの予想とは反して、和真は平然とした表情で木下姉に近づいていく。

「なあ優子」

「あ……な、なに……!?!」

恐る恐る訪ねる木下姉に、同性の俺から見ても格好いいと言える爽やかな笑顔を浮かべて言い放つ。

「その水着、似合ってるぜ。端的に言うとな今のお前メチャクチャ可愛い」

「~~~~~っ!……………アリガト……/ /」

余計なこと振ってしまったと今更後悔している。

(ねえ雄二、なんだか無性に苦いものが欲しくなったんだけど……)

(同感だ……なんだあの桃色空間!?!というか和真の奴ウブのくせに、何であんな恥ずかしい台詞は平然と言えるんだよ!?!……ん?)

突然、和真の顔つきが悪戯をする直前の子どものような笑顔に変わる。長い付き合いになるからわかるが、あの顔をしているときの和真はホントにロクなことをしない。

「しっかしお前も人のこと言えないくらいピュアだよなー、その水着買うまでに数時間も悩んだそうじゃねえか」

「ちよつと待ちなさい!?なんでアンタがそのこと知ってんのよ!」

「とある筋からリークがあつてな。具体的に言うとな保健体育実技派の人から」

「……愛子?」

「ちよ!?和真く……ピューピュー♪」

工藤もう手遅れとはいえ、いくらなんでも誤魔化し方下手すぎるぞ……。

「ア〜ン〜タ〜は〜! (ギユウウウウウウ)」

「いひやひやひやひや!?ひよ、ひよえんひやひやくい!」

「あ、俺ちよつと御手洗いに行つてくるから」

鬼気迫る表情で制裁とばかりに工藤の頬を力一杯に引つ張る木下姉。処刑されていく工藤には一切目も暮れず、場を荒らすだけ荒らした和真はやけに早い足取りでトイレに向かつていった。

「まったく、和真の奴はいったい何がしたいんだ?」

「……おそらく、限界が来たのだろう」

「え?どういうこと鳳君?」

「気になるならカズマの後をつけてみる。普段ならすぐにバレるだろうが……今はそれどころではないはずだ」

「???」

俺と明久は言われた通り和真の後をつけてみると、和真はトイレには向かわず、さつきいた場所からはちようど死角になる場所まで移動する。俺達のいた場所からは見えない場所であることを確認すると……全身を茹で蛸のように赤くして両手で顔を覆ってその場にうずくまった。

「……耐えた……なんとか耐え抜いたぞコラ……。あ、危な……。つかいくらなんでもあんな際どいの反則だろ……。殺す気か優子の奴……」

（ねえ、雄二……和真、さつきまで平然としていたわけじゃなくて……）

（ああ、ただ痩せ我慢してただけのようだな……）

この状況で出ていって茶化そのものなら、おそらく俺達は下手したらライトニングタイガーの餌食になりかねないので、俺達は何も見なかったことにして皆の所に戻ることにする。

………というか、結局さらに苦い物が欲しくなっただけじゃねえか畜生！

【蒼介視点】

「……戻ったか。やけにげんなりとした表情だなお前達」

「あんなの見せられたらげんなりもするよ……」

「つか鳳、もしやテメエこうなるとわかってやがったな……？」

「つまらん野次馬根性を見せるからそうなるんだ。これに懲りたら出歯亀は極力控えるんだな」

まったく、五十嵐や大門といいこいつらといい……是が非でもカズマをおちよくろうとしなければ気がすまないのか？

私がそんな風に呆れていると、木下（姉）も工藤への制裁を終えたみたいだ。

「……ハア、愛子の口の軽さを失念していたアタシがバカだったわ」

「いたたた……もう優子つてば、そんなに怒らなくてもいいのに……ん？」

「……………（ササツ）」

「あははっ。ムツツリーニ君つてば。ボク達の水着を撮りたいのなら堂々と撮ればいいのに。別にボク達は怒ったりしないから。ね？」

「さもアタシが同意見のように言わないでよ……」

「……………俺は水着に興味など微塵も（ダバダバダバ）……これは日射病のせい」

さつきまで全力で目をそらしていた土屋だが、直視した途端に鼻から凄い勢いで鼻血が流出する。カズマから事前に聞いてはいたが、この男はいつたいどういう身体構造をしているんだ……？

「おお。頑張ったなムツツリーニ。28秒だぞ」

「凄いじゃないかムツツリーニ。鼻血の我慢記録更新だよ」

「吉井に坂本、呑気にカウントを取ってる暇はないだろう……」

「そうだよ、そんな悠長なことを言つてないで助けてあげようよ……」

まるで蛇口を捻ったようにもめどなく流れ出す鼻血を心配して、工藤が土屋に駆け寄る……つて、ちよつと待て!?!ここでお前が介抱するのは悪手以外の何物でもないのではないか……っ!?!

「おい工どー」

「……………日差しがキツくなってきた……っ！（ブシャアアアッ）」

遅かったか……。

「え？ちよ、ちよつとムツツリーニ君!?ムツツリーニ君つてば！

「大丈夫なの土屋くん!?鼻血が噴射みたいになつてるわよ!？」

「……………最近の日射病はタチが悪い（ブシャアアアアッ）」

「明らかに大丈夫じゃないでしょ土屋君!？」

「もうコレ日射病とかじゃなくて新型ウィルスか何かじゃないかな!？」

「坂本、土屋の用意した輸血パックはどこにある!？」

「ん？ああ、確か機材を入れていたリュックに入っていたと思うぞ」

なんでこいつはクラスメイトが死にかけているのにこんなに冷静でいられるんだ!？」

私が急いで土屋の荷物から輸血の準備をしていると、おもむろに吉井が倒れている土屋に近づいて語りかけていた。

「ムツツリーニ」

「……………明久……………」

「……………遺言は?？」

諦めるの早くないか吉井!？」

「何言ってるの吉井君!？」

「そうよ! いくらなんでも縁起でもないわよ!」

「……………来世は、鳥に生まれてきますように……………」

土屋、お前もか! 少しは足掻け!

「ムツツリー二君もそこで乗らないの! ちゃんと助かるからっ!」

「……………そして、空から女子更衣室を思う存分覗けますように……………」

「しかも生まれ変わってもやることはソレなの!？」

「もうちよつと現世の死因から何かを学びなさいよ!？」

「くっ、間に合え……………」

私と木下（姉）と愛子の尽力で土屋は何とか一命をとりとめた。輸血作業を終えた

私達三人は半端じゃなく疲れた表情になる。

……………なんなんだこれは!？」

何故海水浴に来てライフセーバーでもないのに人命救助を行わなければならんのだ

!？」

そして吉井に坂本!……………あと土屋! 何故こんな事態になったのに平然としていられるんだ!?! 私がおかしいのか!?! 私の16年の人生が間違ってたのか!?!

私（おそらく他の二人も同じような気持ちだろう）がそんな葛藤をしていると、手洗

い(?)に行っていた和真がようやく戻ってきた。

「……オイオイ、またひでえ惨状だな。またムツツリーニが死にかかったのか?」

「……なあカズマよ、この僅かな時間で私達の今まで信じてきた価値観がいくつも音を立てて崩れていったのだが……」

「ボク達、海水浴に来ただけだよね……」

「何?何なの?もしかしてアタシ達……何か間違った人生歩んできたの?」

「……あー、今お前らが何を思っているのかだいたい把握した。気持ちにはわかるから安心しろお前ら……お前らは何もおかしくねえし、お前らの培ってきたもんは間違っちゃいねえ。ただ……常識が一切通じないのが、Fクラスってやつだ」

カズマの言葉で私達に多大な安心感を得ることができたが、それと同時にFクラスという概念にある種の恐怖のような感情が芽生えた。

「すいません。お待たせしちやいました」

「……お待たせ」

そうこうしているうちに姫路と霧島が合流した。霧島の格好はおとなしめの白のビキニと水着用のミニスカート、姫路の格好は薄ピンクのビキニにゆったりとしたパレオ。吉井達の反応が特に無いことから考えるに、おそらく以前から使用していた物なのだろう。

「……愛子。あまり土屋をいじめないように」

「いや、ボクなにもしてないんだけど……」

霧島が倒れ臥す土屋を見て工藤に告げる。確かに工藤は少々性に奔放な所があるが、今回に限っては落ち度はないだろう。

「違いますよ翔子ちゃん。土屋君は工藤さんの水着姿があまりに可愛いから興奮しちゃったんですよ。ね、土屋君？」

「……………そんな事実は確認されていない」

「まだ立つな土屋。しばらく安静にしている」

「……興奮？」

「はい。土屋君も男の子ですから」

「……………そう」

姫路の言葉を聞くと、霧島は一つ頷いた後にゆっくりと坂本に歩み寄った。何をするつもりだ？

「……雄二」

「んあ？なんだ翔子？」

「……………えい（プスリ）」

「ふーあっ!?!（プシヤヤアッ）」

そして坂本の鼻に突然霧島の指が潜り込み、そこから鼻血が間欠泉の如く湧き上がった。何がしたいんだこいつは……？

「……これで、いい」

「いいわけあるかあっ！いきなり何しやがる！（プシャヤアツ）」

「……だって、雄二は私の水着に興奮しないといけないから」

そもそも普通の人間なら異性に興奮したからといって鼻血を吹き出すという結果にはそうそう結び付かないとか、たった今坂本の鼻から流れ出ている血は断じて興奮したからではないとか突っ込みどころは多々あるが、これまでのやり取りでいちいち反応していたらキリが無いと悟った私はもう見なかつたことにする。

「霧島さんも姫路さんも、二人とも綺麗だからなあ……。スタイルもいいし……」

「え……っ!? あ、明久君!? そんな、綺麗だなんて、恥ずかしいです……」

「んあっ!? ご、ゴメン！ つい口に出ちゃった！」

何気ない吉井の呟きを耳にした姫路は、パレオの裾を合わせるような仕草をしつつ身体を縮めていた。

「ふんっ。どうせウチはスタイルが悪いですよーだ」

そして吉井の背中側からは少々ご機嫌斜めな島田が歩いてきた。わかりやすいくらい修羅場だな。

「つて、あれ？美波は水着変えたの？この前と違うみたいだけど……」

パーカーを羽織っていて全容は確認できないが、島田の水着はおそらくは競泳タイプの水着だろう。

「こ、これはその、今日はたくさん泳ぐ気だったからで！ほら、最近アイスやジュースが美味しくて、体重が増えちゃったから……！」

「え？でも美波、バスの中では夏バテで胸が痩せたつて」

「む、胸は痩せたけど、お腹は出たのよ……つてウチのバカあーッ！そんなこと強調してどうするのよーッ！」

力強く言い切ると島田は自分の顔を覆って嘆き始めた。嘆くくらいならわざわざ言わなくて良いものを……。

「そ、そうなの？僕には全然そんな風には見えないけど」

「いいのよアキ……。どうせウチなんて、古き良き日本人体型なんだから……。ドイツで育つたはずなのに……」

「いや関係ねえだろ。外国で生活すればデカくなるつてんなら誰も苦労しねえよ」

「バツサリとした和真の物言いにさらに沈み込む島田。とどめを刺してどうする……。」

「島田、人の価値は外見で左右されるものではないぞ」

「鳳、慰めてくれるのはありがたいけど……この悲しみは男子にはわからないことなの

よ……」

流石に見ていられなくなったので励まそうとするも、どうやらあまり効果はなかったようだ。おかしいな、飛鳥は特に気にした様子は無かったんだが。

(男が何言っても無駄だぜソウスケ。こういうの、気にする女子はとことん気にするんだよ。優子もそうだし)

(お前が言うのなら、そうなんだろうな)

カズマの交遊関係は男女問わず異常に広い。だからこそ、同じようなケースに何度も直面したことがあるのだろう。……つまりさつきトドメ刺したのは、天然とかではなく故意か……相変わらずえげつないなこいつは。

「あら? どうかしましたか美波さん。そんなところで座り込んで。うちの愚弟が何か粗相でもしましたか?」

島田の後ろから浮き輪を片手に歩いてくるのは、明久の姉の吉井玲さんだった。

「あ、何でもありません玲さん。ちよつとウチが一人で落ち込んでいただけ……で……」
島田が吉井さんの方へと顔を向けて、そのまま動きが固まった。

「美波さん?」

「……しくしくしく」

「美波さん。どうして私を見て泣き出すのでしょうか」

「いいんです……。ウチはもう、瑞希や玲さんには一生勝てないんです……」
「??？」

……大門が身長で悩んでいるときに宮阪先輩あたりに遭遇したようなものだな。
「良かった……。姉さんが普通の水着を選んでくれて、本当に良かった……」

吉井は姉がまともな水着をビキニを着ていることに心の底から安心しているようだった。まあ私もバスでのやり取りを小耳に挟んでいたので安心するのも頷ける。

「そんな心配はしなくても大丈夫ですよアキくん。サイズが無くて、選択肢が殆どありませんでしたから」

「待つんだ姉さん。選択肢があつたらどうする気だつたんだ」

この人はもし丁度いいサイズがあればまたスクール水着をチョイスしたのだろうか？文月卒業後ハーバードに進学を予定している私であるが……この卒業生の破天荒さを見ていると、その新路が本当に正しいのか疑問が出てきてしまう。

「……玲さん」

「はい、なんですか翔子さん？」

「……少しだけ、失礼」

霧島は一言断つてから、吉井さんの胸を無造作に鷲掴みにしていた。

「?どうかしましたか、翔子さん」

「……凄い……」

「あ、玲さんっ！私も失礼しますっ！」

戦っている霧島の横から、姫路が吉井さんの腰に腕を回す。

「??瑞希さん。あなたも何か？」

「……いえ……なんでも……ないです……」

姫路は力なくそう答えると、静かにその場から離れて島田の隣に同じ体勢で座り込んだ。

「……しくしくしく……」

「あ、瑞希……いらっしやい……」

「美波ちゃん……。海って、残酷ですね……」

「違うのよ瑞希。残酷なのはきつと、神様なのよ……」

まるで生気の抜けたような目をした島田が姫路を暖かく迎え入れている。正直見えていて痛ましすぎる……。

「ア……アタシも——」

「(ガシッ) やめとけ優子、はつきり言ってハイリスクノーリターンだ」

「で……でもやっぱり気になるじゃない……」

「俺はありのままのお前が大好きだから」

「つつ!?……か、和真がそう言うなら……モゴモゴ」

……アイツも頑張るな。

一見平然としているが、よく見ると耳元が真っ赤に染まっているじゃないか。動揺しているのか木下はまだ気づいていないようだが……さて、いつまでもつかないかな?

「すまぬ皆の衆……。ワシが一番最後のようじゃな……」

頭上の天気とは裏腹に、沈んだ木下（弟）の口調。

「どうかしましたか、秀吉君。随分と元気がないようですが」

「そうだね。着替えの前は『今度こそワシを男として認識させるのじゃ!』なんて張り切ってたのに」

「放っておいて欲しいのじゃ……」

俯いて呟く木下（弟）は水着の上に監視員にでも押し付けられたTシャツを着ていた。監視員に悪気は一切ないのだが……木下（弟）にとっては災難だったな。

海辺でのお祭り騒ぎ③

【優子視点】

「あー、泳いだ泳いだ。結局俺が一番速かったな」

「悔しいがその通りだな……。どうやら私もまだまだ鍛練が足りんようだ」

「アンタ達容赦無いわね……。アタシ一人だけ競争してる気がしなかったわよ……」

ひとしきり泳いだあと、スイカ割りの約束をしていたためアタシ達『アクティブ』メンバーの三人は指定された場所へと向かっていった。

「なあ、ところで優子……」

「何よ?」

「向こうについたらすぐパーカーか何か羽織ってくれ。持ってきてるだろお前なら」

愛子に上手いこと乗せられてこんな際どい水着買ったけど、一応周囲の視線に耐えきれなくなったときのためにパーカーは用意してある。さっきアタシが恥ずかしがってたのを見て気を遣ってくれたのかな?。

「心配しなくてもそろそろこの格好にも慣れたわよ」

「いや、そうじゃなくてだな……」

「……………」

あれ？なんだか和真の顔が赤い……

「そろそろ俺の精神がもたねえ……」

……………なるほど、理解した。

最初の頃はアタシも自分のことといっぱいいっぱいだったし、さっきまでは競技中だったから和真もそっちに集中してたけど……そういえばこの子、とんでもなくウブだったわね。顔を真つ赤にしてアタシの際どい格好を直視しないよう必死に目を逸らしてる……すつごく可愛い♪

……………なんだかちよつとイタズラしたくなつちやつた♪
ういえば愛子に乗せられてこんなエツチな水着を買ったのも和真のこういう反応が見たかったからだし、ちよつとくらい良いわよね？海だし。

「ねえ和真」

「…あん？なんだよ優子？」

「えいっ♪(ぎゅっ♡)」

「っ?!?!いいいきにやりにやにを?!」

やぶ、わかりやすいくらい動揺してるわね♪

この格好で抱きつくのはアタシも恥ずかしいんだけど、ここは何とか我慢して……。
「かゝずま♪（ぎゆうううう♡）」

両手で和真の頭を掴んで、そのまま胸元で抱きしめる。和真も男の子だから、こういうの嫌いじゃないはずよね？

「や、やわらか……／＼／＼……じゃなくてだな！何がしてえんだお前は!?この暑さで頭が沸騰しちまつたんですか!」

「こらっ、そんなにくたらしいこと言ったらダメでしょ（ふにゆううん♡）」

「ふ、ふわあ……／＼／＼」

「ほら、ホントは嬉しいんじゃない。……えっち♪」

「い……いいからさっさと離せ!／＼／＼というか胸小さいの気にしてたくせにやけにノリノリだなお前!」

「ふくん、そんな意地悪言っちゃうんだあ……」。

悪い子ね………おしおきよ♡（んちゆう…♡）」

「☆●◆▽□◎?!?」

ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡…

和真がいまだかつてないほどテンパってるけど、アタシはお構い無しに畳み掛ける。照れ隠しに憎まれ口叩くような悪い子は、いっぱいキスしてメロメロにしせちやうんだ

から♪

「(ちゅうううう……♡) ……ぷはあっ♪

どう？少しは反省した？」

「あ、あうう……／／／」

箱入り息子と称されるほどピュアな和真には刺激が強すぎたのか、すっかり骨抜きになっちゃったみたいね……この子のこんな表情見られるのがアタシだけだと思おうと、ちよつとした優越感がある。

「どごうやら降参のようね。」

恥ずかしいからつてもうあんな意地悪なこと言っちゃダメよ♪……(ちゅっ♡)「

「……………ふにやあああ／／／……(ドサツ)「

「……………え？ちよ、ちよつと和真!？」

仕上げの頬へのキスがトドメになったのか、羞恥の許容量をオーバーした和真はトロンとした表情のまま完全に脱力する。アタシもそれなりに鍛えてるとはいえ脱力した体重70kgオーバーの男を一人で支えきれはるはずもなく、和真はその場に倒れ込んで動かなくなった。

流石に心配になって容態を確認してみたが……すうすうと寝息が聴こえてきた。どうやら気を失って眠っちゃっただけのようね……。抱きつかれて沢山キスされただけ

で気を失うって、アンタどんだけ純情なのよ……

「まったく和真ったら……（ナデナデ）」

「んみゆ……♪」

……そこが可愛いんだけどね。

「……………」

「え？なに？」

アタシの膝で穏やかな表情を浮かべてすやすやと寝息を立てていた和真の口から突
然何か聴こえてきた。

寝言……かな？

無性に気になったので和真の顔に耳を近づけてみる。

「……………」

え？アタシ？

「……………」

……………だあいすき♡

歓喜と羞恥に耐えきれずに顔を覆ってその場で悶え苦む羽目になったアタシを誰が
責められようか？むしろ気を失わなかったことや和真を起こさなかったことを誰かに
褒めてもらいたいわね。

「しかしホント恐ろしいわね和真、最強の矛と言われるだけのことはあるわ……まさか意識の無い状態でこちらの弱点をこうも的確に抉ってくるとは……」

「お前が勝手に自爆したただけだろう……」

呆れるような声色とともに代表がこちらに歩いてくる。多少自覚はしているけど、願いだからそんなダメな人を見るような目を向けないで……。

「あれ？　そういうえばさっきの間、何故かいなかったような……」

「私は邪魔になりそうだったのでな、一段落するまで距離を置いておいたんだ」

さりげない気遣いがすごくありがたい。

そういうえば代表の存在を失念していたわね……。もし気を遣って離れてくれてなかつたらさっきまでの一部始終が第三者に知れ渡ってたのか……。

………考えただけでゾツとするわね……。

というか、さっきまで自分が何してたか冷静に考えると顔から火が出そうになる。何やってんのよアタシ……。

その後しばらくしてようやく和真の意識が戻ったので、アタシ達は再び集合場所へと歩を進める。起きてからしばらく恥ずかしそうに顔を真っ赤にして俯いている和真

を見てもう一度からかいたくなかったけど、アタシもそろそろ限界なため流石に自粛しておいた。まあ和真の可愛い一面は充分堪能したので、向こうに着いたらおとなしくパークを羽織ってあげよう。……あんな和真を他の人に見せるのは惜しい気がするしね。

「明久君、もつと右ですよ！」

「違うわアキ。実は左よ」

「吉井君、もつと前だよ！」

「アキくん。そこから左前方32度、直線距離4.7メートル程度の方向です」

「……………明久。実は逆方向」

視界が目隠しの布に閉ざされた状態で、吉井君は周りの声を頼りにスイカを目指して

いる。

「……………まあ実を言うと、全部秀吉の声真似なんだけどね……………」

「くくく、良い感じに翻弄されてるな明久の奴」

「和真、なんであんな入れ知恵したのよ……………」

「え？させてくれなかつた腹いせだけど何か？」

「アンタがやつたら大惨事になって終わりじゃない……………」

「それは否定しねえ」

スイカの位置は持ち前の勘で割り出せるだろうし、和真の腕力でおもいつきり叩いたらスイカは跡形もなく碎けちる。ある意味最もスイカ割りに向かない人材ね……………。ちなみに似たような理由で代表も外されている。

「……………雄二。この水着、どう……………？」

「どう、と言われてもな。前に見ているし別になんとも」

「……………それはきつと、きちんと見てないから。もつと近くで見るべき」

「つてオイ!?そんな格好でくつついてくるな!色々と当たってるだろうが!」

「……………遠慮しなくても、いい」

翔子は翔子でスイカ割りそつちのけで坂本君に迫ってるし……………つて、え?急に吉井君の動きに迷いが無くなって…

「くたばれええええつ!!」

「うおおつ!!危ねええええつ!!」

スイカじゃなくて坂本君の脳天に降り下ろした!?

「ああ、ごめん雄二。スイカと間違えちゃったよ」

そう言いながら吉井君は目隠しを外す。いやいやいや、明らかに確固たる意思で坂本君を狙ったでしょうが……くたばれって言ってたし。

「明久よ……。今お主、雄二の声がした途端に迷わずダツシユをしておったように見えただのじゃが……?」

「あははつ。何を言ってるのさ秀吉。酷い誤解だよ」

し、白々しい……。というか、あんなことされたら坂本君も怒ってー

「……まあ、気にするな秀吉。明久はあくまでもスイカを探していただけだからな。そうだろ明久?」

「うん。勿論だよ」

つて、アレ?意外と大人な対応をするわね坂本君。

「じゃあ次は俺の番だな。明久、バットをよこせ」

「いやいや、何を言ってるんだよ。雄二はさつきやって失敗したばかりじゃないか」

「そう言うな明久。和真と鳳はゲームにならないから除外するとして、今のお前で全員

一回目が終わったから次は二週目だろうか？それならまた俺の番じゃないか」

「いやいやいや。二週目が始まるなら、今度は順番を逆にする方が公平だと思うよ。だから僕がもう一回挑戦するよ」

あ、同じ方法でやりかえすつもりね……。二人とも笑顔のまま頑なにバットを離そうとしない辺り、これももうスイカ割りじゃなくてデスマッチね……。

「あ、あの、明久君に坂本君。折角のスイカを割って飛び散らせちゃうのもなんですから、スイカ割りはこの辺で……」

「スイカは絶対に割らないから大丈夫（だ）」

「お主らは、一体何を割るつもりなんじゃ……」

絶対割っちゃいけないものを割るつもりでしょ……。

最終的にその小競り合いを見かねた代表が二人に説教をしてスイカ割りは終了しました。ちなみにスイカは代表が綺麗にバットで1・2等分に切り分けた。どうやったたらバットを使ってこんな均一に分けられるのよ……？

【明久視点】

血で血を洗うようなスイカ割りか鳳君に強制的に終了させられて、今はお昼時。

男性陣がスイカを持ってきたからということ、今度は女性陣がお昼の焼きそばやカレーを買いに行っていた。和真と鳳君はせっかく砂浜があるのだからと二人で走り込みに行って今はこちらにいない。あの二人は本当にストイックだなあ……。ちなみにムッツリーニはカメラに着いた血を洗浄しに行ったらしい。正直焼け石に水だと思うけど、動かずにいられないのがムッツリーニっていう男だ。それにしても周囲を見回してみてもふと思う。今まで海ってカップルばかりのイメージだったけど……

「ねえ雄二、意外と女の人だけで来ているグループもいるんだね」

「ん？　そういうやそうだな。って、ナンパをする男連中がいるんだから、ナンパされる女がいて当然か」

「それもそうだね」

ナンパなんて漫画や小説の中だけの話だと思っていたけど、意外と身近にあるもんなんだなあ……。

「お待たせしました二人とも」

「あ、お帰り。結構時間がかかったね。混んでたの？」

「代表と和真は……走り込みでもしてるのかな？」

色々な食べ物や飲み物を携えた女性陣が帰ってきた。そして木下さん、よくわかってらっしゃる。

「いや、そこまで混んでおったわけじゃないのじゃが……」

「ボクたち、またナンパされちゃったんだよね」

「え？また？」

今日これで二度目になる。女の子だけでいたからだろうか、やっぱり誰かついていくべきだったなあ。

「さつきは特に美波ちゃんと優子ちゃんが随分と迫られて困ってましたよね」

勝ち気な貧乳が好みだったのかな、という感想は口に出せば生きては帰れないと察知したため、すんでのところでどうか飲み込んだ。僕だって少しは学習する。

「ホント、ウチああいうのって苦手なのに……」

「アタシもあんまり……和真と出かけたときは寄って来たことなんてないのに、なんで今日に限って……」

「それは和真といるからじゃないかな……」

童顔ながらも和真の容姿は非常に整っている。ついでに戦闘力はご存知の通りなので、横恋慕を狙うにははつきり言って難易度が高過ぎるだろう。

「まあなんにせよ、それは大変だったね」

「とうか、いつものように腕力で片付けてやれば良かったんじゃないか？」

「こらこら、そんな態度じゃダメだよ二人とも」

荷物を受け取ろうと伸ばした僕達の手は、工藤さんに叩かれてしまった。え？どういうこと？

「そんな態度？」

「なにがダメなんだ？」

「……………はあ……………。二人とも、本当に女心がわかってないよ……………」

「アタシはそういうのあんまり気にしないけど、流石にちよつとね……………」

工藤さんと木下さんがこれ見よがしに大きな溜め息をつく。姉さんがいるから大丈夫だろうと思っただけ……………。

「こらアキ。ウチらが困っていても気にならないって言うの？」

「明久君、それはちよつと冷たいと思います……………」

美波と姫路さんがジト目でこちらを見る。少し困ったので雄二に助けを求めると視線を移すと、雄二は雄二で霧島さんの不興を買っていつものように制裁を受けていた。相変わらず使えないなあ……………ん？

「どしたの、姫路さんに美波？」

隣では美波と姫路が顔を寄せて囁きあっていた。なんだろう？

「ねえ瑞希。ああいうのって、いつどこに行っても出てくるから困るわよね」

「そうですね。困っちゃいます」

二人がこちらを見ながらそんなことを言う。

「あれ？二人つてよくナンパされるの？」

「はい。それはもう、いつでも！」

「そうよ。それはもう、どこでも！」

妙に力強い返事だ。

「でも、その割にはさつき随分と慣れてない反応に見えたけど……」

「そ、そんなことないです！いつものこと過ぎて呆れて声も出なかつただけです！」

「そ、そうよっ！瑞希の言う通りだわ！鈍くて恋愛ごとに縁のないアキにはわからない

でしょうねっ！」

なんて失礼な!?

「そんなことないねっ！僕だつてナンパくらい余裕で……」

「明久君。余裕で……なんですか？」

「アキ。余裕で……何かしら」

どうしよう、ここで言い切ったら殺される未来しか見えない……。

「まさか……できる、とでも言うんですか？ 明久君が？」

「アキ、アンタ何を言ってるの？ アンタにナンパなんてできるわけがないじゃない」
「む」

「そうですね。見栄を張っちゃダメです」

「むむ」

「アキくんは恋愛ごと全般に向いてませんから、異性との交遊はお友達までにしておくべきだと思います」

「むむむっ」

隣で聞いてきた姉さんまで口を挟んできた。

なんて酷い言われよう。僕だって、本気を出せばナンパくらい……！

「雄二も、全然女心がわかっていない。……だから、モテない」

「く……っ！ 言ってくれるじゃねえか……っ！」

霧島さんにアイアンクローを極められたまま雄二が呻く。どうでもいいけどよくあの状態で普通に喋れるな。

「まったく、吉井君も坂本君も反省しないとダメだよ？」

「翔子もその辺で許してあげなさい。あんまり引きずっても仕方ないでしょう？」

木下さんに諷められて、渋々と言った感じで霧島さんは雄二の顔面から手を放す。

(くそつ、なんか納得がいかねえ)

(たね。理不尽に怒られた気がするよ)

(しかもなんだあの言い草は？調子に乗りやがって。何が俺たちがモテない、だ。そんなワケあるかっての)

(全くだよ。僕だつて本気を出せばナンパくらい：)

できる、と言い切ろうとしたところで、カメラを携えて戻ってくるムツツリーニが、誰か知らない人と話をしている光景が僕の目にとまった。珍しいな、いったい誰と話を――

『ねえキミ、凄いカメラ持ってるね』

『……………???'』

『良かったら、一枚撮ってくれない?』

『……………別に、構わない』

『本当?ありがとう』

『あ、そうだ。それならキミも一緒に写ろつか♪夏の思い出に、ね?』

『あははっ。それいいねっ。この子、結構可愛い顔してるしっ』

「ぐぼあっ!?!」

「ど、どうした明久!? 何を見たんだ!」

思わず血を吐いてしまうほどの信じ難い光景。

ば、バカな……! そんな……ことが……っ!

「しつかりしろ明久! お前は一体何を見たんだ!」

「ナンパ……されてる……」

「あ? 何だつて?」

「ムツツリーニが……逆ナン、されてる……っ!」

「んあ? 何をバカなことを。寝言は寝て言えと常々」

『きゃーっ。キミ、写真撮るの天才じゃない!?』

『すごい! メチャクチャ綺麗じゃない!』

『……この程度、一般技能』

『またまた、照れちゃって可愛いっ』

「はあっ!」

雄二の口からも鮮血が飛び散る。

「あ、ありえねえ……っ! どうして、俺たちを差し置いてムツツリーニが……っ!」

「ありえない、ありえないよ……」

信じられない……いや、信じたくない！

「……あのさ、雄二」

「なんだ……？」

「もしかして……このメンバーでモテないので、僕と雄二だけなんじゃ……？」

「ば……バカなことを言うなっ!? そんなことがあつてたまるかっ！」

「だ、だよねっ! そんなわけないよねっ! 僕は何を言ってるんだか!」

「全くだ! 第一、まだ鳳と和真も声をかけられてないじゃねえか! 結論を出すのは早すぎるぞ明久!」

「まったくだよ! あっはっはっは……」

……あれ? 何か大切なことを忘れているような。

「よう、戻ったぞ……」

「随分と賑やかだなお前達……」

噂をすれば走り込みに行っていた二人が戻ってきた。でもなんだかやけに疲れているような……。この二人が砂浜だからって多少の走り込みぐらいで疲労するとは思えないけど。

「どうしたの二人とも?」

「どうしたもこうしたもねえよ……駅前のポケットティッシュ感覚で次から次へと逆ナシされて、走り込みがまったくはかどらねえよ畜生」

「彼女達に悪気は無いとわかつてはいるが……こうも立て続けに声をかけられては、私達とて辟易するというものだ……」

「「がっふあああつ?!」」

そうだった……。この二人学校でもモテる男子ツートップじゃないか!

「おい、大丈夫か……?」

「黙れ!この裏切り者!」

「お前達に期待した俺達がバカだったぜ!」

「何故いきなり罵倒されなければならんだ……?」

「……あー、なんとなく察したわ。」

おおかたナンパに遭った女子に適当な対応をした意趣返しに、そんなだからお前らはモテないだの言いたい放題言われたって感じか?」

なんでそこまで正確にわかるの!?!もうホラーの域だよ和真のその勘!……つて今はそれどころじゃない!これどうとう声をかけられてないのは僕と雄二だけに……。

「……ねえ雄二、やっぱり僕達だけなんじゃ」

「いやいや、落ち着け明久。女子とこの色魔コンビはおいておくとして、ムツツリー二は

あの通りパツと見は物静かで無害だからな。声をかけられ易かったただけだろう」

「言うに事欠いて色魔扱いかよ……」

「坂本、私とて怒り狂うこともあるのだからな」

「まあまあ二人とも……でも確かに、ムツツリーニは僕や雄二とタイプが全然違うね」

そしてこの二人と僕達の違いは次元とか格とかの話になってくるけど、真正面から向き合うと悲しくなってくるので全力で目をそらすことに。

「ああ。だから俺たちがモテないと判断するのは早計だ。お前はともかく、この俺がモテないわけがない」

「そ、そうだよねっ。僕らはタイプの声はかけられにくいけど、だからってモテないって決まったわけじゃないもんね！」

「そうだとも！逆ナンはされないかもしれないが、俺たちが本気を出せばナンパくらい余裕のはずだ！」

「いや待てお前ら。吉井はともかく坂本、お前はこん—むぐつ!」

「気持ちわかるがここは見逃してやれソウスケ。男には、退いてはならねえときがある……そうだろお前ら？」

「そうだ！流石和真、よくわかってるな！そうと決まればいくぞ明久、俺たちの本気を見せてやろうじゃねえか！」

「うんっ！僕らがちよつと本気を出せばどれくらいモテるのか、皆に見せてやろうよ！いつまでもモテないままだつて思われていてたまるかっ！」

「おうともよっ！」

というわけで、僕と雄二は己のプライドを守る為、浜辺でナンパをすることになった。後になって思い返すと、この時の僕らはどうかしていたとしか思えない。せめてこの時、和真の表情をよく見ておけば危険を察知できたかもしれない。この時の和真はおそらく……新しい玩具を見つけたような笑顔を浮かべていただろうから。

海辺でのお祭り騒ぎ④

【優子視点】

「……ねえ和真」

「ん？どうした？」

「アタシら……何やってんの？」

「何って……明久達のナンパを暖かく見守っているんじゃねえか」

どうしよう、日射病でもないのに何故か頭が痛くなってきた……。

「突っ込み所が多すぎて処理しきれないかもしれないかもしれないけど、一応頑張ってみるわ。……」

「まず、何で吉井君達はそのような命知らずなことやっているの？」

これは比喻ではなく厳然たる事実。もし翔子達にバレたら命の保証は無いでしょうし。

「お前らさつき飯買いに行く途中、タチの悪いナンパにあつたそうじゃねえか」

「え？う、うん」

「そのことを聞いた雄二達の反応を、翔子達はお気に召さなかつたんじゃねえか？」

「うん」

「おそらく、その腹いせに雄二達をモテねえだの何だの言いたい放題言っただけになってナンパをすることになった……つつうのが俺の推測だ」

「あー……多分当たってるわね」

確かにあのときの坂本君達はデリカシーが欠けてたけど、翔子達も少々言い過ぎてた気がしなくもないわね……。

「そこだ。アイツらが面白可笑しくなっただけを間近で見物でもしようと思っただけだ」

「なんでアンタはそんな澄んだ目で、そんな酷い台詞をサラツと言えるのよ……」

要するにいつもの嗜虐スイッチがオンになったのね……。普段は意外と常識人なだけに、和真の気まぐれでスイッチが入ってこうなったときは余計にタチが悪く感じるわね……。

「……じゃあ次の質問ね。なんでアタシも付き合わされてんの？」

偶然会ったとかならまだしも、わざわざ連れてこられたには何かしら理由があるはずよ。……アタシと一緒にいたいから、とかだったらちよつと嬉しいな。

「あー、それもあるっちゃあるけど……一番の理由はナンパ対策だ、お互いにな」

「え？ どういうことよ？」

あとナチュラルに心読まないで、恥ずかしいから……。

「お前も単独だとナンパされて迷惑したろ？俺もこれ以上どこの馬の骨ともわからん有象無象共にせっかくのお楽しみを邪魔されたくねえからな、俺達と一緒にいりやそうそう寄って来ねえだろ」

「なるほど、確かにそうね。……とかやっぱりアンタもナンパされてたのね」

「まあな……。チツ、次から次へとゴキブリみてえに沸いて出やがって……」

さつきからやけに刺々しいわね、いつもより口も悪くなってるし……。逆ナンされてここまで不機嫌になるのは多分この子ぐらいでしょうね。浮気の心配とかしなくて良いからアタシは楽でいいけど。

「じゃあ最後に一つ……。代表は止めなかったの？」

「止めようとしたのを俺が上手いこと取り繕って止めた。ついでにこの遊びにも誘ったんだが『勝手にしろ……。私はもう知らん……。』とか言つて断つた後、疲れたのか休憩しに行つたぞ」

「代表……」

今回のこの海水浴、心なしか代表の精神的負担がやたら大きすぎない……？

「それじゃいつも通り、頼むぜ相棒！」

そう言つて和真はアタシに屈託の無い笑みを浮かべる。……仕方ないわね。正直あまり気が進まないけど、こんな笑顔で頼まれちゃ断れるわけないか。アタシは和真のこ

ういう無邪気なところも、堪らなく愛しいと思っちゃうんだしね。

「はいはい、わかったわよ……さつきアタシにハグとキスだけで骨抜きにされた和真君
♪」

「おいやめろ、蒸し返すな」

勿論、こういう方面にはやたら打たれ弱い所もね♪

「まったくこいつは、隙あらば人の弱点を容赦無く抉ってきやがって……あん？」
「え？どうしたのよ？」

というかアンタ、それに関してはアタシのこととやかく言えないでしょ……。

「アイツら確かナンパしに行ったんだよな……なんで砂浜を全力疾走してるんだ？」

「……………ホント、まるで競争してるかのよう……ってあれ？延長線上に土屋君と知らない女性が二人ほどいるわね」

「何？……………フム……………いつもの関係から考えると……………あいつらが全力疾走してるのは、おそらく抜け駆けするためってところだな」

「まあ確かに最初に声かけた方が有利だけど……………協力するって選択肢は無いの？」

「アイツらに限ってそれはねえよ……………つーか、へとへとな状態で知らん女に声かけてるけどよ、傍からみたら危ない奴にしか見えねえな」

「確かにそうね……………あれ？女性の方がおもむろに携帯をいじりだし——」

「ごっつはあつ!!」

「和真!?なんで急に吹き出し……あれ?坂本君達が死にも狂いで逃げていく……」

「……多分……警察呼ばれた……く……!」

なるほど、変質者扱いされたってわけ……。半分くらい自業自得だけどちよつと気の毒ね……。

「~~~~~つ!!! (ダンドンダンッ!!!)」

「楽しそうね和真……」

笑いすぎて涙目になつて……。

この三人、ホントに友達なのかしら?……つて、この疑問何回目になるかしらね?

「せつかくだから音声も欲しいよな。……つつうことで、明久達に急接近♪ (小声)」

「ちよつと和真……こんなに近いって大丈夫なんでしょうね (小声)」

アタシ達は今、吉井君達の声が聴こえるぐらいまで近づいている。

「隠密に徹すれば大丈夫だ。……いいか優子。宇宙は俺達の一部で、俺達は宇宙の一部だ（小声）」

「どんなアドバイスよ!?!」（小声）」

そんなアタシの心配は杞憂だったようで、二人はこちらに気づくそぶりも見せずに作戦を練っている。どうやら相手の容姿を褒めるところから始める気らしい。へえ……意外とマトモな作戦ね。

そんな風にあタシが感心していると、タイミング良く吉井君達の前を歩いていた二人組の女の人がタオルを落とした。

吉井君達はそれを切っ掛けにナンパを上手いこと進めていく。

「どうやら今回は上手くいきそうね（小声）」

「シッ、そろそろオチだから静かに（小声）」

「オチって、アンタねえ……（小声）」

いくらなんでも、ここから和真の望むような展開にはならないんじゃないや…

『『まるで、エロ本のヌードモデルみたいだ!!』』

……なったわね。

あ、二人が思いっきりビンタされた。

「優子、急いで距離を取るぞ（ガシツ）」

「え!?……………つて、なるほどね……………」

和真がアタシの手を掴んで吉井君達のもとを離れる。急に手を握られてドキツとしたけど、和真の表情を見てすぐ納得した。

……………あともう少いで大爆発しそうだ。

二人の声が聴こえないくらい離れたのを確認すると、和真はその場に崩れ落ちた。

「だはははははははははは!!あーっはっはっはっはっはっはっは!!（ダンドンダンドンダン!!）」

和真は四つん這いの状態で力一杯地面を叩いて爆笑している……………いや笑いすぎでしよ……………力強すぎて殴った場所にちよっとした落とし穴レベルの空洞ができてるし。

「……………まあ確かに、あの口説き文句は無いわね」

「まったくだぜ!むしろ何故あれでイケるとおもったんだようくくく……………」

よほどツボに入ったのか和真が復活するまで結構時間がかかったせいで、ようやく収まったころには吉井君達を見失っていた。

「これだけ人が多いと、探すのも一苦労ね……………」

「まあ充分面白いもんは見れたし、ここらで引き上げるか。アイツらもそろそろ諦めが

「つくだろ」

そんなわけでアタシ達は拠点に戻ることにした。

「貴様ら全員そこに直れえええ!!」

「!!!?!」

集合場所では、なんとというか……とにかくカオスだった。意識を失った吉井君と坂本君を秀吉と土屋君が大慌てで蘇生させていて、犯人らしき四人は……アタシが今まで見たこと無いほど怒り狂っている代表（装備：スイカ割りで使用したバット）に正座を強要させられていた。

「愛子、いったい何があつたのよ……」

「えつと……吉井くん達がナンパをしていると知ったあの四人が――」

「いつもの如く暴走して明久達を処刑したわけか……しかしソウスケに見つかったのが、あの四人の運の尽きだな」

愛子の言葉を引き継いだ和真はそのまま玲さん達を気の毒そうに見ているので、つられてアタシと愛子もあつちに視線を移す。……あれ？代表から発せられる殺気に姫路さんと翔子が不自然なくらい怯えているわね……。

「確かに聞いた限りでは、あの二人の行動は軽率かつ浅慮なものであった……だが！そのことは貴様らの所業に対する免罪符になどなりはしない！そんなことも理解できないのか、この愚か者共があつ!!」

「ひい……っ！」

「……ぐめん……なさい……っ！」

代表の雷雨のような凄まじい怒号を間近で受けたせいか、姫路さんと翔子はもう涙目で縮こまつてる。

「ちよ、ちよつと鳳！瑞希達が怯えて（ピュンツツツ!!）……る……じゃ……」

代表に抗議しようとした美波の鼻先をもの凄いスピードでバットが掠めた。あの軌道、あと1cmずれてたら美波の鼻がなくなってたかもね……。

「……誰が口を開いていいと言った？」

「あ……あうう……」

今ので心が折れてしまったのか、美波も翔子達と同じように涙目になりその場に縮こまつてしまう。

「……蒼介君、アキ君の教育で貴方にとやかく（パサアツツ！）言われる……筋合いは……」

さつきよりもさらに速いスピードで繰り出された突きは、玲さんの髪を掠めていった。今のは……あと一mmズレてたら頬が抉れてたわね……。

「……次は当てるぞ。それと一いつ言っておく、貴様が私より年上であることなど、今は微塵も考慮するつもりはない」

「う、うう……」

他の三人ほどではないにせよ、流石の玲さんもかなりの恐怖を覚えたのか、おとなしく正座することを受け入れた。

「ねえ和真……代表、どうしちゃったの？」

「ボクも気になるな……いつもとはまるで別人だよ……」

再び四人に喝を入れにかかる代表から目をそらしつつ、アタシと愛子は何かしら知ってそうな和真に問いかける。

「……なんてことねえ、ただぶちギレてるだけだ。おおかた明久達を呼吸が止まるレベルまで拷問したことがソウスケの逆鱗に触れたんだろ。……ソウスケがああなった以上アイツらしばらく解放されねえな」

うわあ、すごい他人事……。まあそれはそうと、あともう一つ気になっていることが

……。

「なんか、翔子と姫路さんが必要以上に怯えてるんだけど……」

「アイツのあのキレ方、料理指導中の母・藍華さんそっくりだからなー。おおかたトラウマでも刺激されてんだろ」

「なんであの二人が代表のお母さんにトラウマがあるのよ？」

「アイツら週一で料理の修行のため料亭『赤羽』に通ってるからなー。あの人手加減とか微塵もしないタチだし、随分熱心に指導されたんじゃねえの？」

「ああ、納得……」

『貴様！なんだその不細工な魚の捌き方は！恥を知れ愚か者が！』みたいな叱咤激励を受けながら料理修行なんて、少なくともアタシは絶対嫌だ。

結局四人が解放されたのはそれから一時間ほど経った頃で、代表の心をへし折る叱責を延々と聞かされ続けた四人は、よっぽど怖かったのか終わる頃には全員泣きじやくつていた。

何があっても代表だけは怒決してらせないように気をつけよう。今日アタシはそう心に誓った。

ちなみに吉井君達は二人の尽力によりなんとか息を吹き替えしたようだ。

海辺でのお祭り騒ぎ⑤

【和真視点】

「僕たち、よく生きてるね……」

「ああ……。よく覚えていないが、リアルに地獄を見てきたような気がするぞ……」

「お主ら二人のうわごとがなくなったときは、正直もうダメだと思ったぞい……」

「毎度毎度お前らも大変だな」

「カズマ。お前のクラス、常識が通用しないにもほどがあるぞ……」

今俺達男子6人はペンションのリビングにいる。ちようど雄二達が生の死の淵から舞い戻ってきた。流石のソウスケも馴れないFクラスの非常識ぶりが連続したせいで精神的疲労が半端じゃねえな。

「けど、意外だよね」

「ん？何がだ？」

「いや、僕と雄二って相当マズいことやったじゃない？」

「ああ、まあそうだな」

「……………異性と一緒に出掛けているのにナンパなんて、失礼極まりない」

「まあ確かに、軽率な行動だと言わざるを得ないな」

「あの連中がこうなることなんざ用意に想像できたろうに、チャレンジャー過ぎるぜお前ら」

「こいつらホント刹那的に生きてるよな。」

「その割には罰が軽いと思わない?」

「待て吉井。その言い分はどう考えてもおかしい」

「確かにそうだな。この程度で済ませるとは随分甘いな」

「坂本、私から言わせれば甘いどころか理不尽極まりないのだが」

「世間一般では臨死体験を軽い罰とは言わんじやろうしのう……」

まあFクラスに一般常識なんざあるわけねえんだけどな、そんなもんあつたら異端審問会なんざ結成されてねえよ。

「ということは、つまり」

「ああ。まだ何かあるだろうな」

「一応私の方から奴らの横暴な行いに対して少しばかり説教をしておいたので、向こうも多少懲りていると思うのだが……」

「アレのどこが少しなんだソウスケ? 翔子と姫路あたりトラウマになつてもおかしかねえぞ」

「確かに、さつきまでの鳳は……鉄人より遥かに怖かったのう……」

「……………殺気だけで人を殺せそうだった」

秀吉の発言を聞いた雄二達は信じられないといった表情をする。まあ実際に見てねえとピンと来ねえよな。

しかし甘いなソウスケ、Fクラスの強みはしぶとさと粘り強さだけ？そう簡単に懲りる連中じゃねえよ。

「うーん……判断に困るね……」

「まあ、今から近くの町でやつてる祭りに出かけるんだろ？何か酷い目にあるようなこともそうそう起こらない……と、信じたい……」

「まあ、荷物持ちや何かを奢るくらいはあり得るだろうね……」

「……………それは、いつものこと」

こいつらにとつてはな。

俺は例え優子が相手でもそんな使いつぱしりみてえな扱いは虫酸が走るし、仲が良いからこそお金のやり取りはキツチリしとかねえとな。

「まあいつか。なるようになるよね」

「それもそうだな。……とところで和真に鳳、さつきから気になってたんだが……」

「あん？なんだよ？」

「……その格好はなんだ？」

明久達がラフな格好である一方、俺とソウスケは半纏姿である。やれやれ、これだから素人は……いちいち説明しなきゃなんねえのか。

「お前ら、祭と言えばなんだ？」

「へ？急にどうしたの和真？」

「金魚すくい？かき氷？打ち上げ花火？……まあ確かに、どれも祭における重要なフアクターだ。だが俺の求める祭は断じてそんな浮わついたモンじゃねえ。祭において俺達アウトドア派が最も熱くなれる催し物と言ったら答えは一つ……そう……神輿だああああああ!!」

「『今日一番のテンション!』」

今、俺の求めるものは……神輿、ただ神輿。

泥や汗にまみれながらも己の培ってきた力を存分に奮い、浮き世に己が魂の讃歌を謳い上げる至上至高のお祭り行事……参加しないわけにはいかねえよなあ!

「……まあそんなわけで、私達『アクティブ』のメンバー三人は神輿を担ぐことになるので、向こうに着いたらお前達とは別行動になるな」

「三人つて……木下さんも参加するの？」

「そういえば荷造りの際、姉上も半纏を用意しておったのう」

去年の夏はまだ優子はアウトドアに染まりきってなかったから、今回が初参戦になるな。

「「お待たせ！」」

つと、ようやく女子共が来たか。

「皆、随分と時間がかかってたんだね……おおっ！」

「お、凄いな。そんなもんを用意していたのか」

「……………時間がかかるのも納得」

「なるほどな、浴衣じゃったか。全員よく似合っておるではないか」

浴衣ファツションションショーみたいな光景の中、優子だけは俺達と同じ半纏姿である。ついでにゴムで髪の後ろの方をくくって髪型をポニーテールみたいになっている。優子は激しいスポーツをするときはいつもこの髪型だ。ぶっちゃけ俺はこの髪型の方が普段より好みなんだがずっとそうして欲しいとは思わねえ、何事も新鮮さは重要だ。いくら肉が好きなん奴でも朝昼晩三食焼き肉じゃあウンザリするだろうしな……そういや365日欠かさず甘味を摂取し続けている甘党チビがいたな……まあ何事も例外はあるっつうことで、アレはノーカンな。

「へえ。綺麗だね。髪型も変えてるから、グツと色っぽくなってるよ」

「そ、そうですか？」

明久に褒められた姫路が袖を広げて回って見せている。まあ微笑ましい光景だとは思うけどよ……明久、ついさつきそいつに殺されかけたんだぞ？

「まさか私も着ることになるとは思いませんでした」

その隣で玲さんが戸惑ったように自分の浴衣を見下ろしている。思わなかったって、それ自分で用意したんじゃないかねえのかよ？

「皆で着ようって前からこっそりと相談してたんですよ。玲さんの分は翔子ちゃんが用意してくれたんです」

「……着ていないのがあったから」

なるほどねえ、翔子と玲さんは身長も近いから丁度良かったんだろうな。

「ウチ、浴衣って初めて着るかも」

「あ、そっか。美波は海外育ちだもんね」

「ちよつと歩きにくくて変な感じね」

馴れたらむしろ動き易いんだけどな。ソウスケなんて浴衣の格好でゴロツキを数人始末したことがあるくらいだし。

「……………ほえ……………」

「?な、なによ、アキ」

「あ、ああ、いやっ！別になんでもないんだっ！」

おおかた島田の格好に見惚れてたつてところか。重ね重ね思うけどよ、殺されかけたのついさつきなんだよな……。

『……………つ!? (ブシヤアアッ!)』

あつちの方でムツツリーニがまた死にかかってんな。十中八九愛子が犯人だろうが。

『またか土屋!?!』

『む、ムツツリーニ!?何事じゃ!?!』

『……………俺が一体何をしたと……………?』

近くにいた秀吉とソウスケが慌てて駆け寄る中、ムツツリーニは浴衣をはだけさせた愛子を恨めしそうに見ながら床に沈んでいく。やつぱり元凶はお前か。

『生きておるかムツツリーニ!?一体誰がこんな酷い真似を!』

『……………もう、ダメかもしれない……………』

『今輸血してやるからしつかりしろ土屋!』

『……………だが、これはこれで……………満更でもない……………』

『……………お前という奴は……………』

『なんとというか、心配しておるワシらが阿呆のように思えてくるぞい……………』

もう本人が自己生産した血液は一滴も残ってないんじゃないかね……………。俺がそんなことを考えていると、今度は近くで翔子が雄二に話しかけている。

「……雄二。私の浴衣、どう？」

「ん？ああ、そうだな……。まあ似合ってるんじゃないか？」

このキングオブツンデレには最初から期待してねえけどよ、流星にそれはねえだろ……。

「……じゃあ、今すぐ私と結婚したい？」

「全然、微塵も、まっぴらだ」

「……じゃあ雄二……生きて、いたい……？」

「おおっ！翔子は本当に可愛いな！見違えたぜっ！」

「……雄二は素直じゃない」

「お前な……。一応言っとくと、今のは脅迫って言うんだぞ……」

「……恋愛では手段を選んじやいけないって、お義母さんが言ってた」

「おふくろの奴……」

「……あと、雄二には何をしても良いって和真から許しをもらっている」

「和真テメエ！なに俺の人権を勝手に売り渡してんだゴルア！」

「胸ぐら掴むんじゃないよ、シワになるだろうが」

「だいたいお前の人権なんざ既に有って無いようなものだったじゃねえか。何も変わらねえよ。」

「さて、それじゃあお祭りに行きましようか。こんなことをしていると間に合わなくなってしまうかもしれませんからね」

「……雄二もその辺で切り上げる」

「ぐっ……！……覚えとけよ、お前はいつか必ず地獄に叩き落としてやる」

「ハッ、やってみな」

むしろ俺がお前を墓場に落としてやらあ……勿論人生のな！しかも学生の間中に！

「そうですね玲さん。間に合わなくなったら困りますもんね」

「急ぎましよ。ウチ、日本のお祭りってまだこれで二度目だから楽しみなのよね」

「ボクもすっごく楽しみ。早く行こ」

にしてもコイツら、やけに急かすなオイ。まだ日が沈み始めたばかりだ……間違いなく何か企んでやがんな。

「なあ優子、アイツら俺達に隠れて何しようとしてんだ？」

「ごめん、黙って置いて皆に懇願されたから今はまだ話せないの……。あつ、でも、代表とアンタは巻き込まないから安心して！」

「そうかい」

やっぱ何か企んでんのかアイツら。おおかた明久達が危惧した通りだろーな。まあ神輿の邪魔しねえつつうならほつといても良いか。正直かつたりいし。

ブロロロロロ……キキイツ!

「よーテメーら、来てやったぞー(グデー)」

突然近くに俺達をのせてきたバスが急停車し、車内からおっちゃんのだらけきつたような声が聴こえてきた。つか、運転荒っぽいなおっちゃん。

「あれ?バスで行くの姉さん?」

「はい。海よりは離れていますし、着替えも持つて行きますのでバスの方がいいでしょう」

着替えだあ?なんか引つ掛かるな……まあいいか、んなことより神輿だ神輿!

「優子!ソウスケ!準備はできてるよな!」

「ええ!」

「無論だ!」

俺達三人は充分に闘志を滾らせつつ、意気揚々とバスに乗り込んだ。

「あく！楽しかったな！」

「そうね、すつごく楽しかったわ。まさか飛び入り参加だとは思わなかったけど……」

「そこはまあ、俺の交渉力の見せ所よ」

「確かにお前の社交性は目を見張るものがあるな。……なあカズマ、将来“鳳”で働くつもりはないか？」

「んー……考えといてやる」

神輿を全力で担ぎ終えた後、屋台で買った焼きそばを食べつつ出店を回る。屋台での焼きそばは、なんかこう……普通の焼きそばと比べて格段に美味いよな。

「ところで優子、結局アイツら何企んでたんだ？そろそろ教えてくれねえか？」

「薄々嫌な予感はしていたが、やはり懲りていなかったのか……」

「えつと……アレよ」

俺とソウスケは優子の指差した先に視線を向けると……『納涼、ミス浴衣コンテスト！町一番の夏美人を見つけ出せ！』……という看板が。

「……………なあ優子、俺が考えうる限り最悪の仕打ちを明久達がされてると考えていいのか？」

「ええ……………吉井君達を女装させて参加させようつてのが翔子達の魂胆よ」

「一応町興しを兼ねた企画で、そんな企業スパイみたいナマネをさせているのか…………？」
アイツら女子に弱いから上手いこと言いくるめられて参加させられてるだろうな。

……………やれやれ仕方ねえな。

「優子、ソウスケ、男だつてバレて騒ぎになつたときのために様子を見に行こうぜ」

「秀吉がメイクをするらしいからバレないとはそうそう思うけど……………確かにあの面子だと樂觀視はできないね……………」

「カズマ、地方新聞が余計なことを書かないよう情報操作の準備をしておこうか？」

「おー、頼むわ」

しつかしこいつ普段潔癖なくらい真面目なくせに、人のためなら平気で自分の手を汚すよな。

「うし、じゃあいくか」

「了解」

俺達三人は微妙に重い足取りでミスコン会場へと向かった。つーかよ、せつかく貴重な夏休みだつてのに俺達何やってんだろうな……………？

《それでは、いよいよ今年から始まりました新企画！ “第一回・納涼ミスコンテスト” を開催致します！》

ノリノリのアナウンスが会場に響き渡る。俺達三人は観客席で明久達に訪れるであろう過酷な運命を見守っていた。しっかし随分大勢の観客が集まったなオイ。町興しを狙ってんだとしたら順調だな……今のところはだがな。それをぶち壊す危険性を秘めてんのが俺らのツレだっつうんだから笑えねえな……。

《このコンテストは “浴衣の小畑” 協賛による浴衣を題材としたミスコンテストでありまして、名前の通り浴衣の似合う美女を見つけようというものですよ！》

「む…… “鳳” 系列の会社がスポンサーなのか」

「そうなのか？」

「ああ。……ふむ、丁度良い。 “鳳” の傘下に相応しい活動を行っているか視察しよう」

あーあ、スポンサーさんも運が無えな……。こいつは身内に半端なく厳しいから、目

の前で粗雑な仕事しようもんなら良くて左遷、下手したら取り潰されるかもなあ。

《審査方法は得点式で、予選は三名の審査員たちによる独断と偏見で、決勝は審査員プラス観客の皆様の投票によって行われます!》

今ごろアイツらは決勝に進んでしまつたらどうしようか戦々恐々してるだろうな。地方新聞に乗ることはないって伝えてやりてえが……。

《予選参加者はなんと五十九名、この中から決勝に進むことが出来るのはわずかに十名となります!》

「どこの馬の骨ともわからない連中の見せ物になる企画に59人も集まつたのか……ハッ、ご苦労なこつたな」

「そのうち4人は男だと考えるところ……な……」

「もはやミス(?) コンね……」

《では、最初の十名の方に入場していただきましょう! どうぞっ!》

出てきた三人の中には明久とムツツリー二と雄二が含まれていた。前者二人は無駄にクオリティーの高い女装であるが、雄二の女装は正直見るに耐えない。秀吉の技術を持つてしてもアイツのむき苦しきには勝てなかつたか……。

一番、二番の女性の自己アピールは適当に聞き流した。どこの誰かもわからない女子のアピールなんて聞いてもしょうがねえしな。

《ありがとうございます。では、次は3番の方お願いします》

「お、明久の番だな」

「えっ……あれ吉井君なの!？」

「ふむ、言われてみれば面影はあるな」

秀吉の奴、予想通り全力を尽くしやがったな……可哀想に。まあアレならよっぽどしくじらない限りバレねえと考えると明久にとつちやありがてえかもな。

『は、はいっ。吉井秋子です……(裏声)』

地声が出ないように極力声を抑える作戦か、明久にしちや悪くねえ判断だな。

《特技なのはおありですか?》

『え、えっと、強いて挙げれば料理です……。パエリアとか、カルボナーラとか』

《お料理ですか。家庭的で素晴らしいですね。では、ご家庭でも?》

『はい、一応毎日……』

少し前まで水と塩だけで生活していたような男が、随分家庭的になったもんだ。そういう意味では名前欄にアレクサンドロス大王と記入して良かったのかもしれないな。

《毎日ですか!今時の若いお嬢さんにしてはとても珍しいですね。これはポイントが高そうです!それでは更に突っ込んで……彼氏さんはいらっしやいますか?》

いるわけねえだろ。

『い、いませんっ！今まで一度も……』

「やれやれ、今の判断は悪手だな」

「吉井の奴、自分が今女装していることを完全に失念しているな」

「あれじゃ『私は今フリーです』って宣言してるようなものね……」

《おおーっ！これは男性陣にはとても嬉しいお話です！どうですか、協賛かつ審査員の

小畑さん》

《携帯番号を教えてくださいたらオジサンがあとでお小遣いをあげよう》

あ、ソウスケの額に青筋が。

《あなたがスポンサーでなければ殴り倒していたところですが、そうもいかないので質問を変えさせて頂きます。吉井秋子さん、今回はミス浴衣コンテストということですが、今日の浴衣を着る上で気をつけたポイントなどは？》

《その……あまり、か、身体の線が、出ないようにと……》

そりや気をつけねえと骨格でバレちゃうからな。

《先ほどから真っ赤になつて俯いていることからわかるように、吉井秋子さんはかなりの恥ずかしがり屋のようですね。浴衣を提供された小畑さんは、吉井さんの着こなしについて何か質問はありますか？》

《下着をつけているかどうかをお聞かせしたい》

あーあ、ソウスケがあのおっサンを殺人光線でも出てきそうな目で睨めつけてら。

《一周回って心地よくなつてしまいそうなほどゲスな質問をありがとうございます。気のせいかわたくし、先ほどから冷や汗が止まりません》

今のソウスケの様子を伝えたら、冷や汗が止まらなくなるのはあのおっサンだろうな。

『し、下着なんてつけてませんっ!』

「明久はもう駄目かもな」

「おそらくは女性物の下着など穿いていないと言いたかつたのだろうか……」

「絶対に誤解されるわね……」

『うおおおーっ!!』

《よ、吉井さん!?こんなセクハラな質問に答えなくても大丈夫ですよ!?男性客の皆様、ウエーブはおやめ下さい!ここはそういう会場ではございません!》

《決めたよ。彼女は決勝に進ませない。衆愚に晒すにはあまりに惜しい人材だ》

《はい皆様空耳ですよー。スポンサーがお客様を衆愚などと呼ぼうはずがございませんからねー。とにかく、吉井秋子さん。色々ありがとうございました。そして、本当にすいませんでした……》

何とか決勝進出は免れたか……アイツ、本当に悪運が強えな。そしてあのおっサンは

もう駄目だな、頭とか……将来とか。

明久の番が終わり次の女性に映る。スポンサーの傍若無人な振る舞いに司会の人もそろそろ限界だろうな、今にも手が出そうだ。

《井村さん、ありがとうございます。今度は5番の土屋さん、自己紹介をどうぞっ》
『……………土屋香美です』

こいつもこいつでやたら完成度高えなおい。このことが美紀に知られたら完全に標的にされるな、間違い無い。

《ちよつとハスキーな感じの声がたまりませんね。今日はお友達と海水浴ですか？》

『……………はい』

《その浴衣の着付け、大変お上手ですけどよく着たりさせますか？》

『……………いいえ。友人にやってもらいました』

《そのご友人は会場に来ていらつしやいますか？》

『……………はい』

塩対応に徹して審査員の興味を削ぎ落とそうって魂胆か、この調子でいけば無難に予選落ちするだろうな。

《ええつと……………では、浴衣の他にはどのような服がお好きですか？》

『……………チャイナドレスや着物は言うに及ばずレースクイーンにチャアガール看護婦に

キャビンアテンダント更にはファミレス店員に女性警官制服やレオタードとOLスリーツにセーラー服やブレザーや巫女服に加えてメイド服やテニスウェアなども素晴らしいと何でもありません』

「遅えよ!」

「墓穴を掘るとはまさにこのことだな……」

「おそらく本人が着たいわけじゃないんでしようけど、あの格であんなことを暴露すれば……」

《こ、これは驚きました……。土屋さんはこのクールな態度と可憐な外見に加えて、コスプレが趣味のご様子。一部の方にはたまらないでしょうね》

『……………忘れて下さい……………っ! (ブンブンブン)』

ムツツリーニ、その小動物チツクな振る舞いは完全に逆効果だぜ……。

『『こ・う・み!こ・う・み!』』

『……………こ、困る……………っ! (わたわた)』

会場からの香美コールに焦るムツツリーニはあたふたと取り乱していた。

……………可哀想だけでもう駄目だなアイツ。

《これは凄い手応え!土屋さんの決勝進出は決まったも同然でしょう!土屋さん、ありがとうございました!》

『……………あ、あの……………本当に困る……………っ！』

なんとか取り消そうとするも、マイクは次の人間に渡ってしまった。残念だがもうムツツリー二の決勝進出は確定だろうな。

「同情するぜムツツリー二……………」

「さてと、次は坂本だが……………」

「まあ、あのガタイなら十中八九大丈夫よね」

確かにそうなんだが……………経験上、何かしらのオチがあるような気がしてならねえな。

《はい、ありがとうございます。それでは7番。今度は中国からのご参加です。洪さん。どうぞっ！》

『洪雄麗デス。ヨロシクお願いシマス』

「もう設定からして不公平極まりないなオイ」

「リアクションが難しい質問されても、言葉がわからない振りすればおれでオーケーだもんね……………」

「司会の人微妙な表情になっているな」

《これはまた……………背の高い方ですね。どうですか、小畑さん》

『素晴らしいですね。個人的に私、背の高い方が大好きなんですよ』

……………なるほど、こんなオチか。おーおー、さっきまで自信満々だった雄二が目に見え

て困ってら。

《おおーっ！審査員の高評価が得られました！では小畑さん。洪さんに何か質問をどうぞっ》

《ハネムーンはカンボジアなんてどうですか？》

《はいわたくしツッコみませんよ！色々と言いたいことがあっても相手次第で全て堪えて飲み込むのがプロフェッショナルですよー》

「どんだけ食い付くんだよあのオッサン。多分舞台裏で翔子がキレてんだろーな……お、ようやく雄二が息を吹き替えしやがった。」

『こ、国籍違ウノデ困リマース』

《愛があれば大丈夫です。マイハニー》

『愛ナンテアリマセン』

《私には愛が生まれる自信がある》

『ワタシハアナタノコト嫌いデース』

《友達からでも構わない。一生大切にする》

『いい加減にしろ殺すぞおっさん』

《君になら殺されても構わない》

もう完全に素が出てんじやねえかアイツ！あのオッサンも何でおかしいと思わねえ

んだよ!?

《はい、小畑さんも大喜びの洪雄麗さんでした。ではお次……》

《待て。まだ私の質問は終わってない。雄麗、ご両親への挨拶はいつ行けばがふっ!》

お、いいパンチ。よくやった司会者。

《殴つてませんよー。蚊が飛んでいただけですよー。それよりそろそろ次の方に行きま

しょうね小畑さん》

《……仕方ないな》

《それでは気を取り直して……エントリーナンバー8番。渡会さんです!》

《渡会美紀です。宜しくお願ひします》

《渡会さんは地元からの参加のようです。小畑さん、同じ地元民としてなにかお聞きし

たいことは?》

《興味ないね》

「ほう………(ゴゴゴゴゴゴゴゴ……)」

とうとう仕事放棄しやがったよ……。ソウスケからどす黒いオーラが滲み出てるし、

もう完全に詰んだなあのおツサン。

《そう言わずに何か質問を。洪さんの時のようにやる気を見せて》

《仕方がない……。そうですね。それでは8番さん。貴女の中から見た洪雄麗さんの印

象を教えてください」

《お前もう裏行つて洪さんを口説いて来いよ！そして二度と戻つてくるな！》

《なんだ貴様スポンサーに向かつてその口の利き方は！》

《今更常識人面かコルア！上等だ！司会なんてこの場で辞めてやらあ！》

《か、顔はよしたまえ！雄麗のご両親に会う前なのだから！》

《殴つた方がちつたあそのブサイク面もマトモになるつてもんだ！》

《……雄二は、渡さない……》

「あ、翔子まで乱闘に参加してきたわね……」

「このミスコンもこのままお開きだな」

「（プルプルプル……ピツ）父様、私です。『浴衣の小畑』を『鳳』の系列から排除を要

請致します……はい……はい……ええ、偶然件の会社がスポンサーを勤めている企画に立ち会ひまして……」

隣ではソウスケがスポンサー会社に事実上の死刑宣告を下してるし、このミスコンも開かれなだらうな。結局、審査員席で始まった暴動は関係者が全員病院か留置所に入るといふ結末を迎えるまで続いた。アイツらが関わると何一つ無事に終わらねえな。

海辺でのお祭り騒ぎ・完結

【明久視点】

「結局、恥をかいいたのは僕らだけじゃないか……」

「……………心の傷を負った……………」

「色々な意味で一生忘れられない夏になったな……………」

祭の会場を後にしてペンションに戻った僕らは、その庭に設置されているコンロでバーベキューの準備をしながら黄昏ていた。

もう、お婿にいけない……………」

「大変だったようだな、お前達……………」

「ああ、うん、同情するぜ……………」

ミスコン参加を逃れた二人が憐れむような視線を向けてくる。こんなことなら僕達も彼ら神輿組について行けば……………って、そんなんで逃げられる相手じゃなかったね……………」

「でもミスコンの結果は少し気になるなあ。あのまま続けてたら誰が優勝していたんだろうね?」

今はもう着替えちゃって普通の格好だけど、あの浴衣姿……………かなりハイレベルだった

と思う。あの中から優勝が出たとしても何の不思議もないくらいに。

「そうだな……。まあ、妥当に秀吉じゃないのか？」

「雄二よ。男のワシが挙がる時点で妥当と言う言葉は縁遠いと思わんか？」

「……………全員甲乙つけがたい」

「だよねえ。皆可愛かつたし」

「……………ノーコメントだ」

「ソウスケに同じく」

僕と雄二とムツツリーニの三人で女性陣の浴衣批評。本人達の傍でこういうのっていいのかな？

そう思って向こうのテーブルの方を窺うと、向こうは向こうで男性陣批評をしていた。なんだ、それならお互い様だよな。

『私はやっぱり明久君だと思えます。可愛い姿とあの天然っぷりがたまりませんっ』

『土屋もかなり可愛かったけど、ウチもやっぱりアキかな〜』

『……………雄二はいまいちだった。……………やっぱり男らしい方が似合ってる』

『ボクはムツツリーニ君の女装にキュンキュンきたけどね。あんなに似合うと思わなかったな〜。優子は……………和真君が出てないからノーコメントだよな？』

『勝手に決め付けないでよ……………そうだけだ』

『ボクの見立てでは和真君も女装したらかなりハイレベルになると思うんだけど、残念だなく』

『愛子、それ本人には言わない方が良いわよ。アタシ以前似たような話題を振ったら、無言で肘の押すとビリビリする所を思いつきりグーで殴られたから』

『うわ、想像しただけで痛そう……』

『ええ、死ぬほど痛かったわ……もう痛いの通り越して火傷するんじゃないかってぐらいい……』

『和真君のトラウマはかなり根深いようだねえ……玲さんはどうでした？』

『私はアキくんの女装姿は見慣れていきますから……。他のお二方が新鮮で良かったと思いますよ』

『え？ 明久君の女装を見慣れているって……』

『母がとにかく女の子が好きでしたからね。上が私と言うこともあって、小さな頃アキくんはよくお下がりのスカートなどを穿かされていましたよ。名前も最初は“明菜”の予定だったのですが、男でそれは何か違うだろうと祖父が言いまして、現在の……』

なんか僕の恥ずかしい過去が勝手に暴露されてるウウウウウ！

「ちよちよちよちよちよつとやめてよ姉さん！ 誤解だからね!?! そういう格好させられてたつて言つても、幼稚園に上がるより前の話で！」

テーブル傍に駆け寄り、姉さんの口を塞ごうと手を伸ばすも、姉さんはその手をひよいひよいと避けて会話を続けた。

「アキくん、嘘はいけませんよ。一昨日の晩にもスカートを着かされていたじゃないですか、寝ている間に」

「それ初耳だよ!?!アンタ僕が寝ている間になんてなったんの!?!」

「ふふつ、慌てなくても大丈夫ですよアキくん。半分は嘘ですから」

「半分って何!?!どこをどうしたら今の話の半分が嘘になるの!?!」

「スカートは膝の上程度までしか穿かせてません」

「半分穿かせたってことじゃないかアアア!?!」

「業界用語では『半脱ぎ』というそうです」

さ、最悪だ……。そのうち自分の部屋に鍵をつけないと……!

「もう最悪だよ姉さん! 今後は勝手に僕の部屋に入ったら怒るからね!」

「怒る、ですか。それは困りますね」

「困ってるのは僕の方だよ!」

「ほらほらアキくん。ギユツとしてあげるから落ち着いて下さい」

「ええい離せつ! そんなもんで落ち着くワケがはふう……!」

「思いつきり落ち着いてるじゃない」

「はっ!?ち、違うんだ美波!これはその、小さな頃からこうやって姉さんに育てられたせいで、別に心から落ち着くってワケじゃはふう……」

「よしよし。良い子ですねアキくん」

ぐうう……っ!つい条件反射で落ち着いてしまう……!

「別におかしなことでもないでしょ吉井君。和真だつてギユツとしてあげたらおとなしくなるわよ?」

それはそれで意外な一面だけど違うんだよ木下さん!君達はカップル、僕達は姉弟、両者には天と地ほど違いがあるんだよ!

その後、僕達は皆でバーベキューを堪能した……とやりたいところなんだけど、鳳君がバーベキューのサイドメニューとして捌いた新鮮な魚介の生き造り(どうやら僕と雄二がナンパをしているときに釣っていたらしい)があまりにも美味しくて、途中から全員バーベキューそっちのけになっていた。この人ホント何でもできるよね……。

「さてと……腹ごしらえも済んだことだし、締めイベントと行きますかねえ」

夕食後、和真がやけに大きなリュックを漁りながらそんなことを言い出した。

「和真、いきなりどうしたの？」

「オイオイ明久そりやねえぜ。せつかくの夏なんだからさ……花火しない手はねえだろうがよ！」

と云いつつ和真はリュックから大量の花火を取り出した……つて、多っ!? そのデカいリュックの中身、ほとんど花火だったの!?

「お前ら、ここにある花火は好きに使ってくれて良いぞ……(ピーン!)……せつかくだから派手な幕開けといこうじゃねえか！」

いつもの不適な笑みを浮かべつつ、和真は大量のネズミ花火が入った箱を取り出しつつチャツカマンで全てに火を点ける……いやそれマズくない？

「ヒイイヤッツハアアアアア！ネズミ花火フェスデイバウウウウ！」

そんな掛け声とともに皆の方にダツシュしつつ箱の中身を思いつきりぶちまけ……つてちよつとオオオ!

シュルバババババババババババ……

「ワシらの怒り、思い知らせてやるのじゃ!」

「……………目には目を、花火には花火を……………」

二人が膠着状態に陥っている内に武器（調達）した雄二達が和真を取り囲む。この辺りの機転はFクラスでの日々の生活によって培われる

「ちよつと待てお前達!?!この距離では私も巻き添えになるだろうが!?!というか花火を人に向けてるな——」。

「「くたばれええええええええええ!」」

「お構いなしか貴様ら!?!」

「うわああああ!?!やられるーっ!……………なあんてな!少し借りるぞソウスケエー!」

「むっ!?!私の木刀を……………!?!」

「オラララララオラア!（キキキキキン!!）」

「「なにイイイイ!?!」」

和真は奪い取った木刀で自分に向かって放たれたネズミ花火を全て打ち落とした。技術の無駄遣い過ぎる!

「ほいつ、返すぞソウスケ。さてと、少し早いがメインディッシュの時間だコルアアアアアアアアア!」

「おのれ!私の木刀を……………って、なんだその馬鹿デカイ花火は!?!」

四方八方にロケット花火が振り注いだ。鳳君が咄嗟に目にも止まらない剣撃でかなりの数を事前に打ち落とされたものの、打ち漏らしたロケット花火によつて阿鼻叫喚はさらに加速していった。

「まったくもう！アンタって子は！やっつていいことと悪いことがあるでしょ！」

「……いや、ホントすみませんした……。これが締めだと思つてつい悪ノリし過ぎちゃいました……」 ↑ 正座中

どうやら和真の用意した花火はバラエティーなどでよく使われる熱くない花火だったようで特に実害は無かった。その辺の配慮はいかにも和真らしいがいくらなんでも悪ノリし過ぎていたことに変わりはなく、現在僕達がそれぞれ残りの花火を満喫してい

る中、和真はずっと木下さんにお説教されている。和真本人もやり過ぎた自覚があるのか、木下さんに怒られてシユンとしている。平常時の自信と闘志に満ち溢れた様子とはうって変わって小動物みたいなあの姿を見ると、木下さんが和真を可愛がっている理由がわかる気がする。

「ホントに反省してるんでしょね!?! (ギユウウウ!)」

「痛たたたたた!?! してます! 反省してますから! 耳を引つ張らないで!」

「どうも反省の色が見えないわね (ギユウウウ!!)」

「痛い痛い痛い痛い! もう許してえええええ!」

「ダ・メ・で・す! しばらく我慢なさい!」

「うう……優子の意地悪……」

「アタシが何ですって? (ギユウウウウ!!)」

「痛ああああああ!」

「……めんなさああああい!」

うわ、涙目の和真なんて初めて見たかもしれない。

それにしても、あの傍若無人を地で行く和真がああも飼い慣らされるなんて、ほんの少し前までは想像すらしなかったよなあ……。そう考えると木下さんって、もしかしたら物凄い人なのかも……。

そんなこんなで、僕達の笑いあり涙あり臨死体験ありの海水浴は幕を下ろした。

本音を喋る召喚獣①

「ははっ。こいつは傑作だね」

「おや学園長、どうかありませんか?」

「ああ、綾倉先生かい。なに、ちよいと試験召喚システムの操作系統を変えてみようとなんて言っていたんだけどね」

「ほほう、ようやくオカルト仕様から復旧させられたというのにもう弄くり回したのですか。途中からメンテナンスを私に丸投げしておいて良い御身分ですね学園長」

「アンタ最近黒いのを隠さなくなってきたね……今回はすぐもとに戻せるんだからそう堅いこと言うんじゃないよ」

「……まあ良いでしょう。して、操作系統の変更とは具体的にはどのように?」

「半自動化を試してみたのさ。従来の召喚獣がはつきりとした意識のみを読み取っていいとしたら、今回定めた設定はその一步先の意識と無意識の間あたりも読み取って、ある程度自立的に行動できるようにしてみたんだよ」

「なるほど、実用性はともかくとしてなかなか面白い試みですね」

「若干言動に刺があるけど、まあそういうことさ。コイツは是非とも実際に喚び出して

データを採りたいところだねえ」

「データ採取でしたら私が協力致しますが」

「いやいやいや……アンタの点数だと試運転に使うには召喚獣が強すぎる。何かがあったら困るからね」

「面倒ですが故意に一度低い点数を取りましょうか？面倒ですが」

「二回も言わなくて良いんだよ。それに、そんな効率の悪いことしなくても……」

『明久 teme エー！なんであのタイピングでくしゃみなんかしやがるんだ！途中まではうまくいっていたのにこのバカ野郎！』

『雄二こそ！あのタイピングでお腹が鳴るなんて何考えてるんだよ！あれがなければうまくいっていたのにこのクズ野郎！』

『ええいキサマら！いいから補習に戻らんかあつ！』

『くそおおおつ！』

「あのバカどもに補習を抜け出した罰としてやらせた方が効率がいいさね」

「なるほど、確かに丁度良いですね。……しかし学年末テストの結果に目を通しましたが、彼らの成績は飛躍的に向上しています。念のために私の方から召喚獣スペックをデチューンしておきましょうか？」

「その作業はどのくらい時間がかかるんだい？」

「カップ麺を作れる程度の時間があれば充分かと」

「相変わらず仕事が早いねえ……」

【和真視点】

「『召喚獣の試運転?』」

「ああ。そいつをアンタらにやってもらいたいのさ」

夏休みも終わりに差し掛かったある日、Fクラス特別補習が終わってから一緒に海に行ったメンバー（蒼介は欠席、愛子は部活のため後から遅れてくる）で写真を見ながら雑談をしていると、そこにばーさんがやってきてそんなことを言い出した。ふむ、なかなか面白そうな話じゃねえか。

「どうしてウチらなんですか?」

見ていた写真を片付けながら島田が尋ねる。

「どうしても何も、アンタらが適任だからさ。アンタらは召喚獣の扱いにも慣れているし、ついでに補習から脱走しようとしたバカどもへの罰にもなるからね」

「……………(サツ)」

咄嗟に目を逸らす明久と雄二。なるほどな、さつきこいつらが西村センセに捕まったのに特にお咎めなく解放されたのはそういうカラクリか。

「あの。試運転って、具体的にはどのようなことをするんですか？」

話を戻すように、姫路が手を挙げてばーさんに問いかける。

「特にこれといったテスト項目はないさね。召喚して、適当に動き回らせるだけでいいさ。なんの動きもさせないのはテストにならないから困るけどね」

「あ、それだけでいいんですか。それなら私でもできそうです」

安心したように胸の前で手を合わせる姫路。こいつはホント高城先輩並に騙されやすいな。「脱走の罰としてやらせることの割には妙に簡単過ぎる、何か裏があるんじゃないのか?」、とか思わないのかよ。……まあ、間違いなく裏があると確信しているにもかかわらずノリ気な俺がとやかく言えることじゃねえけどよ。

「それでしたら、私もお手伝いします学園長先生」

「……………私も」

「アタシも構いません」

「俺も別に良いぜ?つか、やらせろ」

名乗り出たのは姫路、翔子、俺、優子の四人。

「アンタらはダメさね、点数が高すぎる。あらかじめ綾倉先生が暴走したときに備えて召喚獣のスペックを一時的にデチューンしているとはいえ、軒並み4500点オーバーのアンタらに頼むのは流石にリスキー過ぎる」

チツ、なんだつまらねえ……まあ確かにばーさんの言い分はわからんでもない。白金の腕輪の件でも色々あつたしな。

「そう言うワケで試運転は吉井・坂本・土屋・木下・島田に頼むよ、科目は古典でね。試運転の時間は今から一時間。召喚フィールドは試運転用に学校全体に展開しておくけど、一応この教室から出ないように。データが採りにくいからね。うまくやってくれたら……そうさね、学食の食券か図書券くらいは進呈してやろうじゃないか。ただでやるのもなんだしね」

「「おー」」

学園長の進呈という言葉に、島田と秀吉とムツツリーニが感嘆の声をあげる。現金だなお前らも。

「じゃあ頼んだからね。報酬を出すんだから……絶対に途中で投げ出すんじゃないよ」

そう言い残してばーさんは教室から出ていった。

「ご褒美を用意してくれるなんて学園長もいいところあるわね。丁度欲しい本があったから助かるわ」

「……………図書券はいくらあつても困らない」

「学食の食券でもありがたいのう」

「良かったですね皆さん」

「…………ちよつと羨ましい」

「まあ仕方ないわよ翔子。学園長の言った通り、万が一暴走したら大変だし」

「まったくこいつらときたら、揃いも揃って素直な連中だなあ…………まあ、ばーさんとさほど交流がないから仕方無いのかもしれないねえがよ。」

「……………」

「おーおー、雄二と明久はしつかり警戒してるな。」

「じゃあ、さつさと始めちゃいましょう」

「そうじゃな。こうしておつても始まらん」

「……………了解」

そんな明久達の懸念には気付かず、既に島田達は召喚を始めようとしている。こいつらホラー映画だと真つ先にくたばる役だろうな。

「三人ともちよつと待つ……」

「試験召喚（サモン）っ！」

明久の決死の静止もむなしく三人が声をそろえてキーワードを唱えると、お馴染みの幾何学模様から召喚獣が姿を現す。さて、鬼が出るか蛇が出るか……？

「良かった。サイズは前のやつに戻ってるみたいね」

「やはりこつちの方がしっくりくるのう」

「………耳と尻尾も以前と同じ」

三人の言う通り、見た限りでは殆ど見慣れた召喚獣と全く同じであった。強いて違いを挙げるとすれば……

「………武器を持ってない」

「服装も学校の制服みたいですね」

「装備をリセットするって言ってたから、そのせいなんじゃない？」

翔子、姫路、優子も会話に加わる。そう、現れた召喚獣は文月学園指定の制服姿で手には何も持っていないかった。三体ともそうであるところから、装備を設定していないときのデフォルト形態だと推測できるな。

「一応、今の所おかしな部分は見当たらないね」

「安心するのはまだ早いぞ明久。さっきのババアの話だと、変更したのは操作性の部

分らしいからな。動かしてからが本番だろ」

「ふむ。ならば、さっそく動かしてみようかの」

見た目の確認を終えて、秀吉が自分の召喚獣に指示を出そうとする。その時、

《では、明久に飛びついて驚かせてみるのじゃ》

「へ？」

子供のようないい声だが、教室に響き渡った。

今の口調……あー、そういう機能か……。こりゃ俺が参加しなくて良かったかもな。

「いい、今の……何かしら……？」

「小さな子の声が聞こえましたけど……」

辺りを見渡して見る限り、子供どころか俺達以外の姿はどこにも見当たらない。ま

あ、犯人は目の前にいるんだがな。

「ほんのつい最近召喚獣が妖怪になっておったから、そのせいで今度は心霊現象でも起

こつたのじゃろうか？」

「えええええつ!?!」

相変わらずビビりだなこいつら……見ていて面白いから別に良いんだけどよ。

「けど、おかしくない？それだと操作性の変更とは全然関係ないじゃないか」

「だな。そうすると、あの声は心霊現象なんかじゃないってことか？」

「……………そもそも、召喚獣とは無関係かもしれない」

残念、がつつり関係してるんだなこれが（笑）。

そんなことを内心で思っている、

《今の声はどこから聞こえてきたんじやろうか？》

もう一度さっきの声が聞こえてきた。

さて、そろそろ気づくかな？

「もしかして今の、秀吉？」

「いや。ワシは何も喋っておらんぞ？」

「でも、今の話し方って秀吉そっくりだったような……………」

《な、何……………？お化け……………？うう……………怖い……………っ！》

《……………この声、変声期前の児童のもの》

さらに次々と子供の声が聞こえてくる。うわっ、姫路達露骨に震えてやがる……………面白っ！

「ど、どこかにスピーカーでも隠してあるとか、そういうのですよねっ」

「そ、そうよっ。そうに決まってるわ」

「……………その可能性は低い」

ムツツリーニが姫路達の言葉を即座に否定する。その言葉を聞いてますます震える

二人。

「和真、美波達が可哀想だからそろそろ答えを教えなさいよ。アンタはもうわかってるんでしょ?」

「やれやれ、優子もせつかちだなオイ」

「柊っ!もつたいぶつてないで早く教えなさいよ!」

「何なんですか柊君この声は!」

「わかったわかった、そう急かすな。……それだよそれ、犯人はそいつらだ」

その場にいた全員が俺の指差した方角に目を向けると、そこにはさつき喚び出した三匹の召喚獣がいた。

《それにしても、困ったのじゃ。今朝のことはどうしたら良いじやろうか……》

《怖い怖い!お化けとか、ウチ本当に嫌なのにく!》

《……この視点の低さ。悪くない》

「しよ、召喚獣が喋ってる!」

「へえ。こりや面白いな」

召喚獣たちはそれぞれ腕を組んだり、その場に頭を抱えてしやがみ込んだり、低い姿勢から頭上を見上げてみたりと、思い思いの行動を取っていた。……この召喚獣達の行動から察するに、俺が予想してた余計なオプションも付いてるみてえだな。

「と、とりあえず、心霊現象とかじゃないみたいね」

「はあ……。良かったです……」

お化けの類が苦手な姫路と島田が胸を撫で下ろしている。ホントこいつらは弄つて飽きねえな。

「しかしまあなんつーか、操作性の向上というよりは自動化って感じだよな。これ、お前らが指示してるわけじゃないだろ?」

「……………特に何もやらせてない」

「ワシもあのような動作をさせておらんのだ」

喚び出された召喚獣は、さつきから溜息をつく仕草をしてみたり、胸を手に当てたり、仰向けに寝転がったりしている。やれやれ判断が甘いなお前達、こいつらの本当の厄介さは……

《お化けじゃなくて良かったあ……。危うく前の肝試しのときみたいに、また眠れなくなつて葉月と一緒に寝なきやいけなくなるところだったわ……》

《まさかまた近所の男子中学生に告白されるとは……。こんな話が明久達にバレてしまえば、ワシは更に女扱いされてしまう。なんとか秘密裏に断らねば……》

《……………この視点の低さなら、いつでもスカートの中を見られる……!》

……………(こういうところだぜ。

「美波……。今召喚獣が言っていた、肝試し以来お化けが怖くて葉月ちゃんと一緒に寝てるって話本当なの？」

「木下君……。ついに学校外の男の子にまで告白されちゃったんですか……。？」

「ムツツリーニ……は、別にいつも通りだな」

明久達がそう問いかけると、三人はそれぞれ否定の姿勢で返事をした。

「な、何を言ってるのよアキ！ 召喚獣が勝手にウチがまったく思ってもいないことを喋ってるだけよ！ ウチがお化けを怖がるとか、そんなのありえないもの！」《寝る時だけじゃなくて最近はお風呂も一緒かな。だって、髪洗うとき怖いんだもん！》

「島田の言う通りじゃ。いくらなんでも、男のワシが近所の男子中学生に告白されるなぞ、嘘にもほどがあるぞい」《今月はこれで三人目じゃ》

「……………スカートの中に興味なんてない」《……………スカートの中にはロマンや夢や希望があり興味は尽きない。タイト・ミニ・ロング・フレア・プリーツなど様々なスカートがありそのどれにも異なった魅力があるが、キュロットだけはスカートを名乗るべきではないと思う。あれにははあれで独特の魅力があるものの、防御力が高すぎてー》

語るに落ちるってこういうことを言うんだな。

「秀吉ったら、相変わらずアタシより男子にモテるのね……」

「なんだ優子、お前まだそんなこと気にしてたのかよ？ はあ、俺が捨てられる未来もそう

遠くはないということか……」

よよよ……と、無性に悪ふざけがしたくなつた俺がわざとらしい泣き真似をしていると……

ちゅっ♡

頬に未だ慣れない柔らかい感触が。

「誰もそんなこと言つてないでしょ？それに……そんな未来は永劫こないわよ。それにアタシは死ぬまでアンタの側にいるって、かなり前から決めてたんだから♪」

そう言つて優子はウインクをしつつ、俺に向かって微笑みかけた。

……………なんとというか……………うん……………

「お前……………なんかずるい……………」

「ちよつと、人聞きの悪いこと言わないでよ」

ここんところ優子に主導権握られっぱなしで、完全に力関係が出来上がりつつあるよなあ……。別にそれほど嫌なわけじゃねえんだけど……やっぱなんとなく悔しいから、近い内に何かしら手を打たねえとな、うん。

《でも冷静になると、ちよつと勿体なかつたかも。意地を張らずに怖いって言つて、アキに手でも握つてもらえば》

「ちよ、ちよつとおーっ!?本当に何言つてのよーっ!」

言つて欲しくないことを口にされたので美波が慌てて召喚獣に飛びかかるも、美波の召喚獣はその手をひらりとかわして逃げ回り、明久の足にしがみ付いた。いつまでも意地つ張りなままの本体より召喚獣の方が上手く行きそうだなオイ。

「つて、あれ？美波の召喚獣に触れる……？」

「あのババアのことだ。また細かい部分の調整に失敗したんだろ」

「ん〜……どうも、そんな感じだね」

本来明久以外の生徒の召喚獣は物理干渉ができない。点数が未だに表示されないことも合わせて、雄二の推測は概ね正しいだろうな。

「そんなことどうでもいいから、とにかくその子をこつちに寄越しなさいアキー！」

《やっ。ウチはアキのところにいるっ》

そう言つて明久の足から離れない美波の召喚獣。

「え？今、召喚者の意思に逆らいませんか？」

「こいつは俺の推測だがよ、本能や無意識に思っていることを優先的に読み取ってるんじゃないかねえか？」

もしこの推測が正しいのなら、ますます俺は召喚しない方が良いでしょう。

「なるほど。それで体面より欲求に従った行動を取るワケか」

「……さらに自動化のために自己を形成させたとしたら、幼児に近いものになるのも頷

ける」

当然こんな小難しい話に明久がついていけるはずもなく、頭上に沢山の？マークを浮かべていた。

「えつと、要するに？」

「……この子たちは、幼児程度の行動原理を持ち、自我があると言うこと」

「つまり、本音を喋っちゃう自分自身の子供の姿、といった感じですね」

「要するに、本人から理性を外して幼児退化させたようなモンだと考えりゃ良い」

俺の噛み砕いた説明を聞いた辺りで、ようやく明久は理解できたようだ。

「そっか、子供の姿か。だから美波の召喚獣はこうなんだね」

《アキ、抱っこ》

「抱っこじゃないでしょうが！何甘ったれてるのよ！いいから離れなさいっ！」

《やーっ》

島田が明久の足にしがみついている召喚獣を引きはがそうと悪戦苦闘している。シニールな絵面だなオイ。

「ま、気にしなくても大丈夫だよ美波。こういうの、慣れてるから」

「え？慣れてるって？」

「どうしてか知らないけど、僕って昔から小さな子に好かれるんだよね」

「知能レベルが近いからだろ」

「黙れ雄二」

「むしろ負けてるよな」

「和真、貴様もか!?!」

「すまん明久、召喚獣が勝手に（笑）」

「喚び出してもいないのに召喚獣に擦り付けるんじゃない!」

俺達を睨みつつ明久が頭を撫でると、島田の召喚獣は気持ちよさそうに目を細める。

《あのね、あのね、アキ》

「ん?なに?」

《ウチね、いつもは酷いことをしてるけど、ホントはアキのことが》

「きやああああーっ!」

「ぎやああああーっ!」

島田が持ち前のヘタレを發揮して明久に間接を極める。あーあ勿体無え、ここさえ我慢すれば姫路より一歩リードできたのにな。

「ちよつと、本当に何を話そうとしてんのよ!?!どうしてウチの分身なのにウチが困るようなこと言うの!?!」

《アキ、大丈夫？痛くない？ごめんね？》

「こらっ！ウチの話聞きなさい！」

おーおー、普段内側で闘ってる理性と本能が外側でも闘ってら……愉快愉快♪

《参ったのじゃ……あの少年、いくらワシが男じゃと言っても聞いてくれんのじゃ》

《スカートの魅力はたくさんあるがその中でも特筆すべきはそこに内包される可能性つ

まり見えるかもしれないと言う希望を提供すると言ういわば優しさにも似た―》

「むう……。この召喚獣、なんとかして消したいのじゃが……」

「……………召喚フィールドが広すぎて範囲外に出られない」

秀吉達も自由に話し続ける召喚獣に困ってるな。フィールドは学校全体に広がってるから簡単には消せねえし、自由に動き回るから目を離せない。完全にばーさんの思う壺だなこりゃ。

「それにしてもこれは凄いな。ムツツリーニはともかく。秀吉が隠そうとしていることまでわかるなんて、なかなかできることじゃないぞ」

優子なら力づくで聞き出せるがな。

「そうですね。木下君のポーカーフェイスは凄いですから」

優子は結構な頻度で平然と見破ってくるらしいがな。

「いやいや何を言うのじゃ雄二に姫路。ワシは常に自然体じゃと《演技を褒められたの

じゃ。嬉しいのじゃ《……………》

その場でぴよんぴよんと跳ねて喜ぶ秀吉の召喚獣。

お、明久が何か思いついたようだ。

「あのさ、秀吉」

「な、なんじゃ明久？」

「秀吉は男子に告白されたことってある？」

「あるわけなからう」《このところほぼ毎日じゃ》

「毎日!?!」

「そういや以前に飛鳥もそんなことを愚痴ってたな、同性から毎日のように告白されるって。」

「なananなんてことを言うのじゃ! 明久よ! 今のはこやつ嘘じゃからな!?! 本当はワシは《金曜日と月曜日は特に多いのじゃ》違うのじゃ! ワシは男に告白などされておらんのじゃ!」

「週始めに玉碎覚悟で告白する奴と、週末だからダメもとで告白する奴が多いんだろうな。」

「あ、あれはその……きつと姉上と間違えられておるだけなのじゃ! 《宛名を何度確認してもワシの名前が書いてあったのじゃ》だから違うのじゃ!」

「秀吉アンタ、この学校でアタシに告白してくる生徒がまだいると思ってるの?」

「俺と優子の関係は、俺の知り合いなら全員知ってるからな」

それはつまり全校生徒及び全教職員に知れ渡っているということだ。それを知った上でなおアタクシしようとするチャレンジャーは……いたらいたで面白いが、今のところ確認されていないな。

「んじゃ、今度はムツツリーニに何か聞いてみつか。ムツツリーニ、お前は……」

《……話しかけるな。今、スカートについて考えるのに忙しい》

「……………すまん」

「……………っ! (ブンブンブン)」

「こいつ、いつもと何も変わねえな……」

「じゃあ、最後は……」

「島田だな」

「な、なによ……?」

明久と雄二の視線を受けて、一瞬美波がたじろいだ。そして、気を取り直すように咳払いをして二人に告げる。

「い、言つとくけどね! ウチに隠し事なんて何もないんだからね! アンタたちがいくら質問しても《実は昨日、下級生の女の子に告白されて》いやあああーっ!」

「……………」

もの見事に自滅したな……。

「それにしても優子、ウチの学校いくらなんでも同性愛者が多すぎねえか……？」

「そうね……。アタシも以前何度女子に告白されたことか……」

前々から思ってたんだけどよ、同性にモテるのは木下家が背負った業か何かなのか？

「ひ、卑怯よアキ！ そうやってウチの恥ずかしい秘密を聞き出すなんて！」

「いや、今のは美波の自爆のような……」

「問答無用よ！ いいからアンタも召喚獣を出して本音を喋りなさいっ！」

《本音？ 本音って、好きな人のこと？ ウチの好きな人はね、》

「アンタは黙ってなさい！」

まあ、いくら明久でもこの状況で召喚獣を喚ぶわけがねえよな。だが明久、気をつけろよ？ 俺達の周りにはお前が思ってる以上に狡猾な奴が多いぞ。

「……本音を喋っちゃう、召喚獣ですか……」

ほら、さっそく姫路が紙とペンを取り出してある四字熟語を書き始めた。あの熟語の読み方、間違いなく明久に召喚獣を召喚させるためのトラップだろうな。

「あの、明久君」

「ん？なに姫路さん」

「これ、なんて読みますか？」

「えっと格差問題（かくさもんだい）かな？」

「はい。正解です」

明久の答えを聞くと、姫路はにっこりと微笑んだ。明久、ドンマイ……。

ポンツ↑明久の召喚獣登場

「しまったあああーっ!!」

「ごめんなさい明久君っ。でも、どうしても本音で聞きたいことがあるんですっ」

成績が上がったことが裏目に出たな。

「ははっ。相変わらずバカだな明久」「……雄二。法の精神を書いた人は？」「モンテス

キューだろ。お前はいきなり何を言っつて」

あきひさ……モンテスキュー……

ポンツ↑雄二の召喚獣登場

「しまったあああーっ!!」

翔子のさりげないトラップに綺麗に引っ掛かり、雄二の召喚獣も喚び出された。雄二はバカだなあ……人の不幸を笑ってるからそうなるんだよ。

「何故かしら和真……たった今物凄くアンタに『アンタが言うな!』ってツツコまなければならぬ気がしたわ」

「そうか、そりや間違ひなく気のせいだな」

俺は人の不幸が好きなんじゃねえ……人を追い詰めるのが好きなんだよ。ちなみにそうして追い詰めた奴が、死力を尽くして不幸を克服するような熱い展開はもつと好きだ。

「ナイスよ二人とも！ さあアキ、答えなさい！ アンタの好きな人は？」

《あのねあのね、ウチが好きなのはね》

「アンタは言わなくていいの！ さあアキ、答えなさい！」

「あ、明久君っ！ 私も知りたいですっ！」

「……雄二。私のことをどう思っているのか、聞かせて欲しい」

三人の視線が明久と雄二の召喚獣に集まる。

ちなみに二人の召喚獣はというと……

《バカ明久！ お前の名前のせいで召喚しちまっただろうが！》

《アホ雄二！ 人の不幸を笑うからそんな目に遭うんだ！》

取っ組み合いの喧嘩をしていた。

うん、いつも通りの光景だな。

「明久！ テメエの名前のせいで召喚されちまったじゃねえか！」

「何を言ってるのさ！ 元はと言えば雄二が脱走に失敗するからこんなことになったんだ

ろー！」

その証拠に本体も同じように喧嘩してるしな。

「あの、明久君っ。坂本君のことじゃなくて、好きな人について考えて見て下さいっ」

「そうよアキ！人のだけ聞いておいて自分は逃げようなんて許さないんだから！」

「……雄二。本当の気持ち、聞きたい」

《ムキー！雄二のアホー！》

《うぎー！明久のボケー！》

「くたばれ雄二！責任を取れ！」

「死ぬのはお前だ明久！地獄に落ちろ！」

「明久君っ」

「アキっ！」

「……雄二……！！」

そんな不毛なやり取りをしているところに、

「皆お待たせー。って、なにににー？なにか面白そうなことやってるねっボクらも混ぜてよっ」

部活を終えた愛子が遅れて合流してきた。同情するぜお前ら……このトラブルメーカーが関わるとロクなことにならねえからな。

「ねえ和真、また突っ込みたくなっただけど」

「よかったな優子、今回はあってるぞ」

俺がトラブルメーカーだってのは否定しねえ。

本音を喋る召喚獣②

【雄二視点】

「へえ。本音を喋る召喚獣か。面白そうだねっ」

「全然面白くないっ！」

事情を聞いた工藤は楽しげにそう言った。自分が喚び出してないならさぞ面白いんだろうな！

「じゃあホントに本音を喋るのか、確かめてみようかな」

「……………っ（ササツ）」

ターゲットにされまいと俺達が目を伏せる。

「あれ？和真君は召喚してないの？」

「生憎、俺の点数だと暴走したらヤベエつつつてばーさんから止められていな」

「むー、色々聞きたいことあるのに……仕方ない、それじゃムツツリー二君」

「……………（ピクツ）」

「ボク、ちよつとキミに聞かせて欲しいことがあったんだよね」

工藤がムツツリー二を見てにやあ、と笑みを浮かべる。よしっ、当面の危機は去った

!

「ねえムツツリーニ君。一つ聞かせて欲しいんだけど」

「……………こっちは話すことなんか《……………エロの話しなら大歓迎》……………何もない」

早速召喚獣が真逆の反応をしてやがるな。工藤はムツツリーニの目を覗き込んで、悪戯っぽく問いかける。

「あははっ。そういう話もいいけど、今ボクが聞きたいのはちよつと違うんだよね。」

……………ねえ、ムツツリーニ君」

相手に考える時間を与えるためか、一瞬間を開けて言葉を続ける工藤。

「いつもは『興味ない』って言ってるけど……………ホントはボクに、興味があったりしない？」

そう工藤が問いかけると、ムツツリーニはフツと小さく笑ってから答えた。

「……………何をバカなことを」

《……………スパッツの中はどうなっているんだろう》

「……………っ!! (バシバシ)」

《……………痛い》

思わず本音をぶつちやけた自分の召喚獣をひつ叩くムツツリーニ。……………まあこいつが工藤のスカートの中に興味があることなんざ周知の事実だから、いちいち確認することでもないな。

「あははっ。本当に喋るんだね。面白〜い」

「……………面白くない……………っ！」

《スパッツの中、見たい》

「……………っ！（バシバシ）」

《……………叩かないで欲しい》

「あははははっ」

やけに楽しそうだな。しかもそんなことを聞わざわざ聞くことは工藤はもしかして……………まあ、俺には関係ないか。

「じゃあ、もうちょよつと遊んでみようかな〜？」

「ん〜？」

今度は工藤がムツツリーニから視線を動かし、俺と明久を交互に見る。何だ？とてつもなく嫌な予感がするんだが。

「ねえ、吉井君、坂本君」

俺達の名前を呼びつつ、工藤は自分のスカートの裾をつまんだ。

「スパッツだからつまらないかもしれないけど……………」

「またもや相手が考える為の間を取る工藤。何を企んでいるんだ？」

「ボクのスカート……………めくってみる？」

そう言つて、工藤はピラピラと自分のスカートの裾を上げ下げした。ふつ、俺も随分甘く見られたもんだな。

「何を言つてるのさ工藤さん。僕はそんな《めくらせて下さい》いやらしい人間じゃないよ」

「そうだぞ工藤。俺達をからかつても《待て明久、俺が先だ》無駄だからな」

「アキ、ちよつとこつち来て」

「明久君。お話があります」

「……雄二、おいで」

あ、臨死体験の予感。

くしばらくおまちください

「まったく、少しは懲りなさいよね。そうやっていやらしいことばかり考えてると、また問題になつちやうんだから。ね、瑞希？」

「え？そ、それはその、えつと……いやらしいことは年頃だから仕方がないかもしれないですけど……。と、とにかく、愛子ちゃんをそんな目で見るのはダメですつ！あんまりそういうことを考えると、私も美波ちゃんと一緒にお仕置きをしちやいますからねっ」

「……雄二。浮気は許さない」

「肝に銘じておきます」

俺と明久が二人で額を畳にすりつけて謝る。

工藤め、俺達に何の恨みが……!!

「ごめんねムッツリーニ君、吉井君、坂本君。ちよつとからかつちやった」

謝るくらいなら始めからしないであれ、こっちは命がかかってるんだから。

「……………俺は工藤に興味なんてない」

「酷いよ工藤さん」

「ちよつとは自重してくれ」

「うん。からかつて嘘なんかついちゃってゴメンね」

「反省してるならいいけど……………うん?嘘?」

嘘だと…………?何の話だ?

「そう。ボク、嘘ついてたんだ。ホントはボク…………」

ギリギリまでスカートを持ち上げて、工藤が告げる。

「今日、スパッツ穿いてないんだ」

《……………っ!! (ガタッ)》

《……………っ!! (ガタッ)》

《……………っ!! (ガタッ)》

「これは違うんだあーっ!」

「いいからこつち来なさい」

くしばらくおまちください

「やべえ……。意識が朦朧としてきた……」

「まずいね……。僕も指先が少し震えてきたよ……」

「むしろよく意識があるなお前から……」

畳に倒れ込んだままでの俺と明久に和真が話しかけてくる。お前とは鍛え方（死にかけた回数）が違うんだ。……と聞いてえところだが、起き上がれるほどの体力はもう残ってねえな畜生。

「……雄二。私だつてスパッツを穿いてない」

「アキつてば、どうしていつつもそんなにいやらしいことばかり考えてるのよ」

「明久君つ。ちゃんと反省してくださいっ」

倒れている俺達に女どもがそう言う。んなこと言われても仕方ねえだろうが！和真や鳳みたいなレアケースがそうそういると思うんじゃないやねえ！

「……………（ぐつたり）」

ちなみにムツツリーニは鼻血で倒れて動かない。こいつはいつも誰が手を下すまでもなく勝手に自滅するよな……。

《アキのバカつ。すけべっ》

あと、明久の背中の上では島田の召喚獣が飛び跳ねていた。鳳のお陰で多少向上したとはいえ古典の点数はまだまだ低いため、まったく痛そうではなかった。翔子もあれぐらい攻撃力が低ければ……。

「それとね、三人とも。今朝ボクちよつと寝坊しちゃって、ブラする時間が」
 「もう勘弁《ブラがどうしたっ!?》して下さいっ!」

畜生、恨むぞ俺の無意識!というか工藤は俺達を追い詰めてそこまで楽しいか!?こいつも和真と同類なのか!?……って、翔子がこつちに来るううう!?うわああ死ぬほど怖ええええ!!

「……雄二」

「ち、違うぞ翔子…これは男として仕方ない反応で」

無駄なことだとわかっていても、抵抗するしかないじゃねえか!そんな俺の弁解にもお構い無しに翔子はどんどん近づいてきて—

「……えい」

「んおっ!」

……ええと、何だこの状況?

よし、一旦落ち着いて整理してみよう。俺の頭は翔子の胸の中に抱き抱えられて……!!?!?!?

「……嬉しい?」

「ば、バカを言え!こんなのが嬉しいわけが《イイヤツホオオー!》あるかあああああ
あーっ!!」

声を絞り出せ坂本雄二!声帯が潰れて今後一切喋れなくなっても構わないからこの
ボンクラ召喚獣の声を打ち消すぐらい叫びを上げるんだ!……って翔子!?なんだその
嬉しそうな笑顔は!?更に抱き寄せてくるんじゃない!?

「……じゃあ、もう少しこうしててあげる」

「何を言ってるやが《キヤツホオオー!!》放せええええーっ!」

必死に抜け出そうと暴れるがもがけばもがくほど柔らかい感触が……って違う!邪
念を捨てろ坂本雄二!そして少し離れた場所で嗜虐的な笑みを浮かべているであろう
サディストのことを失念するな!木下姉との関係を散々弄られた報復の機会を虎視
眈々と狙っているに違いないんだぞ!?情けや容赦とは無縁な和真のことだ、下手しなく
ても婚姻を早めるよう画策してくることは間違いない!

《いいなあ雄二!羨ましいっ!羨ましいよっ!》

「明久君っ。翔子ちゃんもそう言う目で見ちゃダメですっ」

「アキ。まだ反省が足りてないみたいね?」

俺の将来が窮地に立たされている一方、明久は生命の窮地にたたされていた。

《優子視点》

「どいつもこいつも綺麗に墓穴を掘っていくなあ……同情するぜ♪」

「まったく同情してないじゃないその顔……」

「あ、バレた？」

バレたも何も最初から隠す気すらないでしょうに……。ちなみにアタシと和真から少し離れた場所では吉井君が正座のまま瑞希にお説教されていた。最初は美波も隣にいたけど召喚獣が《ウチのちっちゃな胸でも喜ぶのかな?》とか言い出したので慌てて離れていった。頑張って美波、同志として応援してるから。

「……明久君、聞いていますか?」

「は、はいっ。勿論っ」

《怒ってる姫路さん可愛いねっ。今日は痛いお仕置きもされないし》

「のおおーっ!」

「あ、明久君っ!?!」

吉井君の召喚獣がそんなことをのたまっているけど、後半はアタシの聞き違いかしら

……？

「ねえ和真。さつきまで吉井君、立ち上がれないほど痛め付けられてたわよね……？」

「明久も雄二も伊達に死線を潜ってねえからな、死にかけてないなら大したことないんだろうよ」

「訓練され過ぎでしょ……」

「優子、頼むから変な影響受けんなよ？まあ、もしお前がああなったら俺は全力で抵抗するけどな」

「言われなくてもわかってるわよ」

「ならいい」

和真と交際してから和真の変化に殆どの人が驚くけど、実際はそんなに変わっていないかったりする。理不尽な暴力には決して屈しないし、命令や指図や束縛をされようものなら、その相手を振じ伏せることすら一切躊躇しない。

そしてそれは……アタシが相手でも例外じゃないでしょうね。上手いこと誘導することは可能だけど命令や指図は聞く気ゼロだし、翔子達みたいに暴力を振るおうとしたり無理矢理従わせようとしたら……容赦なく反撃した上で躊躇いなく絶縁してくるでしょうね。

和真を手懐けるコツ？そうね……優しさと包容力かな。意外と甘えたがりだしね

……アタシ限定だけど。

「(コホンツ)と、ところで明久君っ」

「な、なにかな姫路さん」

《やっぱりお仕置きされるの?》

身を乗り出してきた瑞希に吉井君は怯えたように一步引いてしまう。まあ、無理も無
いかな……。

「いえ、そうじゃなくて……。その、突然ですけど……。あ、明久君は……。好きな人はいま
すかっ!」

「ほえ?急にどうしたの?」

《ほえ?急にどうしたの?》

……和真から鈍感だとは聞いていたけど、まさかここまでとはね……。あんなド
直球の質問なのにどうして理解してないのよ……?」

「……改めて知りましたが、明久君ってこういう時、本当に質問を理解してないんです
ね……」

《どうしてこの状況で急に好きな人なんて聞いてきたんだろう?もしかして、最期に僕
の好きな人に思いを伝えてあげるから安らかに眠れっていうことかな?そういえば先
週見た映画でそんなシーンがあった気がする。死にかけの戦友の手を握って遺言を聞

くところ。あの時はそのあと、火を点けたタバコを口にくわえさせて貰って、戦友はゆつくりと天に召されていたつけ……ってことは、この後僕はタバコを吸うことになるのかな。未成年だけど、大丈夫なのかな……？」

「あの、姫路さん。僕はまだ成人してないんだけど……」

「しかも、壮絶に明後日の方向に勘違いしていますし……」

いや、流石におかしいでしょ!?

「好きな人の有無を聞かれたのになんで最終的に喫煙の話になるのよ……？」

「改めて思うがアイツの思考回路は恐ろしいな。俺は感覚でなんとか理解できるけど常人には無理だな」

ホント便利ねアンタの勘……。

《アキはウチと両想いになるのかな？気になるね？》

「こらあーっ！ちよつとアンタは黙りなさいーっ！」

《やーっ》

「やーじゃないのっ！」

少し離れた場所で美波が自分の召喚獣と格闘してる。吉井君にもバツチリ聞こえてるわよね？実質もう告白してるようなものだけど……多分理解してないわね、あの様子だと。

「そうじゃないですよ明久君。私が聞いているのは、純粹に、今明久に好きな人がいるの
かないのか、ってことだけです」

「え？なんだ、そういうことか。……でもそういうのは、あんまり人前で口にするもの
じゃー」

《えつとね。僕が好きなのはね、》

「大空へ羽ばたけえええ!!!」

《ふぎやあーっ!》

「ああつ。小つちやな明久君がつ」

召喚獣が余計なことを口走る前に、吉井君はゴミ箱にドライブシュートで蹴り込む。
へえ、なかなかのキック力ね。

「……雄二。雄二はどう？私のこと、好き？」

「ふん。くだらねえ。そんな質問に答える義務は」

《俺？俺は勿論……》

「ここだ！ここで決めるんだ！」

《みぎやあーっ》

「……雄二、酷い」

あつちはあつちで坂本君が召喚獣にイーグルショットを喰らせていた。というか、

さつきから思ってたけど……

「絶対アンタの影響でしょアレ……」

『キャプテン翼』は不朽の名作だ。ただし無印に限るけどな」

ああ、確かドイツ・アルゼンチンの扱いと『雷獣シユート』のネーミングが気に入らないんだっけ……。

「あの、明久君」

そうこうしているうちに瑞希が吉井君の召喚獣を抱き抱えて戻ってきた。

「……………(ジーツ)」

「???どうしましたか、明久君?」

「い、いや、別になんでもないよ」

何かを誤魔化すように慌てて手を振る吉井君。

「どうしたのかしら?」

「んー、観察処分者の召喚獣は本人と感覚が繋がってるって言えばわかるよな?」

「……………なるほど」

吉井君の召喚獣は瑞希の大きな胸で抱き抱えられている状態だ。まあつまり……そういうことなんだろう。

「って、違うー!さつきいやらしいことを考えちゃダメだって叱られたばかりなのに、すぐ

にそんな不純な気持ちを抱くほど僕はいやらしい人間じゃ《おっぱいが柔らかくて気持ちいい》行くぞ！次は焼却炉だ！」

「あ、明久君っ!?!いくらなんでも外に蹴り出すのはやりすぎですよ!?!」

瑞希が吉井君の召喚獣をかばうように更に強く抱きしめる。……まあ男の子だし、そこまで隠そうとしなくても良いんじゃないかしら?」

「それより明久君。さっきの質問なんですけど」

「……さっきの質問?」

「はい。明久君の……好きな人は」

「って、まだその話を引つ張るの?教えたくないって言ってるんだからそつとしておいてあげなさいよ。」

「えつと、僕の好きな人はね……」

「は、はいっ。明久君の好きな人はっ」

「……Gクラスに居る左門さん、かな?」

勿体つけてから吉井君が言い放った。いや、いくらなんでもそんなあからさまな卜ラップに……

「……え?さ、左門(サモン)さん?誰ですか?そんな人、聞いたことも……。それに、Gクラスなんてうちの学校には……あっ!?!」

ポンツ↑瑞希の召喚獣登場

…引つ掛かつちやうのね……。

「さあこれで条件は五分五分だよ姫路さん！好きな人の話を続けようじゃないか！」
「ず、ズルいです明久君ッ！好きな人の名前で騙すのは反則ですっ！」

いや瑞希、今のは引つ掛かる方に問題があるわよ……。

「ふふっ。いらっしやい瑞希。存分に本音で語り合いましょ……？」

いつの間にか二人の近くに来ていた美波が瑞希の肩に手を置いて微笑む。道連れができて随分嬉しそうね……アタシも注意しておかないと。

「だ、大丈夫ですっ。私には隠し事なんて」

《実は、さつきから明久君が旦那ことを考えてもお仕置きをしていないのは、私もたまにヘンなことを考えちやうからで》

「いやあああーっ！」

大慌てで自分の召喚獣の口を塞ごうとする瑞希。完全にフラグだったものね。

「オカルト召喚獣がサクユバスなだけあって、やっぱお前の脳内ピンク一色だなオイ」

「はう!?!……うう、終君ひどいです……」

諦めなさい瑞希、和真は人の弱味や弱点を抉り出すことが大好きな人種だから。

「甘いわね瑞希。隠し事のことなんて考えるから逆に召喚獣が口にしちやうのよ」

《ウチもね、ぬいぐるみと机の上にアイツの写真が飾ってあってね、》

「こんな風にいいっ！」

美波も瑞希と同じように飛びかかっていた。人のこと言えないじゃないアンタも。

《隠し事？隠し事って、僕が洗濯物の下に隠しているHな本の》

「でえやあああーっ!!」

《ふぎやあー》

「どんどん被害が拡大していくわね……。」

「というか柙！自分だけ高見の見物なんて汚いわよ！ウチらFクラスの仲間でしょ!？」

「そうです！仲間なら苦難も分かち合いましょうよ!」

「姫路の召喚獣もなんともないみたいだし、暴走はないとみていいだろうな。というわけ

で召喚しやがれ和真」

「そうだよ和真！隠しごとがないなら召喚しても大丈夫でしょ!？」

「ボクも和真君の本音、気になるなく♪ついでに優子も召喚しちやいなよ♪」

「とうとうこっちまで飛び火してきたわね……」

「というか愛子、アンタこそ召喚しなさいよ。土屋君との関係について根掘り葉掘り聞

いて上げるから。」

「ふむ……そうだな……」

和真は顎に手を当てて思案顔になる。そして、

「お前ら全員土下座して頼むつつうなら、召喚してやつても良いぜ？（ニヤア……）」
未だかつてないほど嗜虐心に満ち溢れた笑顔でそんなことをたまつた。いや、あの
ね和真……流石にそこまでして召喚させたがるとは――

「「お願いします」 ↑男三人

……ホント、Fクラスって常識が通用しないわね。

「さあ終、さっさと召喚しなさいよ！」

「あ？何言ってるんだお前？全員つつただろうが、お前らも例外じゃねえよ！」

そう言つて美波と瑞希と愛子を順番に指を刺す。

「な……何言ってるのよ!?そんなことできるわけじゃないじゃない!」

「あつそ、じゃあ召喚してやんね（プイッ）」

美波が難色を示すと和真は明後日の方向にそつぽを向いた。まあ吉井君達に土下座
させて自分は嫌、なんて言い分を和真が聞き入れるわけないわよね。

「何言ってるのさ和真!?女の子に土下座なんて、可哀想だと思わないの?」

「むしろ躊躇いなく土下座したお前らのプライドの低さを可哀想だと思うぜ。……つか
明久、何か勘違いしてねえか?」

土下座の体勢のまま吉井君が猛然と抗議するが、和真はそれを一蹴する。

「俺には召喚する義務なんてないんだぜ？それをわざわざ譲歩してやってんだからよお、お前らのプライドまとめて粉々にしてやらないと釣り合わねえだろ♪」

うわ…セリフといい表情といい完全に悪役のそれね……。ん？美波、それさつき瑞希が吉井君を嵌めた紙じゃない。……まさか……。

「柊！これ、なんて読むか言いなさい！」

いや、引つ掛かるわけじゃないでしょうが……

「issues of differenceだな」

「なんで英訳するのよ!？」

完全におちよくってる……特にやたら発音が良いのが余計に神経を逆撫するわね……。思い通りに行かず苛立っている美波の両サイドに愛子と瑞希が並び立つ。

「美波ちゃん、背に腹は代えられません……土下座しましょうっ」

「瑞希!?!何言ってるの!?!」

「仕方ないよ美波。こういうときの和真君、慈悲も情けも容赦も無いから」

「愛子まで!?!」

あの二人、プライドを捨ててまで和真を陥れたのかしら……？

「~~~~~ッ!!!わかったわよ!やればいいんでしょやれば!」

そこまで葛藤するくらいなら諦めなさい……。

「三人とも何言ってるんだよ!? 和真は僕が説得してみせるから—」

「止めないでください明久君!」

「ウチらは是が非でも道連れが欲しいのよ!」

「だいいち、和真君は説得に応じるような性格していないしね……」

アタシの目の前には、四つん這い状態で額を床に擦り付けている6人の姿が。あれ、なんだろう……何故か涙が出てくるわ。

「……(パシヤツ)よし! プライドを遥か彼方に投げ捨てようが構わないつつうお前らの覚悟、確かに伝わったぜ!」

「ちよつと待ちなさい!? 今写メ撮ったでしょ!」

「安心しろ、拡散はしないと約束してやる」

「まったく安心できないわよ!」

美波が携帯を奪おうと飛びかかるが悠々と避けられる。ホント、的確に人の神経を逆撫でするわね……。

「おい和真、約束通り召喚してもらおうぞ」

「柊君、覚悟しててくださいいね?」

「ゼエゼエ……見てなさい柊、絶対に弱味を見つけ出してやるんだから……」

土下座を解除した6人が和真を取り囲む。大丈夫かな和真、このままだと質問責めされるわよ……?」

「あいよ、慌てなくても約束は守るさ。……優子、もし召喚獣が暴走したら止めるの任せたぞ」

「……ふえ!?なんでアタシ!?!」

突然の指名にアタシはたじろいでしまう。

うう、変な声出ちやった……。

「多分お前なら止められるから。頼む」

「……まあそこまで言うなら、引き受けるけど……」

「よし、これで後顧の憂いは断てたな。」

さてと……試獣召喚（サモン）!」

ポンツ↑和真の召喚獣登場

何の躊躇いもなく召喚したけど、やけに狂暴そうな笑みを浮かべた召喚獣が出てきたわね。……ん?なんか、攻撃体制に入ってるような……

「さっそく質問するぞ!和真、お前!」

《オラアツ!》

「(バキイ!) めっふあッ!?!な、何だこのチビ!?!」

和真の召喚獣がいきなり坂本君を殴り飛ばした。え、何!? 何事!? アタシが慌てている間も和真の召喚獣は坂本君に追撃を加えていく。

《オラオラ! さっさとくたばりやがれえええ!》

「(ドガア!) ごっ!? (ドゴオ!) がはっ!? ……なんでこいつ襲つてきやがる!? 俺に何の恨みが!」

《お前をボコる理由なんざ特にねえよ……強いて言えばお前が一番デカくてぶっ壊し甲斐があるっただけだ! わかったらさっさと沈めやデカブツがあっ!》

「ぐっ上等だテメエ! 返り討ちに(ドカツバキツグシャ!!) ぐげえ!? ちよ、タンマタンマ!」

《くくっ、フフフフ、あーっはっはっはっはっは! ヒヤーツハツハツハツハツハ!! そのままぶっ壊れちまいなあああっ!》

「ギヤアアアアアア!」

坂本君は反撃しようとするも、多少デチューンされたとはいえ和真の召喚獣に勝てるはずもなく……っつて暢気に解説している場合じゃないわ!?

「あーあ、やつぱりこうなったか……それじゃ優子、頼んだぞ」

「アレを止めるの!? 流石にアタシじゃ……」

「大丈夫、あれ暴走してるわけじゃねえから。お前ならできる………というよりこの面子

だとお前しかできねえんだよ」

「……………わかった、やってみる」

「ちよ!? 木下さん、危ないよ!」

吉井君が制止してくるがアタシは構わず近づいていき、坂本君をボコっている和真の召喚獣を後ろから抱き抱えた。

《っ!? 優子!? ……邪魔すんじゃねえ!》

アタシから逃れようとジタバタともがくものの脱出は不可能のようだ。本来アタシ程度の力で召喚獣を押さえ込める筈はないのだけど、何故か押さえ込めている理由はすぐに理解できた。これは和真の分身……………だったら対処法はなんとなくわかる。

「よしよし（ナデナデ……………）。いい子だからおとなしくしましょうね」

《っ!?……………っ……………♪》

暴れまくっていたが優しく撫でてあげると、次第におとなしくなっていく。顔つきもどんどん元の可愛らしい顔立ちに戻っていくわね……………ん? 突然アタシに抱きついて

《優子だーいすき♡》

「……………」

アタシの頬にグリグリと自分の頬を擦り付けて甘えてくる和真の召喚獣。

……あ、ダメだ。もう我慢できない。

「ああもう、ホント可愛いわねこの子ったら！（ギユウウウウ）」

《んにゆく……♪優子、頭などでなでしてえ……♪》

「まったく、甘えんぼなんだから♪（ナデナデ……）」

《えへへ♪好き♡大好き♡》

……これって和真の本音なのよね？ということ、後で和真本人も同じように可愛がっても問題ないわよね？……あ、でも周囲に誰かいると駄目っぽいかな……二人きりのときなら構わないわよね？もとより反論は受け付けるつもりないけど。

そんなことを考えていると和真本人がやってきて、意識を失っている坂本くんを背負う。

「それじゃ雄二は回収していくから、お前は試運転の間ずっとソレを肌身離さず捕まえておけよ？冗談抜きで人の命がかかっているから」

「わかったわ♪」

言われなくても……というかもし仮に離せて言われたとしても絶対に離すもんですか。

「……随分嬉しそうだなオイ」

「まあね♪それから和真、アタシにはいつでも甘えてきても良いからね？」

「……………ん、考えとく（ポリポリ）」

表面上は平然としつつ、和真は坂本くんを回収して離れて行った。……………耳元がすつきり真っ赤になつてたことには触れないであげよう。

《甘えたいのはやまやまんだけど、流石にちよつと恥ずかしいな……………》
アタシが抱えている召喚獣が本音を呟く。

……………やれやれ、和真つたら意外と恥ずかしがり屋さんなんだから♪

本音を喋る召喚獣（完結）

【和真視点】

「ひどい目にあつたな雄二、同情するぜ♪」

「してねえだろ!?!なんだその満面の笑みは!?!」

俺の召喚獣にぶちのめされた雄二がようやく目を覚ましたので、とりあえずおちよくってみる。

「でも、なんで和真の召喚獣だけ暴走したのかな?」

「そう思うのも無理はねえがな明久、あれは別にシステムが暴走してるわけじゃねえんだ」

「え?どういうことよ?」

理解できないという表情でそう問いかけてくる島田。いや、島田だけじゃなく誰もわかってないなこりや。

やれやれ、一人ぐらい気づいても良いだろうに……俺のオカルト召喚獣は阿修羅だったんだぞ?

「あの召喚獣は無意識領域の一部を読み取って活動する半自動型の召喚獣、言い換えれ

ば自我を持った召喚獣だろ？」

「う、うん……」

「なるほど、そういうことか……」

明久達がキョトンとする一方、全てを理解したらしい雄二が苦虫を噛み潰したような表情になる。

「そして構成される人格は、簡単に言うとなんか本人から理性を抜き出して幼児退行させたみてえなモンだ。ここで一つ問題だ、俺から自重と理性と自制心が失われるとどうなると思おう？」

「……………」

「当然、純然たるデストロイヤーができあがる」

「……………お前は本当に、生まれつきのサディストなんだな……」

呆れるような雄二の溜め息。こいつが襲われたことに大した理由なんかねえ。ただ単に一番デカくて壊し甲斐がありそうとだからだろうな。

無尽蔵に溢れ出る闘争心に従い、この世のありとあらゆるものを敵に回し、それら全てをぶつ壊そうとする修羅……それこそが俺の本質、勝負事を好む性分や嗜虐趣味などは所詮その上澄みでしかない。

このどうしようもなく下種な性分に対して自己嫌悪に陥ったことも以前あったりする

るが、今後そういう機会は多分訪れないだろうな。変えようがない本能に対してどれだけ悩もうが卑下しようが無意味だろう。……大切なのは、いかに上手く折り合いをつけるかだ。

「どうだお前ら、常日頃俺がどれだけ自重してるか思い知ったか？」

「やけに上から目線なのはこの際放っておくとして……本性があれば考えれば、確かに随分と制御できてるな」

「制御つつつても抑圧してるわけじゃなく上手いこと折り合いをつけてるだけなんだから、スポーツだの試召戦争だのお前らを追い詰めるだの色々な方法で」

「「ちよつと待て今なんつった最後!?!」」

しかし強靱な理性を受け継がせてくれた母さんには感謝だな。あとソウスケにも。……実際、俺の人生で一番荒れていたのはアイツに会う前の次期だしな。……今でも思うが、『破壊神』ってどう考えても小学校低学年のガキにつけられる異名じゃねえよな……。

「あれ?でも和真君、なんで優子はあんなにアツサリ止められたのカナ?」

ちい、やつぱり聞かれたか……。愛子のあのにやけ面、十中八九わかった上で聞いてきてやがる……。仕方ねえか……。

「あー、それはだな……。優子に対しては闘争心よりも遥かに強い感情を向けているから

で……その、つまりそういうことだ」

「「「「ほほう、なるほどなるほど♪（にやにや）」」」」

「ニヤニヤすんな！」

う、うぜえ……。揃いも揃ってにやけ面を浮かべつつの鬱陶しくハモリやがって、不快指数100割増しだなオイ……。

「……まあそんなわけで、俺の召喚獣には近づかないようにしろよ？今は優子のおかげで無力化できてるけど、他の誰かが視界に入った途端襲いかかってもおかしくねえから」

「わ、わかったよ……」

「まだ弄り足りないが仕方ねえか……」

「………召喚獣のパワーを考えると、冗談抜きで死人が出かねない」

普段から死線を潜りなれている男性陣はどれだけ危険かよくわかってるな。で、女性陣はというと……おーおー、全員こつちを睨んでるな。

「なんだよお前ら？何か不満でもあんのか？」

「……アンタ、やけに説明がしつかりしてるけど、もしかして召喚したらこうなるってわかってたの？」

「まあ……概ね予想はしていたな」

「ウチら完全に土下座のやり損じやない！」

「そうですっ！あんまりです柊君！」

「ボク達は心を弄ばれてご立腹だよ！」

猛然と抗議してくる女子共だが、そんなこと言われても正直お門違いでしかない。俺は召喚してやると約束しただけで、お前らの思い通りになるなど一言も言った覚えはない。後先考えずに行動した行動したのはお前達だし、責めるべきはその短絡的な思考回路だろうが。……そして何より、

「人の弱味を握って陥れようとした奴らには、お似合いの末路だろう？（にやあ）」

「「少しも悪びれていない!」」

どこからか「お前がそれを言うのか!」という突っ込みが聞こえてくるようだが……そんなことはお構い無しに、そろそろ攻めに転じさせてもらおうか!

「つーかお前らの好きな奴も教えろよ。俺のはなんだかんだで教えたくないことバレちまったんだからよ」

《《《《《えつと、それは…》》》》》

「「「どおりやああああーっ!!」」」

愛子を除く五人が一斉に召喚獣をゴミ箱にダンクシュートした。愛子への仕返しは、今度暇なとき千本ノックにでも強制参加させてやろうかな。

【雄二視点】

「ファイヤー!!!」

《《にぎやあああーっ》》

明久とハモるように、それぞれの召喚獣をファイヤーショットでゴミ箱に蹴り込む。
この作業、今日で何十回目だ……。

「はあ、はあ、はあ……。今日はなんてハードなんだろう……。」

「まったく、だ……。実体化した召喚獣が、ここまで厄介、だとは……。」

「雄二なんか、まだ、いいよ……。僕なんて、フィードバックまで、あるんだから……。」
とかさつきから散々攻撃してるのに、点数が全然減ってねえ！この仕様は十中八

九ババアの仕業だな畜生！

「……そろそろ雄二は諦めて正直に本当の気持ちを見せてくれるべき」

「ボクは吉井君の色んな秘密を聞きたいな。誰かさんたちの為にもね、ね♪」

「誰が聞かせるかつ！」

自分の召喚獣を喚び出していない翔子と工藤は余裕な表情だ。まあこの二人は喚び出したとしても余裕な気もするが……特に翔子は喚び出したら絶対俺の負担のだけが多くなる気しかしい！

「工藤さんっ。工藤さんは僕なんかのところより、ライバルのムツツリー二のところに行くべきなんじゃないかな！」

「ん〜……。そうしたいのはやまやまなんだけどね。ムツツリー二君はあんな感じだから……」

『……………エロなんて興味はない』

《……………興味津々》

『……………スカートなんてどうでもいい』

《……………どうでもよくない。凄く大事》

『……………どうでもいいんだ……………つつ!!』

《……………違う。大好き》

「…あんまりいつもと変わらないんだよね〜」

「う……。ズルい……」

汚ねえ！リアクションが鼻血から召喚獣に変わったただけじゃねえか!?

「そ、それなら、えつと……」

明久はなんとか自分から離れさせようと、周囲を見渡して様子を確認している。

『あ、明久君っ！絶対にこつちに来ちゃダメですからねっ!?!』

『声を聞くのもダメよ！あつち向いてなさい!』

《でも、他の人をそういう目で見るのは困るんですっ！だからお仕置きはしないけど、お説教はしていたんですっ!》

《あ！それはウチも同じっ！許せないよねっ!》

姫路と島田は少し離れたところで、召喚獣のお喋りを聞かれまいと必死にガードしていた。

「残念でした。瑞希や美波の秘密は、お泊り会とかで聞いちゃってるもんね」

工藤がちつつち、と指を振る。ハッ、残念だったな明久、お前だけ助かるうつつたつてそうはいかねえんだよ!

『……………zzzz』

ちなみに和真は飽きてしまったのか、教室の隅で横になって惰眠を貪っていた。アイ

ツどんだけ自由なんだよ!?

「じゃあ和真に……」

「嫌だよ、ボクまだ死にたくないし」

「ですよね……」

和真の召喚獣にも無理矢理起こされて不機嫌状態の和真にも、はつきりいつてかかわるのは危険過ぎる。ムカつくが放置しておくしかないみたいだな……。

「それじゃあ雄二で」

「ふざけんなっ! 翔子一人でも手に余るつてのに!」

「んく……。坂本君は、代表の管轄だからダメだよ」

こつちに来ないのはありがたいんだが、管轄つて何だ管轄つて!?

「あれ? そう言えば、さつきから秀吉の召喚獣の声が全然聞こえてこないね」

「ん? そう言いやそうだな。不公平じゃねえか」

考えてみりや、さつきから召喚獣も本人も全く声が聞こえてこない。いったいどうなってるんだ?

「んむ? なんじゃお主ら。ワシを呼んだかの?」

そうやって名前を呼んでいると、離れて静かに座っていた秀吉が目を開けた。一応この場には居たんだな……いや、その割には静か過ぎやしないか……? ?

「木下君、寝てたの？」

「和真じやあるまいし、流石にこんな中ではいくらワシでも寝られんぞ、工藤」

『……………zzzz』

この状況で寝ていられるようなマイペースな奴なんざ、学園中探してもあのバカぐら
いだろうな……………。

「妙なことを口走られては困るからの。修行僧になった気持ちで瞑想して気分を落ち着
かせておったのじゃ」

《……………》

秀吉の召喚獣が本人の隣で座禅を組んで、目を閉じている。

「へえ〜。そうするとおとなくしくなるのか〜」

「そうか。意識を空っぽにしたらいってわけだな」

「うむ、どうやらそのようじゃ」

となると、瞑想慣れしている鳳あたりが今回の試運転に参加していてもなんらダメ
ジはないってことか。

「……………雄二と吉井の召喚獣を連れてきた」

「「え？？」」

《痛かった》

《酷い目にあった》

しまった!? 秀吉に気を取られていた!?

「しよ、翔子! そいつをこっちによこせ!」

「お願い霧島さん! 僕の召喚獣を返して!」

「……ダメ。渡したら、二人ともまた邪魔するから」

俺らに渡すまいと、召喚獣を抱いたまま工藤の後ろに回る翔子。まずい! まずいまずいまずいまずい!!!

「これでようやくちゃんと本音が聞けるねっ。吉井君。好きな人はいないのかな?」

「……雄二。本当の気持ちは?」

満を持して、俺達に質問をしてくる工藤と翔子。俺達がかたくなに口を閉ざしているが、

《好きな人? それは……》

意思に反して、召喚獣がその質問に答えようとしていた。こうなったら一か八かで秀吉の方法を頼るしかねえ……っ!

大急ぎで座禅を組む俺と明久。瞑想、瞑想……。

《……》

すると、俺達の召喚獣は口をつぐみ、黙ってその場で座禅を組み始めた。よし、手応

えあり！

「あれ？吉井君？」

「……雄二。返事は？」

《《……………》》

召喚獣は沈黙を保ってる。いいぞつ、これなら大丈夫だ！

『見て下さい美波ちゃん。瞑想したら大丈夫みたいですよっ』

『ホント!?じゃあウチらも真似しましよ!』

目を閉じているからわからないが、姫路と島田が俺達のところにやってきて、同じように瞑想を始めたような気配が伝わってくる。

《スカートで座禅っ。見たいっ。見たいっ》

「しまったあああーっ！邪念があああーっ！」

俺の隣で明久の叫び声が響き渡る。やれやれ、相変わらずはバカげたことを——
《なんだとっ！スカートで座禅だどっ!?》

《……………俺も見るとっ》

「邪念がああーっ！」

明久の大馬鹿野郎!?俺とムツツリーニの召喚獣も反応しやがったじゃねえか！

「あ、明久君……?」

「アキ……。アンタ、またそうやっていやらしいことを」

「ち、違うんだ！誤解だよ！そうじゃなくて僕は《なんだー。二人とも座禅じゃなくて正座じゃないかー》ごめんなさい！いやらしいことを考えてました！」

「……雄二。浮気は許さない」

「ち、違うぞ翔子！俺は別に《スカートで座禅なんて言われたら反応するのが男の本能だよなー》ぐおおおおおつ！明久あああつ！テメエが余計なことを言うから連想しちまつただろうがあああつ！」

翔子にアイアンクローを極められて俺は断末魔の叫びを上げる。

《んつと、今日の私の下着はピンク色だったよね？》

《ウチはみずいろだよ》

「いやあああああーっ！」

隣で島田達がそんなことを暴露していたが、幸か不幸か顔面に走る痛みのおかげで邪念は湧いてこなかった。

《《……………》》

しばらくすると全員が落ち着きを取り戻し、再び静寂が教室に訪れた。

『ん〜。なんか、静かになっちゃったね』

『……………困る。雄二の気持ち、聞きたいのに』

『さつきからやけに賑やかなアンタ達』

『あ、優子……あれ？和真君の召喚獣寝ちゃったんだね。本人が眠っているからかな？』
『多分そんなんじゃない？愛子、一応釘を刺しておくけど無理矢理起こして八つ裂きにされてもアタシは止めてあげないからね？』

『さらつと恐ろしいこと言うね優子……』

なんかお喋りに夢中になっていられるらしいが無視無視、瞑想瞑想……。

『あ。そう言えばボク、さつきこの教室に入ってくる前、学園長先生に会ったんだけど』

『……うん』

『その時、全員の動きがなくなったら使うようにって渡されたものがあつたんだよね』

『渡されたもの？』

『そ。この箱なんだけど。なんか、ここから一枚ずつ取り出して、それを読み上げなきゃいけない』

薄目を開けて見てみると、工藤が小さな箱を取り出していた。なんだか無性に嫌な予感が……いやいや、それよりも瞑想だ。無心に、無心に……。

『……三枚のカード……連想ゲーム？』

『よくわからないけど、そういうことかなあ。……まあ、とりあえずやってみよつか。はい翔子』

『……〃しましま〃?』

『はい優子』

『アタシも手伝うのね……〃ピンク〃?』

『で、三枚目は……〃みずいろ〃かぁ。この3つから連想されるものねえ……』

《《《パンツ!》》》

落ち着け坂本雄二、これは敵の罠だ。

とにかく今は無心状態を保つよう心がける……!

『じゃあ、次いくよ二人とも。……セーラー服』

『……浴衣』

『メイド服』

《《《木下秀吉つ!》》》

《《《吉井明久つ!》》》

「待つて!どうしてその連想で僕と秀吉が同数なの!」

……ん? 同数? 姫路と島田が明久を、俺と明久とムツツリーニが秀吉を連想したとすると、秀吉は必然的に……

「まさか、秀吉まで僕をそういう目で……?」

「んむ? 何を言っておるのじゃ明久。ワシが友人をそんな目で《女装》と言えば明久しか

おらんのじゃ》見ておるはずがなからう」

恐ろしいなこいつ……顔色一つ変えず堂々と嘘を言い切ったぞ。和真曰く木下姉ならそこそこ見破れるらしいが、もはやそれ人間技じゃないだろ……。

《違うよ秀吉。さっきので僕が連想したのは女装じゃないよ。あのランナツプは秀吉の私服じゃないか》

「明久よ。お主、ワシをどんな目で見ておるのじゃ……！」

たまにこいつは演劇部の朝練後、着替える暇がなくてあのラインナツプで一時間目の授業を受けてたりしているから、あながち否定できないんじゃないか？

『更にもう一回。はい翔子』

『……いやらしいこと』

『はい優子』

『囁きかける』

『で、三枚目……吉井君に、と』

貧乏くじを引きやすいデコイがいるのはとても便利なことだとつくづく思うぜ。

『そつかく。吉井君にいやらしいことを囁くのかく。んふふ。これ、ボクがやってみてもいい？』

『……うん』

『別に良いわよ』

『ありがと二人とも』

さて、明久はどう自爆するかな……って今は自分の身が大切だ、瞑想瞑想……。

『ねえ、吉井君』

《明久君つ。愛子ちゃんにいやらしいことを考えちゃダメですからねっ》

《アキつ。おかしな反応したら、許さないからねっ》

冗談抜きで明久の命が懸かっているな。

『……………○▲×□の……△●※■』

『へ?』

ここからじゃよく聞こえなかったが、どうやら明久は理解できてないようだった。選択を誤ったな工藤……

『……………○▲×□の……△●※■だと……っ! (ブシャアアアアツ)』

《……………○▲×□の……△●※■だと……っ! (ブシャアアアアツ)》

アイツも多少成績が向上したとはいえ、近くで召喚獣と一緒に鼻血を吹いているバカのような、保健体育のエキスパートじゃねえんだよ。

『あれ? 吉井君、なんともないの?』

《?意味が分かんないよ》

『……………むー……………』

どうやら工藤のプライドを傷つけてしまったようだな。ああなったら何をしてくるかかわらんぞ。

『……………ふーっ』

『ひああああああああああっ?!?!?!?』

なんだ?! 工藤はいつたい何を……………違う! 今はそんなことより無心になれ坂本雄二! でないと…

『あ、愛子ちゃんっ! ダメですよっ! 明久君にそういうことをするのは《さっきの明久君の声、可愛かったですっ》きやあああーっ!』

『そうよっ! アキにそういうのは《アキって耳や首が弱いのかな》いやあああーっ!!』
…あんな風に自爆することになる。

『うん。これで少しスツとしたかな』

『……………愛子。あんまり吉井を苛めない』

『はい。じゃあ、最期にもう一回やって終わろっか。はい、《あなたの》』

『……………《本当に》』

『《好きな人》』

《《えっと、それは》》

「どおりやあああーっ!!」

気がつけば姫路も島田も秀吉までもが、耐え切れずに自分の召喚獣をゴミ箱に叩き込んでいた。

「もうダメだ……。フィードバックで体中が痛い……」

「俺もこんなに疲れたのは久々だ……」

「……………キツイ……………」

「流石にワシも疲れたぞい……」

「はう……。このままでと、いずれ変な勢いで告白する羽目になっちゃいます……」

「ウチも、こんなことで告白するなんて、絶対に嫌なのに……」

全員の口から弱音が漏れ始める。とはいえ、解放されるまでにはまだまだ時間があるし……………くそっ、今日は厄日だ!

「というか、なんで俺たちがこんな目に遭わなきゃならねえんだ」

「まったくじゃ。理不尽にも程があるろう」

「だよ。僕らがこんなひどい目に遭うなんて、一体誰が原因なんだろう」

「そうよ。誰が元凶なのよ」

「えっと、誰って言いますと……」

ふと、全員の頭にとある人物の姿が思い浮かぶ。

白髪で、口が悪く、こうなると知っていながら俺達に召喚をさせた、諸悪の根元であるクソババアの姿が。

《 《 …… …… …… 》 》

ガラッ ザッザッザッザ

すると、全員の召喚獣がさっきの和真の召喚獣に負けず劣らずの修羅となり、そのままドアを開けて教室から出て行った。なるほど、全員同じ結論に辿り着いたか。

「まあ、そりやそうだよな」

「人を実験台にしておいて、自分だけ無事でいようなんていうのが甘いよね」

「因果応報じゃな」

「……………当然の報い」

「ま、そう簡単に許せることじゃないわよね」

皆でうんうんと頷き合う。最初からこうすべきだったぜ。ちなみに和真の召喚獣をけしかけないのは俺達に残された最後の慈悲だ。

数分後、階下からはババアのしわがれた悲鳴のようなものが聞こえてきたが……おそろく召喚獣のシステムの暴走が原因で起きた悲しい事故だろう。俺達には何の関係も責任も無い。

合体召喚獣①

【雄二視点】

「実はアンタらに頼みがあるんだけどね」

「「お断りします」」

「……つれないねえ」

時刻は放課後。教室に残って雑談をしていた俺達のところに、学園長のババアがやってきてそんなことを言い出した。

「だって前にババア長のせいで酷い目に遭ってますから。勝手に本音を喋る召喚獣のこ
と、忘れてませんよ」

「んだな。あんなモン二度と御免だぜ」

「……こりこり」

「まったくじゃ」

「ウチもちよつと、ね」

「あはは……」

明久の台詞に俺、ムツツリーニ、秀吉もうんざりといった口調で同意し、姫路と島田

も苦笑いを浮かべている。前回の騒動で被害が無かった翔子は和真に誘われて『アクティブ』の面々とテニスをしている。翔子はともかく和真は間違はなく面白そうと軽いノリで安請け合っている。翔子はともかく和真は間違はなく面白そうと軽いノリで安請け合っている。翔子も被害を被ると相場が決まっているからな。

「まあまあ、そう言うんじゃないよ。今度のは召喚獣に酷い目に遭わされるようなことはないからね。アンタらも……アタシも」

渋い顔をする学園長。そういうあの時は最後に俺達の召喚獣に仕返しされていたんだったな。どう考えてもこのババアの自業自得だから悪びれないぞ、デストロイヤー（和真の召喚獣）をけしかけなかっただけありがたいと思え。

「学園長先生。今回は召喚獣関係のお話じゃないんですか？」

召喚獣に酷い目に遭わされることはない、と言う言葉に反応して姫路がそうね。人間ができてくるコイツのことだ、ただの雑用程度なら手伝っても構わないとでも思っているのだろう。

「いや、召喚獣の話だよ」

「う……。召喚獣のことですか……」

ババアの返事に姫路が怯む。あの姫路ですらこんな反応だ、多分俺も今苦虫を噛み潰したような表情に様変わりしていることだろう。くそつ、面倒事の気配しかしねえ

……。

「んでババア。一応聞くが、それはどんな頼みなんだ？」

とは言え召喚獣の設定変更絡みの話した、Aクラス戦のことを考えれば内容は確認はしておきたい。

……よし、いつものように明久を生け贄にするか。

「おや。文句を言ってもやる気かい？素直じゃないねえ」

「内容次第だが、受けても良い。「雄二がね」明久がな」

「……………（ガスガスガスガス）」

無言でお互いの脛を殴り合う俺達。このカス野郎。目的のために俺を売ろうとするなんて、相変わらず性根の腐った奴だな。

「そいつは丁度いいさね。今度のは二人用だから、アンタらにやつてもらおうか」

「え？二人用、ですか？」

「そうさ。御門のガキンチョからの案でね、今度は二人で一体の召喚獣を呼び出す形に調整を入れてみたのさ。まったくあのダメ人間は……頭がキレるし仕事も出来るのにどうしてあもサボリたがるかね……」

疲れたように溜め息をつくババア。あの人間の駄目なところを具現化したようなオツチャンが一年の学年主任に大抜擢されたことには流石の俺も驚いたが、就任後も以

前と変わらぬ破天荒ぶりに教師達の頭を悩ませている。まあFクラスの俺達からすれば鉄人の仕事が増えたおかげで悪巧みが増え、感謝の一つでも送りたいところだな。

「前大会優勝者が試してくれるとなれば、こつちとしてはかなりありがたいんだがね」

「二人で一体、ねえ……」

「それなら前のようなことはなさそうね」

「面白い試みであることは確かじゃな」

本格的にそのシステムが試験召喚戦争に導入されることになれば、扱ったことがあると言うのはある程度のアドバンテージになる。和真や翔子や姫路がいるものの、上位クラスには総合的な点数で劣る俺達には、そのアドバンテージは無視できないかもな。

「召喚獣が暴れたりすることはない。それはアタシが保証してやるよ。それに、召喚獣に何か問題があればフィールドもすぐに取り消そうじゃないか。それならどうだい？」

ババアが俺達の目を見てそう言う。

「うん……すぐに取り消してくれるのか……雄二、どうする？」

「そうだな……。正直ババアの言葉はビタイチ信用できないが、他クラスの連中……特にこれから挑むAクラスには話を持って行かれたら困る。悩ましいところだな」

このバカ一人の犠牲で事足りるなら即決だったが、俺にまで害が及ぶとなれば話は別

だ。こんなことなら、やつぱり和真にはここにいて欲しかったかもな……。

なんて悩んでいると、

「悩むくらいなら決定だね。吉井と坂本、二人ともこっちに来な」

俺達二人の背中を押すように、ババアが話を勝手に進めてしまった……仕方ねえ、やはりAクラスに持っていかれる危険を考えれば、多少のリスクには目をつぶるしかない。

「吉井でも坂本でもいい。相手の身体に触れて召喚獣を喚び出さな。それで出てくるようにしてある」

「へえ。それだけでいいんですか」

「簡単なのは助かるな」

明久が俺の顔に手を伸ばしてくる明久に対し、俺も明久の顔に手を伸ばす。

そして、お互いに思いつきりその顔を驚掴みにする。

「ぐあああああつ!!」

ミリミリと頭蓋骨から鳴ってはいけない音が聞こえた気がした。

「二人とも何やってんのよ……」

「バカじゃな」

「……………いつものこと」

「あはは……」

で、この後どうすりやいいんだよ？

「あとは吉井でも坂本でもどっちでもいい。普通に召喚獣を喚びだしな」

「ぐうう……っ！試験召喚（サモン）っ!!」

ほぼ同時に召喚獣を喚び出す。すると、毎度お馴染みの幾何学模様が出てきた。

「けほけほっ。さ、ささて……。どんなのだろう」

「げほっ。妙なもんじゃなければいいが」

アイアンクローを外して様子を見守る俺達。いつもより若干長い待ち時間の後に、召喚獣がゆっくりと姿を現す。

「あ………可愛いですっ!」

「へえ。本当ね」

出てきたのはいつもの三頭身の召喚獣ではなく、二歳程度の普通の男児だった。あざとさ全快の耳と尻尾はいつも通りだが。

「雄二と明久の間を取ったような外見じゃな」

「……………それを幼くした感じ」

秀吉達の言うとおりに目つきは俺譲りの鋭い感じがするな。このバカの特徴は……髪質あたりか？

「んで、これはどうやって運転するんだ？」

大事なのは外見よりも性能だ。

「御門のガキンチョいわく今回は試運転かつ二人で召喚だから、干渉し合わないようには操作は無くしてあるそうだよ。アンタら二人の性格を元に自律行動を取るのさ」

「ふうん。今度のも自分で勝手に動くのね」

「え？ そうなの？」

オイオイ大丈夫かよ、前回の悪夢が甦るんじゃないのか……？ そんな俺の不安は杞憂だったのか、召喚獣を見る限り問題行動は無さそうだ。

《うゆ……？ うー……（べしべし）》

トコトコと歩いて、卓袱台に触って遊びだす召喚獣。

《わー。きやつきやつ♪》

それが気に入ったのか、そのままご機嫌で卓袱台の下に潜り込んだりし始めた。

「なんか、本当に子供みたいだね」

「そうだな」

そんな召喚獣を見て、明久と俺がそう呟く。見た感じ、召喚獣と言うよりもその辺の子供に見える。すると、俺達の言葉を聞いたババアがこんなことを言い出した。

「おや。よく気が付いたね。バカジャリのくせに」

「うん？」

誰がバカジャリだーなんだって？

「アンタらの言うとおり、これは子供だよ」

「いや。それは見たらわかりますけど」

この召喚獣を見て大人だと思ふ奴はいないだろ？

「だからそうじゃなくて、子供なんだよ。……………アンタら二人の、ね」

そう言つて、俺と明久を指差すババア。俺達の子供つてー

「はあああああつ！」

何言い出すんだこのババア!? ガチで頭沸いてるんじゃねえか!?

「む…………。そう言われるとそんな気がしてくるのう」

「……………二人にそっくり」

秀吉とムツツリーニもそれらしいと思ひ召喚獣を見ながらそう言う。いや待て、ふざ

けんな!?

「いやいやいや! 僕と雄二で子供っておかしいから!」

「まったくだ! 気色悪い!」

「気色悪いのはこつちだよ!」

明久とガンくれ合う。

そこに召喚獣が歩いてきて、

《ケンカ、ダメ！（ガッ）》

「うぐあつ！」

俺達の脛を蹴ってきた。

じ、尋常じゃないほど痛え……！以前和真に蹴り飛ばされたとき並に痛え！外見はガキでも流石は召喚獣ってことか、攻撃力が尋常じゃねえ……！

つか、喧嘩はダメつつつてんのに暴力で解決しやがった!?この頭の悪さ、伊達に明久の性格を継いでねえな！

「明久テメエ！子供にどういう教育してやがる！喧嘩止める為に暴力ふるってどうすんだー！」

「それは雄二の性格のせいだろ！僕のせいにするな！」

「いや、この頭の悪さと喧嘩っ早さはお前のだ！」

「絶対に雄二だね！」

「落ち着きなジャリども。子供の教育は夫婦の責任さ」

「誰が夫婦だ!!」

《またケンカ！（ゲシッ）》

「ぐううう……!!」

ま、また蹴られた……！どんな神経してんだこのガキ！

「ババア！召喚獣を戻せ！思いつきり俺達に危害を加えてるぞ！」

「やれやれ。仕方ないねえ」

ババアが肩を竦めつつ、召喚フィールドを消す。すると召喚獣の姿も一緒に消えていった。ふう……。助かった。

「とにかく、協力はしたんだ。これで充分だろ？」

「だよね。どんなのが出てくるのかはわかったんだから」

被害は脛蹴り二回か。俺達のいつもの日常に比べれば無いも同然の被害だし、まあ許容範囲だ。

と、そんな風に胸を撫で下ろしている俺達に、ババアは含みのある笑いで答えた。

「まあ、アタシとしてはこれで終わりにしても良いんだけどね」

「ん？」

「協力したいって言う可愛い生徒のお願いには答えてやらないとねえ。学園長として」

「はあ？」

ババアの視線が俺達の後ろに向くと、そこには目を輝かせる姫路と筆を組んでどうでも良さそうに取り繕いつつも眼だけは姫路と同じように輝いているのが丸わりの島田の姿があった。

【翔子視点】

「……ごめん皆、急用ができた」

「え？いいけど、どうしたの翔子？」

「ん、雄二絡みだろ？行つてこい。……さあ、あと三回でゲームセットだぜ優子さんよお！」

「相変わらず坂本君絡みだと翔子の勘は和真並ね……それと和真、まだ勝負はついていないわ！ここからアタシの逆転劇が始まるわよ！」

私と試合をしていた飛鳥と隣のコートで試合をしている和真と優子に離脱を伝える

と、皆快く送り出してくれた。我ながら良い友達を持ったと思う。でも優子、流石に和真相手に0―5から逆転は無理じゃないかな……？

根拠なんて無い、でも確信している。

今、私のいるべき場所はFクラス教室だと。

合体召喚獣②

【雄二視点】

「そうだろう、アンタ達？」

「はい！是非とも子供の顔を見せ……じゃなくて、協力させて下さい！学園長先生！」

「う、ウチも協力しようかな。ホラ、生徒として先生のお願いは極力答えないといけな
いし」

必要以上に張り切る二人。俺は明久みたいに察しの悪い人間じゃないから、こいつらの狙いが何か嫌でもわかってしまう。

「嬉しいねえ。二人もデータ収集に付き合ってくれるなんて」

「任せて下さいっ！」

「よし。それじゃ、よろしく頼むよ」

再びババアが召喚フィールドを広げる。すると、姫路と島田は予想通り明久の方に向かって召喚の為に手を伸ばす。

「……………（ササツ）」

それを明久は後ろに下がって避ける。

「な、なんで避けるんですか明久君？」

「そうよアキ。おとなしくしてなさい」

「いや、そんなこと言われても。二人が協力するって言うのなら、姫路さんと美波の二人で召喚すればいいじゃないか」

「いえ。それはですね、その……」

「えつと……ホラー！瑞希と組むと、点数が高くなり過ぎちゃうじゃない！それだと危ないから、アキと組んだ方がいいのよ！」

「そ、そうですっ！美波ちゃんの言うとおりです！」

その理屈だと姫路は喚び出したらダメなんじゃないか？島田の奴抜け駆けするためそこまで考えて……いるわけねえよな、明らかに今考えましたと言わんばかりの苦しい表情だし。

「大丈夫じゃないかな。今回は学園長が危なかったら召喚獣を戻してくれるし」

そう言いながら明久が二人から距離を取る。

「でも、さつき明久君たちは蹴られたりしていたじゃないですか」

「そうよ。念のためにね？」

だったら召喚しない方がいいんじゃないか？まあ明久が追い詰められていくさまは見てて面白いから放っておくか。しかし、ホント翔子がこの場になくて助かつ——

ゾクッ……!

………いる。

この心臓を鷲掴みされるような圧迫感……間違いない、奴だ……!

自分の運命を呪いつつ後ろを振り向くと、いつもの無表情ながら心なしか目を猛禽類のようにギラつかせた翔子が立っていた。

神様……やっぱりテメエは最低最悪のクソ野郎だよ。

「おい翔子。お前、何処から現れたんだ」

「………私たちの子供が見られると聞いたから」

「一応言つとくが、それじゃあ答えてないからな」

俺の記憶が確かならこいつは和真達とテニスしているはずだ………いったいどうやって嗅ぎ付けたんだ!? また勘か!? なんでこいつ俺が絡むと和真みたいに理不尽なほど勘が鋭くなるんだよ!?

「隙ありよアキッ!」

「えーいつ!」

「ーっとおーっ! さよならっ!」

「あつー！」

「こらー！待ちなさいアキ！」

あつちでは姫路と島田が強行手段に出たが明久は素早くかわして逃亡した。…！翔子の意識が姫路達の方に向いた！チャンスだ！

「付き合っついていられるかっ！」

「……雄二。逃がさない」

ふはは、いかに翔子と言えど逃げることに慣れている俺に追いつけると思うなよ！

と、そう考えていた時期が俺にもあったっけ…。

あの後俺は翔子に逃走経路を次々と潰され、あっさりと捕獲されてしまった…：…何故だ!? かつて神童と呼ばれたこの俺が何故翔子が相手だともあっさり…：…!

ちなみに明久も教室まで強制送還されている。まあ俺が逃げ切れないのにこいつが逃げ切りでもした日には、俺はこいつを地獄に叩き落とさなければ気が済まなくなるがな。

「学園長先生。最初はウチからいきます」

「明久君。もう逃げちゃダメですよ?」

「召喚の準備はできてるよ。いつでも呼びだしな」

「ありがとうございます。それじゃ…：…」

島田が明久に向かって手を伸ばす。明久はそれを黙って見ていて、

ササツ ペタ

「試験召喚（サモン）——って、ちよつと!」

「え? み、美波ちゃん!」

島田が喚ぶ直前、明久はその手を避けて後ろにいる姫路と接触させた。こいつバカのかせにこういうときだけ機転がきくな…：…。

「これで、出てくるのは姫路さんと美波の子供だね」
「そうじゃな。どんな子供が出てくるんじやろうか」

物凄く独占欲の強いのが出てきたりしてな。

慌てふためく姫路と島田をよそに、出てくる召喚獣を気長に待つ。

その時、

「お姉様？まだ残っているのですか？それなら美春と一緒に……」

ガラツと戸を開けて清水が教室に入って来た。

それとほぼ同時に姫路と島田の召喚獣も姿を現し始める。ふむ、あの髪の毛の長さだと、多分女子だな――

「……………（シュパツ）」

《うにゃーっ》

「……………え？」

出てきた召喚獣が、とんでもないスピードで清水に攫われていった。

「……………」

「……………」

「……………」

あまりに迅速すぎる清水の行動に、一同の思考が停滞していた。今、和真と同じぐらい速かったぞ……………」

『ハッ!?ど、どこに消えたんですか美春の可愛い可愛い天使は!?!出てきて下さいっ。美春が大事に大事に育ててあげますからっ!』

どこか遠くから、そんな切羽詰まった声が聞こえてくる。どうやら奴はあの一瞬で召喚範囲外まで移動していたようだ。清水の奴どんどん化け物になっていくな。和真曰く俺らの学年で一番身体能力が高い女子は橘らしいが、今のを常時發揮できるなら余裕で塗り替えられるほどだ。

「さて、今度は誰が呼び出すんだい?」

気を取り直してババアが告げる。清水の奇行はいつものことなので深入りしてもキリがない。

さて、今のうちに俺は退散—

「……………私と雄二」

「ぐえああああっ!離せえええええっ!」

現実はいっだって非情だ畜生!

「……………サモン」

翔子は逃げようとする俺にアイアンクローをきめながら召喚を始める。俺がいったい何をしたというんだ……。

「あ……。すつごく綺麗な子ですねっ」

「ホントね。それに、頭も運動神経も良さそう。文武両道つて感じ」

出てきた召喚獣は女兒の姿だった。見た目は翔子に近いが、あの目つき……くそつ！嫌なこと思い出しちまったじゃねえか……！

「まあ、雄二と霧島の子じゃからな。恐らく勉強も運動も優秀な子になるじやろ」

「……………背も高くなりそう」

「けっ。知るかっ」

苛ついているからか、つい突き放すような言葉が口から出る。

「……………目元とか、小さな頃の雄二にそっくり」

「えええっ!? 雄二つて小さな頃こんな可愛い顔してたの!？」

「……………うん。ほら」

翔子がポケットからガキの頃の俺の写真を取り出す。こいつ、余計な真似を……！

「「えええええっ!？」」

不必要にオーバリアクションするバカ共。大方、今の俺とあの頃いかにも純粹ですと言わんばかりの表情をしたガキが結び付かないんだろうよ。

だがこれだけは断言できる。明久ほどではないが、今の自分が相当クズだと自覚はしている。

だが、この頃の俺は……それ以上のクソだった。

「翔子ちゃん。将来が楽しみですね」

「……うん」

「いいわね。名前はとうするの？」

「……しようゆ」

「……はい？」

「……私と雄二の名前を組み合わせた」

「いや。霧島よ。その名前はもう一度考え直した方が……」

「……それだと、調味料を連想させる」

「じゃあ、こしょう」

「それも調味料だから！」

翔子の独特すぎるネーミング、いや和真が面白半分で吹き込んだんだけか？ともかく流石のアイツらでもついていけないようだ。というかまだその名前諦めてなかったのかよ……。

それにしても、コイツを見てるとやっぱりどうしてもイラつくな……！

「くそ……っ。こんなもんで勝手に色々言いやがって……!」

《おとーさん、おとーさん。遊んでよ!》

「ふんっ」

しようゆ（仮）が俺にせがんでくるが無視だ。

《あそぼーよー。ねーねー》

『イヤだ』

コイツを見ているだけで、過去の俺が重なってしようがねえ……こんな奴に構ってられるか!

《うー……。おとーさん……》

「……………」

構って……………

《おとーさん、あそんでよう……》

『……………チツ』

わかってんだよ……コイツは何も悪くねえ……!俺がくだらないプライドを捨てきれないガキなだけだ!

《おとーさん……ダメ……?》

こんなしょうもない葛藤を和真にでも見透かされてみる……俺は一生笑いだらう

が！

『……少しだけだぞ』

《うんっ》

『おらっ。これっどうだ』

《きやーっ。たかーい♪》

『……そうか。んじゃ、今度は』

《きやつきやつ♪すごーい！おとーさんすごーい》

『……まあな。それで、更にこうだ』

《わーっ♪ぐるぐるだー♪》

『はっはっはっそうかそうか。それじゃ次は』

「「「「………（じーっ）「「「」

「はっ?!?」

いつの間にかその場にいる全員が俺に視線を向けていた。しようゆ（仮）を高い高いした状態でフリーズする。

………や、

やっちまつたあああああああ!?!?

「雄二、楽しそうだねえ（ニヤニヤ）」

「まったくじゃなあ（ニヤニヤ）」

「……………素直じゃない（ニヤニヤ）」

「ち、ちが……………っ！これは……………っ！」

《どしたのおとーさん？もつともつとー》

「しようにゆ（仮）、今は黙ってる頼むから！一生のお願いだから！」

「……………雄二はいいお父さんになる」

「そうね。厳しいことを言いながらもついつい構っちゃう感じね」

「坂本君、可愛いですよ♪」

「うがああああっ！そんな目で俺を見るなあああっ！」

神様、さつきクソ野郎扱いはしたことは謝るから……………なんだったら土下座もするから

……この一連の流れは無かったことにしてくれ……！

合体召喚獣③

【雄二視点】

「さて。それじゃあ一旦その子を戻すよ」

ババアがフィールドを消し、再び起動する。その過程でしようゆ（仮）は姿を消す。

「この俺が……なんて恥ずい真似を……!」

く、屈辱極まりない……!一分前の俺と、ついでに明久にドロップキックの一つでも

喰らわせてやりてえ……!」

「じゃあ、今度こそウチが!」

「吉井いつ!」

突如ドガン、と扉が壊れかねない音を立てて開かれてい「て、鉄じ…西村先生!」

教室に入ってきたのは鉄人ことFクラスの担任にして最大の天敵、補習担当の西村宗

一。

なんだ?今日はいつにも増して凄いい剣幕だな。

「貴様に聞きたいことがある。たった今、校内で持ちきりになっている噂についてだ」

「へ?噂?」

「恍けるな！貴様が体育館で叫んでいた不純異性交遊についてだ！」

不純異性交遊だあ？さつきまで逃走モードだった明久にそんなことしている余裕は流石に――

明久「不純異性交遊つて……げっ！」

心当たりあんのかよ……。

「それは違うんですよ鉄人先生！僕の話を――」

「西村先生、邪魔しないで下さい！今度こそウチとアキの子供を見るんですから！」

「そうですよ西村先生！その次は私と明久君の子供も見るとすから！」

「……僕の話を、なんだ。吉井」

「いえ……。なんか、ここから持ち直すのは難しい気がしてきました……」

なるほどな、だいたい読めたぞ。大方体育館で姫路と島田が合体召喚獣への協力を渋る明久に「何故自分と子供を作ってくれないのか」と大声で問いただしたんだろうな。まったく……この二人は流石に明久ほどじゃないにしても、場をややこしくすることにかけてはたぐいまれなる才能を持っているな。

「あら？学園長、西村先生。Fクラスで何を？」

明久がどう説明するか頭を悩ませていると、学園主任の高橋女史と、

「あれー？吉井君達、また何か面白いコトやってるのかな？ボクも混ぜてよ」

Aクラスきつてのトラブルメーカー（確信犯）の工藤が教室にやって来た。まずいな、よくない流れだ……。

「そういえば、聞いたよ吉井君。また変なコトやったんでしょ？主に坂本君と」

明らかに面白がっている工藤。前回もこいつが来てから被害が数倍に拡大したんだよな……なんとか上手いこと追いつ返せないものか……。

「よし。論より証拠。高橋先生、ちよつといいですか？」

「？なんでですか？」

「後ろのロッカーを動かしたいんですけど、僕の点数だとちよつと力が弱くて。すいませんが、お願いできませんか？」

「わかりました。それでは、試験召（サモ）」

「ほいつ（ササツ）」

「喚（ン）」

明久は召喚のタイミングに合わせて、高橋女史の手を鉄人の腕に触れさせる。それから数秒待つと……

「こ、これが鉄人と高橋女史の……！」

「格闘少年、と言う感じじゃの」

「……………強そう」

魔方陣の中から一人の子供が出てきた。

細身ながらも鍛えぬかれたような身体で、鉄人を幼くしたような顔立ち。全体的に鉄人譲りの武人の印象が強く見える。どれだけ治安の悪い国に連れて行こうが絶対に誘拐されなさそうだなコイツ……。

戦く俺達に、鉄人が冷めた目をして問いかける。

「……吉井。これはどういうことだ」

「説明どうぞ、ババア長」

「これはアンタらの子供をシミュレートした召喚獣さね」

「……学園長。貴女はまたそういうことを……」

鉄人は大して驚いた様子も無く、呆れたように額に手を当てた。このババアの突飛な行動でどれだけ苦労しているのかがわかる反応だな。

「あまり高橋先生には似てませんね」

「そうね。全体的に西村先生って感じ」

「いや。よく見ろ姫路、島田。ちゃんと高橋女史の特徴も引き継がれているぞ」

「え?どこどこ?」

「手に眼鏡を持っているだろ」

「それだけ!」

この人外教師は遺伝子まで人外のようなのだ。とうかせめてかけろよ眼鏡!?!なんで握りしめて棒立ちなんだよ!?

「まったく……。学園長、このような冗談は困ります。もう少し教育委機関の長としての自覚を持っていただかないと」

「冗談で作ったワケじゃないよ。それにこれは御門のガキンチョの発案さね」

「また御門先生か……。学園長に入らないこと吹き込む暇があるなら少しは私生活を正してくれないものか……」

「(にゅっ)仕方ねーだろ西村のオツサン。身に付いた性分てえのは、早々直らねーもんなんだよ」

「「うわあっ!?!」」

鉄人が御門のおっさんに対して愚痴を溢したとたん、教室の窓からおっさんが顔だけ教室に入ってくる。相変わらず髪が所々はねまくってたり、教師とは思えないほど目が濁っている。そんな怪しいおっさんが多分窓の外で張り付いているのもう一種のホラーだ。つかムツツリーニ顔負けだな。

「御門先生、前にも言いましたがそのような危険行為は控えてください!うちの生徒達が真似をしたらどうするんです!」

「はいはいわかったわかった……今はねみーからよ、アンタの説教臭い長い話を聞く気は

無いんだ。……つーわけで、俺はここでフェードアウトさせてもらうわ」

鉄人の鬼の剣幕もどく吹く風、おっさんは両足で窓枠にへばりついたような体勢にチェンジし、おもむろに鉤縄を取り出す。

ヒュンヒュンヒュン……ガキンッ!

「あつこら御門先生!?……ハア……あの男は……!」

「西村先生、あのガキンチョの一挙一動を気にしてたらキリが無いさね……」

斜め下らへんの窓枠に鉤縄を引っかけ、ターザンの要領で

一回まで跳んでいってしまった。

あのおっさん、仮にも教師……それも学年主任だと言うのに、俺達Fクラスに負けず劣らずの問題児のようだ。さらに驚くべきことに、どうやらあのおっさんあんなナリして和真顔負けの頭抜けた運動神経を有しているようだ。就任して2週間前後で問題児担当の鉄人に幾度となく追い回されているようだが、噂では一度として捕まったこと無いらしい。

それと、あのオツサンにはもう一つ秘密が――

「(ん)にちは。ママでちゅよ〜」

「!?!?!」

耳を疑うような台詞に俺は思考を強制中断してそちらの方に首を向ける。ちなみに

俺以外の奴も同じ行動をしたようだ。

「どうかしましたか？」

しかし、そこには書類。小脇に抱えていつも通りに立っている高橋女史がいるだけだった。

「高橋先生。今何か……」

「？何のことでしょうか？」

特に変わった様子も無く、普通の態度の高橋女史。

俺達の聞き違い……か？

「……まあ、いつか。とにかく鉄人。コレで分かってもええましたよね？子供って言うのはこの召喚獣のことなんですよ。別に不純異性交遊ってわけじゃないんです」

「そうだったのか……。いや、すまないな吉井。どうやらあの噂に付いては俺の誤解だったようだ。それと、西村先生と呼べ」

「分かってもらえて何よりです。鋼鉄の西村先生」

「余計な枕詞をつけるな」

「それより、アキ！いい加減アンタも……」

「そうですよ明久君！どうしてさつきから」

「おいでおいで。だっこしてあげまちゅよ」

「っ?!?!?!」

「バッ」

「何か?」

「高橋先生。今、妙な声が聞こえたんだが……」

「いえ。私には何も聞こえませんでしたよ西村先生」

「そ、そうか……」

高橋女史にそう断言されて、納得いかないような顔をしつつも、とりあえず引き下がる鉄人。そして皆が視線を高橋女史から外したところで、

「なんでしようね? おかしなパパでちゅね〜」

「絶対気のせいじゃないいいいっつ!!」

「やっぱりさつきから聞こえたあれ、全部高橋女史なのか?! い、意外すぎる……!」

「意外です……。高橋先生って実は子煩悩だったんですね」

「ウチもびつくりしたわ。もつとこう、バリバリのキャリアアウーマンのイメージだから」

「? 私が何か変なコトでも?」

「自覚ないんだ……」

「それよりも学園長先生。この召喚獣、そろそろ消していただけませんか」

「何を言ってるんだい西村先生。これも研究のうちさね。我儘言うんじゃないよ」

「ぐ……」

「そうですよ西村先生。そんなに嫌がらなくてもいいじゃないですか」

「姫路……。さてはお前、面白がっているな?」

「先生。これもこの学校の大事なイベントの為です。協力しないと」

「島田。顔がにやけているぞ」

「ははっ。照れても可愛くないですよ鉄人」

「目を閉じて歯を食い縛れ」

「なんで僕だけ殴られるんですか!?!」

お前を殴るのに理由なんざ不要だろ?

「まったく……。付き合っていられん」

「あ、パパ…ではなく、西村先生。待つて下さい」

「高橋先生……。その呼び方は誤解を招くので、今度は絶対に止めて頂きたい」

「失礼しましたパパ先生」

「いえ。敬称を付けろと言う意味ではなく」

なんて会話をしながら、鉄人と高橋女史は教室を出て行った。おい、今回の趣旨は合
体召喚獣だった筈だろ?完全に喰われてたぞさつき……。……。

「まあいい。これでとりあえず俺と明久の下らない誤解は解けただろう」

「そだね。良かったよ」

さて、これにて一件落着…

「んふふ。皆でボクに黙ってこんな面白いモノで遊んでたんだね？」

そうだが、こいつがいたのを失念していた……。

「工藤さん。ここは一つ、これで手を打ってくれないかな」

「コイツを好きにしてくれて良いから、俺達は見逃してくれ」

「……………っ!?……………裏切り者……………っ!! (ジタバタ)」

「ん、どうしよつかなく？」

俺と明久は一時共闘のアイコンタクトを交わし、逃げようとするムツツリーニを即座に拘束、そのまま工藤の前に差し出す。工藤がムツツリーニを憎からず思っているのは知っているから、ここは男らしく生け贄になってもらおう。

……………よし、念のためさらにもう一枚カードを切る！

「工藤。これで足りないなら秀吉もつけよう」

「なぜにワシまで!？」

「そこまで言うなら仕方ないカナ?じゃあ…サモンっ」

「……………っ! (ジタバタ)」

工藤が喚び声をあげると、二人の子供を模した召喚獣が出てくる。全体的なベースは工藤で、目はムツツリーニそっくりの男児だ。

「まあ、外観は普通だよな」

「そうだな。問題は…………」

「性格じゃな」

このエロの権化二人の子供つて時点で、もう既にパンドラボックス臭が凄いんだが…………。

「俺の予想では、二人のエロをコンピューターが処理しきれなくて、一周回って生真面目な子供になっているって感じだな」

「あはは。流石にそれは無いでしょ」

「うむ。いくらなんでも無理があるじやろ」

「だよな。俺も言ってみただけだ」

流石にそれは荒唐無稽過ぎるしな。

俺達が笑い合う中、召喚獣が言葉を発する。

《……子曰く、命を知らざれば似て君子と為るなし》

「「……………はい？」」

子供にしてはやけに毅然とした口調。

《……礼を知らざれば似て立つなし》

「おい…………。これって」

「…………多分、論語（ろんご）」

「論語って、確か…………」

「儒教における四署の一つですね。漢文の教科書に載っていたりする中国の思想書です

けど…………」

「「ホントに一周して真面目になったーっつ!!」」

なんてことだ、既に明久より教養あるぞこいつ!?

「お前らどんだけエロいんだよ!」

「……………なんのことだがわからない」

「あははー。照れちゃうよ」

もうこれ子作りというより錬金術の域じゃないのか?

そして、俺達の会話をよそに、召喚獣はまだ何かを呟いてやがる。

《……言を知らざれば似て人を知るなし》

「ところで、これってどういう意味なんだろう」

「えっと、命と礼を知ることの大切さを説いた一文ですね」

「……『人生とは、為すべきことを為し、人の心について思い、天寿を全うすることである』と言う意味」

姫路と翔子が明久に説明をする。

死ぬまでの間に自らがやるべきことを見つけて成し遂げろってことか。非常に深い言葉だが、まさかこんなチビに説かれるとは――

《……すなわち、我が天命は究極の性行為の為の追求にある（ボタボタボタ）》

「……って更にもう一周してやっぱりエロだーっ!!」

「……俺には全く似ていない」

ムツツリー二の否定は今更過ぎるので誰もツツコまなかった。

「それで、次は誰と誰の子供を見せてくれるのかな?」

仕切り直して、工藤が俺達を見渡す。

まだやんのかよ……。

「今度こそ、勿論ウチと」

「話は全て聞かせて頂きました」

「え?ちよ、なに!?なんで美春が」

「(ガシツ) サモンですっ」

「いややあああー!」

ポンッ

《ママ、だーい好き!》

出てきたのはドリル状のポニーテールを下げた女兒。

「え?えつと、ありがと……なのかな?」

その召喚獣に抱きつかれた島田は少し困惑していた。

ふむ……今までのパターンから考えると、この後の展開は多分…

《ホントにママのこと、だいだいだーい好きっ!》

「あ、あはは……。そう言われると、なんだか照れるわね」

《ホントに大好き！………一人の女として》

「いやあああーっ！この子怖いーっ！」

……なるよな。

「いくら娘でも、お姉様は渡しませんっ！」

《ふふーんだ！おかあさんなんてもうトシだもんねーだ！》

「トシじゃありませんっ！そっちが幼すぎるだけですっ！」

《ママはきつとロリコンだもん！》

「いいえ！お姉さまは女子高生が大好きなんですっ！」

年齢以前に性別が同じだっことはもうツツコミ禁止か？……禁止なんだろうな。

「もうウチこんな家庭耐えられないっ！」

「あつ！待って下さいお姉さまあーっ!!」

《まってよ、ママ》

「まったく、お主らはいつも騒がしいのう……」

「ダメだよ木下君。自分だけは無関係、って顔してちゃ」

「んむ？そうは言うが工藤よ。実際にワシはこういった騒ぎにはあまり関わりが無いの

じや」

「大丈夫大丈夫。ちゃんとボクが木下君にも楽しめるように手配しておいたから、ね？」
「いやいや。ワシは特にそのような騒ぎになるようなネタは……」

「(ガラ) どうしたの愛子？アタシに用事って……って、何よ秀吉。なんでアンタはアタシの顔を見るなり涙目で首を振ってるのよ」

「……！(ピーン！)俺の面白センサーが反応してやがる！何か愉快なことやってただろ
お前らー！」

「お前とはかれこれ小学生からの付き合いだが、そんなセンサーは初めて聞いたぞカズ
マ」

「ネーミングもこれ以上無いほど雑だし、絶対今適当につけたでしょ……」

工藤によって新たに追加されたメンバーは木下姉、和真、鳳、橘、の『アクティブ』メンバー達だった。

……物凄く不安なんだが。

というか不安しかないんだが。

合体召喚獣（完結）

【飛鳥視点】

『アクティブ』のメンバーが集まってテニスをしていたら、愛子からFクラスの教室に来てくれとメールが来た。多分翔子が途中離脱したことと関係しているのだろう。ちようどキリも良かったので後片付けをして教室に向かう（徹は興味がないのでパス、源太は塾講師のバイトだそうだ。相変わらずこの集まりはまとまりがない）と、何故か秀吉君が優子を見るなり涙目で首を振り出した。

「工藤よ……。後生じゃ。姉上は、どうか姉上だけは……！」

「んふふー。ねえ優子。学園長先生が優子に召喚獣を出してほしいってさ（ペタ）」

「？どうして秀吉の手を触らせるのかわからないけど、うん、いいわよそれくらい。試験

召喚（サモン）」

《おかしさん、だっこー》

二人を幼くしたような召喚獣が出てきて、近くにいた優子の足にしがみつく。

「えっと……秀吉、何これ？」

「これはじゃな、その」

優子もそのことに気づいたのか、秀吉君をやけに怖い真顔で見据えると……

「ねえ秀吉、ちよつと教室の外で話があるからついてきなさい」

「後生じゃ姉上! どうか……っ! 和真ああああ! お主のせいじゃぞおおおおお

……」

ドツプラー音のような悲鳴を上げながら、秀吉君は優子に連行されていった。

「……すまねえ秀吉」

優子達の召喚獸を可愛がりつつも、和真が珍しく後ろめたそうな表情になっている。

「それで和真、お前と秀吉は何やらかしたんだよ?」

何があったのか気になるのか、坂本君が和真に聞いたです。

「別に大したことじゃねえよ。俺、人のアルバムとか見て弄り倒すのが割と好きなんだ

けどよ……」

涼しい顔でとんでもないこと言い出した。

「優子が頑なに昔の写真を見せてくれなくてな。そこで秀吉に頼んでアイツのアルバムを無断で」

「秀吉完全にとばつちりじゃねえか」

まったくだ。……女の子の秘密を無断でチェックした和真は、後で秀吉君から事情を聞き出した優子にこつてり絞られそうね。

「いや〜。色んな子がいるね」

「そうですね、明久君」

「気が付いたら随分時間もたってるね。そろそろ帰ろうか」

「はい帰りま…今ですつ。試験召（サモ）―」

「甘いね姫路さんつ（ササツ）」

え？何―

「―喚（ン）…？？」

ポソツ

吉井君達の方を向いていなかったか何が起きたのかわからないけど、目の前に召喚獣が一体出現する。ついでに今、姫路さんは私に触れているから…

「……あの、姫路さん？なんで私との子供が見たかったの？」

「わわわ……誤解ですつ」

「飛鳥、一部始終から推測するに吉井はどうやらこの試運転に非協力的らしく、突然自分へ伸ばしてきた姫路の手を咄嗟の判断でお前に触らせたんだ」

「あ…そういうことね……」

「お前ともあろうものがまんまと背後を取られるとは……少し疲れているんじゃないか？」

「……いや、ちよつと考え事してただけよ」

我ながら情けない……武道家たるもの考え事に集中して注意を疎かにするなんて絶対ダメなのに……。蒼介はオブラートに包んでくれたけど、梓先輩にさっきの見られてたら「弛んでんとちやう？」って目が笑つてない笑顔で詰問されてた後鬼のようにシゴかれること間違いなしね……。危ない危ない。

《こんには。いいてんきですなっ》

出てきた女の子の召喚獣は、私達にニコニコと元気よく挨拶をした。

「普通だ……」

「普通だな……」

「………正常」

私達が来る前はどんな召喚獣だったんだろう？

《おにいさんたち、いっしょにあそんでくれるとうれしいですっ》

「うん、いいよ。一緒に遊ぼう」

吉井君は私達の召喚獣に優しく接している。彼も面倒見が良さそうね。………それにしても、全体的に姫路さんより私の特徴がほとんどないわねあの召喚獣。

《ほんとうですか？ やったあー》

「どんな遊びが良いかな？」

《今からおにいさんをいっぼんぜおいでなげるので、上手いこと受け身をとってくださ
いっ》

「ごめんね。僕、すごく受け身が下手なんだ」

おっと訂正、バリバリ私の特徴がでてる………いやいやいやいちよつと待つて!! 私は
一般人に柔道技をかけたりはしないわよ!?

「さつきから酷いです明久君つ。どうしておとなしくしてくれないですかっ」

「どうしてって言われても、僕にも色々と事情が……」

「事情ってなんですかっ。坂本君との子供は見たのにつ」

「いや。あれも望んだわけじゃないんだけど」

「もしかして、相手が私じゃなくて、柊君や土屋君や木下君なら平気なんですか?」

「え? うくん……」

姫路さんにそう尋ねられてしばし考え込む吉井君。

「和真やムツツリーニはともかく、秀吉はちよつと……」

「……………ほほう」

「あ。秀吉。おかえり」

そのタイミングで、秀吉君と優子が帰ってきた。

「和真、後で話があるから。……逃げたら本気で怒るからね」

「つ……………（コクコクコク）」

優子にそう耳打ちされ、和真は若干顔をひきつらせながらも観念したのか頷く。……あの神も悪魔も恐れない和真が好きな子にはこうも頭が上がらないなんて、少し前の自分が聞いたらとてもじゃないけど信じられないでしょうね。

「……………」

ちなみに秀吉君はというと、無言のままどことなく拗ねたような表情を吉井君に向けていた。

「??秀吉、どうかした?」

「いやいや。別に何でもないのじゃが（スタスタスタ）」

「そう?その割にはなんだか機嫌悪そうだけー」

「(ガシツ) 試験召喚じゃ」

「どうしてええっ!?!」

流石に予想していなかったのか、秀吉君に不意をつかれた吉井君。というか秀吉君、

貴方まさか……。

「普通に可愛いのが出てきたな」

「……………だいたい予想通り」

出てきた召喚獣を見ながら、坂本君と土屋君が呟く。今のところさつきまでの違って、これといって奇抜な特徴のない普通の召喚獣ね。

《うう……。たまには男物の服を着たいよう……》

「第一声から特徴丸出しだああああッ!!」

そう言えばこの二人、何かにつけて女装させられているって和真も言ってたわね……………。

突然、学園長が私達の方に近づいてきた。

「せっかく来たんだ、学園きつての健全アベックのアンタ達も協力してくれないかね？」

「今どきアベックって、ばーさん……」

「揚げ足取るんじゃないよ猫ジャリが」

「誰が猫ジャリだ誰が」

そう言えば、和真と学園長っていつ仲良くなつたんだろう……………？

「学園長、確かに私と飛鳥は婚約関係ではありませんが……正直、余計なスキヤンダルのリスクは遠慮させていたきたい」

学園長の頼みをきっぱりと断る蒼介。まあ確かに、この学園は色々と暴走しがちだが、学生新聞で『生徒会長、神聖な学舎で子作りに励む!』なんてゴシップ記事でも書かれたら、鳳家及び「鳳財閥」の次期後継者の蒼介にとってかなりの痛手だもんね。……私は少し興味あったけど、ここは引き下がらしましょう。

「俺もパス。ろくなことにならない気しかしねえし、何より俺は弄るのは好きだが弄られるのは大嫌——」

「(ガシツ) サモン」

「優子おとおお!? 何してくれてんのお前!？」

「ちよつとした意趣返しよ!」

和真も蒼介に続いて断ろうとするが優子に不意をつかれて召喚させられてしまう。

出てきた召喚獣の特徴はというと、髪の色は二人の間を取ったのか、赤みがかつた茶色をしていた。あとは……全体的に優子似の女の子ね。

《……オイオイでめえら、誰の許可とって俺を見下ろしてんだよ? ぶつ壊されてえのか
コラ》

性格は多分だけれど和真似……おまけにこの荒んだ感じ、私は詳しくは知らないけど蒼介と初めてあった頃の、「破壊神」と呼ばれていた和真そっくりね——ってこれまじくはない!? この頃の和真、とんでもなく血の気が多かつたらしいし!

『ア~~~~キ~~~~』

『み、美波!? 清水さんと一緒にいなくなっただんじや!?』

『あの子の家まで走って、おじさんに任せて逃げてきたのよ』

『明久君! もう逃げられませんか!』

『ぐううつ! 誰か、助け……』

『……雄二。捕まえた』

『ぐあ! しよ、翔子!? 何のようだ!? さつき呼んだから、もう充分じや……』

『……サモン。……サモン。……サモン』

『って喚び過ぎだろ! そんなに喚んでも一体しか出てこねえよ!』

『……あと、三十八人欲しい』

『お前は本気で子供が三十九人も欲しかったのか!?』

『……私はいつでも本気』

『ヤバイ……! コイツ、絶対ヤバイ……!』

『ところでムツツリーニ君。子供ができるってことは、当然その前の段階もあるんだよ

ね? つまりコンピュータは僕とムツツリーニ君のソレを予測して』

『……それがどうした(ボタボタ)』

『お主は明久にそっくりじゃな。確かに女装が似合いそうじゃ』
《ボクはおかあさんにもにてるっていわれるよ?》

『待つのじゃ。おかあさんは明久のことじゃろ? ワシは父親で』

《そんなことよりおかあさん、ボクもうスカートはやだよ》

『そんなことではないぞい!? これはワシにとつて重大な問題じゃ!』

って、目を放した際に周りは大パニックに陥ってるし! たどうしよう、これ収集つかないわよ!」

「オラアアアア!!」

《ぐっ…!? 親父テメエ……上等だ、原型も残さずぶっ壊してやらあーぐおっ!?!》

「隙だらけだ」

今にも襲いかかってきそうな召喚獣に和真は先手必勝ばかりに蹴り飛ばした。そのまま逆上して和真に飛びかかろうとした召喚獣に、蒼介は足元に木刀を滑り込ませて転ばせる。

「学園長、このままでと!」

「わかつてるよ橘!」

私の呼び掛けに学園長が応じて、召喚フィールドを取り消した。あ、危なかった…! いくら蒼介と和真が強いと言っても、10000点を越える点数の召喚獣に殴られて

もしたらただでは済まなかったでしょうね……。

「が、学園長先生!? お願いです! あと少しだけ待って下さい!」

「ウチからもお願いします!」

「その気持ちはありがたいけどね、データはもう充分すぎるくらいそろったからねえ。それにあやうく怪我人が出そうだったからね」

「でも!」

「それとも何かい? 他の私的な理由で召喚獣を呼び出そうってのかい?」

「あ。いえ、それは……」

「それならこれで終いさね。時間もだいぶ遅いからね」

「はい……」

目に見えて落ち込む姫路さんと島田さん。そして召喚獣が消えたことで皆落ち着きを取り戻したのか、散らばっていた皆が集まってくる。

「雄二に明久よ。どうしてお主らはあそこまで召喚に抵抗したのじゃ?」

秀吉君のそんな質問に島田さん達も便乗する。

「そうよアキ。……あんなに嫌がらなくてもいいじゃない」

「私もシヨックでした……」

「……雄二も、酷い。ちよつと傷ついた」

「……………」

その質問に対して坂本君と吉井君は沈黙。

すると、近くで聞いていた学園長が口を挟む。

「良いことをひとつ教えてやるよ、悪ガキ共」

「「良い事……………」」

「ああ。子供って言うのは、遺伝子情報だけでできるものじゃない。環境や育て方、色々な要素でおおきくなっていくのさ。だから」

そこで、含みのある笑みを浮かべる。

「未来のことが先にわかってつまらない、なんてことはないから安心しな」

「な……………?!」

……………学園長、相変わらず底意地が悪い。

吉井君と坂本君、目に見えて動揺してゐるわね。

「何を慌てているんだい。アタシは子供の人格形成について一般論を述べただけだよ」

「ババア!さてはこの前の仕返しか!?!それが大人のやることか!」

「やり方が汚いですよ!学園で一番偉いくせに!」

「さて。なんのことさね。アタシにはなんのことかサツパリだね」

「ババアーっ!!」

「じゃあ、アタシはデータでも揃ったしお暇しようかね。アンタ達もいつまでも遊んでないで、さっさと帰るんだよ」

言うだけ言って学園長はさっさと教室から出て行ってしまった。後に残ったのはやけに気まずい妙な空気のみ。

「え、えつと、明久君……。その、えつと……」

「ア、アキつてば何変なコト考えてるよ。別に、あんなのは占いみたいなものだから、そこまで気にすることないのに……」

「……雄二は照れ屋さん」

「誤解だああーっ!!」

「……ん？待つのじゃ、明久よ」

「ん、なに、秀吉？」

「もしや、お主は将来ワシとの子供が出来る可能性があると考えておったのか？」

「いや、だからそれは、その！」

「なぜ口籠るのじゃ!?!出来るわけがなからう!?!」

また収集つかなくなってきたわ……。

「あー、危なかった……あのまま続けてたら俺も蒼介もヤバかったな……」

「ごめんなさい和真、ちよつと軽率だったわ……」

「つたく、前回の惨劇から考えてこうなることは予想できただろうに。まあ何もなかったから別に気にしてねえよ。……そのかわりだな優子、アルバムの件はどうか無かったことにしてくださいお願いしますこの通り頭下げるから」

「と言いつつ一ミリも下げてないじゃない……ハア、仕方ないわね。次やったらもう許さないからね」

あつちはあつちで二人だけの世界に入っつていちやついてるし……。

「……長居は無用だな、帰るぞ飛鳥」

「あ、うん」

蒼介にそう言われて私は帰宅準備をする。

ふう……色々あつたけど、楽しかったな。

それにしても子供か……

いずれ私も蒼介と………やめよう、顔が熱くなってくる。私も和真のことをと
やかく言えないわね……。

柊守那流クツキング

【和真視点】

今日は平日、授業も終わりいつものように優子と下校していた。

「それじゃ、また明日」

「おー」

つつてもそこまで家が近いわけじゃねえから途中までだけだな。以前までは徹や源太ともちよくちよく一緒に帰ってたんだが、優子と付き合いだしてからはほとんどねえな。……氣い遣つてくれんのは良いんだけどよ、あのにやけ面は腹パンしたくなつてくるからやめると何回言つてもアイツらまつたく聞きやしねえ。飼い慣らされてる俺がそんなに滑稽かね？……ああ滑稽だな、うん。もしソウスケが飛鳥の尻に敷かれてたら間違いなく大爆笑するな。いかんいかん、早くなんとかしないと……でもなあ……。

「……つと、しまった。今日お母さん高校の同窓会とかでいねえんだった」

弁当か何か買って帰るつもりだったのに完全にうっかりしてたな。今さら引き返すのもかかったりいし、俺も親父も料理できねえし……出前でもとるか。何故か料理は覚えようって気にならねえんだよなあ……。

そうこうしてる内に家に着いた俺はポケットから取り出した鍵をドアに差し込む。

「(ガチャツ) ただいま。……………?」

あん? 返事が無えな。いつもはうつとうしいくらいの大声で返してくんのに……キツチンの方に人の気配があるな。……………何やってんだ親父の奴? なんだか無性にやな予感がした俺はキツチンに向かって歩を進める。

「(ガチャツ) おい親父、キツチンで何して—」

「おう和真、帰って来たか! (トントントントン)」

……………。

……おちつけ終和真。こういうときは一から状況を整理するべきだ。まずはそうだな、目の前にいるのは正真正銘俺の父・終守那で間違いないな。こんな無駄にデカイ奴のそつくりさんなんざ見つかるわけねえし。次に親父の格好だが、頭にいかにもなコック帽を被り左手を「猫の手」にして野菜らしき植物を固定し、右手で握った包丁でそれを刻んでいる。ちなみにコンロではフライパンと寸胴鍋を火にかけていて……………。

ここから導きだされるこの状況は……………

……………親父が料理をしている。

な……………何だとおおおおお!?

「嘘だろ…どうしちまつたんだよ親父!」

「?……………どうしたんだ倅!何を驚くことがある!」

「そりゃ驚くだろ!?!……………アンタ料理できたのかよ?今まで料理に限らず家事は全部俺と母さんに丸投げしていたじゃねえか」

「まあこういうこともたまには、な!」

「いったいどういう風の吹き回しだよ……………ま別に良いか何か問題があるわけでも無えし。……………で、何作ってんだよ?」

そう言つて近づいて確認しようとした俺を、何故か親父が押し止める。

「まあ待て倅よ!とりあえずお前は気にせずその辺に座っている!」

「いやなんでだよ。別に隠す必要ねえだろどうせ大したもモンじゃねえんだろうし」

「まあ待て倅よ!とりあえずお前は気にせずその辺に座っている!」

「いや、だから!」

「まだ待て倅よ!とりあえずお前は気にせずその辺に座っている!」

ドラクエの無限ループか。

……………まあどうしてもというなら仕方ねえ、とりあえずテーブルに座って待つてる

か。

しかし、まさか親父が料理しているのを横で待つ日が来るとはな。……あん？何だありや？何かの葉っぱ……カレーでも作んのか？タイ風のスープとかにやあんなん入ってるけどよ。……何にしても、あんなの入れるって割と本格的なのな。

「フハハハハハハハ！（…カンカンカンッ！）」

やけに上機嫌だな……なんか青菜っぽいのをフライパンで炒め始めた。手際もやけに良いし意外と料理得意なのか？

「フハハハハハハハ！（バラッ……）」

「!?」

親父がフライパンに投入した食材を見た俺は思わず目を開いた。今のは……マツシユルム、か？

もしかして作ってるの青菜のソテーか？それにしたってマツシユルム丸ごと入れんなよ……変なところで横着だなオイ……。

「フハハハハハハハ！（ドベベッ…バラッバラッ…）」

「?!?!」

続いて投入した食材を見た俺は、一瞬だが思考が完全にフリーズした。今のは……イカ!? 青菜のソテーにイカ!? しかもさっきの葉っぱここで入れたし！あいつマジで何

作ってんの!?

「フハハハハハハハ! (ヒョイ)」

「あん?」

親父はおもむろにフライパンを持ち上げた。

いったい何するつもり—

「フハハハハハハハ! (ドボドボドボ…)」

入れた—!?

な…鍋にブツコンじまった…イカと青菜のソテーを…!? いやいやいや! んな訳ねえよ落ち着け俺!

…つか、そもそもソテーじゃなかったかもな。カレーとかも最初に具を炒めるらしいし…これやっぱカレーかな、青菜もイカもマツシユルムも全部カレーの具になるっちゃあなるしよ。

ただ、カレーっぽい匂いは全然してこね…ん?

「フハハハハハハハ (パタパタパタ…ジュワアアアアアア!)」

今度は何か揚げ始めた。パン粉つけてたからカツかフライ…カツカレーか! フライの可能性もあるっちゃあるけど普通に考えりゃカツカレーだな、俺の好物の…まさ

か親父、それを知ってて……?だとしたらアレだな、俺今まで親父のことどうしようもない自己中野郎だと思ってたが、もしかしたら少し誤解してたのかも――

「フハハハハハハハハ！」↑木の枝状のフライを菜箸でつまむ親父

それ何のフライ!?

木の枝?! いやいやいや! それはねえよ! 多分ゴボウか何かだろう……

「フハハハハハハハハ！」↑握力グリップ状のフライを菜箸で (r y

何のフライ!?!

「フハハハハハハハハ！」↑ハサミ状のフライを (r w

いやだから何のフライだよそれええええええ?!?!

どれもこれも食材ですらないもんばっかりじゃねえか! ……いやいやいや! だから

落ちて終和真! いくら親父が非常識の権化みたいな奴だからって玲さんや1学期の姫路じゃねえんだから、そんなもん料理に使うわけねえだろ!?

そういう形の肉とかだろ!

……たぶん。

「フハハハハハハハハ！」(ヒョイ)

「……………へ?」

親父は再びフライパンを持ち上げた。
オイオイまさか…

「フハハハハハハハハ（ドボドボドボ）」

入れたー！?!?!

そしてまたしてもブツコんだー！?!?!

何だそりや!?!フライを煮込む料理なんざ流石に聞いたことねえよ!?!親父の奴ホントに何作ってんだよ!?!

「フハハハハ！まあこんなところだな！仕上げに…」（スポット…クシヤクシヤ）」

あ？かぶっていたコック帽を突然丸めて何をー

「フハハハハハハハハハ！（ポイツ…どぶん）」

「おいしいiiiiiiiiii!?!?!」

思わずシャウトしてしまつたがそれどころじゃない。

とうとう帽子までぶっこんだ!?!

いや、むしろ特攻んだ!!

流石におかしいだろこれ、明らかにまともな料理じゃねえよ…もしかして親父もあつち側なのか!?!

「待たせたな和真！」

「……………え？できたのか料理？」

「んむ？いや…まあ、できたと言えはできたな！」

は？どういふことだ？

頭の中がクエスチョンマークで覆い尽くされた俺は、再度親父に尋ねることにした。

「つかさ親父……………結局それ何作ってたんだよ？」

「これは別に何でもないぞ！それよりも和真！」

「いや、気になってしょうがねえから言えよ——」

「料理してるっぽい動きをしていたら腹が減ってきた！メシ食いに行くぞ！」

……………。

「なんなんだよそりやあよおおおお!!！」

「どうした碎よ!?!何故急に襲いかかってくる!?!」

「うるせえええ！わけわかんねえことしてんじやねえよ、このクソ親父があああああ！」

結論……………やっぱ俺こいつ嫌いだ！

【料理（してるっぽく見える）レシピ】

①その辺で取ってきた草とか木の根を煮込む

②草とマツシユルムっぽいコルク栓、イカっぽい湿布、葉っぱを炒めて鍋にブツコ
む

③木の枝、握力グリップ、ハサミなどをフライにして鍋にブツコむ

④コック帽を特攻^{ブッコ}む

⑤完成！（捨てましょう）

一流レストランのシェフっぽさを是非ご家庭で！

修羅と英雄①

【和真視点】

ベキベキベキヤツ!!

「ぐぎやああああああ!!!」

俺は足元で馬鹿みたいに転がっている——まあこいつが転がっているのは俺が原因なんだが——チンピラの利き手の指を足で踏み潰した。指の骨が砕ける音とチンピラの断末魔が不愉快極まりないハーモニーを奏でる。

「ちっ…耳障りだからいちいち喚んじやねえ、鬱陶しいんだよガラクタの分際で」

「ヨシオ!?…このガキヤアアアアア!」

チンピラAの悲痛な叫びを聞いて激昂したチンピラBが俺に殴りかかってくる。おーおー、頑張るねえ……。

「死ねえッ! (ブンッ!!) …んなっ!?!」

「雑魚が…」

ガアアアアアアアアアア!!!

「ぐげええっ!?!」

あくびが出そうなほど単調な攻撃だったので適当に避けてから相手の懐に潜り込み、手に持った鉄パイプを首筋に叩き込む。よほど強い衝撃だったのか、チンピラBはそのままAと同じように地面に這いつくばる。

「ぐ、ぐぐ…テメ（ガアンツッ！）ゲボオツ!？」

何か喋りかけたが興味無かったので気にせず第二撃を顔面に叩き込み意識を奪った。

ガンツッ！ガンツッ！ガンツッ！

その後も躊躇なく殴り続け、チンピラBは覚醒と気絶を交互に繰り返しながら顔がどんどん腫れ上がっていく。

「……あん?」

「死ねー（ブウンツッ…）…っ!?う、嘘だろ……!」

ふと、後頭部に嫌な予感があったので屈んでみると……そこにチンピラAのへし折られていない方の拳が通過する。さっきあれだけ痛めつけてやったのにもう復活しやがったのか、丈夫さだけは大したもんだなコイツ。俺はチンピラAが完全な不意打ちを避けられて呆然としている内に素早く後ろに回り込み…

「こんなガキ相手に後ろからとかさあ、プライドねえのかよお前」

ドゴオツ!!

「ぐあああああつ!？」

腰を全力で蹴り飛ばした。激痛のあまりチンピラAがその場にうずくまるが手を緩めてやるつもりはさらさらない。今度は背中に向かって鉄パイプをフルスイングする。

ベキヤアアアツ!!

「~~~~ツ!!!」

「けどワリーな、俺に不意打ちは通じねえんだよ。理由は俺もよくわからんねえけどよ、生まれつきそういうのに気づいちゃうんだよ……なあつつつ!!」

止めとばかりに、俺はもう片方の無事な方の腕に鉄パイプを降り下ろす。人体から鳴ってはいけない音とともに、チンピラAの断末魔が路地裏全体に響き渡る。

「ククツ……クククク……」

ヒヤハハハハハハ！アーハツハツハツハツハハ!!」

ジャアアアアアアアア…

「チツ……返り血までしづといなオイ」

一仕事を終えて多少すつきりした俺は動かなくなった（死んでない。俺もそこまで鬼じゃねえ）残骸二体を路地裏に捨て置いて、近くの公園の水道で袖口に着いた返り血をひたすら洗っている。こんなクレイジーな遊びしてるなんて、クソ親父にはともかく母さんには絶対隠し通さなきゃ……。しかし微妙にスツキリしねえなあ今日の獲物。耐久はそこそこだったがてんで弱かったし……チンピラならチンピラらしくせめて4、5人くらいで群れてろよシケてやがる。

………別に俺は通り魔よろしくあのチンピラ共をぶっ壊したわけじゃねえ。あくまで先に手を出してきたのは向こうだ。……たとえ俺が挑発してそうなるように仕向けたとしてもその事実は変わらねえし、この事実が隠蔽に意外と役に立つ。もし警察か誰かが路地裏を通りかかってあの二人を発見して事情聴取しても、絶対俺には辿り着けねえ。

小学生のガキに殴りかかって返り討ちに遭いました……なんて死ぬほどダセエことを、イキツたヤンキー達がよりよって警察に口外できるわけねえし、仮に口外したとしても誰も信じちゃくれねえもんな。

ちなみに俺がこんな頭のネジ飛んだとしか思えない趣味を持っている理由は、原因不

明のイライラを紛らわすためだ。しかしいつからだっけな、人を見るとぶっ壊したくなるようになったのは……。

「やっと取れたぜ。さてと、さっさと帰るか……転校しても俺のやることは大して変わってねえなあ〜」

翌朝、いつものように早起きして朝食を取り、学校に行く準備を済ませてから家を出る。

この俺、終和真・小学五年生（11歳）は一月ほど前に名門と名高い霜月大附属小学校に転校することになった。転校の理由は親父の仕事の都合という至極ベタなもの。なんでも高校時代の旧友にヘッドハンティングされて、系列の会社を任されたとか。そんなそこそこ重要なポストにあんなド腐れ脳筋サイコパスバカを迎え入れるなんて正

気か?とか、色々ツツコみたいことは多々あったがこの際気にしないことにする。もともと柀家はそれなりに裕福な上に俺も親父も母さんも物欲はかなり薄いので、親父の給料が上がるのが生活に変化はないだろうしな。

……あと、明らかに俺と波長が合わないであろうお坊っちゃん学校に通うことになったのにはちゃんとワケがある(ちなみに編入試験は問題なくパスした。こう見えて勉強はできる方だ)。俺は近くにある公立の水無月小でも別に良かったんだが、そっちに通えば前の学校の二の舞になると母さんが心配したからな。

……………俺は前の学校であることを孤立していた。

きっかけは、そうだな……同じクラスの学校で一番人気のあった女子を泣かせたことだろうな。

自分で言うのは正直アレだが、俺の外見は母さんに似て整っている。おまけに勉強もスポーツもできるっちゃできるし、何故か周りには俺のそつけない態度をクールでカッコいいと勘違いしていた(実際は原因不明のイライラに苛まれていてそれどころではないので、対応が雑になっていただけなんだがな…)残念な女子がやたら多かったのでぶっちゃけかなりモテた。結構な数の女子から告白されたがさつきも言った通り俺はイライラに苛まれていて、誰かと付き合ってもしたらヤンキー狩りに割ける時間が減っちゃうので全て断ってた。もうこの時点で男子達からの評価は最底辺だったが、(残念

な) 女子達からはそうでもなかった。…だが学校にマドンナ(笑)を泣かせたことで女子達からの評価も地に落ちた。俺が泣かしたそいつは……なんつうか、世界は自分を中心に廻っていると常日頃考えているような奴だった。そいつも俺に告白してきたんだが、俺がいつものように拒否すると突然逆上しだしてな……ええとなんだっけな、「自分が付き合つてあげると言ってるのだからありがたく思え」みたいな内容の罵詈雑言を俺に浴びせてきた。我ながら沸点がもの凄く低いこの俺がそのバカから言いたい放題言われて黙っているわけもなく、かと言つてここで暴力に頼るのはなんか負けた気がしたので……こちらも正々堂々真つ向から容赦なく罵倒して、そいつの心をこれでもかと言うほどバツキバキにへし折つて最終的に泣かせてやった。

女子のネットワークはそれはもう優秀なようで、放課後に告られたのに明日の朝にはクラス中の女子全員に俺の悪評が広まっていた。おまけに日ごろから俺に不満を持っていた男子とも結託して、クラス……いや、学年全体からのイジメが始まった。かつての仲間達から耐えがたいほどの苦痛を受け、俺の心はどうとう壊れてしまった………

わけねえだろ。

クラスの中は最初全員で俺を無視したが、あんな有象無象どもハナから仲間ですらねえし、無条件で苛つかせる分その辺に転がってる石ころにすら劣る。そんなことをしたところで「ああ、そうか」とも思わねえよ。そもそも視界に入れるだけで、イラつくんだからあちらから関わってこないのはむしろ逆にありがたかったし、なんだったら感謝の一つでも心の中でしてやってもいい。そんな風に平然と学校生活を送る俺が気に入らなかつたのか、アイツらは次の手段に移行した。朝いつものように登校したら俺の机にマジックで「死ね」だの「学校来んな」だの何の捻りも無いテンプレ臭い悪口が所狭しと書き込まれていた。よくここまで書き込めたなと若干関心はしたもののそれで済ませてやるつもりは更々無い。くだいようだが俺の沸点は我ながらかなり低いので、実行犯を炙り出してぶちのめすことにした。

クラス全員が心なしかにやけてたため全員グルであることはすぐわかつたので、俺は適当に手近にいた男子を締め上げて犯人を吐かせようとした。そんな俺の暴挙を止めべくそいつの友人らしき奴が数名が飛びかかってきたが、高校生ですら一方的にボコ

れる俺に敵うはずもなく秒殺してやった。その時点でクラス全員にビビりだったが、それに気にも止めず俺は恫喝を再開。最初はなけなしの勇気を振り絞って口を閉ざしていたが、「さっさと教えねえとお前の両手両足の爪、一枚ずつ剥がしていくから」と耳打ちすると快く吐いてくれた。人間素直が一番。

そいつがゲロつたせいで特定された実行犯男女4名（その内の一人は笑えることに俺が泣かせた件の女子だった）は青ざめた表情でその場に固まっていたが、俺がゆつくりと近づいていくと、「ちよつとした冗談だった」だの「悪かった」だの言い訳や大して心のこもつてない謝罪をしてきた。完全にイラついてる俺がそんなことで止まるはずもなく、4人仲良く跡が残らないように気を付けて痛めつけた。その後、他クラスの連中も強行手段に出てきたが一人残らず返り討ちにし、一方的に俺が悪いと決めつけてきたバカ教師を事故に見せかけて潰し学校から排除したりと……まあ色々やつたなあアツハツハ。保身に走った学校側が俺へのイジメや俺の暴行をもみ消したりしたおかげでこの件は闇に封印されたが、俺は変わらず孤立したままだった……ただし悪意ではなく恐れによるもの変わっていたが。

それで、ヤンキー狩りはともかく学校で俺が孤立していることは知っていた母さんが、公立に行かせたら同じことを繰り返すのではと危惧して私立の霜月小に通うことになったつうわけだ（前の学校が保身に走らなければ確実に書類で弾かれてただろう

な)。

で、霜月小での俺はと言うと……以前ほど露骨なものでは無かったが、やはりクラスで浮いていた。名門校だけあって頭が良いのか、俺が相当頭のネジ飛んだイカレヤローだつて薄々感づいてるのかもな。

ま、何にしてもありがてえ。俺の近くでうるちよろされるとぶつ壊したくなるしな。そんなことを考えながら登校していると、校門の前で見覚えのある顔がちらりと。

……………。

そう……俺は今、一人でいたいんだ。

だからよお……

「おはよう。……う？どうしたヒイラギ？今日はいつにも増して不機嫌だな。それに身だしなみもだらしないうことこの上無い。いかんぞ、そんなことでは……(クドクド)」

「んなことでいちいち俺に突つかかつて来るんじやねえよオオトリ！あと不機嫌なのはこの清々しい朝にお前と遭遇しちまったからだよこのボケェツ！」

修羅と英雄②

【和真視点】

転校後の俺の生活はそこそこ快適なものであったが、早急に何とかしてえ問題が一つだけある。

「む……ヒイラギ、お前の家はあつちだろう？ 私の日と鼻の先で寄り道とは良い度胸だな」
それがこの常に鉄面皮のスカした奴……俺のクラスメイトで、クラス委員長兼生徒会長
のオオトリ・ソウスケをどうにかして俺に関わらせないようにすることだ。せっかく今日
の授業も終わって平日だけどヤンキー狩りに行こうと思つてたのによ……空気読め
やコラ！

「うるせえ、テメエにや関係無えだろ」

「ある。私は生徒会長として生徒を正しい方向に導かねばならん、そしてそれに例外は
存在せん」

う……うぜえ……。こいつ絶対俺とは未来永劫わかり合えない人種だ、間違いない。

「そしてそれ以前に私はお前のクラスの委員長だ。クラスメイトの素行不良を矯正する
のも私の役目だ。……と言っても、お前以外の生徒は皆多少羽目を外すことが稀にある

ものの、基本的に真面目だがな」

「俺が群を抜いて問題児だとしても言いてえのか？」

悔しいがそれを否定することはできねえな。

このオオトリって野郎は何でも物凄くでかい企業の御曹司らしく、幼い頃から帝王学を学んでいるせいかがギのくせに責任感の塊のような奴だ。あと俺の親父をヘッドハウンティングしたのもこいつの父親らしく、母さん↓親父↓こいつの父↓こいつの経緯で「俺のことをよろしく頼む」的な内容をお願いされたらしく、こいつ以外の生徒が露骨に俺を避ける中鬱陶しくてしょうがないほどやたら俺に絡んでくる。なんとか排除したいところだがこいつに悪意というものがまるで無いので暴力的な手段はどうしても取れないでいる。自分がどうしようもないクズだという自覚はあるが、善意で行動している奴に暴力を振るうほど落ちぶれてはいねえつもりだ。……とはいえ鬱陶しいことに変わりはなく、俺の苛々はそれに比例してどんどん膨れ上がっていくわけで………ええい、まどろっこしい!

「つき合ってらんねえぜ!」

「む、待て!どこへ行く!?!」

いちいち相手するのも面倒なのでここは戦略的撤退。オオトリは追いかけてくるようだが無駄だ、温室育ちのお坊ちゃんに俺が捕まるかよ!

「…………ハア…ハア…………ゲホツ！…………もう逃げられない…………ようだな…………ヒイラギ…………
！」

「ゼエ…………ゼエ…………うるせえこの野郎…………！」

急遽始まった町全体を舞台にした時間無制限鬼ごっこは両者スタミナ切れで俺の判定負けに終わった。

…………なんなんだよこいつ!? ボンボンのクセにやたら速えしスタミナも半端ねえじゃねえか!?

いや、問題はそこじゃねえ。確かに運動能力はかなりのモンだったが流石に俺には及ばねえ。……にもかかわらず俺が振り切れなかったのは、どういうわけか俺の逃走経路を読まれてことごとく先回りされたからだ。挙げ句の果てには信号が切り替わるタイミングや人混みが集まる時間帯や場所など様々な要素を利用して、俺の逃走経路をこいつの思い通りにコントロールされたみてえだ。

そうされたという根拠は、今俺達が息を整えている場所が………俺の自宅のすぐ近くだから。俺が判定負けだと判断したのもこのことが原因だ。流石にこのヘトヘトな状態じゃあヤンキー狩り以前に、適当にぶらつくことすらキツイからな。しばらくしてお互いの息が整う。

「では私はこれで失礼する。お前も今から寄り道しようとは思わないだろうからな」
「この野郎……！」

く、屈辱だ……！まさか同年代の奴に土を付けられるとは今まで思ってもみなかった……！

帰宅してからヤンキー狩りに行くこうにも、この消耗しきった体じゃ流石の俺と危ねえだろうし……仕方ねえ、今日は諦めるか……。

だが覚えてやがれオオトリ、俺はこう見えて結構執念深いんし根に持つ方なんだ……この借りは必ず返す!!!

その後、放課後の無制限鬼ごっこは毎日続いた。最初らへんは負けが続いていたものの、身体能力自体は俺が上なので慣れてくると俺の勝ち星が増えていき、一ヶ月経った現在では完全に五分五分となった。どれだけフェイクを混ぜても逃走経路を読まれるので俺もアイツのスタミナを削るよう誘導することで、この鬼ごっこは俺とオオトリのどちらの体力が先に尽きるかのデスマッチと化した。アイツの体力が尽きて俺を見失えば俺の勝ち、アイツが俺を捕まえるか自宅まで誘導できればアイツの勝ちだ。

まあ俺が勝とうが負けようが、ヤンキー狩りに赴くほどの体力は残らねえんだがな。……それ自体は別に良い。そもそもヤンキー狩りの頻度は週一程度だし、この前はたま放課後にやろうと思っただけで基本的には休日にしていたからな。

……だがそれじゃ俺の気は晴れねえ！アイツを撒いた後にヤンキー狩りを成功させてこそ完全勝利つてもんだぜ！

……とはいえ、流石にそろそろ苛々とストレスが溜まってきたな。ちようど今日は休日だし、一呼吸もかねて繰り出すとするかね。

「ぐうつ……ば、バカな……!」!?

「全国にその名を轟かせる『天下無敵』の『ウルコイ閨高』、その『最強』チーム『ガトリシグ餓斗燐愚』の俺達が……こんな『ガキ』たった『一人』に『ヤラレ潰され』ただと……!」!?

「『こいつ』……『何モン』だ……!」!?

俺がチンピラ5人ちよいをブチのめしたことが余程信じられなかったのか、こいつらの舎弟（それかパシリ）らしき奴らがその五人を担いで蜘蛛の子を散らすように逃げていった。……どうでもいいけど喋り方だけはいつちよまえだなオイ。そんな昔の Yankee 漫画みてえに振る舞ってんなら「『ヒキひき肉』にしてやんよオ!」とか言いながら殴りかかってこいつてんだ、景気よく返り討ちにしてやるからよ……だいたい俺達が、つてお前らはただ端っこで見物してただけだろうが。

……しかし、何故だ?

血がべつとり付着した鉄パイプをその辺に放りながら、ふと自問する。

あの雑魚共曰く、こいつらはチンピラの中でもかなりのやり手だったらしい。実際今

までのチンピラとは明らかに動きが違ったし、一発も喰らわなかったとはいえ何度か結構ヤバかった場面もあった。そんな奴等をぶっ壊したからには今までで一番充実感を得られるはずだ。

なのに何故、こうもスッキリしねえんだ……？

そんな風に柄にもなく物思いに耽っている、こちらに近づいていく足音が。さっきのパシリ共が仲間でも呼んできたのか？それにしても足音は一人分だし……つてマジかよ!?

「またお前かよ……」

「……随分と物騒な趣味だな、ヒイラギ」

足音の招待は目の上の瘤ランキング堂々の第一位であるオオトリ。せっかくの休日だつてのになんでこいつと顔会わせなきゃならねえんだよ……つーかこれマズくね？学校にこのことチクられたら退学まった無しじゃね？

……無駄だと思いが一応言い訳しとくか。

「言っておくが、先に手を出してきたのはこいつらだからな。例え俺から挑発し始めたとはいえこいつは正当防衛だ」

……我ながらなんて苦しい言い分だ。こんな主張、いかにもこの綺麗事大好きそうな優等生であるこいつにしてもまかり通るわけねえよな――

「なるほど、それなら私から言うことは特に無いな」

……………はあ？

「いやいやいやオオトリ君……俺としてはありがたいけどよ、生徒会長なのにそんなあつさり見逃して良いのかよ？」

「ありがたいのなら気にする必要ないだろう」

「いや気になるに決まってるんだろ。『暴力は絶対いけないことだ』……みたいな綺麗事を至極真面目に思ってるようなエリート様がそんなドライな対応すりや気になってしょうがねえよ」

俺の言葉を聞いたオオトリは心外だとしても言わんばかりに眉を潜める。

「……………お前の中での私のイメージがどうなのかは知らんが、綺麗事だけで世の中が回ってると思ってるほど私は平和ボケしてない」

「へえ、意外だな……………」

「全ての人が平等に幸せになれる世界など未来永劫有り得ない。……私の父も財力に物を言わせて商売敵を倒産に追い込んだりしているしな」

「知りたくなかったなその情報……………」

「というかこいつテンプレみてえな聖人君子かと思いきや、俺が思ってた以上にリアリストなんだ……………」

「それに、私は弱者には寛容だが愚か者には容赦しない。いかなる理由があろうとも、よってたかって子どもにも暴力を振るおうとしたクズ共にかけてやる情けなどありはない。……これからも思う存分潰すと良い、私は止めん」

そして俺が思ってたより遥かに黒いな!?こいつもしかして、俺の好きにやらせた方がチンピラを駆除できて都合が良いとか思ってたの!?涼しい顔してえげつないオイ!

「……………」しかしヒイラギ、これだけは聞いておきたい。……何故こんなことをしているんだ?」

相も変わらず鉄面皮だが心なしか値踏みするような表情で、オオトリはそう問いかけてきた。

何故……って言われてもなあ……

「大した理由なんざ無えよ。ストレス解消みたいなもんだ」

「ストレス?……すまない、クラスで孤立しかけていることがそこまでお前の精神に負担をかけてるとは知らなかつ」

「違えよ!」

ぼっち拗らせてる寂しい奴と勝手に判断されるのも癪なので、しょうがないから一から十まで説明してやった。

「……なるほど。つまりお前は、人を見ると壊したくなる破壊衝動に従っているという

わけだな？」

「まあそういうことだな」

俺がそう肯定すると、オオトリは目を瞑り数度頷くと……

パアンツ！

いきなり俺の横つ面を張り飛ばした。

「……はっ」

俺が事前に察知できない程度の軽いビンタだが、完全に不意を突かれた俺は怒る以前に困惑する。俺が呆けた表情をしていると、オオトリは俺を非難するかのように睨めつけてきた。

「愚か者が……！壊したいから壊している？ふざけてるのか？貴様はそれでも人間か？まるで畜生そのものだな、今の貴様は」

修羅と英雄③

〔和真視点〕

売られた喧嘩は買うスタンスの俺だが、前の学校のカス共のようにオオトリをトラウマになるほど痛めつけるつもりはなかった。こいつは御曹子なので財力や権力にものを言わせて報復してきたらガチでマズい。俺や親父だけならともかく母さんに危害が及ぶのはダメだ。それに間違いなく霜月小を退学になるしな。そうなったら母さんの厚意を無下にすることになる。さつきから理由が母さんばつかだからマザコン扱いされかねんが……別に構わねえよ何とでも言え。俺はあの人に心から感謝してるし、あの人を誰よりも尊敬してる。あんなどうしようもないバカ親父のために人生を棒に振って、多少いじめられた程度で相手を半殺しにするようなどうしようもない下衆野郎が実の息子だつづうのに、嫌な顔一つせず俺と接してくれてるんだからな。これ以上余計な負担かけられるかつてんだ。

……話を戻すとこの鬨い、壊れ過ぎねえようある程度手加減しながら鬨っている。度重なる鬼ごっこから、こいつの身体能力は高いが俺には及ばないレベルだとわかっていゝる。多少気い抜いた所で俺の勝ち揺らがねえはずだ。

……そう思ってたんだがなあ……。

ズドドドドドドドドドドオオオツ！

物凄い勢いで遅い来る木刀を俺は次々と弾いていく。このままだとリーチの差の關係上一方的に攻められるだけになってしまふので俺が一方踏み込むと、ほぼ同時にオオトリが後ろに後退しつつ間合いギリギリで木刀を薙いできた。その攻撃はさつきまでのように木刀の側面を弾くだけで無力化できたものの、また俺の間合いから外れてしまった。

こいつ、予想よりずっと強えなオイ……。

確かにパワーやスピードは俺の方がずっと上……しかし戦況はほぼ互角。技巧や頭
のキレは向こうが上だからだ。それに加えて自らのペースに無理矢理引き込む独特の
リズム、そして小学生とは思えぬほどの剣術のキレは正直言っただけでかなり厄介だ。あと
鬼ごつこのときも思ったが、こいつ明らかに俺の思考を読んできるとしか思えぬ……。
例えば、俺が間合いを詰めながら右腕を振りかぶる。実はこの右腕はフェイクで本命は
左足のミドルキックなんだが……事前に看過してなきや不可能なほど迅速にガードされ

た上、返す刀で俺の右足を叩きおろうとしてきた。俺は持ち前の反射神経ですぐさま離脱したためどうにか空振りに終わった。

あ、危ねえ……もし俺が事前に察知できなきゃやられてたかもな……

俺は生まれつきとても勘が良い。特に顕著なのは自分に迫る危険と人を壊そうとするときの勘は100パー的中する。だから俺に不意打ち闘ちの類いや身体能力で劣る相手からの攻撃全般は一切通用しねえし、ついでに相手の隙やどこを攻撃すれば壊れやすいか、どのように攻めていけば良いかなどがなんとなくわかる。

……だがこいつには前者はともかく後者はいまいち役に立たねえ。なんつうかこいつ、防御がとんでもなく上手いのだ。致命傷狙いの攻撃はことごとくいなされるか避けられるし、そうでない攻撃もダメージを軽減されちまつてる。なんとか隙を見つけて何発か入れたものの、あんなシヨボい攻撃程度じゃたとえ100回食らわせたところで大したダメージにはななりやしねえよな……。で、そんな拮抗状態に置かれた俺はどんな苛々が募つてくかと思いきや……むしろ気分が高揚してきやがる。

なんだこいつ?! 攻撃が全然通らねえ……面白え! こいつなら多少本気でやつても大丈夫だよな!

ハイになった状態で再び間合いをつめながら右腕を振りかぶる。今度は余計な小細工を加えてない分、パワーもスピードも今までとはまるで訳が違う! 防げるもんなら防

いでみやがれ!……仮にいなそうが避けようが関係ねえ、攻め続けて競り勝ってやる!
そんな俺に対し、奴は木刀でガードの構えに入り―

「っ?!? (ゾクツ)」

ふと急激に嫌な予感が全身を駆け巡ったため、俺はすぐさまオオトリと距離を取る。
今の嫌な気配、あのまま行つてたら確実に右腕やられてたな……。

「……今のを初見で看過したか」

「テメー……今何しようとしやがった?」

「我が鳳家に伝わる剣術流派 “水嶺流” 第陸の型・波紋。接触する直前に剣を高速振動させることで、ダメージを人体の内部に響かせる。私はまだ半人前でこの型を十全に使いこなせるわけではないが、貴様があのまま右拳を振り抜いていればただでは済まなかつただろうな」

なんつう危ねえ攻撃仕掛けてくるんだよこのお坊っちゃん……。こいつ意外と過激派だな……。クククククク、上等じゃねえか!

「認めてやるよ、テメーは強え……。だからこそ覚悟するんだな、こつからは……」

俺はそこで一度言葉を切り、もう一度オオトリに向かつて走り出す。

「本気で潰す!」

……手加減抜きで全力全開で。

「っ!? 速い……!」

「オラオラどうしたアツ!? テメーの力はそんなもんかよ!」

拳と木刀が目にも止まらぬ攻防を繰り返す。しかし俺と奴の身体能力には明確な差があるため、徐々に俺が優勢になる。オオトリも先程のように振動を織り混ぜて牽制してきたが、全開時の俺の勘はより精度を増している。はつきり言って恐るるに値しねえんだよ!

不規則な緩急は反射神経にもものを言わせて対応し、急所狙いの鋭い刺突や遠心力を利用した回転斬りは無難にかわし、高速の剣撃も全て捌き切る。

「くっ……このままではマズー」

「隙見いいいいっつっけっ!!」

「!? しまっー」

俺が繰り出す怒濤の攻撃を受け続けて疲弊したのか、とうとうオオトリが決定的な隙を露呈した。俺はそれを見逃さず奴の服の袖を掴み、そのまま地面に転ばせた。そしてトドメに渾身の蹴りを喰らわせる直前、

ドクンツ!!!

「っ!? ……オラアツ!」

俺は直前で蹴りの性質を人体破壊ではなくぶつ飛ばすことに変更させた。俺に蹴り飛ばされたオオトリはそこそこの距離を吹っ飛んだものの、大したダメージには至らなかった。

……今のは、何だ？アイツを壊そうとした寸前、俺の全身を何かが駆け巡った。直感で危険を察知……したわけじゃねえ。現にそのまま振り抜いたのにアイツは何もしかけてこなかった。ましてや理性なわけねえ、確かに冷静になつて考えてみりゃ壊さないように闘つてたのだから完全に本末転倒になつてたんだが、さつきまでのハイになつた状態ではそんな些細なこと抜け落ちてたしな、我ながら情けねえ……。

「……………今、何故躊躇した？」

オオトリが立ち上がりながら興味深そうに尋ねてきた。いや、俺が聞きてえよ……ここはトボけとくか。

「さあてね……それよりも、どうだこの辺でやめとくか？頭のよろしいテメーならさっきの攻防で本気の俺には勝てねえつて理解しただろ？負けを認めるのがプライドが許さねえつてなら、しょうがねえから引き分けてことにしといてやるからよ」

「人によつてはその発言そのものがプライドを刺激しそうだな……生憎だが続行させてもらう。確かにお前は私より強い。だが私はここで退くわけにはいかない！そしてヒイラギよ、お前は畜生に甘んじてはならんのだよ！」

「お前が何を言っているのか知らんけどよ、これ以上やるってんならもう容赦しねえからな。……一応釘指しとくけどよ、後で親に泣きついて仕返しとか企むなよ？」

「あまり私を愚弄するな。この鬭いは私とお前だけのもの……たとえ父様だろうと干渉は許さん」

「そうかい、それを聞いて安心した。これで遠慮なくブチのめせるぜ」

「……よかろう、見せてやろうじゃあないか。水嶺流の真髄……剣撃の極致を！」

オオトリが木刀を構えて突撃してくる。……おいおいどういふことだ？ さっきまでの鬭いから判断すると、こいつの強みのひとつは絶妙な間合いの取り方だ。俺は拳か足なのに対してアイツは木刀という、リーチ差によるアドバンテージを最大限に活かそうとしていた。だから間合いを詰めようとしたのは俺ばっかで、アイツはあくまで迎撃というスタンスを取っていた。なのになんでアイツは向かってくるんだ？ 血迷ったのかやけくそか、どつちにしろ少し期待外れ――

ゾクウツ
!!!!!!

っ
!?!?!?

な、なんだこりや!?

俺の勘が告げている……避けようの無い危険が!

今まさに!

俺に向かつて迫っていると!

次の瞬間、

一人の人間から放たれたとは到底信じられない剣撃の雨霰が、
無情にも俺の全身を飲み込んだ。

修羅と英雄（完結）

【和真視点】

俺は生まれつき直感がずば抜けて鋭い。どういうわけか知らねえが（というか断言できる理由などどれだけ探そうが、俺には多分見つけられないと思う）特に自分に降りかかる危険に対してはつきり察知できる。

だから、すぐにわかった。

この攻撃はどうあがいても避けられない、と。

先ほどまでとは比べ物にならないほどの剣速で繰り出される、上下左右からの無数の斬撃……それを察知した俺の判断は我ながら迅速だったと自画自賛したいくらいだ。避けることはこの際スッパリと諦め、この無数の斬撃から俺にとつて致命的な攻撃を見抜き、それを捌くことに全力を注ぐ！

ズガガガガガガガガガガガガアアアアアアアアン!!!

「ぐ……おお……!!」

凄まじい衝撃に俺の肉体が悲鳴を上げ、全身の骨が軋むの感じた。ま、マズい……！
こんなもん急所を避けたところで耐え切れるもんじゃねえ……ここまでか!?
流石の俺も敗北を覚悟したそのとき……

ブチブチブチブチブチイツツ!!

何かが千切れるような嫌な音とともに、俺を襲っていた斬撃がピタリと止んだ。
い、いったいどうなってやがる……!?

慌てて周囲の状況を確認しようとしたが、耐え難い激痛のせいか瞼を開けることすら
ままならない……いや、それどころか意識が朦朧としてきやがった……。

ヤベエもう限か――

ビリイイイイイイイイッ
!!!!!!
「~~~~~ツツツ!!!」

気絶する寸前の寸前、俺は咄嗟に手の生爪を剥がして無理矢理にでも意識を覚醒させた。因果応報の激痛が俺に襲いかかるが関係無えっ! どうしてもぶつ倒れるわけにはいかなかったからな……!

意識を取り戻したことで周囲を確認すると、俺の目の前でオオトリが倒れ伏していた。……いや、どうしてそうなった?

「ぐうつ……!……私の……敗け……か……!」

どうやら意識はあつたのかそれとも俺の絶叫で覚醒したのか、突然オオトリが敗北を認めた。

いや、だから……どうしてそうなった!?

「なんでお前倒れてんだよ……? わけがわからな過ぎて勝ち誇れねえよ……!」

「なに、このザマは単なる自滅だ……。水嶺流玖の型『百川帰海』……この技は人が自衛のため……無意識にかけている筋肉のリミッターを外すことで……桁違いの速度の斬撃で敵を覆う必中の剣……。だが、この技は今の未熟な私では……到底使いこなせる代物ではない……。それでも使ってしまった結果は、これだ……。この……無様な姿だ

俺の直感が身に降りかかる脅威を察知した。慌てて周囲を見回しても該当しそうなものは何もなかったが、耳をすましてみるとこちらに向かつてくる足音が複数……。原因はこれか……。だが誰だ!? 確かにここはヤンキーが溜まり場にしようなトコだか、いくら不良でも怪我したガキに襲いかかるなんてマネは……。っ。

ああ、成る程な……

「さつき俺がブチのめした閨高とやらが、援軍を連れてお礼参りに来たってわけか。……なんつうか、清々しいほど器が小つちえな」

いくらボコられたとは言え、小学生のガキ一人へのリベンジに複数でかかるかね? 格好悪い……。

まあそれはともかく、ここはさつきとズラかるか。尻尾巻いて逃げるみてえで正直いい気はしねえが、こんなボロボロな状態じゃあな……。背に腹は帰られねえ。

……。あ。こいつどうしようか……。

アイツらはいいつが俺のクラスメイトだと知らないだろうし、もしかしたらスルーしてくれる……。わけねえよな。俺のいた場所に同年代らしきガキが転がってたら、俺がどこ行つたか問いただすに決まってる。……。そしてこいつは頑として口を割らねえんだろうなあ、何となくわかるぜ。そうなつたらこいつはおそらくあのクズどもに……

……。

「……………つてオイオイ！なに考えてんだ俺……………可哀想だけど見捨てるしかねえんだよ……」
 人一人担いで逃げ切れるわけねえし、だいたい俺が逃げなきゃならねえのはコイツのせいなんだ。こいつがどこでどうなるうと自業自得で、俺には何の関係無いだろう？

そもそも俺は誰だ？善人オトリとか正義みの味方たいな奴、そういつた小綺麗なモンとは対極の人間……………そう、それこそこつちに向かって来てるクズどもと同類の人間だ。今さらガラでもねえこと考えるな、偽善極まりねえんだよ気持ち悪い。ふと頭に浮かんだ血迷ったとか思えない考えを一蹴してから、俺は踵を返してズラかろうとして……………

先ほどとは別の考えが頭をよぎったことで、俺の足はその場から一步も動かなかつた。その考えはさっきの偽善極まりないものとは違つて……………実に俺らしいものであつた。

「……………あーあ、運が良いなオオトリ。」

結果的に、俺はお前を守るために死線を潜ることになつちまつたぜまつたくよお……………」

俺の愚痴が言い終わるや否や、閨高のチンピラ軍団が姿を現した。ひいふうみい……………8人か……………ほんとどうしようもねえなコイツら。

「オウそこの『ガキ』……………『テメー』がうちの『舎弟』モンを『可愛』ホがつて『くれた奴か？』!?

リーダーらしき奴が俺に確信を持った目で訊ねてきた。わかってんならいちいち確認すんなよ面倒臭え……。

「……だつたらどうした？」

「俺達『餓斗^{ガトリン}燐^ン愚』に『上等』かました『野郎』は絶対に生きて帰さねえ……死にかけ

『なとこ悪いが、『テメー』は『ここ』で『潰す』!』!?

どこまでもテンプレだなこいつら……。

……仕方ねえ、腹括くるか。

覚悟を決めた俺はオオトリを庇うように立ち塞がり、ふらふらの体に鞭打ち構えを作る。

「………上等じゃねえか、かかってこいよ三下共」

「そんな『ザマ』で『何』ができる! そうだな……『ツヨシ』! 『殺つ』ちまえ!」!?

「オウ!」

ボス猿の言葉をきつかけに、ツヨシとやらが金属バットで殴りかかってきた。その様子を見て俺は確信する。

……こりやダメだ。さつきブチのめした奴レベルならワンチャンあつたが……このツヨシとやらはレベルが違う。万全時でも手こずりそうなほど強え。ましてや今の満身創痍な状態じゃあどうしようもねえな……。

俺が諦めたことがわかったのか、ツヨシとやらも奥にいる残りのチンピラ共も俺に嘲るような笑みを向けてきた。

……ムカつくなあ。

年下のガキに大人数でリベンジしようとしてるっただけでも小物なのに、その上武器まで持ち出すような救いのような無いゲスヤロー共のくせに凶に乗りやがって……！

……俺は、俺はこんなクズ共に蹂躪されて終わるのか？

やっぱ、それは嫌だなあ……

「何、笑つてやがる。『テメー』!?あまり、いい気になるなよ!」!?
 「『ツヨシ』の『仇』……『討たせ』てもらおうぜ!」!?

チンピラ共が臨戦体勢に入ったので、俺も金属バットを持って奴らに接近……すると見せかけて手に持ったバットをその辺に投げ捨てる。

「!?」

「!?」

「!?」

突然得物を捨てた俺にアイツらが何やら面食らってるみてえだが、今の俺にこんなチンケな武器はふさわしくねえ。そうだな……おっ♪あんな所に『車両禁止』の道路標識があるじゃねえか!

あれにしよう。

呆然とするチンピラ達を捨て置いて俺はその標識の根本を掴み、

そのままアスファルトから強引に引っこ抜いた。

「はあっ!」!?

「う……嘘、だろ……?」!?

「『ドコ』にあんなちがるぎやぶっ!」!?

「け… ケンジ… イイイイ!?」!?

何やらボーっとしてたので、とりあえずケンジとやらが射程圏に入るまで接近し、手に入れた武器（道路標識）でぶん殴った。うん、使い心地もバツチリだ。

「な… つ!? こ、こいつ… …!?」!?

「は、速すぎ… …!?」!?

「違う違う、違うんだよ… …。テメエらが遅すぎるんだよこのダボが!」ゴオオオオオオオオオオ!!!

ドゴシヤアアアアア!!

「ぐげええええ!」!?

「がはあああ… …つ!」!?

未だに動揺の抜けきつていねえカス二人を容赦なく始末する。さて、そろそろこいつらも気を引き締め直したかな?

「び、びびって… …んじゃねえ! “囲ん”で“フクロ”にしちまうぞ!」

リーダーらしき男の掛け声で、残りのチンピラ達が俺を取り囲む。やれやれ、まだ格の違いがわかんねえのかこの低能共は… …。

「テメーら、生きて帰れると思うなよ? … …。まとめて血祭りに上げてやらああああ!!」ゴオオオオオオオオ!!!

「……………なぜだ？」

「…ああ？」

カス共を一人残らず始末し終え（別に殺したわけじゃねえ。アイツらは生きてる……からうじて）、オオトリを背負った状態で帰宅していると、突然オオトリが話しかけてきた。起きたんならさっさと降り…：そーいや全身肉離れだったなコイツ…：仕方ねえ、我慢して聞いてやるか……。

「なぜお前は最初、私を庇おうとしたのだ？初めから勝算があつたわけじゃなかったの

だろう?」

「……ハアツ!?てめ、意識あったのかよ!?!」

「半分ほどな。かろうじて意識はあったが、口が聞ける状態ではなかった」

マジかよ……!?!?つてことは何だ、きっきのハイな状態の言動も全部聴かれてたつてことかよ……うわヤベ、思い出すだけで心にク……。

「それで、どうなんだ?お前は『人助けなんて自分には似合わない。今までさんざんぶつ壊しておいて偽善にもほどがある』……などと思っているクチだろう?」

いちいち見透かしてくんじゃねえよ。まあそれはともかく、こいつを助けた理由、ねえ……

「もったいないから……だな」

「?……どういうことだ?」

「俺をここまで追い詰めたような奴が、あんな三下共に潰されて終わるなんざ……割に合わねえだろ?」

オオトリは一瞬ポカンとしてから、どういいうわけか面白そうにクスクスと笑いやがった。

「……オイ、何がおかしいんだコラ」

「それで自分が潰れては本末転倒だろう?」

ぐ……痛いところついてきやがって……。

「まあ、面白いのはそれだけじゃないのだがな」

「……今度は何だよ？」

「ヒイラギ、何故私が分不相応な奥義まで持ち出してお前に勝とうとしたか疑問に思わなかったか？」

「……そういやそうだったな、というかそれ以前になんで急に喧嘩売ってきたのかすらわからねえんだけど……。」

「それはな、単純に度しがたかったからだ。人には欲望を制するための理性がある。イライラするからぶつ壊したいなどと本能に身を任せて暴れまわるなど、私にとって到底見過ごすわけにはいかない」

「へーへー、なるほど。それはまた優等生様らしい言い分だな」

それで俺のこと獣だ何だと抜かしてたのかこいつ。

「……とまあ、ここまでが建前だ」

「あ？建前？」

「私もお前と同じでもつたいたいと思っただけだからさ。……お前は同年代では私に初めて土をつけた奴だ。そんな奴が弱い者苛めで満足しているなど……はつきりいつて割に合わんだろう？」

……なんだよそりや。

「……………ふ、ふふ……」

「……………はっ、ははは……」

「あははははは！あーっはっはっはっはっはっはっは！！！！」

その後、満身創痍で俺達はそれぞれ母親にこつてり絞らながら入院生活に入った。親に頭が上がりたくないのはお互い様だな。結構ヤバい痕跡をそこら中にほったらかしにしたままだったが、“鳳”から圧力をかけて一切合切揉み消してくれたお陰で学校からの処分は無かった。権力万歳。

今回の件で俺達は“カズマ”、“ソウスケ”と呼び合うほど仲が良くなった。そのお陰か、徐々に他のクラスメイトとも打ち解けるようになった。

で、肝心の俺の破壊衝動はというと……ソウスケの提案でスポーツに打ち込むことで理性で抑えつけた分の鬱憤を晴らすことになった。以前までは俺についてこれる奴が

いないせいでむしろ逆効果だったが、今は俺と互角に渡り合えるソウスケがいる。これでは退屈する暇も無さそうだけ。

あと、不良どもをボコる際にその場の全てを破壊尽くしたせいなのか、ボコった奴らが相当名の知れた奴等だったからか……地域での俺の異名が「破壊神」になった。ヤンキー狩りはやめてしまったので、しばらくこの噂は一人歩きしてどんどん尾ひれがついていくことだろう。

……解せぬ。

和真と優子①

【優子視点】

「ふう、やっと登りきれた……。これから三年間通いつめるとなると少し憂鬱になるわね……」

周りに誰もいないことを確認しつつ、アタシは愚痴のような独り言を呟く。今日からアタシの通う文月学園の校舎は急勾配の坂の上……。いや、むしろ山の上に建っているという清々しいほどの不親切設計だ。通る道によつては坂が急すぎて自転車から降りないと登れないほどで、その分帰りは何とも爽快な気分……。なるかと思えば傾斜が急過ぎて全力で漕ごうものなら安全面のまるで保証されてない絶叫マシンに変貌してしまふ。よつて結局朝の登坂で費やしたエネルギーは、自転車のブレーキによる摩擦熱に変換されて終わると……。改めて整理するとなんとまあ不合理極まりないこと。

アタシは徒歩だからまだマシだけど、それでもしんどいことには変わりない。まったく、何を考えてこんな場所に校舎を建てたのやら……。普通に考えれば金銭的な理由なんでしょうけど、この学校についているスポンサーは言わずと知れた四大企業と来たもんだ、そんなケチ臭い理由ではない気がする。……。ま、一庶民のアタシがそんなこと考

えてもしようがないか。

「……眺めは悪くないわね」

立ち止まって周囲を見回してみる。眼下には見知った自分の街と知らない郊外へと続く道の二つの光景が広がっていた。現在の時刻は7時半と、入学式まではまだ一時間以上余裕がある。入学初日とはいえこんな早くに登校している生徒はアタシの他には今の所見当たらない。アタシも別に物好きでは無いので、こんな早くに登校せざるを得ない自分に少しだけ辟易している。

アタシは猫かぶり、というか……周りから何でもできる優等生に見られるための努力に人生の大半を費やしている。双子の弟が演劇狂いであるように、アタシも木下家の血の性からは逃れられないようだ。

その後アタシは校門で待機していた色黒の大柄な先生に挨拶を済ませ（「こんな朝早くから感心だな」と褒められたがこっちの台詞です。教師って大変ね……）、新入生在校生教師父兄用の椅子が並べられた体育館で自分のクラスと座る席を確認する。アタシは1—Aで、座る座席は右から二番目かつ前から二番目だ。

文月学園は完全実力主義の先進的な進学校だ。一年目はクラスによる優劣は存在しないようだが、席順は入試での成績順で決まっているらしい。この席順を見て教師は鼻屑する生徒を選別するのではないかと想像するとどんよりとした気分になるが、席は男

女で別れているためアタシは自分のクラスでは二番目に成績の良い女子ということになる。たしか入試でのアタシの順位は5位だったから、よほど各クラスに偏りがなければアタシより成績の良い男子はいないだろう。……学園生活の滑り出しとしては上々ね。

そんなことを考えながら指定された場所に向かうと、既に先客が座っていた。アタシの右隣、つまり1—Aの男子で二番目に成績の良い生徒の席に男子が一人。

赤みがかつた黒髪の無造作ヘアにやや細身ながら引き締まった体、そこそこの高身長と見るからに運動が得意そうな外見だ。……あと、やけに可愛い顔立ちね。男子に可愛らしいは禁句だとはわかってはいるけど、それにしたってこれは……。流石に女子に間違われることはないだろうが、演劇バカの弟がメイクしたら男子だと一目でわかる人が皆無になりそうなほどの童顔だ。

……まあ、その弟はノーマイクでも男子だと認識できる人が皆無、どころか家族でもアタシとの区別がつかないほどなんだしそう驚くことでもないか。

この男子生徒は見るからに退屈していた。同じ雑誌を100回ほど連続でひたすら読み返せばこのような表情になる、というくらい明らかに退屈そうな表情だ。

こう言つては失礼だがとても真面目な優等生タイプには見えないので、こんな朝早くからスタンバイしているのはちよつと不思議に思った。……もしかして、式の始まる時

間を8時だと勘違いしたのかな？意外とドジっ子？

アタシがそんなくだらないことを考えていると、その男の子はこちらに気づいたのかアタシの方をじろりと見る。

「オイ、心の内で勝手に人をドジっ子扱いしてそんなそのお前。つつ立ってねえでさっさと座れよ」

なんでわかったの!?

「そ、そそそんなこと思っていないわよ！妙な言いがかりはやめ…やめてよね！」

「いや動揺しすぎだろ……。おおかたどう見ても優等生には見えねえ俺が、入学式とはいえなんでこんな朝早くに登校してんのか疑問に思っ、式の開始時間を間違えたんじゃないか？…とか思っただろ」

いやだから、なんでそんなピンポイントで当てられるのよ!?! エスパ―!?

「えつと…ごめんなさい……っ？」

「いや別に謝って欲しい訳じゃねえよ。アンタの想像通り俺は断じて優等生タイプじゃねえし、そもそも好きでこんな早くにここに在るわけでもねえしな」

そう言っつてこの男子生徒は肩を竦める。とかさつきから思っただけ、可愛い顔に反して意外と荒っぽい口調ね……。

「まあとりあえず初対面だから自己紹介でもしようや。俺は柊和真、これから一年間よ

ろしくな」

「そ、それもそうね。アタシは木下優子、こちらこそよろしくね柊君」

フレンドリーに手を差し出して来たのでアタシも手を出して握手する。そこまで男の子に免疫があるわけではないため若干動揺してしまっただが、自己紹介としてはまあ及第点だろう。

「……ふむ、なるほどねえ……」

しかし柊君は一瞬腑に落ちないような表情をしてから、すぐさま意味深な笑みを浮かべた。ちよつと何よその不敵な笑みは……？せつかく可愛い顔してるんだからもうちよつとこう、あどけなく笑いなさいよ……。

「何か気になることでもあるの？」

「……いや、気にすんな。んなことより式開始までまだ大分時間あるんだし、適当に駄弁って時間潰そうぜ。さっきまで暇で暇でしゃあなかったんだ」

「だったら話は戻るんだけど……時間を間違えたわけじゃないなら、どうしてアンタはこんな早くに登校したの？」

「ああそれな。聞いて驚け実はな……俺、こう見えてスポーツ得意なんだよ」

「ツツコミ待ちかしら」

どう見ても得意そうに見えるわよ。

アタシの指摘を気にも留めず柊君は話を続ける。

「それで今日サッカーの気分だったから、この学校のサッカー部の朝練に混ざろうと画策してたわけよ。ところがだ、今日は入学式だからサッカー部……とかどこの部も朝練やってなかったんだよ。それで泣く泣く体育館で退屈な時間を……」

「やっぱりアンタドジっ子気質じゃない」

「やかましい」

その後もアタシ達は談笑を続ける。アタシは今まで完璧な優等生を演じてきたため社交性には自信があり、柊君はそんなアタシよりも社交性に富んでいたため、さつき知り合ったばかりとは思えないほど話が弾んだ。そして時間経過とともに次第に他の生徒達もどんどん体育館に集まってきた。柊君の前に座ったのはとても高校生とは思えないほど小柄で童顔な銀髪の生徒。柊君は一度会話を切り上げて自己紹介をすると、こちらに振り向き大門徹と名乗りその後は我関せずとばかりに前に向き直った。人付き合いが苦手なタイプなのかな？アタシの前に座ったのは神々しさすら感じさせるほどの黒髪の美人。アタシが今まで見た中で一番整った顔立ちね。柊君と違ってどう見ても優等生タイプにしか見えないのに、この女子生徒は式開始ギリギリにやって来た。柊君が恒例の自己紹介をしようとした（省略したが柊君は彼女の前に来た1—Aの生徒全員と自己紹介を済ませている。ただだけコミュニケーション力高いのよ……あと平賀

君って男子と終君の後ろに座っていた時任君の二人だけ趣味だの特技だのやたら詳しく聞いていたが、なんで？」が、間の悪いことに式開始の合図らしきブザーが体育館全体に鳴り響いた。

パンフレットで学園長と紹介されていた白髪のお婆と、眼鏡をかけたバリバリのキャリアウーマン風の女性がマイクを持って舞台上立つ。

《それではこれより文月学園入学式を開催させていただきます。司会進行を務める第一学年主任の高橋洋子です。まず最初に学園長による新入生の皆さんへの祝辞です。学園長先生、よろしくお願ひします》

《あいよ。コホン……えー、新入生の皆さん。入学おめでとう。アタシは、この学園の長を務めるー》

「変態だアアアアア！」

「僕の話の聞けエエエエエ！」

えつと……どう反応すれば良いのかな？

和真と優子②

【優子視点】

ザワツ

『へ、変態だ?!』

『この学園長は変態なのか?!』

『道理で学費が安いと……!』

《ちよつ…!? どうしてアタシが変態扱いされるんだい!?!》

学園長の衝撃カミングアウト(?)により体育館は喧騒に包まれる。いや…ここ仮にも進学校よね? 明らかに学園長の声とは違うってわかるでしょ……。

「変態が学園のトップねえ……これからの三年間が不安になりますなあ木下さん」

「悪ノリしないの」

「ちつ、しようがねえなあ。さっきの声は、つと……あいつらだろ」

そう言つて柊君は体育館の入口の方を向く。アタシもそちらに視線を移すと、二人の男子生徒がすごい形相で走っているとても珍妙な光景が目に入った。片方は逆立った赤髪に屈強なガタイのいかにも不良っぽい男。もう片方はそこそこ整った容姿をして

いるだけでパツと見は普通……じゃないわね、上半身セーラー服の時点で普通とはかけ離れているわ……。アタシの弟の亜種、つまり実は女性という可能性もゼロではないのだが、そうなる何故下半身は普通に男子制服なのかという話になってくる。総じてこの二人を一言で言い表すのなら……うん、紛れもなく「問題児」ね。

「聞けお前ら！とにかく腕に自信のある奴は出てこい！そうでないやつは邪魔だから下がってろ！」

赤髪の方の男子が体育館中に響き渡るほど大声でそんなことを言い出した。ちよつ……入学式早々喧嘩でもしようっての!?

「えっ、なに!?今度は喧嘩!?今日は一体どうなってるの!?!」

セーラー服の男子(仮)が突然慌てふためく。あの二人、グルってわけでもないのね……。

啖呵を切った赤髪を中心に新入生達が『十戒』のワンシーンのように割れていくなか、好戦的な表情で向かっていこうとしている生徒が約二名……って、

「アンタ達どこ行こうとしてんのよ!?!」

アタシは終君と大門君の手を慌てて掴む。二人はアタシの方に振り向くと、

「何、随分腕に自信があるみてえだから軽く遊んでやろうかと思つてな」

「売られた喧嘩は買う主義なんですね。別に良いじゃないか、『無駄にデカイ奴は何をされ

ても文句は言えない』って法律で決まってるんだからさ」

涼しい顔してとんでもないことをのたまいやがった。

「ダメに決まってるでしょうが!?! 初日から問題起こすつもりなのアンタ達は!?! あと大門君、そんな法律無いから!」

ホント何考えてんのよ!?! こんなのがウチのクラスの男子トップツーパーなの!?! アタシが意地でも離さないとはかりに手を握りしめつつ二人を握りしめる。すると、

「まあ確かに初日から問題起こすのは割とマズイよな。仕方ねえ、ここは引き下がるか」
終君はあっさりとな納得した。あれ? 意外とすんなり説得できた……。一方大門君はというと、

「仕方ないね、ここは君の顔を立てといて上げるから感謝するんだね。……もし僕が将来政権を握ったら必ず『長身撲滅法』を制定してやる」

やたらと恩着せがましいものこのちらもすんなりと引き下がる。というか大門君、どっただけ身長がコンプレックスなのよ……あとその法律が制定されることは絶対無いと思う。

「誰も腕に覚えのある奴はいないのか!」

離れた所で赤髪の怒号が木霊する。ああもう、いい加減にしなさいよ……。周りの迷惑もお構い無しに行動して、これだから不良って嫌いなよ……。

アタシが内心でイライラしていると前の席の女子生徒が赤髪の方を向きながら、心なしか悲痛そうな表情で呟く。

「……………雄二……………」

……………え？知り合い？この……………どの角度から見ても模範生というイメージしか湧かない美少女と、あの見るからに粗暴そうな男が？

「この状況で寝てんじやねえええ!!」

するとまた赤髪の絶叫が響く。声が出た方を向くと、赤髪の不良とポニーテールの女子生徒が対峙していた。近くに座っていた他の生徒は避難しているのに何で座ったままなのあの子!?

「ありやあ寝てんな。随分と豪胆な奴だぜ」

アタシの隣で柊君が感心するように呟いた。アタシも目を凝らしてよく見てみると、確かにその女子生徒は座ったまま眠ってるようだった。な、なんて緊張感の無い……………とどうか、なんでこんな騒ぎの中寝ていられるのよ!?

すると、騒ぎの元凶二人に一人の教師が近づいていく。あの人さつき校門で挨拶した色黒の先生ね。

「ん？ありやあ……………西村センセじゃねえか」

「え？柊君あの先生と知り合いなの？」

「俺の知り合いっつーか、俺の親父の知り合いだ」

西村先生は問題児二人と二言三言ほど言葉を交わしてから、

「この……馬鹿者どもがああつー！」

「「ぎやあああああつー!!」」

騒動を拳一つで収束させた。

いやあの、西村先生……それ体ばー

「違うぞ木下。あれは指導だ」

「強引過ぎない!?というかこれ、教育委員会とかに訴えられたらマズいんじや……」

「はっはっは、お前いくらなんでも四大企業を過小評価し過ぎだろ。この程度のスキヤ

ンダル、余裕で揉み消せるだろうぜ」

「黒っ!?仮にも教育機関が揉み消しとかやっちゃっていいの!？」

え? つてことはこんな高台に校舎を建てたのも不都合なことを隠蔽するため!?

……入る学校間違えたかもしれない……。

その後入学式は粛々と進んだ。予定外の乱入事件で時間が押していたのでやたらと急ピッチで。

入学式終了後、振り分けられたクラスで自己紹介の時間に。教室での席順は普通に出席番号順なのね。あの男子二人とは離れちゃったか、ホツとしたような野放しにするのが不安なような……あれ？黒髪の人はアタシの後ろなんだ。

「じゃあまず私から……この一年間君達の担任を務める布施文博です」

布施と名乗ったその先生は、白衣を着た少々頼りなさそうな男性だ。……多分化学教師でしょうね。

その後淡々と自己紹介は進んでいき、あつという間にアタシの番になる。ここは正念場よアタシ、この自己紹介で奇抜な挨拶をしようものならこれからの一年間……いや、下手したら三年間の学園生活にダイレクトに響くんだから。

「如月中学出身の木下優子です。これから一年間よろしくね（ニコッ）」

結構大きめの拍手を受けながらアタシは着席する。よしっ、手応えは十分……！

別に脚光を浴びたいとか、中心に立ちたいわけではない。欠点を人にさらけ出すのが極端に嫌なだけで、それを防ぐためならいかなる労力も惜しまないのがアタシ、木下優子という人間だ。損な性分だとは自分でも思うけど、こればかりは生まれつきだから

しようがない。

………あと柗君、何故アンタは机に突つ伏して笑いを堪えるかのように体を震わしているのかしら？事と次第によつてはひっぱたくわよこの野郎。

そんなアタシの怒りなどお構いなしに自己紹介が続く。アタシの後ろに座っている黒髪的女子生徒が優雅に席を立つ。なんていうか、ただ立っただけなのに随分と絵になるわね……。

「………神無月中学出身の霧島翔子です。よろしくお願いします」

霧島さんはクラス中の視線をこれでもかと浴びながらも顔色一つ変えずに淡々と名前を告げる。内容こそ特筆すべきことの無いありきたりなものであったが、同性のアタシですら見惚れそうなほど優雅な佇まいであった。カリスマってきつとこういう人と言うんでしょうね……。

その後も自己紹介は続いていき、大門君の番になる。……改めて見ると小学生にしか見えないわね。入学式では問題起こそうとしてたけど、流石に自己紹介は普通に――「臯月中学の大門徹だ。始めに一つきみ言っておくことがある……：僕の身長や顔立ちにとにかく言う奴は 容 赦 な く ブ チ の め す つもりだから覚悟してね」
数秒前の自分をひっぱたいてやりたくなつた。

………おかしいでしょどう考えても!?どこの世界に初めの自己紹介でクラスメイトを

脅す奴がいるのよ!?

皆も同意見なのか（柊君だけ机に突っ伏して爆笑してたけど）

教室中がざわめくのもお構いなしに大門君は着席する。いくらなんでもマイペース過ぎでしょ……。布施先生は注意しようか悩んでいたようだが、結局諦めて次の生徒に自己紹介の続きを促した。

そして自己紹介は続いてゆき、とうとう柊君の番になった。すつごく不安なんだけど……。

「霜月大附属中出身の柊和真だ」

霜月って、あの名門の？意外……。

問題児と思いきや、以外と品行方正なのかも――

「ククク、覚悟しろよお前ら……俺と同じクラスになったからには、平々凡々でありきたりな学園生活は潔く諦めてもらおう!」

アタシの淡い希望は意図も簡単に打ち砕かれた。

何の宣戦布告よそれは!?

「ふむ、具体的にどんな学園生活になるんだい?」

すると大門君がそんな質問する。

「良い質問じゃねえか大門。そうだな、例えば……」

柗君はおもむろに後ろに座っている平賀君に振り向く……心なしか悪意に満ちた笑顔で。

「例えばだ……この男こそ京成中学出身、趣味は音楽鑑賞特技は手品得意科目は社会と、なんとも普通きわまりない男・平賀源二とて、例外じゃねえ！」

「いやなんで俺のプロファイル全部暴露したんだ柗!?!俺自己紹介で何言えば良いんだよ!?!」

「せつかくだから一発ギャグでもしろよ。……これが質問の答えだ。自己紹介で一発ギャグ……一人の男子生徒がさっそく平凡な学生からかけ離れてしまったなあアツハツハツハ！」

「アツハツハツハじやなあああああい!?!」

お……鬼だ………。

クラス中が爆笑の渦に包まれる中、アタシは平賀君に同情の涙を禁じ得なかった。惨い、惨すぎる……。

柗和真……アイツは間違いなく真性のSだ。

そして同時にこう思った。

「頭腦の無駄遣いにもほどがある」……と。

この一連の流れ……間違ひなく計画的犯行だ。おそらく柊君は入学式前に平賀君と知り合ったときには、こうなる算段がついていたのだろう。柊と平賀……自己紹介が出席番号順かつこの二人が同じクラスであるならこの二人の自己紹介は十中八九連続している。だから柊君は平賀君のプロフィールを細かく聞き出していたのだ。時任君のプロフィールを細かく聞いていたのは、自己紹介も成績順だった場合の標的だったのだろう。これだと一見男女混合の際の成績順だった場合を想定していないように思えるが……おそらく柊君の標的は男子に絞っていたと思う。標的を女子にすると、その女子が気弱な性格だったら最悪泣かせてしまい笑い話にならないもの。

ここまで情報を集めれば、あとは大門君にさっきのような質問をしてとでも頼んでおけば準備は完了。思考時間ほぼゼロで一発ギャグをさせられるという、地獄としか思えない状況に平賀君を放り込める。なんかクラス全体も平賀君に一発ギャグを期待するような空気になってるし、大門君みたいな図太い神経をしていなければやらないという選択はできないだろう。

……ごめんなさい平賀君、標的がアタシじゃなくて良かったとかちよつと思っちゃった……。

和真と優子③

【優子視点】

「……………zzzz」

「こいつは……………」

あのハチャメチャな入学式から早一ヶ月が経った。ただ今現国の時間、昨日の席替えで隣になった柗君は始まってまだ10分もたっていないというのに何の躊躇いもなく爆睡している。現国の時間毎回こうなる…というわけではなく、全教科の授業でちゃんと受けるかどうか完全にランダム、というか完全にこいつの気まぐれによる。見事に問題児一着線だが難儀なことに成績はかなり優秀（アタシほどではないけど）なので先生達は完全に諦めムードだし、クラスメイト達は微笑ましいのかそつとしている。

……………でも残念だったわね、このアタシが隣になったからにはそうはいかないわよ。

「ほら、授業ちゃんと聞かなきゃダメでしょ」

起こそうとやや強めに揺すってみたものの、まるで起きる気配がない。……………しようがない、多少乱暴に起こそう。

「んむ…木下……………」

「え？アタシ？」

と思つたら何故かアタシの名前を呼んだ。でも目は瞑つたままだし、もしかして寢言？

「お前今……………」UNO” って言つてなかつただろ…？」

「どんな寢言よ!？」

思わず大声でツツコんでしまった。

「……………木下さん、授業中ですよ」

「え、あつ。す、すみません……………」

先生に軽く注意され、教室のどこからかクスクスと笑い声が聞こえてくる。ああもう、余計な恥かいたじやない……………という先生か、なんで夢の中でUNOしているであろうこいつはスルーなのよ!？」

アタシが世の中の理不尽に憤っていると、また柊君が寢言を……………

「……………何べんやつても同じだつての。わっかんないかなー、時間の無駄だつてよ……………わかりやすく言うのだな、木下が俺に勝つなんざお前が日頃やつてるダイエツトだのバストアップトレーニングだのくらい無駄な努力よー」

……………思わず掴みかかつてしまった私をだれが責められようか。何故かその瞬間に目を覚まして全部避けられたのは余計にアタシを苛立たせた。その後喧嘩両成敗とあう

ことで二人とも嚴重注意を受けることになったことはもっと腹立だしい。

それよりも、ああ……………一ヶ月間必死にこつこつ積み上げたアタシの優等生像が……

「……………いい加減機嫌直せよ木下。そもそもだな、たかが寝言だろうがよ」

「それじゃないわよ!?!いやそれもあるけども!どうしてくれんのよ、アンタのせいでアタシが築き上げた優等生像がパーじゃない!」

「むしろその発言がアウトじゃね?というか木下、俺にはバリバリ地の性格で接するのな」

「どうせアンタにはもうバレてるんでしょ…:だったら取り繕うだけ無駄よ」

「ほー、潔いな。そういうところ嫌いじゃないぜ」

「うるさいわよバカ!」

ただ今放課後。生活指導の西村先生からの軽い説教を受けた後、アタシ達は教室までの道のりでまた口喧嘩を……………いや、口喧嘩というよりはアタシが一方的にこいつに振り

回されている。

柊和真：アタシはどうもこいつに苦手意識があるのよね……。本性をあっさり見抜かれた（アタシの予想では初対面でもうバレてたと思う。今思い返してみるとなんか意味深に笑ってたし）こともあるけど、どうもこいつと話していると何故かカツとなりやすい。愚弟相手ならともかく、アタシそこまで血の気多くないはずなんだけど、こいつは何故か呼吸をするようにアタシの神経を逆撫でしてくるのよ……。

まあそんなわけで、どちらかと言えばかかわり合いたくない相手なんだけど……客観的に見てもアタシ達のクラスの中心は間違いなく柊君だ。こいつははつきり言って社交性の化物で、同学年で面識の無い生徒が既にいないほどの行動力がある。輪の中心に座るのはもはや必然だった。つまり、誰からも好かれる優等生を演じたいアタシからすれば決して避けて通れない相手なんだけど……こいつと関わったら今回みたいに築いた優等生像が崩壊していくのよ畜生！どうすりゃいいのよこんなの！あと、第三者がいるときは頼まなくてもアタシの猫かぶりに合わせてくれているのが逆に腹立つ。そんな気をきかせられるならアタシに余計なちよっかいかけるとかやめてよ！……もしかしてわざとやってんの？アタシがイメージを守るために涙ぐましい努力をしているのを適度に邪魔して面白がってるの？……そうだとしたら心の底からぶっ飛ばしたいと切実に思う。

「でもよお木下、お前猫かぶんなら男子トイレに突撃したりなんて非常識なことはやめとけよ」

「した覚えはないわよ!?!」

何突拍子もないこと言い出すのよこのバカは!?

「え?でも確かにこの前入つていくのを見たぜ?何故か男子制服着て。カムフラージュのつもりか知らんがあんなんで誤魔化せる訳ねえだろ……」

男子制服?……ああなるほど、そういうことね。

「それ、アタシじゃなくて双子の弟の秀吉よ。二卵性なのに何故か瓜二つなのよね……」
「あー、そういうことか。どうりで木下なのに女みてえだっ—おっと……女みてえだったわけだ」

「ど・う・い・う・意・味・よ!?!」

「よっ、ほっ、とうっ……こんな風に暴力に訴えてくる奴よりかは—よっ……可愛げが—ほっ……あるだろう?とうっ……」

「この、いい加減おとなしく捕まりなさいよ!その腕へし折つてやるんだから!」

「それ聞いておとなしくする奴がいると思つてんの?バカなの?脳みそババロアなの?」

「うがああああ!!!」

間接技をかけようとしてもことごとく避けられる。今までも何度か手が出たことがあったけど忌々しいことに全部避けられている。さつきも熟睡状態のこいつに掴みかかったのに避けられたし、ホントどうなってんのよ!?

「まあ落ち着け木下。お前はもう少しゆとりを持った方が良いぞ?」

「誰のせいよ誰の!?!」

「わかったわかった悪かったって。この通り頭下げるから許してくれよ」

「どの通りよ!?!一ミリも下げないじゃない!」

「あ、俺これから徹達とサッカーする約束があるからここら辺でおいとましてもいいか?」

「勝手にしろおおおおお!」

まったく、今日とはんだ厄日よ!

「……とまあこんな感じよ。……まったく、男子ってほんとデリカシーが無いんだから」
「……そう」

下校中、アタシを待ってくれていたクラス代表（一年生は試験召喚戦争が無いため役割は学級委員長に近い）の霧島翔子に愚痴を聞いてもらっていた。代表はクラスでは一番仲が良く、アタシの素も十全に知っているためたまにこうして柊君絡みの愚痴を聞いてもらっている……のだが、なんで毎回心なしか微笑ましいものを見る表情をしているのよ？

「何がおかしいのよ？」

「……優子と柊はいつも仲良さだなんて」

「んなつ!?ど、どうしてそうなるのよ!?!」

いきなり何言い出すのよこの子!?!

「!?…だって、柊とのやり取りを話してるときの優子…いつも楽しそうにしてるから!?!?!」

!?!重ね重ね何言ってるのよこの子!?!

「……昔は、私と雄二も……」

代表が心無しか辛そうな表情になってるけど今はそれどころじゃない!代表の言っ

てることがもし本当なら、まるでアタシが……いやいやいやないない！どうしてアタシが

あんな男を……そりやまあ見てくれはかなりいいし、普段はああだけど肝心な時は氣遣いができるし、話してて退屈はしないけど……って違ああああう！？違うからね！？そんなことあるわけないからね！？

結局その日は悶々としてほとんど眠れなかった…。

「うう……爽やかな朝だったのに瞼が重い……」

ただ今登校中、コンディションは激しく寝不足。物凄く眠たいけど、昨日の今日で授業中寝落ちなんてしちゃったら柊君のこと責められないし、何よりもう取り返しがつか

なくなってしまう。そんなわけで石にかじりついてでも起き続けなきゃならないことを考えると、HR前だつてのに憂鬱になる。

「……………あれ、柊君と……………誰？」

自クラスに向かう途中、空き教室で柊君と見知らぬ女子生徒が向かい合っていた。柊君は自然体だが女子生徒は真剣な表情を……………まさか告白!?! 気まずい場面に出くわしちゃったわ……………。それに昨日の今日で……………いやだから違う! 結論はもう出たでしょ! 柊君がどこの誰と付き合おうとアタシには関係な—

「別れましょう! あなたにはもうウンザリ!」

告白現場じゃなくて破局現場だつたああああ!?! どうしよう!?! もっと気まずい場面だこれ!

「ん、オーケー。じゃあさいなら」

軽っ!?! 少しは動揺とかしなさいよ! ……ほら、女の子の方涙目になってるじゃない!

「バカ! (ブンツ)」

「おっと (スカッ)」

女子生徒としては柊君の横つ面を張つて捨てて台詞を残しつつ去りたかつたようだけど、柊君が避けちゃつたから物凄く残念な絵面に……………いやそこは空気読んでひっぱたかれなさいよ、女の子別の理由で号泣しながら出ていっちゃつたじゃない…。

「予想してたけど、やっぱアイツじゃダメか……ところでその鼠、隠れてないで出てこ
うよ」

「っ」

バレてる!?!なんで!?!あの角度からは見えるはずなのに!

「5秒以内に出て来ねえと、取っ捕まえた後黒板を引つ掻く音を3時間くらい聞かせ続
ける。はいー」

「わああ!?!待って待って!?!」

慌てて空き教室に入る。なんでこいつはこう、嫌がらせの内容が斜め上なのよ!?

「なんだ木下かよ。優等生様にしちや随分とお行儀が悪いじゃねえか」

ニヤニヤしながらからからかうように揶揄してくる。イラつとするけど非はこちらにあ
るから我慢我慢……。

「えつと、その…悪かったわよ……」

アタシが申し訳なきように謝ると、柊君は何故かきよんとした表情になる。

「なんであやま…ああ、そっか。そういや木下は知らなかったな」

と思つたら納得した表情が変わる。勝手に納得してるけど、どういうことよ?

「さっきの、別に珍しいことじゃねえから気にしなくて良いぞ」

「え?珍しいことじゃないって…」

「俺女子と付き合つても長続きした試しがねえし。今までで最長は……三週間くらいだな」

「いや短すぎるでしょ!?!」

何をどうしたらそんな短期間で愛想尽かされるのよ!?

「いいんだよ別に。そもそも付き合う前から長続きしねえつて奴ばつかが告白してくるからな。お前に言つても仕方ねえことだけどよ、俺をアクセサリーか何かと思つてやがる女子多過ぎねえか?」

自分で言うのもなんだがアタシは察しが良い方だ。だから、柊君が何が言いたいのかだいたいわかった。

「要するに、アンタの表面やステータスしか見ていない女子ばかりつてことね」

こいつはルックスも成績も良いし運動もできる、それに社交性も抜群にある。そんなこいつと付き合つてる女子はそれだけで一目置かれてもおかしくないからね。

「流石優等生様、そういうことだ」

「その優等生様つてのやめなさい。バカにされてるみたいでイラつとくるから」

「じゃあ犬畜生で」

「ストレートにバカにしろとは言つてないでしょ!?!」

「じゃあ閣下」

「どうしてそうなるのよ!?……それに、嫌なら断りなさいよ」

「そうしてえのは山々だが、昔それで色々あったからな。……意外かもしれねえがな、俺って意外と口撃力あるんだぜ?」

「全然意外じゃないから安心しなさい」

「わざわざトラブルの素をばらまくのもなんだし、相手が幻滅して離れていくのを待つようにしてるんだ。……俺に振られるより自分から振った方が、相手も安いプライドを守れるだろうしな」

「ほら、そういうところよ」

わざわざ「安い」をつけなくても良いでしょうに……。

「さて、そろそろ教室に……なあ木下」

「何よ」

「お前、何だか疲れてねえか?随分と眠たそうだ」

「?!……一番触れてほしくない相手に……昨夜のことまた思い返してきちやっただじゃない!」

「まあね……昨日中々寝付けなくて……」

やたらと勘の良いこいつに下手な誤魔化しは通用しないので、ここは一部だけ伏せて正直に打ち明けた。

「そうか……木下、午前中は保健室で休んどけよ。先生には俺が言っておくから」
「え?…いや、大丈夫よこれくらい」

「端から見たらそうは見えねえよ。ノートとかは俺が取って置いてやるから」

「いや、だから…」

「俺にはいまいちわからんが、優等生像とやらはお前にとつて大事なんだろ? 昨日の今日で寝落ちなんてしてみろ、もう取り返しがつかねえぞ」

「それは、そうだけど……」

確かにアタシは今寝不足だ。強がっているが、放課後まで起きていられるかというところ……

「……じゃあ、お願いしても良いかな?」

「気にすんな。お前に体とか壊されでもしたら…」

「えっ……」

何よその心配そうな表情……やばい!? 顔が熱くなっていくのを感じる……し、してない! アタシはちよつと優しくされただけで落ちるようなチョロい女じゃー

「最近俺のマイブームになりつつある『木下いじり』がままならなくなる」

「この野郎!」

一瞬でもときめいたアタシの純情な感情を返せ!…いや、そもそもときめいてないから!

和真と優子（完結）

〔優子視点〕

以前までは柊君とは口喧嘩が絶えなかったが、あの出来事以来友達のように接するこ
とが多くなった。……これだとまるでアタシがちよつと優しくされただけでコロツと
いくちよろい女みたいに聞こえるけど、断じてそんなことは無い。周りにどれだけ迷惑
をかけようと少しも気にもとめないクズだと思つてた奴が他者への気遣いができる割
とまともな奴だとわかつたのだ、そりや接し方も多少は変わってくるというものだ。特
に他意はない……ないつたらない！

それにアイツが清廉潔白人物というわけでは断じてない。この2ヶ月でアタシは、
というか少なくともクラスの皆は確信したことは、柊和真は真性のサディストだ。

例えば今も……

「さて、1—A 昼休み裁判の開廷だ。検察官・大門徹、被告人・玉野美紀の罪状を延べろ」
「きそじよー。被告人・玉野美紀は2時限目の体育の時間、僕及び和真の制服をゴスロリ
にすり替えようとした容疑がかかっている。……被告人、何か弁明は？」

「わ、私は悪くないよ！可愛い男の子には可愛い服装をする義務が——」

「判決、有罪」

「そんなあつ?!」

教室で中世の魔女裁判みたいなことをしている最中だ。……まあこれは美紀が悪いわね。終君も大門君も可愛らしい顔立ちがコンプレックスらしいのに、美紀はこれまでもあの手この手で女装させようとしているのだ。それも一度や二度じゃなく、今月に入ってもう10回を越えている。そろそろ本格的に痛い目見る頃だろうとは薄々思っていた。

「被告人を『恐怖! ゴムパッチンの刑』に処す。

徹、準備開始」

「オーケー」

「え、何をーむぐっ…」

終君が合図をするや否や、大門君が美紀を後ろから羽交い締めして、何故そんな物を所持しているのか聞きたくなる、やたらとデカイゴムパッチンを嚙ませてから上顎と下顎を押さえ込んだ。

「くくくッ!! (ジタバタジタバタ)」

「ククク、もう遅えよ。自分の犯した罪の愚かさを悔やみながら、心の中で死のカウントダウンでも刻むんだな」

悪役みたいな台詞とともに柊君がゴムパツチンを持ちながら美紀と距離をとつていき、ゴムがギチギチに伸びきった所で歩みを止めた。

「さてと……すぐ離すのも味気無えし、もう少し勿体ぶるか」

「~~~~ツ!!! (ジタバタジタバタ)」

「3……………2……………1……………」

「!!! ↑目を瞑る

「わバチーーン！」

「?!?!」

「なああんちやつて♪」

「~~~~ツ!!!」

天使のようなあどけない笑みを浮かべながら考えうる限り最も残酷な所業を実行する柊君。う、うわあえげつな……美紀もう恐怖で涙目になってるし。

「お、おい和真……いくらなんでもやりすぎだぞ……」

血の通つた人間とは思えない悪魔の所業を見かねたのか、平賀君が柊君を諫めようと……

「じゃあよ源二、お前が今日一日アレ (ゴスロリ) 着て過ごせよ? もしそうだとしたらこいつは見逃して——」

「すまない玉野さん、僕はここまでのようだ……」

「っ!?(ガーン!!)」

…したがアツサリ引き下がってしまう。ここまでって平賀君……もう少し粘ってから言いなさいよそのセリフは。

流石に見てられないので助け船を出してあげよう。……といってもあの柊君が人の指図を素直に聞くわけではないので、ここは…

「柊君、あんまり遊んでると昼休み終わっちゃうよ? 購買に行かなくて良いの?」

「デメリットを提示して自主的に止めさせるのが正解ね。」

「あ、そういうやまだ昼飯買ってなかったな。…仕方ねえ、この辺で勘弁してやるか」

そう言って柊君はおもむろに手を離れた。

バチイイイイイイイイインツ!!!

「痛あああああああいつ!?!」

ゴムは凄い勢いで縮んでいき、そのまま美紀の顔面に盛大にぶち当たる。大門君から解放された美紀はよほど痛かったのか床をのたうち回って悶絶する。ごめん美紀……そつちを止めさせるのはアタシじゃ力不足だったみたい……。

……とまあこんな感じで、何らかのきっかけでSスイッチが入った柊君は本当に情け容赦が無く、その悪意を向けられた人は今の美紀みたいにロクな目に遭わない。

なんというか、良くも悪くも感性がお子さまなのだ。無邪気で、天真爛漫で、だからこそそれほど残酷な所業でも平然と実行できる。しかし、だからと言って良し悪しの区別や程度のさじ加減がつかないわけではないようだ。わざわざゴムパツチンのような気の抜けるアイテムを使うのも、周囲には笑いを提供しつつ標的にダメージを与えるためだろう。女子生徒を張り倒すのとゴムパツチン、被害は同じでも周囲が感じるイメージには大分差があるだろうから。そういう意味では、柊君もアタシほどじゃないにしろ世間体は多少気にしているのだろう。……だったら授業中躊躇いもなく爆睡するのはやめなさいと小一時間説教してやりたいわね。

「なあ木下、今日暇か？」

「え？いきなりどうしたのよ？」

HRも滞りなく終了し帰り支度をするアタシに柊君が邱にそんなことを訪ねてきた。

「いや、今日は放課後野球でもしようと思ってたんだが思ってたより集まりが悪くてな

……そこで年がら年中暇そうなお前に声をかけたわけだ」

「なるほど、つまり喧嘩売ってるわけね」

利き腕をへし折ってやろうと手を伸ばすもアツサリ避けられる。相変わらずムカつくくらい速いわね……

「ガツカリさせるようで悪いけど無理よ。今日はちよつと読みたい本があつてね」

「あー、通販で買ってるって言う、お前の好きな男同士がーあ、やべ……」

……ちよつと待て、イマコイツナンテイツタ？

「柊」

「（ビクツ……）な、なんだ木下？」

思わず呼び捨てで問いかけるアタシにやや気圧されたように柊君は少々後ずさる。アタシは逃がすまいと距離を詰めつつ、柊を笑顔で問い詰めにかかる。

「なんでアタシがアタシの趣味知ってるのよ？」

その後しばらく渋っていたが逃げ切れないと観念したのか、終君はおそろおそろ口を開く。

「や、あのな木下……先日色々あつてお前の弟の秀吉と意気投合して仲良くなったんだがよ。軽いジャブとしてお前をからかうためのネタでも仕入れとこうかと軽い気持ちで聞いたらさ……そりやもう、これからカブトムシを取りに行く子供のような輝く目でベラベラと話して——」

「なるほど」

終君がいつの間にか愚弟と仲良くなつてることに関しては、こいつの社交性を考えると別に不思議じゃない。……しかしまさか、あいつアタシに隠れてそんなことをしていたとは……。常日頃のアタシのアイツへの扱いを鑑みると不満の一つや二つは仕方ないとは思っているが……アタシの、トップシークレットを、よりもよつてこいつにバラすなんてねえ……さあて、どうしてくれようかしら……？

殺意のオーラを辺りに撒き散らすアタシに、若干躊躇しつても何故か覚悟を決めたような表情で終君が諫めてきた。

「まあアレだ木下、家限定とはいえ年頃の女子が下着姿でだらけるのは正直はしたないと俺は思——」

言葉を言い切る前に私は柗君の頬をひっぱたいていた。今までさんざん避けられたのに何故今回当てられたのかはわからないけど、多少すつきりしたから気にしないことにしよう。

「……いい加減機嫌直せよ木下」

「フンッ！」

頬に紅葉をつけた柗君が話しかけてくるが、アタシはそっぽを向いてそれを拒絶した。

今日は両親が仕事で不在のため料理は自分達でなんとかする必要がある。あの愚弟は料理ができないので必然的にアタシが作ることになるが、食材の買い置きなどはな

かったからスーパーに寄って、ついでに切らしている日用品なども買い揃えておく。最終的にアタシ一人で家まで持ち帰るには億劫になるほどの量になったが、この頬に紅葉をつけた男に乙女の秘密を暴いた罰として持たせるので全く問題なし。時折通行人にクスクスと笑われているがフオローなんかしてあげない。むしろ良い気味である。

「いや、我ながらデリカシーに欠ける物言いだったとは思うけどよ、いくらなんでも引つ張り過ぎだろ。問答無用でシバき回した上にこんな雑用させて、まだ不満でもあるのかよ?」

「不満?あるわよあるに決まってるでしょ!誰にも知られたくなかった秘密が洗いざらい流出したのよ!?!本当ならアンタの脳髓を引きずりだして無かったことにしてやりたいわよこの野郎!」

「お前ってホント優等生なのは外面だけで、一皮剥ければヤクザみてえな奴だな」

柀君はやれやれと肩を竦めながら、バカを見るような目を剥けてくる。ああムカつく!!こいつなんでの確に人を苛立たせるのがそんなに上手いのよ!?

「どうせアタシの下着姿を想像したりしてたんでしょこの変態!」

「ぶっ飛ばすぞクソアマ!」

柀君は顔を真っ赤にして目に見えて動揺する。そう言えばこの二ヶ月でわかったことがもう一つあった。こいつ……こいつ見えてすつつつごくウブだ。そういう方面への

耐性がからつきしと言うか、箱入り娘かつてくらい免疫がまるで無いのだ。クラスのバカ男子達が成人指定の本…要するにエロ本の鑑賞に柊君を誘ったところ、柊君が今と同じように顔を真っ赤にしてそそくさと立ち去ったときのクラス中の衝撃とまったくもう…：そういう反応は正直抱き締めたいほど可愛らしいと普段は思っているが、口喧嘩中の今はガッツリ利用させてもらおう。

「凶星？ ねえ凶星？ やーいエロ和真〜」

「よしわかった腕を差し出せ木下。肘のあの、押すとビリビリする部分を思い切りぶん殴ってやる」

「嫌に決まってるでしょバーカ！

〜（こ）までおいで〜♪（ダツ）」

「ハッ、笑わせてくれるぜ…：俺から逃げられるとでも思ってたんのかこのバカ女が！（ズダダダダダツ!!）」

「速っ!？」

どうやら挑発しながら逃走したのは悪手だったらしい。大荷物を抱えながらもかわらぬ陸上部顔負けの超スピードで追いかけてくる。逃げ切れないとわかつてはいるものの立ち止まる勇氣はなく、破れかぶれで路地裏に逃げ込み―

ドンッ

「痛っ!?!」

「ああ!?!なんだあ!?!」

誰かにぶつかって転んでしまった。強く打ったお尻をさすりながら立ち上がって前を見ると、リーゼントに改造制服といかにも不良ですと言わんばかりの格好の男が、もの凄い形相でアタシを睨んでいた。

「おう姉ちゃんよお!?!どこに目をつけて歩いてんだコラアツ!」

「ご、ごめんなさい……」

相手は不良とはいえ100%アタシにある。だから素直に謝ったのだが、男は眉を吊り上げて余計苛ついた表情になる。

「ごめんで済むわけねえだろ!?!迷惑料として30万円払いな!」

「さ、30万!?!ぶつかっただけでなんでそんな額……」

「ああ!?!文句でもあんのかテメエ!?!だったらこの場で痛い目にあわせてわからせる必要があるよなあ……!」

ボキボキと腕を鳴らせながらにじり寄ってくる。ま、マズい……!!

「ひっ……、来ないで……!」

「もう遅えよ。口答えなんかしたテメエのバカさ加減を恨むん!」

「んだよ会話もできねえのかよ、無能だなテメエは。無能なら………ぶつ壊しても問題ねえってことだよな？」

「えー」

次の瞬間、柊君は男の頬を掠めるようにしてバットを降り下ろした。男の頬はぱっくり裂かれ、さつきまで以上の轟音が周囲に響き渡り、衝撃をともに受けたアスファルトには小さくない輝が入り、そして金属製であるはずのバットは………無惨にもへし折れてしまった。

「ちっ、外れちまったせいでお釈迦になっちまったか。バットもただじゃねえつてのに……仕方ねえ、代償はこのバカの肉体で払わせるとするか」

そう言つて柊君は壊れたような笑みとともに、折れたバットを男に向けた。

「ひ……ひい……うわああああああああああああああああ!!」

男は恥も外聞もかなく捨てて逃げ出した。みつともないと言えどもないが、この光景の一部始終を目撃した者で彼を笑える人はほとんどいないだろう。先ほど柊君は外れたと言つていたが……厳密には「外した」が正解だろう。でなければ、あんな薄皮一枚だけ剥かれるようなことにはなつていない。もし彼があつた男に直撃させるつもりだつたら………その考えに至つたからこそ、あの男は一目散に逃亡したのだ。

「やれやれ、やっぱり外見と態度だけ取り繕つた半端モンだつたか………さてと、」

「っ………え？」

ガラクタと化した野球道具を懐にしまいつつ柊君はこちらに振り向いた。さっきまでの言動がアレなので思わず強ばってしまうが、柊君はさきほどのような壊れた笑みを浮かべてはいなかった。笑みは笑みでもあれは……必死に隠していたものが露見してしまつたがために何かを諦めたような、それでいて寂しげなものだ。

「まあ見ての通り、俺は色んな意味でマトモじゃねえ。正直お前がこれからも周りに優等生として見られてえなら関わらない方が良い……というか、関わっちゃダメなタイプの人間だ。ここらでバツサリ縁を切っておくべきだと思うぜ？お前が望むんなら俺も関わらねえようにするから安心しな」

「……………」

柊君の言い分に色々と思うことはあるが、今アタシの胸の内にある率直な感想はとうとうと……

なんかイラつとした。

イラつとしたので即行動。アタシは柘君に近づいて両の頬を思いつきり引つ張つてやった。アタシの行動が予想外過ぎたのか柘君はしばらくされるがままの状態で硬直した後、おそるおそる口を開く。

「や、あのさ木下さんよ……何やってんのお前？」

「くだらない」と言い出した罰よ。まったく……アンタの中のアタシはどれだけ救いたい女なのよ？」

何なのよあのこちらの顔色を伺うような、どことなく寂しがつているような、心の底では拒絶されることを恐れているのが見え見えの表情は？さっきアンタが言ったように優等生としてのアタシはあくまで外面だけの仮面でしかない。でもね……あんな顔をするような子を見捨てられるほど、アタシは血も涙もない人間じゃないのよ！

「……逃げないからね」

「……は？」

「アタシは絶対、アンタから逃げたりしない！アンタが腹の中で何を抱えていようが知ったことじゃ無いわよ……決めた！アタシはアンタの隣に立つて、そのねじ曲がつた性根を叩き直してあげる！」

「……拒否権は？」

「無いわ。これは決定事項よ」

「……………く、ふふふふ、あーはっはっはっはっは！」

柊君は突然狂ったように笑いだす。しかし表情は今まで見たことが無いほど穏やかであつたため、気が触れたわけではないらしい。

「何を言い出すかと思えば、堂々と粘着宣言、しかも勝手に人をひねくれ者扱いした挙げ句に矯正宣言かよ、俺もとんでもねえ奴に目をつけられちまったもんだ。……やれやれ、お前も大概マトモじゃねえな」

「な、なんですつてえっ?!」

「……………だが、気に入った」

そう言つて柊君はアタシに不敵な笑みを向けてくる。

「だが良いのかよ木下？俺の隣に立つてことは、俺に好き放題振り回されるとイコールだぜ？俺自重とか遠慮とかとは無縁の人間だぜ？お前のこと好き放題引きずり回すぜ？休日もお構い無しだし、よほどのことが無い限りお前の都合も一切考慮しないぜ？それに俺、両手両足の指じや数えきれなくらい女子と付き合つたけど俺の無茶苦茶さに耐えきれず皆すぐリタイアしていったぐらいだぜ？」

「上等じゃない！どこからでもかかつて来なさい！こう見えてアタシ、重度の負けず嫌いなんだから……………だからアタシのことは名前で呼びなさい」

「あん？なんでだよ？」

「負けず嫌いって言ったでしょ？ 秀吉が名前呼びなのにアタシか苗字呼びなのは納得いかないわ」

「理由それかよ!?!……まあ確かに、俺の隣に入ると宣言した奴を苗字呼びは違和感あるな。だったら俺も和真で良いぜ?」

「それじゃこれからよろしくね、和真!」

「こちらこそよろしくな、優子!」

動揺してはいけない土屋家①

【雄二視点】

「まったく……最近、ババアの召喚獣のせいでヒデえ目に遭うことが多いな」

「そうだね。困ったもんだよ」

子供型の召喚獣が出る、という騒ぎがあった、翌日の放課後。俺と明久は報復（学園長室の机の引き出しに鍵をつけて『どれかが当たり。頑張つてね♪』というムカつく文面の張り紙とともに偽の鍵百個と当たりの鍵一個を混ぜて机の上に置いてくるといふもの）を終えて二人で廊下を歩いていった。ちなみに和真の案で机の中には『中の物はこの机の別の引き出しに移して置いたよ。無駄な努力御苦労様でした（笑）』と書かれた紙切れだけが入っている。人を苛立たせることに関しては他の追隨を許さないよなアイツ。

「そもそも、身体よりも精神にくるものが多いっていうのがいやらしいと思うんだ」

鞆を回収しにFクラスの教室へと向かう途中、明久がそんなことを言い出した。まあ確かに勝手に本音を喋られたり子供のシミュレーションをしたりすんのはなあ……常に平常心でいられる俺ですらうんざりしてるのだから、他の奴には苦行そのものだろう

な。特に…

「確かに、俺ならともかくお前みたいに取り乱しやすい奴にはキツイよな」

俺が至極当然な意見を述べると、なぜかこいつは心外だとても言いたげな表情になった。

「それはこつちの台詞だよ。僕は太抵冷静に対処しているけど、雄二はいつも隣でアタフタしてるじゃないか」

……はあ？何言ってるんだこのバカは。

「お前こそ何言ってるやがる。どう考えても俺の方が常に冷静沈着な態度を保っているだろうが」

「いやいや、僕の方がクールに振る舞ってるよ。動じないこと山の如しって感じだね」
なんて会話をしながらFクラスのドアを開けると、

『木下が今着ているメイド服のリボン、一万から！』

『一万五千！』

『二万！』

『何を勝手に人の衣装を売買しておるのじゃ!?これは演劇用じゃから、お主らには渡せんと言ってる……とにかく放すのじゃー!』

教室の中ではクラスメイトがオークションみたいなの、というかオークションを繰り広げていた。翔子は確か木下姉に呼ばれてAクラスに行ってるんだっただけだ。だから和真も珍しく教室で惰眠を貪ってるのか。

「ほらね？ 平常心の塊の僕だからこそ、教室に入るなりこんな騒ぎがあっても動じないで済んでるんだよ」

「何言ってるやがる。俺だって眉一つ動かしてないだろうが」

『平然と会話を続けとらんで助けんかあああああああ！』

輪の中心から秀吉の叫び声が聞こえてくる。

最終的に騒音で安眠を妨害されたせいで超絶不機嫌モードに移行した和真があつという間に全滅させて幕を引いた。そういやこいつらはまだ知らなかったっけ、寝起きの和真は冗談抜きで危ないってよ。

「お主らの平常心、じゃと？」

「うん。僕の方が雄二なんかよりよっぽど冷静沉着だと思うんだ」

「まだ言うか。絶対俺だつての」

「……ワシはそんな話の為に見捨てられそうじゃつたのか……」

「つうことはアレか？俺の安眠が妨害されたのも元を辿ればお前らがくだらねえ争いに夢中になってあのポケどものバカ騒ぎをすぐに止めなかつたからだつてか？オイオイ良い度胸してんじゃねえか……ブチ殺してやるからちよいと面貸せや」

「よすのじゃ和真!?お主の気持ちはわからんでもないが蒸し返すでない!」

据わつた目で俺達を睨みながらこちらへにじり寄つてくる和真を、秀吉が後ろから羽交い締めして食い止める。あまりの迫力に金縛りにあつたかのように硬直していた俺と明久がその様子を見て安堵する。こいつが本気でキレてたら秀吉が抑えきれぬはずないしな。俺達の反応に不服そうな表情をしながらも、ようやく和真は矛を収めた。さて、命の危機が去つたところで話をもとに戻すが……

「雄二なんていつつも霧島さんに振り回されて動揺しまくりじゃないか。絶対僕の方が冷静だよ」

「寝言は寝て言え。お前のどこが俺より冷静だつて言うんだよ」

「全部だよ。その証拠に今この瞬間だつて僕の方が冷静じゃないか」

「嘘つけ。秀吉の格好に動揺しまくつてくるくせに」

「何を言つてるのさ雄二。僕はこの通り、取り乱すことなく冷静に鑑賞して」

「どれどれ（ピラッ）」

「卑怯なっ!?（ダバダバダバ）」

「雄二よ、なにゆえワシのスカートを一―一まあ、男同士じゃから構わんのじゃが……」

「すまん秀吉、一応中は見えない程度に捲ったつもりだ」

「なぜそこで謝るのじゃ!? 男同士じゃから構わんと言っておるのに!」

「とにかく、これで明久の方が動揺しやすいということは証明されたはずだ」

「よし、さっそくこのことを霧島さんにリークしに……」

「なっ!? テメエ汚ねえぞ!」

「ほら! 雄二だつて動揺してるじゃないか! やっぱり僕の方が冷静だよ!」

「何を!」

「やるか!」

「まったくこのバカとききたら、さっさと負けを認めれば良いものを……ここは第三者に現実を突きつけさせるとするか。」

「秀吉と和真! どつちが冷静だと思う?」

「どつちもどつちじゃと思うのじゃが……」

「そんな意見は断じて認めん。」

「つーかお前らが冷静? とうとう頭に蛆か何かでも湧いちまったか?」

呆れたように答える秀吉と、可哀想なものを見るような視線を送ってくる和真。秀吉はともかく、すげえムカつくなこいつは……！ちよつと前までは和真も木下姉絡みですぐテンパってたからそこにつけこめたが、耐性ができたのかそれとも痩せ我慢してるのか、少なくとも俺達の前じやまったく動揺しなくなつたからなコイツ……その代わりに以前にも増して木下姉に飼い慣らされてるみたいだが。

「そもそも、そういったことは同じ条件で比較せねば優劣などつけられんじやろ」

「野球と水泳で優劣を決めようとしてるようなもんだな。んなもん勝敗云々以前にそもそも勝負として成立しねえよ」

秀吉が諭すように言い、和真もそれに賛同する。

まあ確かにそうだな、今のところ俺と明久じや動揺する条件が違うだろうし。

「それなら条件を揃える必要があるな」

「だね。同じ条件なら僕は雄二なんかには負けるわけないんだから」

「なんじや、まだ続ける気か？」

「当然！」

「こんなバカに侮られたまま終われるわけがねえ！」

「あー、やつちまつたなあ……雄二に明久、すまねえ」

突然、和真が携帯を片手にバツの悪そうな表情でそんなことを言い出した。いきなり

何だ？ やっちまった、つて……なんだか物凄く嫌な予感が――

『お前ら二人がとうとう（美紀的な意味で）一線を越えた』つてメールをついAくEクラスの全員に送信しちまっ――」

「なんてことしてくれてんだキサマアアアアアアアアアア!?」

俺も明久も我を忘れて和真に食ってかかる。こいつは悪魔か!?! いや悪魔だ間違いない! この学園の連中は思い込みが激しいから、そんなネタを吹き込めばあっさり信じてしまうに違いねえことはわかりきってるだろうが! なんていきなりそんな鬼畜な所業を……

……いきなり? …… ……まさか……

「まあ嘘だけどな」

「やり方は悪辣じゃが、お主ら二人が同レベルじゃと見事証明されたな」

やっぱり罨か畜生!?! ……いいや認めねえ!

この俺が? こんなバカと同レベル? そんなこと天地がひっくり返っても認めるわけにはいかねえんだよ!

「違うんだよ二人とも! さっきのはただの声の大きなツツコミで」

「そうだ！あくまでもあれは絶叫ツツコミなんだ！」

「それこそがまさに動揺じやろうに」

「言い訳も同レベルだなお前ら」

ちいつ、これは何を言っても逆効果だな……仕方ねえ、ここは敢えて受け入れることで器の大きさを見せるか。

「ま、まあ、わかったよ二人とも。それなら次からはツツコミも控えるよ。さっきのも別に動揺したわけじゃないけど、誤解されるのも癪だしね」

「仕方ないな。ツツコミを動揺していると受け取られるなら、俺も控えるでしょう」

「それでも認めないとは、本当にお主らは負けず嫌いじゃな……」

「コイツと同レベル扱いされるのが我慢できないだけだ（よ）！」

お互いを指差して叫ぶ。コイツに負けてるのなんざ召喚獣の操作技術と女装のクオリティくらいで、あとは全て俺が上だ！

「しかし、次と言ってもどうするつもりじゃ？」

「じゃあもう一回俺が——」

「遠慮させていただきます」

そもそも題材をこのド外道に提供させるのは人選ミスだ。こいつの凶悪な所業を冷静に対処できる奴なんざ鳳ぐらいだろうよ……。

「しかし、困ったね……」

「うまく同等の条件で勝負できるものがあればいいんだがな」

「……………何を話している？」

俺達が頭を捻っていると、窓の外からムツツリーニが這い出てきた。以前までの俺ならかなり動よーツツコミを入れていただろうが、御門のおっさんが赴任して以来見慣れた光景になりつつある。あのおっさん、鉄人から逃げるとき大概窓から行くもんな……………。

「ああ、ムツツリーニ。実はねー」

くくムツツリーニに事情を説明中くく

「……………なるほど。」

そういうことなら、協力する」

明久のわかりにくい説明を聞き終えたムツツリーニはそんなことを言い出した。

「え？協力って？」

「……………俺が二人を動揺させる仕掛けを用意する。それで勝負をしたらいい」

仕掛けを用意って、それ結構重労働じゃねえか？

「ホントにいいの？」

「(コクリ) ……そういうのを、一度やってみたかった」

こともなげに頷くムツツリーニ。

仕掛け人がムツツリーニとなると不公平さは無いだろうし、和真のような殺傷力も乏しいだろう。

「よしっ。じゃあお言葉に甘えて……勝負だ雄二！」

「けっ。望むところだ！」

「まったたく、お主らは……」

「ほほう、なるほどねえ♪」

こうして俺達の奇妙な勝負が始まろうとしていた。後になって思うが、くだらない意地を張るんじゃないかと心底後悔している。

動揺してはいけない土屋家②

【雄二視点】

週末の放課後、俺と明久は「土屋」と書かれた表札のある家の前まで来ていた。

「覚悟はできてるんだらうね、雄二」

「それはこっちの台詞だ明久」

明久とふたりで、目の前の一軒家を見ながら話す。綺麗な庭に、大きな玄関扉。モデルハウスのようなその家で、これからとある企画が開催される。

「……………まず、ルールの確認」

「ルールつつつても、別に複雑なもんじゃねえから安心しろよ明久」

「なんで僕を名指ししたのかな和真」

「他意は無え……………多分」

「多分!?!」

ムツツリーニと和真の二人が玄関の前で俺達に告げたルールはたった二つ。何があっても平静を保つことと、平静を保てなかった場合罰ゲームを受けることだ。要は常に平常心を保っていれば良いだけの話か……………フン、楽勝だぜ。

「……………アウト判定は別室で待機している秀吉に任せてある」
「了解」

秀吉が判定するなら文句はねえ。今日という今日はこのバカに人としての格の差、そして俺がいかに精神的に大人なのかをわからせてやる！

「……………ちなみに」

「ん？」

「……………罰ゲームは、和真のタイキック」

「……………」

俺と明久の心拍数が跳ね上がった。

「適度に手加減はしてやるから安心しろよ」

「安心できるかあっ！」

冗談としか思えない…というか冗談であってくれと切実に願いたい罰ゲームの内容に、思わずツツコむ俺と明久。すると、

『明久、雄二、アウトじゃ』

どこからともなく秀吉の声が聞こえてきた。

「……………今のを開始後に言われたら、罰ゲーム」

「なるほど」

「景気付けに蹴つとくか？」

「遠慮します」

さっきのはあくまでルール確認だからノーカンだ。そもそもそれがわかっていたからツツコミを入れたんだしな。

「……………それじゃあ、今からスタート」

「おうっ!!」

「俺の出番が来ねえよう、精々足掻けよ？」

ムツツリーニが歩き出す。

さて、ここからが本番だな。

「……………まずは庭を案内する」

「あれ？家の中じゃないんだ」

明久の言葉に頷いきつつ、玄関先から庭へと移動するムツツリーニ。俺達三人もそれに続く。ムツツリーニの家の庭は結構広く、花壇や家庭菜園などが作られていた。

「へえ。トマトを植えているんだ」

「向こうはキュウリか？ジャガイモも植えているみたいだな」

「裏側の方にはアスパラやピーマンもあるぜ。随分とまあバラエティ豊かな菜園じゃ

ねえの」

「……………父親の趣味」

話をしながら更に家の外周を沿うように歩く。多分このバカはこの方法なら食費をゲームや漫画に変えても問題なくなるんじゃないか？……………とか思ってたんだろうな。一つ意見するのなら、生活費を好きに使いたいならその前にあの姉貴をどうにかしないとダメなんじゃないか？

「……………向こうは物置とか、車庫とか」

「ふむふむ」

「今のところ普通だな」

「……………普通の家だから」

「お前が住んでいるって時点でそこはかとなく異論を挟みたくなるなオイ」

心の内でのみ和真に賛同しておく。今日はそう言った発言は動じていると判断されてしまう可能性がある。まあ普通に何かを言うくらいなら大丈夫だとは思うが念には念をだ。和真の黄金の足から繰り出される蹴りは頭おかしいレベルの威力だ、断じて一発たりとも喰らうわけにはいかねえ……………。

「……………じゃあ、家の中へ」

「うん」

そしていよいよ家の中へ。

結局庭では何もなかったか……。

「てつきり何か仕掛けているものだと思っただけ……」

「俺もだ。ずっと警戒していたんだが」

「……………考えすぎ」

「そんなことを言つて、実は玄関を開けたらいきなり何か用意してあるんじゃないの？
靴べらの代わりに鍋つかみがあるとか」

「……………そんなことはしない」

心外そうに言いながら、玄関を開けるムツツリーニ。

スリッパ

スリッパ

便所サンダル（新品）

鍋つかみ

しゃもじ

「……………何か？」

何かじゃねえよこの野郎……！

下唇を噛んで必死にツツコミを我慢する俺達。

「……………今度は家の中を案内する」

「さつさと行くぞお前ら」

そんな俺達を尻目に、ムツツリーニと和真は平然と靴を脱いで、しゃもじを使ってスリッパを履いていた。そもそもスリッパだから靴べらは要らねえだろなんてツツコミんぞ俺は……………！

「行くぞ、明久」

「了解」

俺と明久も靴を脱いでサンダルや鍋つかみを履き、ムツツリーニにそれに続く。しゃもじの隣に「革靴用」と書かれたスプーンが置いてあったが、当然のように無視した。

「……………こつち」

ムツツリーニが階段を上っていく。どうやら先に二階を案内するようだ。

「二階には何があるの？」

「……………俺や兄さん達の部屋」

「そーいや以前、上二人下一人の四人兄弟つつつてたな」

「いいなあ。お兄さんとか、羨ましいよ」

「何言ってるんだ。お前にだって姉貴がいるだろ」

「……あれは……ちよつと、特殊だから」

「気持ちにはわかるぜ明久、俺も父親がアレだし……」

勿論俺にもわかる。なんせ母親があれだしな。

「………ここが、一番上の兄さんの部屋」

「ふむふむ」

部屋のドアには「颯太の部屋」というプレートがかかっていた。

「………ここが、二番目の兄さんの部屋」

「ふむふむ」

さつきと同じように「陽太の部屋」というプレートが。

「………そしてここが俺の部屋」

今度は「ムツツリーニの部屋」というプレートなかつていた。

………「ムツツリーニ」？

「うくツ！」

「アダ名で……」

滑稽なものを見るかのような（いや、実際滑稽なんだろうが……）和真の隣で、込み上げるツツコミの衝動をどうにか食い止める。なんで自分の家でアダ名!? こいつは母

親に「ムツツリーニ、ご飯よー」なんて呼ばれてるってことなのか!? 不憫すぎるだろ！息を止めて堪えている俺達に、ムツツリーニは続けてこう言った。

「……………最後に、妹の部屋」

そして、一番奥の部屋を指差すムツツリーニ。

“土屋の部屋”

「苗字いいーっ!?!」

いくらなんでもおかしいだろこれは!?!何がどうなれば自分の家で家族から苗字呼びされる事態が起こり得るんだよ!?!

『明久・雄二、アウトじゃ』

聞こえる秀吉の声。おのれ…………四段落ちとは卑劣なマネを……………っ!?!

「さて、楽しい楽しい罰ゲームの時間だ」

いつの間にか和真が俺と明久にジリジリと近づいて来る。満面の笑みを浮かべている様子が余計に怖え…………。

「ちよ、ちよつと待—」

「柊和真、容赦せん!」

思わず命乞いをする俺達を一蹴したかと思いきや、まさに一瞬で俺達の背後に回り：

バコオオン！　バコオオン！

「ぐがあああああつ!!」

俺達のケツに蹴りを叩き込んだ。あまりの威力に俺も明久も体を支えきれずその場に倒れこんだ。

い、痛え……っ！チャリに思いきり跳ねられたほどの衝撃を受けたが、確かに手加減はされているようだ。こいつの蹴り、本気でやったらコンクリート程度ならレゴブロックのように碎けるらしいからな……。

「……………大丈夫?」

「いや。全然大丈夫じゃないよ……」

「一撃で意識を持って行かれそうになつたぞ」

「んだよ軟弱だな。」

「ご自慢の打たれ強さはどうしたんだ?」

無茶言うな!……と叫びたい衝動をすんでのところで押さえつける。いくら耐久力に自信があつてもだな、交通事故を平然と流せるほど人間やめてねえんだよ……。

少し休憩を取つた後、俺達はムツツリーの部屋に入る。……しかしムツツリーの部屋か、入るのは初めてになるな。通常時ですらツツコミ所の宝庫だというのに、まず間違いなく企画用に魔改造されているだろうな……。それに、もし和真が仕掛けに一枚噛んでいたとしたら……ここは気を引き絞めて行く必要があるな。

動揺してはいけない土屋家③

【雄二視点】

「……………散らかってるけど」

ムツツリーニがそう言いながら自分の部屋のドアを開ける。その言葉とは裏腹に部屋の中は結構綺麗に片付いていた。

「へえ。ムツツリーニの部屋はこんな感じなんだ」

「やっぱりカメラとかが多いんだな」

「……………（コクリ）」

「明らかに学生にや手の届かなさそうな機材もちらほらあるな。資金源は……………言うまでもねえか」

和真の言う通り、デジカメ一つとっても学生が持っているものとは比べると何ランクも上だろう。そして資金源は間違いなくムツツリ商会だ。まさに趣味と実益を兼ねた機材ってところか。

「本棚は……………なるほどね」

「不自然なほどに辞書や百科事典が多いな」

「つーかムツツリーニの部屋に辞典なんかある時点で不自然極まりねえよ」

「……………どこも不自然ではない」

あのカバーの中にはまず間違いなく辞書とはかけはなれた内容の書物が何冊も入っているのだろう。恐ろしい強敵の目からどうすれば隠しきれるか常日頃思考を繰り返している俺や明久からすれば、あんな隠し場所机の上に堂々と積んでいるのと大して変わらねえぜ。

「ねえムツツリーニ。あの本棚を見せてー」

「んなことより暇潰しにDVDでも見ようぜ。ムツツリーニ、良いよな?」

「……………構わない」

明久の台詞を強引に遮って、テレビの電源を入れてDVDを読み込ませる和真。ムツツリーニが話を逸らすならともかく、なんでこいつが…?こいつがこの場面でムツツリーニのフォローをさるメリットなんて…………

ははあくん、そういうことか。木下姉と付き合いだして多少改善されたとは思うが……………そういえばこいつ、グラビアすらまともに直視できないほどウブだったよな。そうとわかればこんなチャンス絶対見逃せねえ…

「まあそう言うなよ和真。DVDなんざいつでも見れるんだしよ、ここはムツツリーニの秘蔵コレクション鑑賞タイムにー」

「すぐにそのへららず口閉じろ。さもないと次蹴るとき手加減してやらん」
 「さーてこのDVD何が録画されてるかなー？」

触らぬ神に祟りなしだな、うん。

和真がDVDを再生している間に、暇になったので部屋の中を見回してみる。すると、壁のカレンダーに書き込まれている丸印とメモが目には止まる。なにになに……

『9月14日 Aちゃん写真集納品日』

基本的に明久の幸せは大嫌いな俺だが、自分の知らない内にどんどん世界を広げられていくこいつに少しばかり同情した。

と、そんなことをしているうちに、TVの方から音声が響いてくる。

《(ピツ)……鳳蒼介の英語講義く日本文学編く》

画面には鳳がAクラス教室の教卓についている映像が映っている。この時点で和真が一枚噛んでいるのは明白だが、鳳が仕掛人……こいつがさっきのしゃもじやら鍋つかみといったしようもないボケをかますことはないだろうし、さほど警戒する必要はないな。

《今回は日本文学を通して英語を学ぶ。多国の書物を翻訳する際、異なる言語間による差異が原因で奇妙な翻訳をして原書の雰囲気壊してしまうといったケースは意外と少なくない。諸君らが将来そういった職業につくのであれば、ここでの講義は決して無

駄ではないはずだ》

内容もおふざげ要素が一切ないガチなやつだ。……つーかガチ過ぎるだろ。和真、明らかに人選ミスじゃないのか？

《ではまず英文はこうだ。

I am a cat. I don't have any name yet.
I can't remember in where I was born, but I can do that I cried "ニャーニャー" at a dark and wet place. I saw a creature as human there for the first time. Later, I knew that the human was a student who was the vilest race in all human s.》

この文は……『吾が輩は猫である』か。というかおかしくないか？なんで最初に英文なんだよ、この手の講義なら普通は日本語の文を英語に翻訳していくんじゃないか？

《これを日本語に直すとこうなる。

吾んねーまやーどうやる。のーじえーなーだねーらん。まーんじが生まいたらむ

さつとう分からん。ゆー分からんしが薄暗さぬ湿たいみーんじマーウマーウ泣ちよーたるくとうびけーやうびとーん。吾んねーうまんじ初みていにんじんでい言しんちやん。あとうからちやしがうれー書生んでいぬちゆぬなーかんじ一番そーしちぬわつさぬやなさにやたんでいぬ事」

「なんで方言んんんん?!?!」

『明久・雄二、アウトじゃ』

あの野郎、真面目な顔してなんつーもんぶつこんできやがつて！つーかなんであの内容を表情一つ変えず淡々と読むんだよ!?なんかそれだけで笑えてくるわ！

「柊和真、容赦せん！」

バコオオン！ バコオオン！

「ケツがああああつ!!」

そして襲い来る衝撃。俺達は急いでDVDを止めようとするが和真に止められてしまう。その時の和真のなんともまあイキイキした表情と言ったら……こいつ、サデイストスイッチがONになってやがる!?!そしてDVDの鳳は無情にも話を続ける。

《そしてこれを古文に直すところなる》

古文か……英会話の講義なのに古文に直す必要があるのかと普段ならツッコンでいるが、さつきのコテコテの方言に比べたらさしてアレな内容にはならないだろうから安

心―

《つてゆうかあアタシにやんこなんだけど、でもウケることにアタシ名前なくね？ハピバのともイミプくだしマジでチョベリバって感じる。けどアタシ的には超テンサゲなどこでニヤーニヤーとオールでオケってた気も―》

「お前もう黙れええええ（バコオオン！ バコオオン！）ぐあああああつっつ！！」

真面目な顔のまま何ほざいてるんだこいつ!? 古文つーか……それただのちよつと昔のギャル語じゃねえか！ よくあんなふざけきつた文淡々と言えたな!?

「うく、くくくく……ほ、ホントにやりやがったソウスケの奴……」

悶える俺達の隣で和真が必死で笑いを堪えている……もしかなくてもやつぱりお前の差し金か！ というか和真経由つて時点でこいつが鳳にいらんこと吹き込むのは確実だろうが！ なんて警戒しなかったんだ俺のバカ野郎！

俺達がしばらくして痛みから立ち直ると、まだDVDが続いていることに気づく。まだあのかよ……

《……続いて須川亮の、女子の告白を上手に断る方法講座》

聞こえた瞬間、俺と明久はプレーヤーの停止ボタンを連打していた。

「ムツツリーニ、折角こうして遊びに来てるんだ。DVDはこの辺にしておこうぜ？」

「そ、そうだよ。もつと違うことをしようよ」

「……………わかった」

ムツツリーニが領いたので俺達は元の位置に戻る。ふう、当面の危機は脱したな……………。

「そう言えばムツツリーニって漫画とかはあまり持ってないんだね」

「確かに見かけないな」

「……………兄さん達が読んでいるのを、たまに読むくらい」

「あ、そつか。兄弟で貸し借りできるのか」

「兄弟がいる利点だな」

「俺は持つてるのは『キャプ翼』と『ドラゴンボール』くらいで、あとはたまに源太に借りるくらいだな」

「え、五十嵐君漫画好きなんだ？」

「『特攻の拓』とかばっか読んでそうないメージだな」

「やめてやれよ。アイツだって好きでチンピラ顔に生まれたわけじゃねえんだし（カチツ）」

《(ピツ) ……そうですね。どう気遣っても、僕と付き合えないという事実は相手を傷つけてしまいますから—》

「和真あああああアツ!!!」

『明久・雄二、アウトじゃ』

やり方が汚すぎる！あんなキメ顔で“モテる男の苦勞”について語る須川の映像を流されて、平然と観ていられるわけないじゃねえか!?

「柊和真、容赦せん！」

バコオオン！ バコオオン！

「少しは容赦しろおおおお!!！」

再びケツに襲い来る地獄のような衝撃に耐えてから、俺達はムツツリーニに向き直る。

「このDVDはやめよう、いややめてください」

「頼むムツツリーニ。あの須川のキメ顔を観るだけで吹いちゃうんだ」

「……………わかった」

頷いて、プレイヤーからディスクを外すムツツリーニ。助かった……………あんなもん何度も再生されたらあつという間に限界を迎えるところだぜ……………。

「……………それなら、他のDVDは？」

「あ、いや。それは……………」

「や、やめとこうぜ。音が欲しいなら……………」

状況を打開すべく辺りを見回すと、運良く活路を見いだせそうな物を見つけた。

「ほ、ほら、CDとかはどうだ？」

そう言つて俺はCDラックを指差す。

「……………CDはクラシックしか持つてない」

もうツツコミ所しかない台詞だがとにかくスルー。

「いやいや、クラシックでいいじゃない」

「お、おう。クラシックは最高だよな」

「お前らにクラシックの何がわかるんだよ」

余計なこと言うな和真！

「……………そこまで言うなら」

ムツツリーニが立ち上がり、CDプレイヤーの再生ボタンを押す。すると、スピーカーからは荘嚴な音楽が流れてきた。

《二―B 根本恭二、詩の朗読をします》

ついでに余計な声も。

「ムツツリーニ、CDもやめよう。僕、クラシックとか苦手なんだ」

「そうだな、実は俺も性に合わないんだ」

「あ、じゃあ俺の持つてるCDでも聞くか。タイトルは『SOU SUKE―魂のヘヴィメ

タルー』

「遠慮しておきます」

もうタイトルの時点で笑えてくる。

というか鳳、お前も友達だからってこいつの馬鹿げた思い付きにほいほい付き合うなよ!?

「……………了解」

CDを止めるムツツリーニ。だいたいなんで根本が協力してるんだよ……。あれか？一学期散々な目にあわせた仕返しなのか？

「ところでムツツリーニ、ちよつとトイレを借りてもいいか？」

「あ、僕も」

「……………部屋を出て、右手側にある」

ムツツリーニに言われて、俺達は部屋を出てトイレに向かう。

「……………まさか、ここには仕掛けはないよな……………？」

トイレの前に、俺のこの言葉がきっかけて俺達二人に緊張が走る。その後どちらが先に入るか軽く揉めたが、最終的に俺がじゃんけんに勝って明久が先に入ることになった。さて、何が潜んでやがる……………？

【明久視点】

「……あれ？普通だ……」

警戒して個室の中を見回したが、おかしいところは特に無かった。

「考えすぎだったのかな……」

水洗式で、芳香剤やタオルがあつて、あとウオシユレットがついている。壁につけてあるウオシユレットのリモコンには「停止」、「おしり」、「ビデ」の三つ。うん、普通だ—

「ん？」

何かがひっかかる。

もう一度今のところを確認する。ウオシユレットのリモコンがあつて、ボタンには

「停止」、「おしり」、

「ビデ—ーオ？」

「つ—ーつ—！」

即座に息を止めてこみ上げてくるものを堪えた。

ビデオってなんだ……！用を足しながらビデオを楽しめってか……!?普通は、ビデオ
“ だろ……っ!”

ツツコミを入れたい衝動を押しえ込んで、平静を保つ僕。落ち着け僕……またアレを
喰らいたいのか……!

自分に言い聞かせること数十秒、秀吉のアウト宣告は発せられることはなかった。良
かった……本当に良かった……。

息を整えてトイレのドアを開ける。用を足したいという気持ちはいつのまにか消え
去っていた。

「おう明久。どうだった?」

「うん。何もなかったよ」

平然と嘘をつく。折角だし、雄二も僕と同じ苦しみを味わうべきだろう。

「そうか、それほ良かった」

僕がセーフだったからか、安心してトイレに入る雄二。バカめ!セーフだったのは、
僕の精神力が凄かったからだ!なんとなく気になったので、その場で数十秒待ってみ
る。

『雄二、アウトじゃ』

『ちくしよおおーっ!!』

アウト宣告と雄叫びが聞こえてきた。一拍遅れて和真がかけつけ、雄二をトイレから引きずりだして罰を執行した。

「くそ……もう下半身の感覚がねえぞ……」

「ふふっ。あの程度で取り乱すなんて情けないね。あんなのベタベタなネタじゃないか」

「ん？つてことはお前、あれに気が付いても平気だったつてことか？」

どうやら雄二は僕がアレに気付かなかったから平気だと思っていたようだ。やれやれ、僕を舐めてもらっちゃあ困るな。

「平気に決まってるじゃないか。あんな『ビデオ』と『ビデオ』なんて、誰でも一度は思いつくようなネタなんだから」

「なるほど、やっぱり気付いてなかったのか」

「へ？」

「ちよつと来い」

雄二に連れられて再びトイレに。なんだなんだ？

「スイッチの下の英訳部分をよく見ろ」

言われた通りビデオと書かれた箇所の下の文を見る。えつと………B I D E I
「ーッ!!」

ぐ……う……う……つ! B I D E O っ て……! これは……僕でも間違えない
……っつ!!

『明久、アウト』

「くそおおーっ! 雄二、余計なことをーっ!!」

「ざまあみろ」

このせいで僕の下半身の感覚もなくなり始めてきた。

動揺してはいけない土屋家（完結）

【雄二視点】

「……………おかえり」

「遅かったわね」

三人でムツツリーニの部屋に戻ると、なぜか島田が普通に座っていた。

「うっす」

「ただいま」

細かいことにあまり頓着しない和真が無反応なのは勿論、俺も明久も島田がいることについてのツツコミなどしない。余計なリスクは避けるべきだ。

「……………何かあった?」

「いや、何も無い」

「ちよつと手間取っただけだよ」

「なんだよその無意味な強がゴフアツ!」

呆れたような声から一転、和真は急に吹き出した。なんだ!?!何が起きた!?!

「終はどうしたのかしらね?」

敵な笑みを浮かべる。

「な、なにかな？」

「またウチの胸見てたでしよ！」

「ーっつ!! (サツ)」

沸き上がる何かを押さえるべく顔を下げ俺達。

ぐうう……っ！まさか……あの島田がこんな自虐ネタをしてくるなんて……！この企画どんだけガチなんだよ……!!?

「それにしても、肩が凝るわね」

胸ではない何かを揺すりつつ、肩に手を当てる美波。や、ヤベエもう限界……！

必死に俺達が息を止めて堪える中、

「……なんてね、あははっ冗談よ」

島田はその緊張した空気を吹き飛ばすように笑った。そして、笑顔のまま言葉を続ける。

「ところで……アンタたち知ってる？」

「うん？」

「……ウチ、結構傷ついてるのよ……」

「だったらやるなあーっつっ！」

『明久、雄二。アウトじゃ』

何だこの企画!?!何がこいつらをここまで駆り立てるんだ!?!自分を捨ててまで俺達を陥れたいのか!?

「コヒュー……コヒュー……柊和真、容赦せん……!」

バコンツ バコンツ

「いてっ」

「あいたっ」

呼吸が乱れまくってるからか、さつきまでと比べると威力は雲泥の差だった。前から思ってたけどこいつ人の不幸笑い過ぎじゃね?木下姉に飼いやられても本質はまったく変わってないってことか……。あ、島田が親の仇を見るような目で和真を睨んでやがる。

「はあ……はあ……なあ島田……」

「……………何よ」

「ナイス自虐ネタ（笑）」

次の瞬間島田は鬼神のような形相で和真に殴りかかっていたが、案の定全部避けられていた。いつ見ても反則染みた瞬発力と直感だな……。

「どうなってんだこの企画……」

「どうして美波まであんなにアグレッシブに参加してるんだらう……」

あの後島田は諦めて部屋から出ていき、ついでに何故か和真も部屋から出ていったため、部屋の中は俺と明久とムツツリーニの三人だけになった。

「……………細かいことは気にしない」

細かいこと……なのか？考えたところで答えはでないから気にしないが。

「しかしまあ、秀吉が判定係で助かったぜ」

「確かに。秀吉に物真似なんてされたら、平常心なんて保てないもんね」

「ああ、アイツが出てくるのは流石に反則だよな」

はっはっは、と明久と笑い合う。

ガチャッ

「では、今からワシの物真似を見てもらうのじゃ」

「……………」

余計なことを言わなければ良かった、と後悔した。

「まずは、わかりやすいところからいこうかの」

胸に手を当て、秀吉が物真似の準備をする。

「文月学園教師よりー」若者の気持ちを理解しようと思つて萌え文化的を勉強したが、いまいち理解できず勘違いして覚えてしまった鉄人こと西村教諭」

そののどろろがわかりやすいんだよ!?

「……………」

「……………」

一瞬の静寂。

『……………自分……………ツンデレ、ですから』

「ぶっおっ！」

耐えられなかった。

「さて……………」

吹き出してしまった俺達を気にすることなく秀吉は悪夢のような催しを続行する。

「続きまして、同じく文月学園教師よりー」学年主任の才女、高橋女子が絶対に言いそ
うにないこと」

それもう物真似じゃなくて大喜利なんじゃー

『お一人様1パックまでなんて、誰が決めたんですか!!』

「ぶハあつ！」

また耐えられなかった。

「次はさつき和真からリクエストされたものじゃ」

急に出ていったと思つたらあの野郎そんなことしてやがったのか……。

「同じく文月学園教師よりー〃三年学年主任の綾倉慶先生に似合いそうな台詞」

十全に警戒しろ俺。和真のリクエストって時点でロクな内容じゃー

『13 kmや』

「(づ)ほオつ！」

確かにどつちも糸目で腹黒系だけでも！

「次も和真のリクエストじゃ」

アイツは鬼か悪魔か!?

「文月学園生徒よりー〃二—A男子生徒、大門徹が言いたくしょうがない台詞」

は?言いたい台詞?どういうことだ?

「『あ、店員さん。この服もう少し大きいサイズありますか？』」

「だフあつっ！」

訂正……鬼や悪魔ごときじゃあ、こんな残酷なネタは思いつきやしねえな……。

「では、最後じゃ」

もう四度も吹いているというのに、秀吉はまだ畳み掛けてくる。演劇か!? この物真似も秀吉にとつては演劇の一環だからここまで本気なのか!?

「文月学園生徒よりー 〃ーF男子生徒、木下秀吉が絶対に言わないこと。」

そう言つて、少し間を取る秀吉。

「『実はワシは、演劇なんか大ッ嫌いなのじゃ』」

「……………」

耐えられた。

「ん…………む…………? お、お主ら、なぜ吹き出さんのじゃ?」

「……………」

「だ、だって、物真似じゃと言つておるのに、ワシがワシの物真似をしたんじゃぞ? それは普通に考えたら変じやる? おかしいじやる? のう雄二、明久?」

「……………」

「な、なぜそんな顔をしておるのじゃ。笑うのじやる? 本当はもう、堪えきれなくなつて

おるんじやろ？」

「……………」

「う…………うう…………」

「……………」

「お、お主らなんて嫌いじゃあーっ！」

いてもたってもいられなかったよつで、秀吉は全速力で部屋から出ていった。

『アウトじゃアウト！二人とも4回吹き出したから二度罰ゲームじゃー！』

罰ゲームのことはしつかり覚えていたようだが。しかし4連発か…………これはきついな…………。

そんな風にこれから遅い来る罰ゲームに辟易していると、罰ゲーム執行人の和真が部屋に到着した。

「さて、それじゃあタイキツク四連発…………といきてえところだが…………」

ん？なんだ？

「八回も蹴んのは正直かつたるい。それにどうせお前ら一回蹴るたびにのたうち回って時間とられるだろうしな」

なんか雲行きが怪しくなってきたような…………。

「つーわけで…………四回分を一発に凝縮しちゃいます♪」

一瞬本気でそう思ってしまったように、明久はぴくりとも動かない。あれだけの勢いで蹴られたにもかかわらず、明久は意識を失ってるのかなんのリアクションもしなかった。

……ハッ、こうしちやいらねえ！明久の安い犠牲を無駄にしないためにも、俺は早くこの場から――

「逃げられるとでも？」

いつの間にか俺の背後に和真がいた。……というかも蹴りのモーションに入ってやがる!?

「や、やめ――」

「轟け雷鳴！」

ズガアアアアアアン!!!

轟音とともにすごい衝撃を受けたことは覚えているが、それ以降の記憶はまるでない。後から振り替えてみて思うことはただ一つ、こういうバカ企画に和真だけは関わらせちゃダメだ。

violet memory①

【紫苑視点】

日曜日の早朝。

母さんの実家である赤羽家が所有する剣道場にて、私と蒼介は日課の剣術稽古を一通り終えた後、恒例となりつつある十本先取の模擬戦を行っていた。私達の振るう剣は古流剣術『水嶺流』という殺人剣なので、相手の致命傷になる部位に木刀をヒットさせる、もしくは寸止めすると一本というルールだ。ちなみにこの十本先取ルールで私が蒼介に負けたことは一度もなく、今も9対5と既に私がリーチをかけている。

「ほらほらどうした蒼介！もう後が無いんだからシャキツとしな！」

「う、うう……グス……」

私が渴を入れても蒼介が奮い立つことはなく、それどころか今にも泣き出しそうになる始末。

やれやれ……ホントこの子は打たれ弱いというか、将来が心配になるくらい泣き虫だねえ……宝の持ち腐れとはこの子のことだよまったく……。

「う……うわああああつ！」

挙げ句の果てに破れかぶれで剣を振り回しながら突っ込んで来た。精神的に追い詰められた末の行動とはいえ、私も舐められたもんだね……突撃自体は破れかぶれだけど、振るう太刀筋自体は見事の一言、その動きには無駄がほとんど無い。この動きは水嶺流参の型・怒濤……無駄の流麗な動きから繰り出される高速の剣撃だ。

……でもねえ蒼介、私はアンタより二年早く剣を振るっているんだよ？

「馬鹿正直に真正面とは舐めてくれるねえっ！」

「うわあっ!？」

こちららも「怒濤」による高速剣撃で真っ向から迎撃する。激しい激突の末、技のキレの差ど競り勝った私は蒼介の木刀を弾き飛ばし、間髪入れずに無防備になった彼の首元に木刀を添える。

「……………参り、ました……………」

「ん、よろしい♪きさてこれで十本目、今日も私の勝ちだねえ蒼介」

稽古が一段落し朝食を終えた（食事中に会話なんて無作法な真似はできやしない。母様の怒りを買って叩く羽目になること請け合いだ）私は、母方の遺伝が強く出た青紫の長い髪を梳かしつつ弟と会話を弾ませる。年相応以上に背伸びをするのもどうかと思うが、清潔を保つといった最低限の身嗜みは小学生だろうと必要だ。

「それにしても、アンタは相変わらず気が小さいねえ……序盤はほぼ五分なのに差が開きだすとすぐ崩れる悪い癖、どうにかしろっていつも言ってるでしょうが」

「……ごめんなさい姉様（ズウウウン……）」

「はいはい、別に怒ってないから落ち込みなさんな」

……ひとつ訂正、全然話が弾んでなかった。

どうやら模擬戦の最後で精神的に崩れたことを本人も気にしているらしい。今回が初めてのことなら次から気をつければ良いのだろうが、蒼介のそれは常習……というか必ずそれで毎回自滅している。あの心臓に毛が生えてそうな両親からどうして、こんな気弱な泣き虫が生まれたのか不思議で仕方ない。こんな調子で今後大丈夫かねこの子……。

鳳家の当主、及び「鳳財閥」の後継者は世襲制ではない。私や蒼介は本家の人間だが、いくつかある分家の人間から私達よりも後継者にふさわしい者がいれば後継者はそ

いつが選ばれ、そして私達は分家扱いになるというシビアな仕組みだ。分家と本家の境界線は薄氷よりも薄く、両者は容易く入れ替わる超実力主義……それが私達“鳳”の掟だ。

分家の者は本家の地位を奪おうと、本家はその地位を死守しようと研鑽を積む。そのため表面的にはともかく必然的に分家と本家の仲は最悪になり、遅かれ早かれ骨肉の争いを繰り広げる運命にある。

なぜ鳳家にこんな殺伐とした決まりがあるかと問われれば、その理由は後継者の厳選……ひいては鳳家及び“鳳財閥”の存続のためである。世襲制ではその存続を傾けさせない無能な人間が後継者になる恐れがある。しかしそれは断じて許されることではないのだ。

鳳家の起源は鎌倉時代まで遡るといふ由緒正しい武門の家系だが、『鳳家当主は生き延びることを決して諦めてはいけない』という、潔く散ることを美学にする武士としては極めて異質な理念が当初から現在まで残っている。ピンと来ないならば、例えば江戸時代に鳳家の家臣が將軍家に粗相をし、鳳家の当主へ切腹を命じられたとしよう。その場合当主は間違いなくそれに応じなかったに違いない。むしろ反旗を翻してでも取り潰しに抵抗した筈だ。

武士としてあるべき潔さを欠片も持ち合わせておらず、不忠であると糾弾されてしか

るべきの武士失格のスタンス。しかし潔さなど言い替えれば責任感の欠如でしかない。鳳家を率いる者は皆その両肩に背負っているものを、当主ひいては鳳家が倒れることで、いったいどれだけの犠牲が出るのかを自覚していた。故に鳳家の当主は一族を率いる統率力、そして、何を置いても自身が生き残る能力……総じて「英雄」の資質が必要とされる。

そして「鳳財閥」に関しては、もはや鳳家以上に倒れることが許されない。日本のみならず世界中でも五指に入るほどの資本を有するほど肥大化した「鳳財閥」の経営が傾くということは、冗談抜きで世界的大恐慌の引き金になるだろうから。この世界を飢餓地獄に落とさないためにも、財閥を守っていく「英雄」の資質を持つ後継者の厳選は必須となる。

と、私達には遅かれ早かれ過酷な運命が待ち受けているというのに、この子はこんな調子で大丈夫だろうか？

……ああ勘違いしないでもらいたいが、私が心配しているのは蒼介の気弱さと打たれ弱さだけだ。もしこの子の後継者としての資質が欠如しているなら、それはそれで別に何も問題は無かった。私は分家の連中などに負ける気がしないし、私が父様の跡を継いで蒼介には私のサポートに回って貰えば良い。蒼介は私を慕っているし、私も可愛い弟を蔑ろにするほど狭量ではないつもりだ。

……しかし現実はその逆、

「……………ところで話は変わるけど蒼介、外国語の習得は順調かい？」

「えっと……………英語、中国語、ロシア語、ドイツ語、フランス語なら……………なんとか……………」

「……………私だってようやく英語と中国語を習得したところだつてのに」

他ならぬ蒼介こそが後継者最有力候補なのである。いかにも自信なさそうに言っているが蒼介の性格上、習得練度が半端ならばそもそもリストアップさえしないので、この五言語は会話に支障がないレベルでマスターしているに違いない。

言語一つとってもこの通り、蒼介はその心の脆弱さに反比例するかのようにな、とてつもない資質と潜在能力を有している。私も歴代最高クラスと称された父様に匹敵する資質であると太鼓判を押される程度には優れているらしいが、そんな私が凡庸に感じるほどにこの子の才は桁違いだ。学業は既に追い抜かれているだろうし料理や芸術も危うい。剣術にしたって純粋な剣の腕では多少勝っているだけで、そう遠くない内に抜かれてしまうだろう。そしておそらく現段階ではまだ氷山の一角、それほどまでにこの子

の潜在能力は歴代「鳳」の英雄達と比較しても群を抜いて突出している。あとはそれに見合うだけの強靱な心さえあれば万事解決なんだけど……世の中つてのはほんとうまくいかないねえ……。

「……さてと、それじゃ私は恵子んちに行くとするよ。勉強教えてくれって頼まれててさ。アンタはこの後どうするんだい？」

「えつと……特にすることもないので、母様のお手伝いでもしようかと……」

「相変わらず孝行息子なようで何よりだよ。それじゃあね」

「いってらしゃいませ」

召し使いじゃないんだから、その送り出し方はどうにかなんないのかねえ……。

恵子の家でマンツーマン勉強会を終えて、私は赤羽邸へ帰宅中である。まさか宿題ま

で手伝わされるとは思っていなかったので、予定していたよりも精神的疲労が大きい。「まったく恵子の奴、あれでよく霜月の入学試験パス出来たもんだよ」

確かに名門霜月大付属中のカリキュラムのレベルは、普通の小学校とは比較にならないだろうけど、それにしたつてねえ……。身近な弟の飲み込みが異常に早いせいで私の感覚が麻痺している可能性も無くはないけどさ。

だけど毎回悪びれもせず宿題を押し付けてくるあの凶太さは、蒼介に少し見習わせたいかもね……。やっぱ無し、あれはただ厚顔無恥なだけで英雄の器には程遠い。

ここ最近蒼介の気弱な性分をどうにかできないかと思考を重ねちやいるが、中々思いつかないもんだ……。今後はともかく、しばらくは私が守つてやらないとね。

「せめて何かきつかけでもあればいいんだが……」

「ならその切っ掛け、僕が作つてあげようか？」

……………え？

「っ!？」

いつのまにか目の前にいた黒外套の男から、私は弾かれたように距離を取つた。

嘘でしょ!?私……この至近距離まで接近を――

次の瞬間私は、
突如首筋に走った謎の激痛と共に気を失ってしまった。

Violet memory ②

【紫苑視点】

ガチャツッ！

「姉様！」

鳳系列の病院のベッドで暇を持って余していると突然ドアが勢いよく開かれ、酷く狼狽した顔の蒼介が病室に入ってきた。いやまあ実の姉が前ぶれなく入院したんだから、冷静でいられないのは無理はないけどね…

「病院では静かにしな蒼介。ましてや走るなんて言語道断だよ」

「う……………ごめんなさい……………」

至極真つ当な注意をされてシユンとしつつも、私の安否を確認できたからか落ち着きを取り戻す蒼介。

「やれやれ、なんだいそのお粥みたいな顔色は。これじゃどっちが病人かわかりやしな
こよ」

「だって……………だってえ……………」

うわああああああん……！」

そして塞き止められていたものが決壊したかのように、蒼介は声をしゃくりあげて泣き出した。

「ちよつと倒れただけでオーバーだねアンタは……。しつかりしなよ男の子だろ？」

「エグツ……グスン……だつて……もし姉様がいなくなつたらと思うとー」

「勝手に私を殺すんじゃないよ！」

私はおもむろに蒼介の胸ぐらを掴んだ。そして蒼介の驚いた様子を確認しつつ、蒼介を己の元に引き寄せ抱え込む。

「余計な心配しなさんな。こんな泣き虫な弟を放つてあの世にいつちまうほど、私は薄情者なんかじゃないさ」

「姉様………う……う……」

「へ？……ちよ待つー」

「うわああああああん！」

「だあああああやつぱりかあああつ?!? こんの泣き虫蒼介が、静かにしろつて言つたでしようが！ だいたいこの至近距離で泣かれたら入院着がアンタの涙と鼻水でベトベトに……離れるオオオ！」

この病室が“鳳”関係者の中でも最上位専用の個室でなければ確実に嚴重注意を喰

らったであろうレベルの大騒ぎの末、どうにか宥め賺せて帰宅させた。

「まったく……あれじゃあお見舞いに来たのか嫌がらせに来たのかわかんないよ」

結局ベトベトになったので新しい入院着に着替えつつ、私は蒼介の軟弱っぷりを一人愚痴る。

コンコンツ

そんな中、突如病室のドアが控えめにノックされた。着替え中だったので少し待ってもらい、着替え終わってから入ってもいいと返事をする。病室のドアが開かれ、角縁眼鏡をかけた初老手前の医師が悲痛そうな顔で入ってきた。ここの最高責任者かつ私の担当医である葉江^{ヤクエ}彰^{アキラ}先生だ。

「いったいどうしたのさ先生、そんな表情を患者に向けてちや病状を悪化させかねないよ」

「それはすまないね、次からは気を付けよう。……そんなことより、良かったのかい？」

「は？何がさ？」

「ついさつき弟さんとすれ違ったんだが、足取りがさほど重く無かったところを見るに、どうやらあの子にはまだ伝えてないんだらう？」

君の触覚・痛覚が失われていることを」

「……………まあね」

そう……謎の人物の襲撃で意識を失った私は、この病室のベッドの上で目を覚ました。父曰く、鳳本家の私と蒼介には私達がストレスを感じない距離で常に護衛がついており、普通なら不審な人物は私達に近づくことすらできないらしい。それを踏まえるとそのプロの護衛達や水嶺流剣術を修めている私が、あの至近距離まで誰にも感知すらできなかつたあの男がいかに恐ろしいかわかる。まあそれはともかく私をこの病院に輸送する手続きをしたのはその護衛達だらう。みすみす私が襲われたことで決して軽くないペナルティを受ける、もしくは最悪暇を出されるであらう護衛達は哀れだが、私も

人を哀れんでいる余裕などありはしない。先程胸ぐらを掴んだときに蒼介の表情を伺っていたのも、ちゃんとしつかり握れているか確かめるため。

蒼介を抱き締めたときも、まさに雲を掴むような虚無感を味わった。

「……………それで薬江先生、私の異常の原因はわかったのかい？」

「精密検査をした結果……………触覚の喪失に直接関係あるのかはまだわからないが、君の全身の至るところから悪性腫瘍のようなものが見つかった」

「……………」

流石の私も言葉を失ってしまった。

悪性腫瘍……………つまり癌。それも至るところから見つかったとなればどう甘く見積もってもステージⅣ、末期癌だ。

それが意味することは、私はもう……………

己の死期を感じ取った私は、ふと薬江先生の言葉に引つ掛かりを覚える。

「悪性腫瘍……………のようなもの？なんだいそれ、断定はできないのかい？」

「ああ……………他の細胞に比べてとてつもなく異常で有害なのは間違いないのだが、あの物質は明らかに人体から発生したものではない。……………情けない話、何もかもが未知過ぎて私の医学ではどう対応していいのかわからないんだ」

さらに悪い知らせが続く。

鳳本家、及び次期“鳳財閥”トップ候補である私の担当医に抜擢されたほどの医者だが、どう対処していいかわからないと匙を投げた。それはつまり私の体を蝕んでいる何かを取り除くには現代医学では、ほぼ手の打ちようが無いということを意味する。

「当然私達も手は尽くすつもりだが、気休めを言つて下手に希望を持たせたくはないのではつきり言おう。

……君の余命は幾許も無い。幸か不幸か痛覚が無くなっているため感じとれないだろうが、今この瞬間も全身に散らばった異物は君の命をゆっくり……ゆっくりお蝕み続けていて、そう遠くない内に峠を迎えるだろう」

「……………」

「そして異物は心臓にまで散布しており、手術で摘出することもできない。……よしんば奇跡が起きて治療することができたとしても、蝕まれた体はいくつもの障害を背負うことになるだろう。どちらにせよ君はもう……二度と剣を握れないことを受け入れる必要がある」

流石の私も目の前の厳しい現実を飲み込むことは容易ではなかった。外は私の心象に呼応するかのように、ポツポツと雨が降りだし始めていた。

XXXXX年

6月3日 雨

二週間ほどかかってようやく己の運命を受け入れた私は、最後のときまでの出来事全てをこの日記に記していこうと思う。私の体を蝕む謎の異物の正体は未だ掴めておらず、今この瞬間も私は死に向かっている……のだろう。触覚・痛覚が無くなったことで苦しまずに済んだと喜ぶべきなのか、それとも謎の異物が原因で私の痛覚が無くなったと見るべきなのかはわからない。それにしても触覚が無ければ日記を書くのも一苦勞で、さらに書いた満足感が著しく減少してしまうようだ。

XXXXX年

6月12日 雨

健気なことに蒼介は忙しいだろうに、暇を見つけては私のもとへ見舞いにきてくれる。弟の偽りのない愛情には内心感涙ものだが、それと同時に騙し続けることに小さくない罪悪感を感じる。毎度毎度涙目になりながら心配そうにしている蒼介にはすぐ治して戻ると元気付けながらも、私はもう自分の生を諦めているのだから。

蒼介の前でのみ元気な様子を演じる様のなんと愚かなことか、これでは私は道化そのものではないか。鏡に写った今の私の姿は、さぞや滑稽なものなのだろう。

蒼介を心配させまいとしているようで、その実私のやっついていることは問題の先送りでしかない。どうやら心が弱いのは蒼介などではなく私だったようだ。

そんな風に悩んでいるからか、食した料理がまるで美味しく感じられない。このことを母様に知られたら、食材と料理に対する敬意が足りない叱られるだろうな。

XXXXX年

6月15日 雨

美味しい美味しくない以前に、食べたものの味がまったくしなくなつた。どうやら私は触觉に続き味覚も失つてしまつたらしい。このザマでは料亭赤羽の料理長を継ぐという進路も閉ざされたであろう。もしこの世に本当に神がいるのなら、どれだけ私は嫌われているのだろうか。

—————

XXXXX年

6月18日 雨

父様と母様はとんでもなく多忙の中、どうにか暇を作つて私のもとへ見舞いに来てくれる。親である以上当然のことだが、二人は蒼介と違つて私が死に向かつていることを薬江先生から知らされていよう。だからだろうか……母様の目は深い悲しみで、父様の目が何かを悔いるような感情で生め尽くされているのは。

つくづく私は親不孝者だな……。

それはそうと、最近病院特有の薬臭さを感じにくくなった。あの臭い事態は苦手だが手放しで喜べるほど私の頭はお鼻畑ではない。このままだと私はいずれ……

いやだ。

—————

XXXXX年

6月24日 雨

今度は嗅覚が消失した。

自身の五感が徐々に失われていく恐怖は凄まじく、ここ数日の私はほぼ錯乱状態であつた。かろうじて蒼介の前では平静を保てたものの、愚かにも私はお見舞いに来てくれた両親に「哀れみのつもりなら、二度とその面見せるな」と八つ当たりをしてしまつ

た。こうしてなんとか正気を取り戻して改めて自分の醜さに反吐が出る。結局私はいよいよともなれば自分のことしか考えていない矮小な人間だと思い知らされた。皮肉にも二人の顔を見たくないという思いは真実になった。だから私は一切の見舞いを遮断し蒼介とすらも会おうとしなくなった。これでいい……今の私にはもう鳳家の娘である資格も、蒼介の姉である資格も無い。

だから。

そうした自暴自棄な感情に引きずられるように、今度は聴覚に異常を来し始めた。もうすぐ私は……

いやだ　こわい　たすけて

XXXXX年

6月29日 雨

もう何も聞こえない。そして視界も霞んできた。
私を支えてくれる者も、自ら切り捨ててしまった。
このまま私は……わたしは………

死
に
た
く
な
い

Violet memory ③

【紫苑視点】

「……お……」

「……え……ま……」

………ん………なんだ………？何か聞こえてくる………。

外界を認識する器官を全て失い、真の静寂の中で命尽きるのを待つ身だった私は、突如起きた外部からのアプローチにほぼ崩壊しかけていた自我をどうにか取り戻した。

原因不明の病に侵され、既に私の五感は完全に消え去った筈なのに……幻聴か？

「……紫音……」

「……姉様……」

……いや、まだ臆気ではあるが……確かに聞こえた、この私を呼ぶ声が。

そして誰が呼んでいるのかなど考えるまでもない……他二人は万が一別の人であるかもしれないが、少なくとも私を『姉様』と呼ぶのは……私の弟はこの世界でたった一人だけだ。

己の聴覚が戻っていることを自覚したことが原因かはわからんが、驚いたことに失っていた感覚が段々と戻り始める。発狂状態のときに唇の内でも噛み千切ったのか口の中で血の味がしだして、病院特有の薬品臭さが鼻腔をくすぐる。そして完全な暗闇だった世界に光が差し、私の両の目はひどく狼狽した両親……そして、

「……ねえ……さま……!?!」

「蒼介……なんて顔してるんだい、男前が台無しじゃないか……」

「見えるのですか……!?!聞こえるのですか!?!姉様!」

「見えるし聞こえてるよ……気持ちにはわかるが起きたばかりだから、あんま揺らさないでくれないか……」

泣き腫らして目を真っ赤に充血させたハナツタレ蒼介を映し出した。まったく、相変わらず泣き虫だねこの子は……どれ、ここは復活した姉様が叱咤激励の一つでも――

「oooooooooooooooo!!!」

「し、紫苑!?!」

「姉様?!」

「……ッ!」

突如火炙りにでもされたかのような痛みが全身を襲い、あまりの激痛に私はその場に蹲る。

は、はは……なんだこれ……!?!

痛い、つてことはどうやら触覚も戻ったようだが……私の体はここまで蝕まれていたというのか……。

絶え間ない激痛に耐えながらも、私の死期が目の前まで迫っていることを悟る。五感が戻ったのも決して息を吹き返したわけじゃない。まるで蠟燭のように、おそらくは命尽きる前の最後の輝きといったところだろう。

それを裏付けるように私に繋がれている心電図には、こうして意識があることが不思議なほど低い脈拍を示している。

———そうか、私はもうすぐ……だったら……!!

「ね……姉様……?!」

激痛で意識を失いそうになりつつも、私は最後の力を振り絞って蒼介を抱き寄せ、その状態で父様と母様の方を向く。

「ごめん……父様、母様……この前手酷く、追い返したことを……詫びたいところ、だけど……私にはもう、時間が無い……から手短かに、言うよ……私は、貴方達の娘で、幸せ……だった」

「紫苑……」

「くっ……紫苑、すまない……!」

「はは、は……なんで、父様が謝るの……さ」

「それは……」

「ごめん……ホントにもう……時間が無いん、だ……私、は……蒼介に、伝えなくちゃ、なら無い……ことが、ある……」

そして私は意識が朦朧としながらも、涙で濡れきった蒼介の顔抱き締める。

「すまない……ね、蒼介……わた、しは……アンタに……嘘を……ついちまった……よ……」

「……!」

「最……初……アンタが……見舞いに、来てくれ……た……ときには……私がもう……助からない、だろう……ことは……わかってい、ただ……それなのに……私は手? アンタに、余計な……期待をさせ——」

息絶え絶えになりながらも無意味に希望を持たせたことを詫びようとしたが、私が最後まで言い切ることなく蒼介が涙ながらにそれを手で制した。

「もういい……もういいんです姉様……覚悟は、できていましたから……」
「……………そう、か……………」

……私はどこまで道化なのだろう。

蒼介の才は私とは比べ物にならない……それを知っていながら、誤魔化せるとでも思っていたのか？

きつと蒼介は私の言葉がただの強がりでしかないと、始めから見抜いていたんだ。その上で、私のどうしようもない虚勢と偽善と自己満足を汲みとり、つまらん大根芝居に付き合ってくれていたのだ。実の姉を失うという恐怖、悲しみ、絶望を押し殺してまで。

何が私を守ってやらないと、だ。

何が心さえ強ければ、だ。

守られていたのは……私の方じゃないか……………！

この子は私なんかより、よっぽど強い心を持っているじゃないか……………！

もう思い残すことはない。私が見届けずともこの子は、いかなる障害だろうと乗り越えていけるだろう。ならば私はこの子の姉として、最後の役目を全うしようではないか。

「そう、か……だつたら、最後に……伝えて……おくことが、ある……」

痛みが段々と強くなりそれに引きずられ意識も朦朧としてくる。今まさに私の命が燃え尽きようとしているが、構うものか……今この瞬間に、最後の力を振り絞れ……！
「蒼介……私の死に囚われるな、塞ぎ込むな……全てを乗り越え“鳳”を継ぐんだよ……。大丈夫……アンタは強い、アンタならできる。アンタがアンタである限り、誰にだつてだつて負けやしない……！だつて蒼介は英雄で……私の自慢の……弟、なん……だか……ら……」

意識が薄れゆく中、蒼介だけではなく父様と母様が泣き叫ぶ声が入る。

まったく、泣き虫蒼介だけじゃなくあの二人まで……湿っぽい別れは好きじゃないんだけどね……けどまあ一番伝えたいことは済ませられたんだ、良しとするかね。流石にしばらくは私の死が影を落とすことになるだろうが、蒼介ならきつと乗り越えてくれると信じている。

決して長いとは謂えない一生だったが……それでも、私の人生は……満ち足りたもの……だつ……

「もう意識はあるんでしょ？ さっさと起きたまえよ。」

「（パチッ）……………は？……………は？」

突如呼び掛けられた声に反応して私は目を開ける。目の前には私の担当医師・薬江先生が楽しそうに微笑んでいた。

……………いやいや、何がどうなってるの？

私は原因不明の病で間違いなく死んだ。私の死はどうあつても覆ることはなかったはずだ。その診断結果を私に伝えたのは、他ならぬ目の前の薬江先生なのだから。

だから解せない……………どうして私は生きている？ よしんば奇跡とやらが起きて一命をとりとめたとしても、間違いなく何らかの後遺症が残って然るべきだ。なのに今は全身

を襲っていた激痛すら綺麗さっぱり無くなっている。体を調べてみてもいたって健康体で、取り付けられていた様々な医療器具すら無くなっている……最初から蝕んでいた病など無かったと言われたら、あり得ないと想いつつも思わず信じてしまいそうなほどだ。

いったい何がどう転べばこうなるんだ……？

「ふふふ、やっぱり混乱しているようだねえ……まあそりやそうか♪死を覚悟したのにもかかわらず気がつけば五体満足、助かった喜びよりもどうして助かったのかとおう疑問でできて当たり前だよねえ♪」

「……色々と聞きたいことはあるけれど、とりあえず……なんだいその人を苛つかせる気満々な口調はさ？お年寄りのくせにはつちやけ過ぎっていうか……アンタそんなキヤラじゃなかったでしょうが」

「うーん……実を言うところつちが素なんだよねえ。ごめんね紫苑君、君の知る僕は……外見も性格も名前も肩書きも行いも、それら全てが紛い物なのさ♪」

「は？何を言ってる」

「まあ落ち着いてもう一度周りを見てみなよ。話はそれからでも遅くない」

色々と腑に落ちない点はあるが、とりあえず言われた通りに辺りを見回して……

気づいた。

「……っ!？」

私達のいる部屋はどう考えても病院の中にはなかった。私の座っている場所を取り囲むように血のように赤い文字で大きな六芒星が描かれ、その他にも床や壁など至るところに馴染みのない文字の羅列が書き殴られている。何故私はこんなカルト宗教のサバト会場染みた部屋にいるのか……という疑問以前に、どうしてこんな異様きわまりない部屋にいることに気づけなかったのか。ずっと病室にいたことや目の前に葉江先生がいたことで、無意識にここが病室だと思い込んでいたのだろうか……？

「な、なんだいここは……随分と仰々しいレイアウトだね。それとも何かい、ここで本格的なこつくりさんでもやろうつての……？」

「ふうくん？なるほどなるほど……流石は鳳本家の人間だね、初っ端からほぼ大正解だよ」

「何……？」

「こつくりさんも降霊術の一種だからねえ……君の推測した通り、この部屋は降霊術のために作つた部屋なんだ。」

唯一違う点は既に降霊術をおこなった後、ということかな♪」

「……………え？」

おい、こいつは今何と言った…………？

こいつの今の発言が嘘偽り無い事実だとすれば…………

「…………つまりアレかい？最初私が目を覚ましたとき、このいかにもな六芒星の真ん中にいたってことは、私が…………」

「そう、君が降霊術でこの世に喚び出された魂だよ。死に体だった君がどうして五体満足なのか疑問に思ってたよね？それが答えだよ。君は一度死んで僕の手で現世に喚び戻されたのさ♪そうだね、今ごろ大がかりな君の葬式が行われているんじゃないかな…………僕が用意したダミーの死体を棺に入れてね」

Violet memory ④

【紫苑視点】

「ハア……まさかアタシがもう死んでるとはね」

「おや、随分と達観しているんだねえ。普通自分がもう死んでいると突きつけられたら、もう少し狼狽ないし混乱すると思っただけど？」

不思議そうに首を傾げる（と言ってもそれが本心とは思えない。何故なのかはわからないが、こいつはアタシがさほど狼狽えないという確信があつたのではないか……？）
薬江先生に手を振って否定する。

「あれほど病に侵された状態から急に五体満足な状態に変わりや、そりや不自然に思うに決まつてるじゃないか」

「フフ、まあそれもそうだね♪……どうだい？ 苦痛から解放され五体満足で甦った気分は」

「最悪に決まっている」

薬江先生を睨めつけながらそう吐き捨てる。

「蒼介に伝えるべきことは伝えられたけど……そりやあ、この世に未練が無いと言え

嘘になる。どうして私がこんなに早く死ななきゃならないっていう、この世の理不尽に對しての恨み言もあると言えはばある」

「……………ふむ、だったら何の不都合が——」

けどね、と私は先生の言葉を遮る。

「それら全部引つくるめて人生なんだよ。理不尽だろうが納得いかなかろうが、自分にしろ大切な誰かにしろ終わってしまったたからには、そのことを逃げずに受け止めなきゃならないのが人間なんだ。それを受け入れず、こんな怪しげな呪いまじなでこの世に甦たった奴はもはや人間ですらない。どうしてくれるのさ薬江先生、私は人として死ぬことすらできなかつたんだよ」

そんな私の糾弾にも薬江先生は眉ひとつ動かさず、とてまつまらなそうに微笑んでいた。その表情が少し引つ掛かったが、構わず私はさらに畳み掛ける。

「……………それにだ、薬江先生。アンタは外見も性格も名前も肩書きも全て偽物なんだろ？こんなオカルトに首突っ込んでいる時点で、真つ当な医者では無いことは既に確定しているが…………」

だったらアンタは私の担当医として何をしていた？」

「ふむ？」

「とぼけても無駄だよ。アンタが偽物なら、私に処方されていた、病の侵食を遅らせる薬とやらも偽物だつてことだろう？　そもそも降霊術で私を喚ぶことが目的ならわざわざ死期を延ばす理由なんて無い」

「……何が言いたいんだい？」

「……………オブラートに包めば煙に巻かれそうだから単刀直入に問うが、薬江先生……」

アンタがしていたのは延命行為じゃなくて、私にトドメを刺すことじゃないのか？　いやそもそも……ここに来る直前に私を襲った黒外套の男……奴もアンタ、もしくはアンタの息がかかった奴じゃないのか？」

「え？　うん、そうだよ」

笑つちまうくらい気軽に肯定した薬江先生に、私はほんの一瞬呆気にとられてから――
「ぎっけんじゃないよー！」

激情を爆発させた。

この男は私に毒か何かを打ち込み触覚を奪い、そして私に薬と称した劇薬を投与し続け症状を悪化させ続け、しまいには私の命を奪ったことを認めたのだ。これが逆上せずにはいられないだろうか。

「てことは何から何までアンタの自作自演つてことじゃないか！アンタ、自分がどれだけ人として終わっている行為をしたかわかっているのかい!?まさかとは思いますが、こんな下法で生き返らせれば全てチャラになるとでも!?!」

「聞き捨てならないねえ……あまり僕を見くびらないでくれ、そんな理由で降霊術なんか持ち出すはずが無いだろう。そもそもだね……」

これまで僕が奪った命は百や千じゃ聞かないんだよ？今さら君一人殺したぐらいで、僕が罪悪感なんて抱くと思うかい？」

「……ッッッ!!!!」

得体の知れない悪寒が全身を駆け巡り、あまりにも強烈な忌避感が吐き気と眩暈を引

き起こし意識が朦朧とするが、どうにか寸での所で踏み留まった。

……私は間抜けか？こんなドス黒い悪意をどうして今の今で察知できなかつたんだ？……いや、ドス黒いなんて表現は生易し過ぎる。かといって私のボキャブラリーではこれを表す言葉が存在しない。ただ一つ言えることは……こいつは危険過ぎる。こんなものを腹に抱えながら平然と笑っている……と言うより人の形を保っていること自体、不可解極まりないほどの狂人だ。どれだけの人間を殺したかとかそういう次元の話ではない、こいつはたとえ人類を滅ぼしたとしてもひと欠片の罪悪感すら抱かないだろう。

……こいつは今ここで始末しておかなければならないと私の本能がそう告げている。どうせ私はもうゾンビ同然の存在だ、手を汚すことに躊躇する必要は無い！そう決意して薬江に飛びかかろうとするが…

「つ……………!?!」

動かない。

こいつに殴りかかろうとした途端、全身を接着剤でコーティングされたかのように動きが取れなくなつた。どんなに力を入れても指先一つ動かせない。まるで体がこいつを害することを拒絶しているみたいに。

「人の話は最後まで聞くものだよ？でなければそういう羽目になる」

この異変の原因を知っているのか葉江は微笑んでいる。表面上はにこやかにしているが、今この瞬間も肌を突き刺すような悪意が滲み出ている。

「しかし化け物……か。当たらずも遠からずだね」

「な………に………!?!」

「えーと、そうだな………これでいいか。これを強く握ってごらん」

そう言つて葉江がおもむろに私の方へ投げ渡してきた物は、どういふ訳か握力グリップ。訝しみながらも握らなければ話を進めるつもりがないようだったので、仕方なく強く握つてみる。その瞬間どういふわけかさつきまでの硬直が綺麗に無くなつて――

バキンツ!!

「……………はっ」

気がつけば私の手の中の握力グリップは粉々になっていた。……………いやいやいや、おかしいだろう。鳳家の厳しい教育を受けてきたとは言え私はまだ小学生、こんなゴリラみたいな握力では無かつた筈だ。自分を化け物だと自虐したが、こういう方向性の化け

物だと思っていたわけではない。

「種明かしをするとだね、君に打ち込んでいたものは『アドラメレクの欠片』と言うものでね」

そう言いながら薬江は白く発光する物質を密閉した試験管を取り出した。

「アドラメレクの……欠片?」

「そ。詳しい説明はまた今度するとして、こいつには実に様々な使い道があるんだけど……今回用いた使い方は召喚獣ダゴンと君の同調率を揃えるためだね。その副作用で君は一回死んじやったわけだけど……」

「召喚、獣……?わかるように説明しな」

「まあ実際見た方が早いよね……」

聞いたことの無い言葉と共に、薬江を中心に謎の力場が展開される。

「サモン」

そしてその言葉と共に幾何学模様が出現し、その中心から三頭身にデフォルメされた薬江が這い出てきた。

「……とまあ、これが召喚獣だ。科学とオカルトが混ざり合い、人間を遥かに越える力を持った存在……と言ってもこれはまだプロトタイプで、ある要素及びその他諸々を付け加えるつもりなんだけど、まあそれはともかくとして……」

葉江はそこで一度言葉を切り、展開されていたフィールドを消失させる。するとそれと連動するように召喚獣も姿を消した。

「結論を言うと君の体は召喚獣ダゴンと完全に一体化している。アドラメレクの欠片で君の体とダゴン君の適合率を強引に揃え、ダゴン君が君の遺体と融合する。そして降霊術で喚び寄せた君の魂を憑依すれば……」

「……私とダゴンの結びつきは二重の強固なものになっているというわけか」「うん正解♪ものわかりが良くて助かるよ」

そのダゴンとやらが私の体と結びつき、さらに私の魂も結びつかせる。これではもうこの体が私のものなのかダゴンのもものか区別がつかない……否、私とダゴンの区別すら消失しているのだらう。私はダゴンであると同時に、ダゴンは私なのだ。そして私が目の前の方に攻撃できないのも、私がダゴンであるが故だらう。

「ダゴン君は僕によって生み出された召喚獣だ。外部からハックをかけてプログラムを書き換えでもしない限り僕への攻撃、及び僕が不利益を被る行動をとることができない。そしてこの制約は、ダゴン君と体を共有している君にも適応されるのさ」

「チツ……身勝手な理由で殺されたり化け物にされたりした挙げ句、首輪まで付けられるとは胸糞悪い話だね……それでアンタは私に何を望むんだい？こんな回りくどいことをしたんだ、降霊術の実験なんかじゃないんだらう？」

「君に求めること、ねえ……困ったことに連帯責任は片道切符じゃない。ダゴン君にかかっている縛りが君に適応されたということとは、その逆もまた然り。君が本気で拒絶すれば君には何一つ強要できない。となればこちらもそれ相応の見返りを用意しなければ、協力関係を気づけないよね」

「ああん？何を言い出すかと思えば……協力？この期に及んで世迷い言を。どんな報酬を用意しようが、私がアンタなんぞに手を貸すとても——」

「それが鳳秀介の命、だとしてもかい？」

「……………は？」

あまりに荒唐無稽すぎる報酬を提示され、私はこの男のことが本気でわからなくなつた。父様の命……それが何故私の報酬になり得るといふのだ。

「狂人だとは思っていたけどここまで破綻しているとはね……どうして私が父様を手にかねなければならぬ？私がそれを望む理由など何一つ無いだろうが」

「……………本当にそう思うかい？」

私の心拍数ははね上がる。

「何が……言いたい……？」

「聡明な君のことだ、もう薄々気づいているんじゃない？彼の罪にさ」

さらに心拍数が上がる。

「常に護衛をつけていた筈の君に、どうして劇物を所持した僕があつさり近づけたと思
う？薬江彰なんて名前の医師など『鳳』の系列の病院に所属していないことに、あの鳳
秀介ともあろう者が気づかなかつたとでも？」

とうとう体全体が硬直し、その一方で全身が彼の話を聞くことに忌避感を抱く。だつ
て…

「実に不可解な点が多いものの……もし秀介君が君を見殺しにしたとすれば、それら全
ての疑問は解消しちゃうねえ♪」

それは直面するにはあまりに残酷過ぎたから。

「……何を馬鹿なことを。あの人は確かに所々腹黒い部分もあるが、理由もなく娘を見殺しにするような人間では——」

「もう一度言うけど、聡明な君ならもう気づいているんじゃないの？……君を見殺しにする理由が彼にはある。」

それは——」

その後私は多少の葛藤の末、業腹ながらその男……薬江彰改めラプラス（おそらくこの名も偽名だろう）と手を組むことになった。戸籍上では私は既に死んでいるため、来るべきときが来るまではこの空間（ラプラスが言うにはここはパソコンの中らしい。今さら奴が何をしようと驚かないが、まさかそんな科学技術の結晶の内部で降霊術なんてオカルトテイストの強い儀式をしていたとは……）で生活し、そして主に父様を討つべく牙を磨くことになった。

既に私はもう身も心も醜い化け物になり果てたのだと思う。かつての自分が今の私を見たら、きっとひどく失望することだろう。

しかしそれでも私は……

進路指導の召喚獣①

【和真視点】

「「うーん……」」

「? どうしたのよアンタたち。難しい顔しちやつて」

「珍しく真面目な顔をしておるのう」

「何かあったんですか?」

ある日の放課後。あと保健体育さえ500点を越えれば腕輪能力がランクアップするため、綾倉先生から借りた『エキスパート・ラーニング』を片手にガラにもなく教室で自習をしていると、真剣な表情で考え込んでいる明久、雄二、ムッツリーニが珍しかったのか、姫路と秀吉と島田が三人に訪ねていた。持ち前の勘で面白そうな気配を嗅ぎ取ったので、俺も本を閉じて集まりに加わることにした。

「「これだよ、これ。どうしようかと思つてき……」」

「悩みの元凶らしきものを姫路に見せる明久。」

「あ。今日もらった進路希望調査ですね」

「うん」

進路希望調査表だあ？あくまで現時点での希望なんだから、んなもん大して悩むことでもねえだろ。

「どうするも何も、進学じゃないの？」

「うちのクラスの素行見ると忘れがちだが、一応ここ進学校だし大抵はそうだろ」

進学校どころか学舎かどうかすら結構な頻度で疑わしくなるけどな、このクラス。

「ワシは、少なくとも雄二は進学するものじゃとばかり思っておったがの」

「ま、俺もそのつもりではあるんだがな。進学するにしても、どこの学校とか何の学科とかも書かなきゃいけないだろ？それをどう書くのかが結構悩ましくてな……」

コイツがそんなことで悩むなんて意外……ああそういうことか。ホント往生際悪いなコイツも。

「悩んでるのは明久もだ。どこの樹海を選べば良いか、こいつにとっては悩ましいところだろう」

「お先真つ暗だなオイ」

「とういか雄二、サラツと僕の進路選択に『樹海で野垂れ死に』を混ぜるんじゃない」

なんでコイツらは隙あらば会話内容を不毛な方向にシフトさせたがるかね……？

「迷ってるなら、まずは思いつくまま書いてみて、後から変更したらどう？」

「確か、第三希望まで書くんですよね？」

「いや。俺達三人は特別に第十五希望まで書くように言われている」
「多すぎませんか!？」

三つ程度じゃこいつらの進路は決まらない……とは西村センセの弁だが、数だけ増やしても下手な鉄砲なんとやらつてなるほど人生甘くねえと思うがな。

「十五個もあるんじや適当に埋めんのも苦勞するだらうな」

「そうなんだよね……それに適当に書こうものなら鉄人のことだし、鉄拳制裁付きの書き直しか待つてるだらうし……とところで、秀吉や和真はもうコレ書いたの？」

「んむ? ワシもまだ書いてはおらんが、やりたいことは勿論演劇関連じやからの。さほど迷うことはないじやろ」

「あ、そつか。いいなあ」

「俺は第一希望が霜月大で、それ以外は適当に大学ランク順で埋めたから全く覚えてねえ」

「相変わらず滅茶苦茶ねアンタ……つて霜月大? そこつて確か、全国でも五指に入るであらう超難関大学じゃあ……そんなとこ受けて大丈夫なの?」

「試験当日俺に隕石でも落ちてこない限り間違いない受かる。過去問目え通したけど綾倉先生に借りた教材に比べればチョロかったし」

「おお……僕には一生縁の無いセリフだ」

「というかお前が霜月大？学力はともかく、人格破綻者のお前があんなエリート大学に進学希望するとは意外だな」

「よりによってお前に人格破綻者呼ばわりされる筋合い無えんだけど……まあ俺中学まで霜月大附属だから古巣に帰るみてえな感覚だな、あっちには知り合いも多いし」

ちなみに優子と愛子と徹も霜月大志望で、飛鳥は梓先輩と同じく栄応大の推薦を考えているらしい。そして蒼介はハーバード、源太はイギリスの大学を希望しているそうだ。

「それなら、アキも将来やってみたいことで決めたらいいんじゃない？」
悩んでいる明久に島田はそう助け船を出した。

「将来やってみたいこと？」

「そうじゃな。そこから進学なり就職なりを考えたら良いじやろ」

「明久君はどんなことにに興味がありますか？」

姫路にそう訪ねられ、明久はしばし考え込んでから口を開く。

「漫画やゲームかな」

「それただの趣味じゃねえか」

「うぐ……」

「いや、漫画家という手があるぞい」

「あるいはゲームデザイナーという道もありますよ」

ケーキが好きだからケーキ屋さんになりたいレベルの安直な発想だな……。

「漫画やゲームには関係無いけど、アキなら調理師とかもいいんじゃない?」

調理師ねえ……そういやこいつ料理得意だったな。ソウスケがガチ過ぎるからすっかり忘れてた。

「つまり、僕の将来は——」

「……………エロ漫画家、エロゲー作家、エロ調理師」

「—のどれかに……………って、どうして全部にエロがつくの!?!その進路は全部ムツツリーニにとつての願望だよね!?!」

「……………!! (ブンブンブン)」

いつになったらコイツはその無駄なあがきを諦めるのかねえ……だいたい百歩譲って前二つはともかくエロ調理師ってなんだ、どこに需要があるんだそんな特殊なジョブ。

「おいおいムツツリーニ。まがりなりにも人生を左右する大事な話だぞ? もうちよい真面目に聞いてやろうぜ」

こいつが明久関連で真面目になるとき、大抵が明久をディスるための前フリだよな。

案の定雄二は小馬鹿にしたような笑みを浮かべながら明久に向き直る。

「それで明久、いったいお前はどこの中学校に進学したいんだ？」

「さては喧嘩の特売だな!?全部買ってやるから表に出るこのクソ野郎!」

「アキと葉月が同級生……。姉として感慨深いものがあるわね」

「美波はその前に友人として僕に同情するべきだ!」

「つうかそれ進学じゃねえだろ……。進むどころか盛大に逆走してるじゃねえか」

「あはは……。えつと、それじゃ明久君は一旦保留して……。土屋君は将来なりたいものは何かないんですか？」

「……………ヌー……………カメラマン」

「(ノードカメラマンか……………)(ノード)

俺達の考えは多分一致した。

「ええと、土屋君……。先生に提出する用紙なので、もうちょっと説明しやすいものにしたほうが……………」

「……………!!(ブンブンブン)」

どこの世界に進路希望用紙にノードカメラマンと書いて提出する高校生がいるんだよ……………。

「ムツツリーニはやりたいこと自体に問題がありそうだね」

「だが、明確にやりたいことがあるっていうのは良いことだと思うぞ」

明久と雄二はムツツリー二を見ながらそんなことを呟いた。やりたいこと、ねえ……とりあえず体動かすやつがいいな。ここ卒業したら試験召喚戦争もできなくなるし、そうならいいよデスクワークへの意欲が無くなるぜ……あ、翔子。

教室に入ってくるや否や雄二達には気づかれずに近づき、目にも止まらぬ早業で進路希望調査標をひったくったかと思えば、これまた凄いスピードで何かを書き込んでいく。

「そう言う坂本君は何か興味があることはないんですか」

「うん？ そうだな、俺は——」

「……こんな感じ」

そして翔子は近くにいた明久にその用紙を差し出し、明久はそれを手に取って読み上げる。

《お婿さん・旦那さん・おしどり夫婦・新婚さん・霧島雄二・翔子と永久就職・e t c …》

「なによ坂本。アンタもう進路決まってるんじゃない」

「まったくだよ。人のこと羨ましいとかなんとか言っちゃってさ」

「お前らわかつていて言ってるだろ!？」

お前はもうどんなルートを辿ろうが最終的に行きつく所は同じだから、どれだけ悩んでも無駄なことだな。

「つか雄二お前もしかして、翔子に自分の進学先教えないつもりだったのかよ」

「……………俺がエリート気質の連中と無条件でそりが合わないのは知ってるだろ？だから自分の学力より大分ランク落とした大学に進学するつもりなんだが……………こいつのことだから教えたら絶対俺についてくるだろ。そんなことになったら俺は翔子の両親に顔向けできねえよ」

……………こいつも一回ぶちのめした方がいいかもな。

予想通り雄二はまさに「怒ってます」と言わんばかりの表情をした翔子にアイアンクローをかけられる。

もつともらしい理由で取り繕ったが、多分こいつのことだからキャンパスライフくらいは自由に過ごしたいとかそんなだろうな……………結婚云々に腹くくっても涙ぐましい抵抗はまだ続いているようだ。翔子もそれを察しているのか、雄二の悲鳴には耳を貸さず怒りに任せて顔を大豆のように変形させる。

「うーん…………… 本当に悩ましいなあ……………」

まあそんなことはこのクラスでは日常茶飯事なので、明久はそれを捨て置いて自分の進路をどうするか悩む作業に戻ろうとしたその時、ガラツと戸を開けて我がクラスの担任、鉄人こと西村先生が教室に入ってきた。

「なんだお前たち、まだ残っていたのか。用がないのならさっさと帰宅しろ」

教室の窓を見て回る西村センセ。どうやら教室の戸締まりをチェックしにきたらしい。

「すみません、西村先生。ちよつと皆で進路について話をしていたんです」

姫路城がそう言つて頭を下げると、

「ほう。進路についての話か」

西村センセは明久達三人の顔を順番に見て呟いた。

「今世紀中に終わればいいんだが……」

時たま思うがこの人ホントに教師か？

「まあ、冗談は置いておくとしてだ。進路についての相談なら進路指導室で聞かぞ？」

「「……………?」」

何故かキョトンとする明久達。

「おいお前たち。なぜそんな不思議そうな顔をする」

「あ、そつか。あの部屋つてそういう使い方もあるんだつけ」

いや、普通そういう使い方がメインだろ……。

「拷問や補習の他に進路を指導する側面もあつたとはな……」

いやだからメインは進路指導で他はサブ……というか補習はともかく、拷問なんざサ

ブにすら入らねえよ普通。

「……………予想だにしない利用法」

「あの部屋の名前をなんだと思っただけなんだお前たちは」

時たま思うがここってホントに学校か？

「あの、西村先生。進路指導でどういむたことを教えてくれるんですか？」

「そうだな。お前たちが希望する進路に対して、具体的なアドバイスをしてやることができる。例えば医者になりたいと言うのなら、その生徒の学力や学びたい内容に即した学校を紹介したりな。……………それでお前たちはに漠然とした希望のようなものはないのか？」

「希望はあるが教えたくない」

「……………ヌー……………カメラマン」

「樹海以外」

「よし。一列に並んで歯を食いしばれ」

せつかく珍しくまともな流れだったんだから、一瞬でぶち壊すんじゃないやねえよ……………。

「……………まあ、つまるところまだ方向性が定まってないということか？」

「そんな感じですよ」

「そういうことなら皆と話をするのも良いだろう。困ったことがあれば進路指導室に来るといい」

そう言つて西村センセは教室から出ていき、

「(ガラツ) 放しは聞かせてもらつたよ」

入れ替わるように学園長のぼーさんが――

「あ、学園長先せ――」

「(ピシヤツ) さようなら」

戸を開けて入つてくる前に明久がそれを阻止した。

「良い反応だ明久」

「……………グツジョブ」

「(ガラツ) 本当に無礼な連中だねアンタらは！」

「学園長先生、ウチらに何か用ですか？」

警戒しつつ島田がぼーさんに尋ねる。これまでの経験が活きたのか、いい加減こいつも学習したようだ。

「実はだね、丁度新しい召喚獣の設定を――」

「間に合つてます」(島田)

「お引き取り願うのじゃ」(秀吉)

「……………帰れ」(ムッツリーニ)

「爆ぜろ」(雄二)

「ついでにハゲろ」（明久）

「なんだいその反応は!? しかも最後の二人はただの罵倒じゃないかい!」

無理もねえけどまったく歓迎されてねえな……つうかもうすぐ大規模な召喚大会がある筈だろ? 召喚システムの調整云々で綾倉センセ絶対クソ忙しくなるはずなのに、このばーさんまた余計な仕事増やしたんじゃ……。

「あの、学園長先生。新しい召喚獣の設定というのは……?」

（明久絡み以外は）人間ができてる姫路が恐る恐る問うと、ばーさんは満足そうに頷いてから答えた。

「前に召喚獣で心理を読み取ったり、性格のデータから子供をシユミレートしたことがあったらどう? それらを活用して、今度は召喚者の未来をシユミレートできるようにさせたのさ。綾倉先生に」

「そろそろアンタ綾倉センセに毒でも盛られるんじゃないか?」

やっぱ綾倉センセに負担がいつてやがった。あの人がおとなしそうな外見なのに割と性格が荒んでるの、多分この人が原因だよな……。

「召喚者の未来をシユミレート……ですか?」

「ま、予測というより占いに近いさね。性格や運動能力や成績、人間関係のデータを入力して、考えられる最も可能性の高い未来の姿を出現させるのさ」

それは確かに面白そうだけどなんでアンタが自慢げに語ってるんだ？

「それってどんな未来が見られるんですか？」

「だいたい二十三〜五歳になったくらい姿だね。あんたらの性格を加味して、その進路を選択した際に抱くであろう感想とかを言うようにしてあるらしい。年齢に応じた心や身体の成長も考慮してね」

要は自分が選びそうな進路に対する感想を、未来の自分に教えてもらうってスタンスか。

「それは今のアキにはびつたりかもしれないわね」

「そうじゃな、渡りに船というやつじゃ」

その船がタイタニックかもしれないねえつてのに乗り気になっている二人を見て、やはり学習していないと俺は考えを改める。

「でも、また酷い目に遭うんじゃない……」

「不要になったら『アウト』と言えば消えるようにしてあるさね。何かあればそれで対処したらいいさ」

ばーさんのその言葉に、疑惑の念を薄めてしまう明久。おいおいホントどうしようもねえな明久……今回警戒しなきゃならねえのは学園長よりむしろ綾倉センセだ。あの人ストレスが溜まると涼しい顔で八つ当たりしてくるって以前御門のおっちゃんが愚

痴ってたからな……意図的にシステムに不具合を生じさせてもおかしくねえ……。

進路指導と召喚獣②

【雄二視点】

「一応、話を聞く限りでは大きな問題は無さそうだな」

「うーん……それはそうなんだけど……」

「それでもやはり明久は猜疑心を拭いきれないようだ。……まあこのババアのいうことをホイホイ信用するほど、俺も平和ボケしちやあいながな。」

「まあ気が向いたら使えばいいさ。無理強いはしないよ。フィールドは張っておくから好きに使いな」

「そう言い残してババアは去って行った。いつものように俺達をモルモットにするつもりならこの場になきやデータを取れないし……あのババアも一応教育者だ、今回は善意で提供してくれたのかもしれないな。」

「して、どうするのじゃ明久？」

「折角だし、使ってみるよ」

「お。随分と思いい切りが良いな」

「まあね」

だがまあせっかくこうしてバカが率先して毒味役を引き受けてくれるわけだし、とりあえず今は静観でいいか。

「じゃ、喚び出すから念の為に皆離れて。」

よし……試獣^サ召喚^{セン}っ！」

お馴染みの喚び声に呼応して現れるお馴染みの紋様。そしてその中心から明久の分身である召喚獣が姿を現した。

「おお、今度は等身大だな」

「……………肝試し以来」

出てきた召喚獣はいつもの三頭身ではなく、きちんとしたバランスの姿だった。

「ふむ。今回は制服ではなくスーツ姿なんじゃな」

「社会人になったってことだからかな？」

「よかったな明久。かろうじて社会人にはなれるって、コンピューターが判断してくれ
たみたいだぜ」

「和真、ぶん殴っていいよね？」

「その後で蹴り返していいなら構わないが？勿論全力全開で」

「……………じゃあいい」

俺と明久の会話は不毛なやり取りが多いって以前言ってたが、お前も人のこと言えな

いだろ和真……それからお前の蹴り交通事故と大差無いんだから自重しろマジで。

「あれ？僕よりちよつと背が高い」

「これからまだ伸びるって予測したんだろうな」

「へえ。それは嬉しいなあ」

なんて話をしている俺達に、未来の明久は顔を向けてきた。

《あ、懐かしい！高校生の頃の皆だ！》

召喚獣が喋ることに関しては以前経験済みのためさほど違和感はない。というか会話ができないと聞きたいことも聞けないから当然の措置だろう。

《そっかそっか。そういうえば高校生の頃の僕ってこんな感じだったよね……でも、もうちよつと賢そうだったような気もするけど……》

未来の明久よ、それば間違いない気のせいだ。

「一応聞くが、お前は明久の将来の姿でいいんだよな？」

《そっだよ。いやあ、雄二もこんな顔だった？秀吉にムツツリー二に、霧島さんもまだ幼いなあ。》

和真は………あれ？この頃から顔つきがほとんど変わってないね………》

「オイ待てやコラ、なんで関係ない俺に流れ弾が来てんだよ。………つか俺、未来でも童顔スパイラルから抜け出せてねえの？地味にシヨックなんだけど」

召喚してもいないのに知りたくなかったことを聞かされて露骨にテンションを下げ
る和真。……ああ、そういやこいつ自分のキャラとは真逆の可愛らしい顔立ちがコンプ
レックスだったっけ。

《あ、あはは……それにしても、こうして高校生の頃の皆にまた会えるなんて思わなかつ
たよ》

空気を読んで話題転換なんて今の明久には絶対にできない芸当だが、未来から来ただ
けあつて少しは賢くなつてやがる。……いや実際に未来から来たわけじゃなく、それら
しく設定されただけなんだろうがな。

《それで、そっちは瑞希と美波だよね？ こんにちは》

「は、はいっ！ こんにちはっ！」

「え、えつと、初めまして……じゃなくて！ 久しぶり……でもないし！ あ、あの、その……！」
「狼狽えすぎだろオイ」

「？ 二人とも、何を慌ててるの？」

「お前はお前でマジかよ……」

目に見えて緊張する姫路達とその理由がまるでわかっていない明久に、呆れたように
嘆息する和真。気持ちは十二分にわかるぞ。

「あ……。確かに、今よりは若干マシな顔つきになつてるもんなあ」

「うむ。良い男になったものじゃ」

「……………今後余程苦勞すると見た」

この二人の受難は今後しばらくは続きそうだな……それと明久、そんな面白くなさそうな表情になつてゐる暇があるなら、お前はもう少し周りを見る。

「……………ま、いいか。それより、未来の僕に聞きたいことがあるんだよね」

《ん？何かな？》

「単刀直入に聞くけど、二年後の僕はどうなつてゐるの？」

現在高校二年生の俺達に訪れる二年後。進学か就職か……その後の人生に大きな影響を及ぼす大事な選択だ。

《ああ、それなら大丈夫だよ》

「？ 大丈夫つて、何が？」

《二年後も楽しく幸せな高校生活を送っているから》

「待つて!?! 二年後にまだ高校生をやっているつて、全然幸せには思えないんだけど!」

こいつは傑作だ、まさか選択すらできない立場だとは。

《あ、わかりにくかつた？ 要するに、来年卒業できないつていうー》

「そこまで説明しなくてもわかるよバカ! 問題は どうして僕が来年卒業できないのかつてことー! 出席日数!?! それとも赤点!?!」

《いや、点数も出席日数も足りていたよ》

「じゃあどうして!？」

《……でもね、二年生じゃ卒業はできないんだよ……》

「卒業以前に三年生になれなかったのか!」

「明久、俺らに対して別に敬語とかはいらねえからな……それと下級生達と馴染めなかったいつでも三年の校舎に遊びに来ていいから!」

「慰めてるつもりかしらないけど、半笑いで言われたら余計心が痛むかららね!」

和真の慰めに見せかけた追い討ちを受け、明久が頭を抱える光景を未来の明久はまじまじと眺め……

《うくん、なるほど。我ながら反応が面白いね。これは皆が散々からかってきたのも頷けるなあ》

「はっ!」

……どうやら多少マシになったのは外見だけじゃないみたいだな。明らかにどっかの誰かの影響を受けたであろう不適な笑みを浮かべる未来の明久を、かつがれたと知った今の明久は半目で睨む。

《心配要らないよ。死ぬほど勉強して先生方に毎日土下座をしたら温情で卒業くらいさせてもらえるよ》

「全てにおいて心配だらけだよその台詞！」

崖つぶちに晒されていることに変わりはないと知った明久は再び頭を抱える。……いやまあ、最近はいいつも段々成績が向上してきたからそこまで追い詰められてはいないと思うが、それでもあり得ないと言い切れないのが明久の明久たる所以だな。

《他に聞きたいことは？》

「いっぱいあるけど返ってくるのは聞きたくない答えばかりになりそうだよ……」

すっかり将来を聞くことに躊躇するようになった明久の代わりに、姫路と島田がすごい勢いで前が出る。

「じゃ、じゃあ、私が質問してもいいですか？」

「ウチもちよつと聞きたいことが……」

《ん？ 何かな？》

「あの……今、恋人がいたりしますか？」

「そ、そうっ。あるいは結婚していたりとか！」

「ド直球過ぎるだろお前ら……」

和真が呆れるのも無理はない。本人がすぐ横にいる中そこまでストレートな質問ができるなら、明らかに直接想いを伝えた方が手っ取り早いだろ……というか横でクエスチョンマークだらけになってる明久、なんでこれで気づかないんだよ……。

《ん〜……内緒、かな?》

未来の明久は少し考え込んでから、悪戯っぽく微笑みながら言葉を濁した。はぐらかすのも大分うまくなってるなこいつ……。

「そ、そんなこと言わずに教えて下さいっ!」

「そうよアキ! 隠し事なんて似合わないわよ!」

《あはは。そう言えば高校生の頃の瑞希と美波ってこんな感じだったなあ》

「も、もしかしてウチらに関係あるから言えないとか、そういうこと!」

「お願いです! 教えて下さい明久君! ……あとさつきから気になってたんですけど、いつ頃に私のことを名前で呼んでくれるようになったんですか!」

《え? ……ああ、確か高校の頃はまだ瑞希のことを名前で呼ぶのが気恥ずかしかったっけ? そうだなあ、あれは—》

「アウト」

明久の一言で跡形もなく未来の明久は消え去った。あのババアのことだから、召喚獣を消す際に何か不具合でも生じるかと思っただが、杞憂だったか。

「あ、明久君っ! どうして意地悪をするんですか!」

「ウチ、他にも聞きたいことがあったのに!」

「いいんだよ。あんなバカに質問なんてしても、どうせ変な答えしか返ってこないんだ

から」

「? 何怒ってるのよ?」

「別に」

「???」

「明久もアレだが、こいつらもこいつらだな……」

鈍感なのはお互い様だったか……これじゃあ永遠に進展なんかしないんじゃないか
……?」

「とりあえず、役に立つかはわからんが、そんなに害が無さそうなことは確かだな」

「………そうだな、俺の直感にも抵触しねえし」

「うむ。どうじゃムツツリーニ。進路に迷っておるなら喚び出してみるのも良いかも知
れんぞ?」

「(コクツ) ……試獣召喚」

喚び出されたムツツリーニにはノーネクタイのスーツ姿で、どことなく飄々とした印
象を抱かせる。系統としては御門のオッサンに近い。

「意外だな、ムツツリーニはまだまだ背が伸びるみたいじゃないか」

「僕より少し高いくらいだね。いいなあ」

「………そんなことはどうでもいい」

未来の自分の外見には興味がないようで、すぐさま質問に入るムッツリーニ。

「……………一つ、聞かせて欲しい」

《……………なんだ》

「……………ヌードカメラマンには、なれたのか……………？」

いや、そんな「プロ野球選手になれたか？」みたいな目で尋ねるようなジョブじゃないだろ……………。

《……………今の俺の仕事を知りたいと？》

「……………（コクリ）」

《……………「鳳財閥」直属の新聞記者をやっている》

「……………」

《……………どうした？》

「……………Pardon？」

なぜ英語。

《……………「鳳財閥」直属の新聞記者をやっている》

言われた通り、さきの台詞をもう一度繰り返す未来のムッツリーニ。しかし新聞記者……………それもあの「鳳」直属か。高い情報収集能力に行動力、そして多種多様の特殊技能を備えているムッツリーニに、鳳が目をつけ勧誘したとしても不思議ではないな。

しかし、かなりの出世頭になることを聞かされたと言うのに、ムツツリーニは怒りに全身を震わせていた。

「……………お前は……………」

《……………ん？》

「……………お前は……………何をやっている……………？」

《……………何を、とは》

「……………なぜ、ヌードカメラマンになっていない自分を許容している……………？」

何故ヌードカメラマンにならなかった自分を、そこまで許容できないんだ……………？

「……………諦めたのか、自分の夢を……………生きる意味を……………！」

《……………政界・財界の闇を暴き、駆逐し、日本を浄化することが、鳳から課せられ

た俺の使命だ》

「……………違う……………！服の中に隠された神秘を暴くことが指名なんだ……………！」

《……………酷いもんだな……………昔の俺は》

「……………認めない……………！俺はそんな自分を絶対に……………！」

自分の夢とは道を違えた未来の自分。その生き方を認められず、ムツツリーニは将来の姿を強く睨みつけていた。

「それにしても、ムツツリーニの口から『日本の浄化が使命』なんて台詞が出てくるとは

思わなかったよ」

「まさかあの鳳から、そんな重役を任されるようになるのはの」

「ソウスケは権力者や人の上に立つ者が道を踏み外すことを決して許さねえからな。父親の跡を継ぐにあたって掲げる当面の目標は、そういった連中を片付けることだって以前いつてたが、その尖兵として抜擢されたのがアイツとはな……」

「このまはまのペースでエロさが成長したら、そのうち振り切つて真面目になるつてことかもしれないな」

以前の合体召喚獣の際も似たような結果だったし。

なんて考察をしているところに、

ーピピッ パシャッ

という電子音が響いた。今のはケータイカメラのシャッター音か？

「……ありがとう、瑞希」

「いえいえ、これくらい」

音の原因は姫路と翔子。どうやら姫路がケータイで未来のムッツリーニを写真に収めたらしい。

「姫路さん、ムッツリーニの写真なんか撮つてどうするの？」

「あ、私じゃなくて翔子ちゃんに頼まれたんです。取り方がわからないそうなので」

「……携帯電話は苦手」

「俺の携帯はメモリー消去から画像データ改造まで何でもできるくせにな……」

「……雄二の物以外携帯電話は苦手」

なんてピンポイントに俺に不利益を及ぼす例外なんだ。

「して、霧島はムツツリーニの写真なんぞをどうするのか」

「愛子にでも送るんだろ。相変わらず友達思いだなお前は」

「……それほどでもない」

工藤に未来のムツツリーニの写真を？

「ああ、そっか。夢に破れた惨めなムツツリーニを指差して笑うわけだね」

「それは良い考えだな。ムツツリーニの夢の哀れな末路だ。高らかに笑ってやろうじゃないか」

「ないか」

「相変わらずデリカシーの欠片も無えなお前らも……」

「たまに疑問に思うんだけど、アンタらって実は友達じゃないわよね」

「失礼な。僕らの友情は一生ものだよ」

「まったく。俺たちは永遠の友情を誓い合っているんだからな」

（……利用価値がなくなるまでは）

「なんか、心の声が聞こえてきた気がするわ」

「金箔より薄っぺらい友情じゃな……」

「いくらゴーイングマイウエイな徹でも、流石にこれと一緒ににはされたかねえだろうな……」

俺達こそ親友未満知人以下の固い絆で結ばれた、真に素晴らしき男の友情と言えるだろう。

なんて話をしている横で、姫路はさっきの写真を添付したメールを打っていた。

「愛子ちゃんに送信つと」

「……ありがとう、瑞希」

「いえいえ、これくらいなんでも……わ、もう返信が」

送ってから殆ど間を置かず姫路のケータイに返信が来た。

「……ふふふつ、愛子ちゃんつてば」

「どれどれ、ウチにも見せて」

「……私も」

姫路のケータイを覗き込む翔子と島田。

「あははっ、いいリアクションね！」

「……愛子、可愛い」

すると、二人とも楽しそうに笑顔を浮かべた。

「なんだ？そんなに面白い返事がきたのか？」

「どんな反応だったの？」

「やめとけデリカシー皆無コンビ」

続いて俺と明久も覗き混もうとしたが、失礼な呼び名と共に和真に阻まれる。このバカと一緒にするなといつも言ってるだろうが。

「うーん……秘密です。これは明久君たちには見せられません」

「それが良いだろうな。男の俺らにや見せるのは無粋つてもんだ」

「……和真、愛子がどう反応したかわかるの？」

「アイツの人となりを知ってりや大方見当はつくだろ。……この非モテ共はともかくと
して」

「ぐっはあっ!？」

和真の放った言葉のナイフに打ちのめされ、夏のナンパが散々だったことを想起させられつつ、俺達は膝から崩れ落ちた。この野郎自分がモテるからって容赦なく人の古傷
抉りやがって！

《……………お前が抱いているのは夢じゃない、欲望だ》

「……………己が信条に背を向けた男が何を……………!」

《……………それなら貫いて見せろ、自分の志を》

「……………言われるまでもない。俺は決して信念を曲げない……………」

《……………夢は形を変えろ。それだけは覚えておけ》

「……………これ以上、お前と話すことはない……………」

ムツツリーニが「……………アウト」と呟き、召喚獣が消え去った。やたらとシリアスな会話だったが、その中心はヌードカメラマンになるか否かと聞くと、なんだかなあという気分になる。

進路指導と召喚獣③

【和真視点】

「さて。次は坂本かしらね」

ムツツリーニの番が終わり、島田が雄二に水を向ける。

「むしろ俺は未来なんざ知りたくもないんだが……」

「……雄二（メキツ）」

「そうだな、抵抗は無駄だな。わかっていたさこんちくしょう！」

やけになった雄二が召喚獣を喚び出した大人になった雄二は、背丈はそれほどかわつてはいないが、心無しか雰囲気が柔らかくなっている。源太や明久と並んで貧乏くじ役かとも似合うこいつのことだから、何かしらとんでもない格好で出てくるんじゃないかと期待していただけに、極普通のスーツ姿とはとんだ肩透かしだ。雄二もそれを危惧していたようで、あからさまにホットしている。ちっ。

「よかった……奴隷みたいな格好で出てこなくてほんとよかった……ところで未来の俺」

《なんだ？過去の俺》

「未来で俺はどんな職についてるんだ？」

《あー……一応高校教師をやっている》

僅かに言い淀んだりわざわざ一応をつけたことは多少気になるが……高校教師ねえ。意外……って程でもねえか。こいつ勉強教えるのやたら上手いし、ついでに割と面倒見も良い方だしな……学生時代の素行はどう考えても教師とは対極だけだな。

「よし、苦労、アウト」

そして雄二は満足そうに頷きつつ召喚獣を消した。

……いや、早くね？

「……雄二、そんなすぐに消さないで」

「そっだよ雄二。おかげで霧島さんとの関係がどうなっているのか聞けなかったじゃないか」

「目的は進路の確認だろ？それ以外のことを探るのは不純だと俺は思う」

相変わらず往生際の悪さと屁理屈じゃあ右に出る者はいねえな……お前が抵抗しようが無駄なんだよ。

「なあ翔子。こいつから無理に聞き出さなくても、未来のお前に聞いた方が早えだろ。どうせお前ら間違いなく交流続いでるだろうし」

「おい和真テメェ!?!」

忘れたのか雄二、俺は『翔子の恋路を応援し隊』隊長だぜ？この手の話でお前を追い詰めるのに理由なんざいらねえだろ。

「……やってみる」

翔子が小さく「……試^サ獣^モ召^シ喚^ン」と呟くと、今度は未来の翔子が姿を現した。未来の翔子は相変わらず綺麗な顔立ちに綺麗な黒髪に――

《……（ポツ）》

大きなお腹に――つてちよつと待て!?

「「アウトおー！」」

そんな未来の翔子を見て思わず叫んでしまう俺達男子陣。いやダメだろこれ!?! 少なくとも進学校の進路指導の延長線上に存在しているシユミレーションじゃねえ!

「明久君達、何を騒いでいるんですか?」

「そうよ、アキ達はともかく終までどうしたのよ。別にお腹に赤ちゃんがいてもおかしくない歳じゃない」

「いやいや! そういう問題じゃなくて! もつとこう、倫理的にとにかく何というか……え? 何? 僕らの考えがおかしいの?」

「安心しな明久、お前の考えは大概がおかしいが今回ばかりはこの反応が絶対正しい」
率直に言って生々し過ぎる。この方向性の話題に免疫の無え俺にはハッキリ言っ

荷が重い……というかそれ以前に、ムツツリーニの発想がそっち方向にいけばその瞬間にオダブツだ。何とかそうならないように注意を反らさなければ―

「翔子ちゃん、やつぱりその子は坂本君の―」

こんの淫乱ピンクがああああ!?

ダメな流れが確定したことに内心頭を抱える俺をよそに、未来の翔子はその問いに答えようと身体を姫路に向けて、

《……あ》

そのお腹に入れてあったボールを落としてしまった。

「……………」

言葉を失う俺達の前で、てんてんと弾むボール。

《……………」

未来の翔子はそのボールを拾ってお腹に入れ直し、恥ずかしそうに呟いた。

《……動いた》

「うごくかああーっ!」

紛らわしいんだよこの野郎!お前のことは親友だと思ってるけどシバいていいかなマジで!

「霧島さんは大人になってもお茶目だなあ」

「……………遊び心を忘れていない」

「翔子ちゃんらしいですね」

「そういう問題か!?! ってか将来のシミュレーションなのにネタを仕込んでいるっておかしいだろー!」

そんな雄二の叫びを聞いて未来の翔子が首を傾げる。

《……………ネタ?》

「腹にボールを入れて登場するなんて、出オチ以外の何物でもないだろ」

《……………???》

雄二の言葉がピンと来ないのか、翔子は更に大きく首を傾げた。

「ん? ウチらを驚かせようとしてボールを仕込んできたんじゃないの?」

《……………そんなこと、考えていない》

当然、というように否定する翔子。

……………何故だろう、無性に嫌な予感がする。

《……………これは子供が欲しいっていう雄二へのアピール》

「「ああ、なるほど」」

「それはもう追い込みのレベルだ」

嫌な予感多分の中。

「なんじゃ、子供はまだできておらんのか」

「坂本君は子供好きなのですぐにできるものだと思います」

「普段はあんなに威勢の良いこと言ってるクセに意外と臆病なのね

「まったく、情けないなあ」

「待て待て待て！論点がずれている！聞くのは将来の進路だろ！」

何か翔子が微笑んでるしほぼ確定だなこりや。他の奴らの反応からして誰もまだ気づいてねえ、つと……よし。

「じゃあ改めて……未来の翔子ちゃんは何をしているんですか？」

《昼はお仕事もしている》

「「夜は!?」」

《……頑張ってる》

「「……………」」

「お、おい待て姫路に島田！俺と翔子を見て顔を赤くするな！邪推しすぎだろ!? ついでにムツツリーニと明久も唇から血が溢れるほど悔しがってるんじゃないやねえ！」

うおつ!? すっげえ憎悪……雄二人くらいなら呪い殺せそうだ。

「では未来の霧島よ、お主は何を頑張っておるのじゃ?」

《……料理とか、裁縫とか、勉強とか》

おいお前ら、あからさまにほっとしてるけど多分何かしらオチがあるからなこれ。

「いやー、焦ったよ。僕はてつきり違う意味だとばかり」

「あ、あはは……私も勘違いしちゃいました」

《……ふふつ》

そんな明久達を見て、翔子は笑って告げた。

《……そういうお話は、高校生には秘密》

ほら見ろ、こんな風にさりげなく爆弾を投下するのが翔子だ。

「……………!! (ギリツ)」

「落ちてバカども! 『今ここでコイツを殺っておけば……………!』って顔で俺を睨むんじやねえ!」

「死ねええーっ!!」

「危ねえええーっ!?!」

明久達が飽きもせず不毛なやり取りを繰り返すかたわら、翔子は知りたいことを知れて満足したのか召喚獣を戻していた。こいつにとつて一番大切なものは、多分この先決して変わらねえだろうな。

……にしてもアイツらが最後まで気づかなくてホツとしたぜ。アイツら子供はまだ出来てないって勝手に判断してたが、未来の翔子はそのやり取りをやけに微笑ましそうに眺めただけで、肯定なんざ一切してねえってことに。

「二人目が欲しい」や「早く子供が欲しい」とは言わなかったし……まあつまり、そういうことなんだろう。

「それにしても、面白いわねコレ」

「そうですね。シュミレーションだから確定した未来じゃないっていうのがまた気が楽でいいですし」

「それに、今までほど酷い目に遭わないものね」

楽しそうに話をしている島田と姫路。

確かに実害はさほど無さそうだし俺の直感も作用しねえが……なんだろうな、この無性に引つ掛かる感じは。

「じゃ、折角だしウチもちよつと喚び出してみようかな」

「美波ちゃんは将来どんなお仕事をしているんでしょうかね」

「塗装業者とかじゃねえの？ 壁専門の」

「ぶつ飛ばすわよ終……それにお仕事をしているとは限らないわよ。もしかしたら、専業主婦なんてコトも……試獣召喚っ！」

願望駄々漏れなまま島田はキーワードを口にして召喚獣を喚び出す。

女性用スーツに身を包んだ未来の島田は、ポニーテールをやめて髪を下ろしていた。パツと見では特におかしな点は見当たらねえが……さて、今回はどんなオチだ？

「あ、美波ちゃんも今よりもうちよつと背が伸びるんですね」

「……脚が長くてカッコいい」

「あ、ホントだ。ウチ、背も大きくなるのね」

自分の召喚獣の傍に立ち、やけに嬉しそうに背を比べる島田。

「ま、外見についてはこれくらいにして……聞くこと聞いちゃいましょっか」

「あ、はい。それじゃ……将来の美波ちゃんはどうなお仕事をしているんですか？」

姫路の問いに対して、未来の島田は少々照れ気味に答えた。

《ウチ？ウチは一応、その……モデルを……》

「「モデル!!」」

《い、一応よ？いつかはデザインの方もやってみたいと思っただけ、そっちはまだ勉強中……》

「ああ確かに、ザクだのグフだのリックドムだのややこしいもんな」

《いや、プラモデルは関係無いからね？》

なんでプラモデルだってわかるんだよ……。

「凄いです美波ちゃん！切っ掛けはなんだったんですか？」

《えっと、大学の学園祭で出し物があつて、それに参加させられたんだけど》

「……そこでスカウトされた？」

《ううん。熱心な友達がその写真を撮影した挙げ句、勝手にオーディションに応募しちゃつて……》

「手垢まみれのベツタベタなきっかけだなオイ」

つうか何やつてんだあのドリル女は……。

「ちなみにその友達は何をしているの？」

《ファッション系雑誌の編集をやっているわ》

悪質なストーカーとかになってないだけまだマシか……。

「友達が勝手に応募しちゃって、なんて台詞を実際に耳にするととは思わなかったよ」
「本当にあるんだな、そんなの」

《でも、それはただの切っ掛け。勿論ウチも興味があつたからやっているのよ?》

まあルックスがモデル向き、ってだけでやっていけるほど温い世界じゃねえだろうな。島田にはこの未来の姿に至るまでも、そしておそらくその先も、少なくとも苦労する羽目になるんだろうな。やりがいがあるとさえ言えそうなんだろうが。

《ところで、そんなことより―》

「ん?」

島田の召喚獣が明久の方を向いて嬉しそうに笑つたかと思うと、

《高校生のアキよね!懐かしいーっ♪》

「つつつ?!?!」

明久を思いつきり抱き締めた。ほほう、大人になって素直になれない病面倒臭さが薄まったか。

「ちよ、ちよつと!何やつてるのよ!」

《うーん……可愛いし、抱き心地もバッチリ!》

あちら、明久の奴分かりやすいぐらいデレデレしちゃってまあ……からかつてやり

てえのは山々だが、俺の場合ブーメランになっちまうからここは黙つとくか、うん。

「み、美波ちゃん！そういうズルはダメですっ！」

「う、ウチだつてやめさせたいわよっ！」

《よしよし、アキは可愛いわね》

……傍から見るところ映るのか。よし、俺も絶対人前ではこうならないよう注意しなければ。

「離・れ・な・さ・い！」

業を煮やした島田が割って入り、召喚獣と明久を強引に引き離れた。やたらと赤くなった顔を扇ぎつつ、横目で未来の島田をチラ見していた明久だが、突然愕然とした表情になった。

「っ！ば、バカな……っ！」

「ん？どうした明久？」

「む、胸が……」

「美波の胸が……成長している……っ！」

「「なにいつ!？」」

あまりの衝撃的事実に雄二とムツツリーニ、ついでに俺もノリで驚愕する。

「え？明久君達は気付いていなかったんですか？」

「……服の上からでもわかるのに」

「だ、だって、絶対にありえないことだと思っていたから……」

「殺すわよ」

「髪も下ろしちまったし、未来のお前アイデンティティ全滅じゃねえか……。大丈夫かよ。こんな没個性で」

「ぶっ殺すわよ」

島田のさつきから限界ストレスまで膨れ上がったので、おちよくんのはこのくらいにして……。ああなるほど、そういうオチか。

「しかしアレじゃな」

「ファッションモデルは胸が大きいと採用されにくいというのはデマじゃったようじゃな」

「そういえば、そんな噂もありましたね」

「……美波の胸、Cくらいありそう」

《ふふふ、凄いでしょ》

将来の島田が胸を張って言葉を続ける。

《これこそが未来の胸パツ》

「アウト」

台詞の途中で、未来の島田は唐突に姿を消した。

俺は真顔かつだんまり状態の島田に近寄り、ポンと肩を叩いて一言。

「人生そんなもんさ」

島田はその場に崩れ落ちた。

進路指導と召喚獣（完結）

【雄二視点】

「さて、次はワシが喚び出してみようかの。試獣^{サモ}召喚^{モン}じゃ」

島田がメンタルブレイク状態から復帰した直後、秀吉が自分の召喚獣を喚び出す。少しの間を置いて幾何学紋様の中から、見知った顔をした召喚獣が出現する。長い髪を後ろで一つに束ねていて背も少しだけ伸びている。ふむ……どう見ても女子にしか見えない現在と比べると、やや中性的よりになってるな。

「むう……」

「あん？何か不満な点でもあんのか？」

「大人の姿なのに髭が生えた形跡すら全くと言って良いほど無いのじゃ……」

「それは流石に高望みし過ぎなんじゃねえの？」

「あんまりな言い種だが秀吉以外の全員が似たような意見だろう。」

「よかった……胸が全然無成長してないわ」

「してるわけなからう?!」

もし仮に秀吉の召喚獣の胸が膨らんでたら、島田に親の仇を見るような目で睨まれて

たんだろうな。

「ところで、木下君の進路は」

《ワシなら劇団に所属しておるが》

「ま、予想通りね」

まあこの演劇狂いがそれ以外の道を選んでいる光景なんて想像できないし、聞くまでもないことだったな。

「……じゃあ、優子は？」

《姉上？姉上は……（ザザアツ…）管理栄養士をしておる》

……ん？今、ノイズみたいな音が入ったような……。

「管理栄養士？って何？」

「……食指と栄養に関する専門的な知識と技術に基づいて、栄養指導や給食管理・栄養管理を行う職業」

「アイツの頭なら資格取得は余裕だろうが、なんだってそんな職を……ああ、そういうことか」

「愛されてるようで何よりだなあ和真（ニヤニヤ）」

「黙れチンピラゴリラ」

こいつは将来必ずスポーツ系の職を選ぶだろうから、木下姉はそのサポートわしよう

とこの仕事を……つて流れだろうな。真意に気づいた翔子、姫路、島田も揃って微笑ましそうな表情になってやがる。

「ええと……どういふこと？」

「簡潔に言うのだな明久、木下姉は和真の――」

「それで秀吉、他の連中はどうなんだ？」

弄られる流れを察したのか和真が強引に話題を転換する。ここでしつこく食い下がれば、おそらく黄金の右足の餌食になるから渋々追求はしないでおく。

《そうじゃな……例えば、久保は代議士の秘書になっておるのじゃ！》

「「おおおー」」

能天気な明久達は素直に驚嘆しているが、いち早く事情を察した俺と和真は苦い顔になる。

「そ、そうか……。久保はついにそこまで行っちゃったか……」

「なんとというか、やるせなくなるな……」

《久保は「特に民法の改正に対して尽力したい」と言っておったのじゃ》

「「……………」」

その一言で察したのか、秀吉とムツツリーニも苦い顔になる。よりにもよって当事者の明久は理解してないが。

「……民法、第731〜749条」

「？ 婚姻に関わる法律がどうかしましたか、翔子ちゃん？」

「……なんでもない」

明久の奴、理解はしてないが第六感が告げたのか背筋をビクつかせてるな……この件に関してだけは多少同情する。

「じゃあ、工藤さんは？」

《医者のおとして頑張ってる》

医者か……多少は意外だがわからなくはないな。

「よく一緒にバカなことをやったりしているから忘れがちだが、そういや工藤もAクラスなんだよな」

「そうね。医学部志望でも何の不思議もないわね」

「人の身体についても詳しいしね」

絶対医学の勉強目的で詳しくなったわけじゃないだろうがな。

「………女医………だと………？………ヤツは………どこまで、人を惑わすのか？」

なんか勝手に戦おのっているがムツツリーニ、そこまで惑われるのは多分お前だけだ。

「さて、こんなもんじゃろうかの。アウト」

そうしてひと通り満足した秀吉は召喚獣を戻した。

「じゃあ次は……和真、やってみる？」

「あん？俺は別に興味無えんだけど」

「和真が無くて僕達はあるんだよ。皆も気になるよね？和真の将来」

「「気になる」」

……まあ、能力面はともかく性格面がこの上なくデンジヤラスなこいつが、未来ではいつたいどうなってるのかは多少気になる。……どんな進路を選択しようが普遍的な奴には絶対にならないだろうが。

「ふーん……まあ良いけどよ。試獣召喚」

やはり興味無さそうに、しかし特に断る理由も無かったようで和真は召喚獣を喚び出すキーワードを告げる。

しかし…

ザザツ…ザザザツ……ザー

教室中にノイズが響き渡るだけで和真の召喚獣が一向に出現せず、それどころか教室に敷かれた召喚フィールド自体が何故か消滅してしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

あまりに意味不明な出来事に言葉を無くす俺達。なんとなく気まずい雰囲気が続くが、ようやく和真が溜め息を吐き沈黙を破る。

「さてと……………撤回」

「「意義無し」」

「しっかしアテが外れたなあ、俺の勘も鈍ったか？」

「? どういうことだ?」

帰り支度をしつつ、和真の意味深な呟きに反応する。

「いやさ……さつきも言った通り俺は自分の将来なんぞ全くもって興味無えんだよ。にもかかわらずなんで今の今までここに留まったと思う?」

「言われてみれば……なんでなの?」

「理由は単純明快、何か愉快なことが巻き起こる気がしたんだよ。まあ、今回は不発みてえだが」

……要するにこのサデイストは、今回の召喚獣の試運転でまた俺達が酷い目に遭わないか楽しみにしてたってわけか……。

「まったく和真は……僕達だって毎度毎度トラブルに見舞われるわけじゃー」

『きやあぁーっ!! 覗きいーっ!!』

《ご、誤解だよ! 僕らはたまたま迷い込んだだけだ!》

《ムツツリーニ! お前はよりによってなんてところに連れて行きやがるんだ!》

《……すまないを昔の癖で身体が勝手に》

運動部の女子達に追い立てられて逃げていく、とても見覚えのあるスーツ姿の三人組が、タイムミング良くFクラス前の廊下を通過していった。

「……やっぱ俺の勘は正しかったか。それで明久、トラブルに……なんだって？」

「見舞われるわけじゃ……ないと思っただのに……」

直前の明久の言葉がとても虚しいものに……。

「というか召喚獣は既に戻した筈だろ!? 教室内のフィールドまで消えたって言うのに、なんで俺達の預かり知らない所で勝手に湧いて出てんだよ!?!」

「恒例の調整ミス……いや、綾倉先生が担当だからおそろく故意だろうな。学園長から押し付けられた余計な労働に対する八つ当たりってどこか」

「どうしてこんな問題を起こすかなあ!あの連中は一応僕らの分身なんじゃないの!?!」
「お主らの分身だからこそ、じゃと思うのじゃが」

聞き捨てならねえぞ?! 明久やムツツリーニはともかく、俺の分身ならもつと思慮深い行動を取っているはず……って今はそれどころじゃねえ!

「とにかく面倒なことになったらまずい! 追うぞ! 明久、ムツツリーニ!」

「ああもう了解っ!」

「……………了解」

未来の自分達を追って廊下に出て走る。そして召喚獣たちの姿を探しつつ、俺達は対

応策を話し合う。

「雄二！一旦アイツらを戻しちやつた方が良いんじゃないの!？」

「ダメだ！ここでアイツらが消えたら、俺達がスーツを着て覗きをやつたと誤解される恐れがある！あの連中を差し出した方が俺達自身には被害が少ない！」

「……………下手に姿形が似ている分、厄介」

やつてもない罪に問われるなんぞ冗談じゃねえ！幸い翔子もあの場にいたからアイツに断罪されたりはしないが、それでも理不尽なことに変わりはない。

なんてことを考えながら全速力で駆けていると、同じように前方を走っている女子運動部員共の声が聞こえてくる。

『あの覗き連中、誰だかわかる!？』

『わかんない！きちんと顔見えなかつたし!』

『うちの学校の人じゃないかも!』

よし！不幸中の幸いにも顔は見られなかつたようだ。これなら召喚獣を消してしまえば真相は闇の中だ！

「雄二！ムツツリーニ！」

「ああ！わかつてる！」

「……………OK」

「アウト！アウト！」

三人で走りながら召喚獣送還のキーワードを叫ぶ。すると、その言葉に反応して消え去った。

『『きやあああああーっ!?変態いいーっ!!』』

『『ぎやあああーっ!?なんじゃこりやあああーっ!?』』

—逃げている奴等の穿いていたズボンが跡形もなく。

「ちよ……っ!?待つて!?!どうしたこと!?!どうして服だけ消えてるの!?!」

「俺が知るか!?!どうせまた調整ミスか何かだろ!」

「……………なんという変態仕様……………」

召喚獣を消そうとしたら服だけが消失。どこに需要があるんだこの仕様!?

結果として、成人男性三人組が超クールビズ状態で学校の廊下を奔走するという地獄の構図に。

「まずい!?!急いで消さないと!?!アウト!」

「バカ!?!よせ明久!」

俺が制止するより先に、もう一度送還キーワードを口にする明久。すると、

『『ひいひいっ!?!今度は上着までえーっ!?!』』

室へと向かっていった。

「くそっ！あのまま追いかけてくれたら楽だったものを！」

「どういうこと!？」

「追っていると思つた連中が隣にいたら、普通は疑いようもないだろ！」

「な、なるほど……じゃあ今からあの子達の前に出ても」

「鉄人の前に突き出されるだけだ！」

「……………殺生な」

「こうなりやもう証拠を差し出す以外、既に前科のある俺達の冤罪は晴れねえ。

「こうなりや連中を取り押さえて俺達とは別人だとしようめいする！絶対逃がすな！」

「でも、召喚獣は触れないんじや」

「お前がさつき島田と接触していただろ！それなら捕獲も可能はずだ！」

「了解！」

奔騰は一旦送還できりや楽なんだが、また服だけ消えたら大惨事だ。ここは追いかけて掴まえるしかない。

「でも、追いつける!?!全然距離が縮まらないけど！」

「……………自分に追いつくのは難しい」

「為せば成る！卒業生と現役生の違いってモンを見せてやんぞ！」

こうして俺達は未来の俺達を追いかけるという、青春をテーマにした歌にありがちなシチュエーションを実演する羽目になった。

【和真視点】

「……まあそんな訳で、アイツら本人が覗いていた訳じゃねえんだよ。下手人は未来のアイツらだから正直冤罪とは言い切れねえけど、ここは勘弁してやってくれねえか？」

『ま、まあ……そういうことなら……』

『仕方ないわね……柊君に免じて不問にしとくわ』

『というかアイツら、召喚システムに大人になってもやつてること全然変わらないって判断されたのね……』

やれやれ、余計な手間かけさせやがって……明久達にバレねえように尾行しながら愉快なハプニングをひと通り満喫してから、職員室に向かった女子部員達を先回りして補

足、事情を説明して矛を収めさせた。アイツらじや多分召喚獣には追いつけねえだろうからな。

十分楽しませてもらったし、誤解ぐらいは解いてやらねえとな。俺も覗きの前科があるつちやあるけど、運動部の女子はほとんど知らない仲じやねえからあつさり信じてくれた。多分明久達ならこうはいかなかつただろうな。

さてと、あとは明久達の任せてさつきと帰るとするか……お、綾倉センセじゃん。

「おーい、綾倉センセ」

「ん？ああ柊君、今から下校ですか？」

「まあそんなところだ。……ところで綾倉センセ、さつき明久達の召喚獣が暴走した挙げ句、下半身超クールビズ仕様になるという面白事件があつたんだが……あれ、アンタの差し金だろ」

「ははは、学園長へのちよつとした意趣返しですよ。あんな目にあつた彼らの怒りほば間違ひなくあのクソババ……学園長に向くでしょうし」

「全然隠せてねえし、もうクソババアって言い切つても良いんじゃないやねえの？」

しかしなるほどねえ……一定時間経つと女子更衣室の近くらへんに、あの三人の召喚獣が出現するよう予めプログラミングしてたつてことか。いくら更正しようが染み付いた習性は完全には消えねえ。未来のムツツリーニは高確率で未来の明久達を巻き込

んで覗き騒動を起こす。さらにその騒ぎを収集しようと駆けつけた明久達が送還のキーワードを口にするのと服だけ消えるように細工。そして騒ぎはより拡大、と……相変わらずこの人の策略はえげつねえな。

「……アレ？てことはFクラスのフィールドが消えたことと明久達の召喚獣が勝手に出現したことは別件ってことだよな？」

「……え？フィールドが消えた？」

首を傾げる綾倉センセに、俺が召喚する際に起きた不具合を詳しく伝えた。

「……つとまあそんな感じだ。しっかし珍しいこともあるもんだな、アンタが意図的でない調整ミスをするなんて……？」

「……………」

「綾倉センセ？」

「え……………ああすみません、少し考え事を。」

教えてくれて助かりました。ちよつと今から召喚システムの点検をしなければならなくなつたので、この辺で失礼します」

綾倉センセは何かを考え込んでいたが、俺が呼びかけると我に返り、おそらくはその不具合の原因を確かめるべくメインサーバー室に歩いていった。

「あの人も大変だな……………？……………気のせいか……………さて、俺も帰るか」

い。
後になって思い返してみれば、このとき感じた違和感は気のせいではなかったらしい。